

中・四国アメリカ研究

第6号

2013年

目 次

特集： アメリカ精神の基層—民主主義の伝統と革新&アメリカニズムと文化的相克—	
ハワイ王国における可視的教会と不可視的教会の衝突	
—二つの教会論とその文化的合意—	山 本 貴 裕 (1)
失われてゆく市民としての私	
—ヘンリ・アダムズのもとに集った女性たちと門戸開放帝国主義—	中 野 博 文 (23)
白人性とアメリカの夢を超えて	
—Russell Banksの <i>Continental Drift</i> にみる社会規範からの肯定的逸脱—	栗 原 武 士 (43)
自由論文	
ハワイ先住民によるハワイ語新聞発行の原点を求めて	佐 野 恒 子 (59)
20世紀への転換期アメリカにおける州紙巻きタバコ販売等禁止法	
—その成立と廃止の背景—	岡 本 勝 (75)
在米日本人移民社会における高等教育推奨の動き	
—南カリフォルニア地域を中心に—	松 盛 美紀子 (105)
奔放な女を家庭的なフラッパーに	
—映画『プラスティック・エイジ』における性表象—	大 野 瀬津子 (127)
『青い眼がほしい』におけるクローディアの二重意識	渡 部 知 美 (143)
投稿規定	(157)
編集後記	(158)

中・四国アメリカ学会

ハワイ王国における可視的教会と不可視的教会の衝突

——二つの教会論とその文化的含意——

山本貴裕

はじめに

1820年3月30日、アメリカ海外伝道局（American Board of Commissioners for Foreign Missions, 以下アメリカン・ボードまたはボード）から派遣された宣教師17名がサデウス号でハワイ島に到着した¹。それから遅れること約40年、1862年10月11日、英國国教会から派遣されたトーマス・ネトルシップ・ステイリー主教（Bishop Thomas Nettleship Staley）と2名の聖職者を乗せたコメット号がホノルルに到着した。彼らはハワイの王、カメハメハ四世（Kamehameha IV, 在位1855年～1863年）からの招きを受けてやってきた。彼らが招かれた背景には、1820年以来、ハワイの宗教・政治の両面で増大していたアメリカ人の影響力を抑制しようとする、王と彼の参謀の思惑があった²。カメハメハ四世はステイリーに初めて会った際、英國国教会の祈祷書の一部を自らの手でハワイ語に翻訳したことを伝える。ステイリーは10月19日、国王夫妻の前で就任の説教を行い、10月21日、多数の首長と有力な外国人が見守る中、王妃エンマ（Emma）に洗礼を施した。10月23日には宮廷の会合で英國宣教団を歓迎する決議が採択され、「ハワイ改革派カトリック教会（Hawaiian Reformed Catholic Church, 以下HRCC）」という名称で法人設立特許状を申請することも決議された。11月28日には国王夫妻が、その2日後には外務大臣ロバート・ワイリー（Robert Wyllie）と判事G・M・ロバートソン（G. M. Robertson），そして司法長官チャールズ・ハリス（Charles Harris）がステイリーから堅信式を受ける。12月21日にはのちにハワイの国王となるデイビッド・カラカウア（David Kalakaua）もそれに続いた³。

英國宣教団はハワイ王室・政府からの全面的な後援のもとハワイでの布教活動を始めるが、すでにハワイ伝道に従事していたアメリカン・ボード系宣教師からの反発を引き起こし、やがて両者は本格的な論争へと突入する。英國宣教団が英國国教徒から構成されており、アメリカン・ボードが米国の会衆派によって設立された組織である⁴という点だけを見れば、両者の争いは一見、イギリス人とアメリカ人の「国民的」対立や、英國国教会と会衆派の「教派的」対立のように見える。この争いを「イギリス人主教ステイリー」対「アメリカ人会衆派」という枠組みで考察したロバート・シームズ（Robert Semes）の研究は実際こうした見地に立っている⁵。だがこの種の解釈は、彼以前の先行研究によって指摘されてきた（いや彼自身も指摘し

ている) より複雑な現実の諸側面をうまく説明できないのである。

まず、両者の争いを国民的対立という枠組みでとらえようとするとき直面するのが、英國宣教団の支援者にはアメリカ人が含まれ、アメリカ人宣教師のそれにはイギリス人が含まれていたという事実である。たとえば、HRCCの発起人の一人、ハリスはアメリカ人であった⁶。また、英國宣教団はもともと英國国教会と米聖公会 (Protestant Episcopal Church) との「共同」事業として始まった。それが英國国教会だけの事業となったのは、南北戦争の勃発によって米聖公会の事業参加が妨げられたからであった⁷。事実、米聖公会は終戦後すぐにステイリーを助けるために二人の聖職者をハワイに派遣している⁸。その一方で、ステイリーの敵側、すなわちアメリカ人宣教師側には、ハワイ在住の「英國」国教徒ーと米聖公会員ーの多くが含まれていた⁹。

このように英國宣教団とアメリカ人宣教師の争いは国民的枠組みを超えて、英米人を分断する形で展開した。同様に、両陣営の布陣は教派的に見てもかなり複雑である。上で述べたように、この争いは英國国教徒・米聖公会員を分裂させた。彼らのうちステイリー側についた者たちは、英國国教会の「カトリック的」性格を強調する「英國カトリック派 (Anglo-Catholics)」であった¹⁰。他方、アメリカ人宣教師側についた者たちは「福音派 (Evangelical party)」であり、彼らは教義の面でアメリカ人宣教師とほとんど変わらなかった¹¹。さらにアメリカ人宣教師自身もその教派構成は複雑であった。彼らは1854年、アメリカン・ボードから自立した際、「ハワイ福音派協会 (Hawaiian Evangelical Association, 以下HEA)」を結成したが、同協会には会衆派だけでなく長老派の会員も含まれていた¹²。つまり、両陣営の争いは教派を分断したり、横断したりする形で展開したのである。

ここまで先行研究によって断片的ながらもすでに指摘されていることであるが、両陣営の布陣が「なぜ」このような構成になっているのかという点はこれまで十分説明されてこなかった。ステイリー陣営については「英國カトリック派」というくくりで比較的容易に理解できるが、反ステイリー陣営の構成の複雑さはこの論争の全体的把握を困難にしている。この問題を考える際に鍵となるのが、反ステイリー陣営を構成する二つの部分ーアメリカ人宣教師と英國国教徒・米聖公会員の一部ーを描写する際に共通して用いられる「福音派」という語である。最近の福音派史研究は、福音派の運動を米国や英國などの一国の枠組みではなく、環大西洋的次元においてとらえると同時に、その超教派的性格にも注意を払ってきた¹³。こうして得られた新しい知見に照らし合わせてみれば、国民的・教派的枠組みに収まりきらない反ステイリー陣営はまさに福音派的であったということができる¹⁴。つまり、この争いは英國カトリック派と福音派の戦いであった。

では福音派とはどのような人々であろうか。マーク・ノル (Mark Noll) によれば、「福音主

義 (evangelicalism)」と呼ばれる運動は18世紀中葉にイングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランド、そして英領北米植民地において一連の相互に関連した信仰復興運動として始まった。英国のそれは「福音派リバイバル (Evangelical Revival)」と、米植民地のそれは「大覚醒 (Great Awakening)」と呼ばれる。初期の福音派運動には二つの中心があった。「最も重要な中心」は英國国教会であった。「第二の中心」は英國国教会「外」の「リバイバルを経験したカルバン派 (revived Calvinists) のネットワーク」であり、それにはイングランドの非国教徒や、ブリテン周辺部の諸公定教会の会員（ウェールズの英國国教徒、スコットランドの長老派、ニューイングランドの会衆派）、さらには公定教会を持たなかったアメリカ中部植民地の長老派が含まれていた¹⁵。このように福音派は教派や国家の境界線を超えて拡大と拡散を繰り返す「系譜」としてとらえることができるが、その一方で時空を超えて維持されてきた一定の「信条と態度」によっても特徴づけられる。後者のとらえ方の代表がデイビッド・ベビントン (David Bebbington) の定義である。彼は福音派の四つの特徴として、回心主義、行動主義、聖書主義、十字架中心主義を挙げる¹⁶。

だが、本稿で注目したい福音派の特徴はその「教会論 (ecclesiology)」である¹⁷。なぜなら、それこそ彼らと英國カトリック派を分断した根本的な問題であったと考えるからである。福音派の教会論を一言で言うならば、「可視的教会 (visible church)」よりも「不可視的教会 (invisible church)」を重視する態度である。グレイソン・カーター (Grayson Carter) は「英國国教会内」の福音派の教会論についてこの点を指摘している。英國国教会39箇条の第19条によれば、「可視的教会」とは「信仰者の会衆であり、そこでは純粋な神の御言葉が説かれ、キリストの定めに従い、それが要求するすべての点において、サクラメントが適切に執行されなければならない」。英國国教会内の福音派の大半にとって可視的教会とは英國国教会を意味し、彼らは国内外の敵からそれを守ろうとしたが、結局のところ、彼らにとっての最重要課題は、「不可視的『キリスト教会 (Church of Christ)』」を集めることであった。それは再生された人々からのみ構成される集団であり、その中にはありとあらゆる教派・国民から呼び出された人々が含まれた。つまり、福音派の教会論は国教会の概念と根本的な緊張関係にあった¹⁸。

英國国教会内の福音派と同じことが、ステイリー主教と対立したアメリカ人宣教師についてもいえる。彼らもまた自分の所属する教派、すなわち可視的教会よりも、超教派的な「不可視的」教会を重視する福音派であった。逆に、ステイリーをはじめとする英國カトリック派は不可視的教会よりも「可視的」教会の働きを重視した。両者が残した一次資料には、実際にこれらの用語がしばしば用いられており、両者の議論の相当な部分が教会論に関する諸問題にあてられている。そこには、正反対の教会論に基づく宗教的感性が真正面から衝突し、激しい対立を引き起こした痕跡が見られる。彼らの教会論を理解せずして、両者がなぜそれほど激しくぶ

つかったのかを理解することはできない。また、異なる教会論をめぐる両者の戦いは単なる宗教紛争ではなく、ハワイ王国の文化をめぐる争いでもあったという点においても重要である。さらに言えば、英國国教会の招致によってアメリカの影響力を抑制しようとしたハワイの王や彼の参謀の視点からすれば、両者の戦いは、ハワイがさらなるアメリカ化を食い止められるのかどうかという重要な問題と密接にかかわっていた。

かつて、ハワイへの主教制教会（Episcopal Church）の導入の過程を詳細に研究したラルフ・カイケンドール（Ralph Kuykendall）は導入「後」の論争を「乱暴で無益な論争」と片付け、自分の研究の枠外に置いた¹⁹。彼の研究に限らず、同論争の「展開」を一次資料に沿いつつ丹念に考察した研究はこれまで存在しない。本稿では、ステイリー主教がハワイ伝道に出発する直前の1862年半ばから、彼がアメリカ人宣教師からの挑戦を受けて立つ1865年初めにかけて、両者の間で交わされた議論を時系列に沿って追いつつ、そこに見られる二つの教会論とその文化的含意を考察してみたい。なお、本稿で取り上げる時期においては、ステイリー主教と、ハワイの英國国教徒・米聖公会員の中の福音派との論争はまだ表面化していない。彼らはアメリカ人宣教師の議論に誘発される形であとから論争に加わっている²⁰。したがって、本稿で扱う福音派側の資料はアメリカン・ボードのものに限定されるという点を最初に断っておきたい。

第一章 ステイリー主教の教会論

カメハメハ四世はハワイ王国に英國カトリック派の原理を導入することで、アメリカ人の影響力を抑制しようとした。彼の意気込みは、彼自身がハワイ語に翻訳した英國国教会の祈祷書に、ハワイ語と英語で自ら執筆した「序章」をさらに付け加え、そこにおいて「カトリック・チャーチ」について要約していることからもうかがえる²¹。英國カトリック派の教会原理とはいかなるものであったのか。本章ではこの点について、ステイリー主教がハワイ到着前後に亘った二つの説教での本格的な議論を考察してみよう。

1862年7月23日、ハワイ伝道の途に就く直前のステイリー主教はウェストミンスター寺院（Westminster Abbey）にて別れの説教を行った。説教の冒頭ステイリーはイザヤ書42章4節から「島々は神の掟を待ち望む」を引用し、「神の掟」とは「内なる靈的力」と「その外への表れ・具現」の二つを意味すると述べ、前者を「私たちのうちにある王国」、後者を「この地上におけるキリストの可視的王国（the kingdom of Christ visible）」、彼の神秘的な体（His Mystical Body）、信仰深い祝福された人々の集まり、すなわち彼の聖公会（His Holy Catholic Church）と換言した。彼は説教の焦点を後者に当て、それを介した救済の仕組みについて次のように説明する。「その超自然的援助のすべてにおいて、あるいはサクラメントの贈物すべてを通して、偉大かつ神秘的な受肉の徳が人類の中に流れ込み、以前は卑しく汚れていたもの

が再び清められ、主が用いられるのにふさわしいもの、それを作られた神の名に値するものとなる」。またステイリーは、かつては英國諸島が神の掟を待っていたと指摘し、イギリスとハワイのチャーチ史を結び付ける。福音を望むエゼルベルト王に心を動かされた大聖グレゴリウスが、アウグスティヌスをケント王国に派遣し布教させたのと同様に、今回の英國国教会からの宣教団派遣は、1794年にカメハメハ一世（Kamehameha I，在位1795年～1819年）がイギリス人船長バンクーバーに依頼した「英國からの先生」の派遣がようやく実現したものである²²。

ステイリーはこのような前置きの後で、これからなされるべき仕事の性格と目的に説教の焦点を移す。彼が最も重視したのが、先住民に対して「彼らが最も親しんできたあの体系〔会衆派のそれ〕においては残念ながら看過されてきた神の真理」を伝えることであった。彼はその「真理」の説明において、キリストが受肉によって先住民の「苦しみ・誘惑・喜びのすべての中に入られた」という点を強調し、宗教の目的とは本来「無害な快楽を抑えること」や「日常生活の周りやその外側に外皮のようなものを形成すること」ではなく、「本能と共に働き、その日常生活を神聖なものにすること」であり、「自然や芸術における美しいものすべてを聖域での礼拝のために聖別することで神は栄光を与えられる」と主張した。受肉や聖別を柱とするステイリーの救済論は教会をその中心に据えていた。ステイリーによれば「これらの原理の教育に対する神の祝福によって、あるいはそれらの原理を教会組織・法規において実現することにより、私たちは先住民をより高くより純粋な人間の理想へと引き上げることができる」²³。彼はその他にも、英米人を中心とするハワイ在住外国人に対して、「キリストの聖なる御言葉とサクラメント」を与える仕事や、会衆派と同じようにハワイ人をミクロネシア諸島に宣教師として派遣する仕事の必要性についても述べている²⁴。

ステイリーは説教の最後で、「人々が現在慣れ親しんでいる形のキリスト教」に対して自分たちが敵対的態度を取れば彼らの信仰は根底から揺らいでしまうと自戒し、各々の教会の「欠陥や腐敗」の下には「真理の基層」が存在すると指摘した。また彼は、他の教会に属するキリスト教徒を「改宗させる」行為や、諸国民の間での嫉妬心をあおる行為は避けるべきであると付け加えた²⁵。

ステイリーが別れの説教で展開した教会論・救済論は、1862年10月19日にホノルル仮大聖堂（Temporary Cathedral of Honolulu）でカメハメハ四世夫妻を前に行われた彼の就任説教においてさらに肉付けされる。ステイリーはこの説教の中で、英國国教会よりも早くからハワイ伝道を行ってきた「プロテstant系キリスト教を公言するセクト」と「ローマ教会」との違いを鮮明に打ち出す。まず、英國国教会は宗教改革の際、前者にみられる「カトリック教会の古き慣行への不敬」と、後者による「既存の秩序への隸従」という「両極端を避けた」。したがって「私たちのチャーチ」の祈祷書の序章には、「古代の教父によって解釈された（強調は原

文)」のような仕方で聖書に導かれるようにと書かれている。「古代の教父」とは「おもに最初の5世紀、すなわち最も純粹な教会の時代」教父を指している²⁶。

ステイリーは祈祷書を引きつつチャーチのサクラメントの意味を次のように説く。「サクラメントは単なる象徴や靈的真理の姿ではない。それらはしかるべき任命を受けたキリストの聖職者によって施されたとき、それらによって、あるいはそれらにおいて『私たちに与えられる内的・靈的恩寵の外的・可視的しるしである』(強調は原文)」。そしてステイリーは洗礼式から堅信式、聖餐式へと至るチャーチのサクラメントの順序を説明する。ステイリーによれば、このような制度を持つ英國国教会の「原理」とは、要するに「私たちは何かしら突然の抗しがたい衝動によって回心させられるのを待つではなく、自分自身はすでに洗礼によってキリストのチャーチに接ぎ木されており、悪事を働く古き自分を日々制する義務を負い、また天からすでに分け与えられている力によってそうする能力を持つ」ということである。つまり、英國国教会は「キリスト教徒としての人格の漸次的形成」すなわち「洗礼から死まで続く過程」を重視する²⁷。それは不可視的教会への瞬間的な統合を説く福音派とは対照的であった。

またステイリーは別れの説教の時と同様、チャーチの聖別思想を取り上げ、「自然や芸術における美しいものすべてを聖域での礼拝のために聖別する」例として、大聖堂での礼拝の「壯麗さ」に言及する。チャーチは「円筒形天井に沿って反響するオルガンの音、ステンドグラスの窓、塗装された祭壇の飾り、聖餐台の家具」を「信仰の付属物・補助器具、あるいはキリストの愛への供物として」重視してきた。ハワイ諸島の先住民は「他の民族以上に儀式に対して受容的であり、かつそれを必要としている」。彼の次の言葉はおそらく会衆派を念頭に置いたものであろう。「より純粹に主観的・觀念的な礼拝に傾く人々はこのことを肝に銘じ、体全体の善のために彼ら自身の個人的好みを多少は犠牲にすべきである」。ここでは、英國カトリック派と福音派の宗教観が客觀－主觀、具体－抽象という対立軸でとらえられている。

信仰の具体的な形を重視する英國カトリック派は聖俗一体の世界観を有していた。ステイリーによれば、宗教は本来「普通の生活から分離した単なる枠組みや感情のシステム」ではなく、「私たちの自然な本能のすべて」を「パン種のように感化し (leaven)，神聖なものにする」。また、宗教は「7日のうち1日、すなわち日曜日にだけ」行うべきものではなく、しかもその一日が「悪ふざけも甚だしく安息日と誤って呼ばれている」。他方、チャーチは「1年を通じて毎日唱えるべき祈りの指示 (強調は原文)」を提供し、断食やクリスマスやイースター、昇天祭などの祝祭をしかるべき順に行うよう教える。ステイリーは「ガリラヤのカナでの結婚式に出席し、水をワインに変えた」キリストに言及し、キリスト教は決して「不機嫌さやタブー (強調は原文)」がすべてではなく、神は人間が「神から与えられた賜物すべてを感謝しつつ適度に使うこと」を望んでいると指摘し、これこそ「眞の自己抑制」、「本当の節制」であると主

張した²⁸。ステイリーのこうした主張は、安息日の厳守や節酒を重視する福音派への真っ向からの挑戦であったということができる。

このようにステイリーはチャーチ制度の主要な特徴を説明して、説教を終えた。ステイリーの挑戦的な就任説教は、福音派系の二つの英字新聞『パシフィック・コマーシャル・アバタイザー』(以下『アバタイザー』) や『フレンド』では直接、批判の対象として取り上げられなかつた。その代わり、両紙が標的として取り上げたのは、ロンドンのハワイ総領事マンリー・ホプキンズ (Manley Hopkins) が英國宣教団のハワイ伝道を正当化する目的で出版した著作であつた²⁹。ただし、その間、二つのハワイ語新聞、『クオコア (Kuokoa)』と『ホクオカパキピカ (Hoku o ka Pakipika)』ではステイリーの説教をめぐって数週間にわたって論争が繰り広げられている(前者は反ステイリー、後者は親ステイリー)。翌年1月中旬にはそれに『ポリネシアン』が加わり、両紙に対して新聞紙上での宗教論争を控えるように呼びかけるという一幕もあつた³⁰。

福音派の秩序に対するステイリーの挑戦はその2か月後に、ハワイ史上初のクリスマス祭典という形で具現化した。この年までハワイではクリスマスを公に祝うという習慣がなかったが、王はこの年、この日を「公の休日」と宣言した。政府関連の事務所はすべて閉鎖され、商業活動も停止された。ステイリーは当日の日誌に「私たちは、今までとは異なる事態を開始すること、そして私たちの聖なる主の誕生日がしかるべき名誉を与えられることなしに過ぎ去るという事態を二度と黙認しないこと、を決意した」と記している³¹。HRCCを中心に行われた公的なクリスマス祭典について、『アバタイザー』は好意的に報じたが、それを米会衆派のフォーストリート教会やローマ・カトリック教会、ドイツ人クラブで行われたクリスマス祝祭に関する記述の間に埋め込んだ³²。そこには、この「異なる事態」におけるHRCCの影響力を減じようとする同紙の意図がうかがえる。

第二章 アメリカン・ボードによる英國宣教団への批判

1863年11月30日、HRCCは大きな打撃をこうむった。最大の支援者、カメハメハ四世が29歳の若さで亡くなったのである。ステイリー主教の進行で行われた葬儀の式次第には、招かれた聖職者の中でアメリカ人聖職者だけに肩書が付されていなかった。このことは彼らを怒らせた³³。カメハメハ四世の跡を継いだのが兄のロット・カメハメハ (Lot Kamehameha)，すなわちカメハメハ五世 (Kamehameha V, 在位1863年～1872年) である。カメハメハ五世は弟ほど積極的にHRCCに関わらなかつたが、弟の遺志を継いで、同教会への支援を続けた。また、政府高官のほとんどをHRCC関係者で固めたほか、ステイリーを王のチャプレンとして留め、枢密院の一員にも任命した。1864年春には新聞紙上で、ステイリー主教が教育委員会の委員長に任

命される予定であるとか（実際には翌年、教育委員会の「一員」に任命される）、王が主教制教会を国教化し、その維持を目的として国民に税金を課そうとしているとかいううわさが報じられ、論議を呼んだ³⁴。同年7月7日から8月13日まで開催された憲法会議により君主的な方向での憲法の改正の動きが表面化し、8月20日には実際にそうした新憲法が発布されたことで、福音派の警戒心はさらに強まった³⁵。

だが英國カトリック派と福音派の論争を激化させる直接の引き金となったのは、同年末に出版された『アメリカン・ボード議事録－サンドイッチ諸島での仕事への最近の干渉に関して－』（以下『議事録』）であった。『議事録』は1864年10月4日から7日にかけてマサチューセッツ州ウースターにて開催されたアメリカン・ボード年次大会で外国書記官ルーファス・アンダーソン（Rufus Anderson）が諮問委員会を代表して提出した「干渉に関する声明」（以下声明）と、同声明を受けて招集された「委員会の決議」（以下アピール）との二部構成となっている³⁶。以下では『議事録』で展開された福音派の議論を追いつつ、彼らの教会論が表現されている部分に焦点を当ててみたい。

まずは声明から見てみよう。声明はローマ・カトリック教会の話から始まる。ローマ・カトリック教会が、プロテstant宣教師の伝道領域に自らの宣教師を送り込んでくるのは、プロテstantの敵を名乗る彼らの「公然の原理」からして「首尾一貫して」いる。カトリック宣教団はこれまで政府レベルでは支配的な影響力を得たことはなく、彼らとの競争は一般の人々の間でのもの限られていた。その間アメリカン・ボードはハワイのキリスト教化を順調に進め、1863年には「教会の宗教的組織化を完成させ」、先住民教会に自己統治・自活の責任を譲り渡した。またハワイ政府は「法律上はプロテstant」であったが、「1862年以前はいずれの教派への不都合なしがらみも持っていなかった」。このような状況下で、プロテstantもカトリックも自由な宣教活動に従事し、あらゆる階層の人々の宗教的要求も満たされていた。

このように声明は1862年以前のハワイの政教事情を振り返ったうえで、ハワイへの主教制教会導入の経緯を福音派の視点から次のように説明する。ハワイの宗教に欠けていたのは「福音派的感性とすぐれた能力・人格をもつ主教制教会の聖職者一名」のみであった。少数の外国人と王・王妃は主教制教会の礼拝を好んでいた。こうした状況に応えるために、ボードの外国書記官が数年前に米聖公会のある主教に対して「福音派の司祭一名」の派遣を進言するが、結局、誰も派遣されてこなかった。1860年の初めには同様の聖職者を英国から招へいしようとする動きが起こる。王の指示を受けて、当時の教育委員長リチャード・アームストロング（Richard Armstrong）と外務大臣のワイリーが、ハワイでアメリカ人宣教師とともに布教活動に従事した経験のあるロンドンのウィリアム・エリス（William Ellis）に書簡を送り、主教制教会の聖職者の確保を依頼した。エリスは自らがハワイの状況に適していると判断した「福音派」の聖

職者一名の獲得を検討する一方で、「高教会派（High Church）の傾向のある者」については「他の福音派の聖職者の共感や支持を得ることができないであろう」と否定的な見解を示した。その間、ワイリーが書簡を送ったもう一人の人物、ホプキンズが、「『極端な典礼主義によって特徴づけられる英國国教会の一部』に属する幾人かの個人と連絡を取り始めた」。この一派は「主教」の派遣をもくろんでいた。主教には「その職務・機能に付随する道具一式（paraphernalia）すべて」がついてくる。ホプキンズからこの計画について知らされたエリスは反対するが、彼の意見は無視され、結局、「主教一名と司祭三名」の派遣が実行された³⁷。「道具一式」という表現は、ハワイの政教関係に関する「不都合なしがらみ」という表現とともに、本格的な可視的教会に対する福音派の本能的警戒心を表している。

声明は、「この驚くべき干渉」への批判が決して「セクト的」視点からなされているのではないという点を強調した。英國宣教団のしていることは「プロテスタントの伝道の慣例」を破る「大きな刷新」であり、「非常に危険な原理の実質的主張」である。ローマ教会の攻撃なら辛抱できるが、「分裂した家は立っていられない。すべてのプロテスタント教派、すべての宣教会がこの件には深い関心を抱いている」と³⁸。福音派は英國カトリック派の批判において「分裂」を含意する「セクト」という語をしばしば用いたが、それは自分が所属する教派の特殊性よりも教派間の共通性を強調する、福音派としての彼らの特性によって説明できる。

声明はさらに、英國宣教団がアメリカン・ボードの40年以上にわたる人的・金銭的投资の成果を横取りしようとしている批判し、その原因を前者の無理解に帰する。英國宣教団は「その数、構成、威信、そしてその典礼主義的精神の強烈さによって、当諸島におけるボード派遣宣教師の諸制度や影響力にとって代わろうとしている。この運動は（中略）アメリカ人宣教師の数、性格、労働について、あるいはそれから生じた偉大な宗教的・社会的変化についての非常に不適かつ誤った見解とともにはじめられたのである」。声明はこうした見解の代表例としてホプキンズの著作を名指しで批判し、それがアメリカ人宣教師の成果を「失敗」と断じているのは「無知」の表れであると指摘する³⁹。このくだりからは、両者の戦いが単なる宗教的争いではなく、社会の「諸制度や影響力」をめぐるそれであるというボードの認識がうかがえる。

声明はそのあとステイリー主教が到着直後に説いた、チャーチ制度の主要な特徴を詳しく紹介し、それが人々の間に定着すれば、必ずや「宗教的見解や習慣における危険な革命」が起きるであろうと警告した。ボード系宣教師の「キリスト教聖職者としての職務や仕事がローマ・カトリックと同様、（自称）改革派カトリックによっても無視されている」様子を「先住民は見ている」。今までのところ改革派カトリックの礼拝が「あまりにも派手すぎ、かつあまりにもローマ・カトリック的である」ために人々の関心を引き付けることができないでいるものの、彼らが政府内で持つ影響力については「大いなる不安」を覚える。声明はこのように述べた⁴⁰。

最後に声明は、英國宣教団の歴史に関する詳細についてはアンダーソンの新著⁴¹の第20章を参照するようにと勧め、同宣教団がハワイのプロテスタント共同体にとって「善をはるかに上回る惡」であり、いったんこの事情を知れば「英國またはこの国〔米国〕の主教制教会の兄弟たちも、現在の形でのその継続を望まないであろう」と締めくくった⁴²。

このような諮問委員会の声明を受けたアメリカン・ボードは、「全プロテスタント宣教会・全プロテスタント系キリスト教徒へのアピール」を発表し、「改革派カトリック宣教団(Reformed Catholic Mission, 以下RCM)」の原理への反対を訴えた。アピールはまず、アメリカ人宣教師の成果を失敗と切り捨てたホプキンズへの反論として、彼らが過去40年にわたって異教の地ハワイにおいて達成してきたさまざまな「成果」を列挙した。その中には、ハワイ語のアルファベットの発明、学校の設立、教科書の作成、聖書の翻訳、読み書き・算数・地理の教育、高等教育のシステムの開始、約30年前に起こった何千人もの回心、勤勉・節約の習慣、安息日の厳守などが含まれていた。アピールはさらに「このような道徳的・宗教的大革命は自然と、政府の運営や枠組みにおける革命につながった」と続け、45年前のハワイの政治は「単純かつ絶対的な独裁君主制」であったが、25年前、カメハメハ三世(Kamehameha III, 在位1825年～1854年)により成文憲法が宣言され、それに基づき「国王、上院議員、下院議員という英國憲法を模範とする政府の枠組み」が整備され、自由の確保のための「立法、司法、行政の諸権力の賢明な分散」が図られたと指摘した。そしてこれこそ「プロテスタントまたは福音派のキリスト教の自然な結果である」と主張した⁴³。

アピールによると、アメリカン・ボードがこのようなハワイ伝道の成果を踏まえて、ハワイ諸島のキリスト教化は十分達成されたと判断し、当地での伝道事業を終了し、宗教的制度を先住民の手に渡そうとしていた矢先に、「ロンドンで勝手に形成された委員会」が主教制教会の聖職者一名を求めるハワイ国王の要望に「つけ込んで」、「主教一名と司祭三名」からなるRCMを結成・派遣した。そうすることで同委員会は「勝手に無限の拡大を提案した」が、それは「あたかも当諸島をキリストの可視的王国(the visible kingdom of Christ)に併合する仕事、そして真にカトリック的なキリスト教の諸制度をそこに植え付ける仕事がこれから始まるとしているかのようである」⁴⁴。これは可視的教会に対して福音派が抱いていた警戒心の最たる表現であった。

アピールは最後に、アメリカン・ボードは主教制教会そのものを問題視しているわけではない、という超教派的な福音派としての立場を鮮明にした。ボードのRCM批判は、ある教派による別の教派への批判というよりも、むしろ教派の違いにこだわらない福音派による、教派の違いにこだわる英國カトリック派へのそれであった。アピールは言う。「プロテスタント主教制教会の聖職者一人」がホノルルに福音を伝えに来たのであれば、同教会「特有の儀式・教会

制度がハワイの人々のキリスト教徒としての生活・進歩のために適しているかどうかは、フェアな実験によって解決されるべき問題となるであろう」と。だがRCMは「ローマ主義者を前にプロテstantの名を放棄し」、アメリカ人宣教師の側の「友好・礼儀の申し出をすべてはねつけ」、「キリストの福音宣教師としての彼らの立場を認めず」、「彼らの仕事を全く評価しない」。RCMが最初にしたことと言えば、「キリストのみを通じての罪びとの救済」というアメリカ人宣教師の教えを否定し、「キリスト教の安息日を軽蔑すること」であった。このようにアピールはRCMを批判する一方で、英國国教会や米聖公会、あるいは英國国教会の二大宣教会については、責任の追及を避け、RCMは「英國国教会の一セクトまたは党派にすぎない」と切り捨てた。そして、「もしハワイに侵入してきたこの宣教団が、プロテstant宣教団または福音派キリスト教徒の公認団体から生じたものであったならば、それは礼譲の法の許すべからざる違反となったであろう」と述べ、「プロテstantでもカトリックでもない干渉に対するプロテstant系キリスト教会の世論へのアピール」を締めくくった⁴⁵。

第三章 主教演説

アメリカン・ボードによる英國宣教団批判はステイリー主教をついに公の場でのボード批判へと駆り立てた。反論の機会は、1865年1月1日、HRCCにてカメハメハ五世夫妻の前で行われた主教演説においてやってきた。この章では、主教演説の中で展開された彼の反論を、教会論を中心に考察してみたい⁴⁶。

ステイリーは最初に「私はこれまで中傷や暴言に対して無関心を貫いてきた」と断ったうえで、「平和・慈善の福音の宣教師を自認する者たちが（中略）あそこまでひどい虚言や非難を並び立てる今となっては、状況は全く異なる」と述べ、「アメリカン・ボードの報告」を名指しで非難した。そしてアメリカン・ボードの「体制」を次のように分析してみせる。「アメリカン・ボード」というのは「非常にうぬぼれた名称」であるが、実際には「長老派と会衆派として知られる二つのカルバン派系教派」の代表に過ぎず、しかも「前者は十の、後者は四つの異なるセクトに分裂している」。このようなボード評は、英國宣教団を「セクト」にすぎないと断じたボードへの逆襲であった。ステイリーは同演説での議論を、ボードの宣教師たちの「過去40年間の教えがもたらした結果に関する事実（強調は原文）」と「これからなされるべき残された仕事」に絞る意向を表明し、各論に入っていった⁴⁷。

彼が最初に取り上げた点は、「もともと堕落した状態」にあったハワイ諸島の先住民たちがアメリカ人宣教師の布教活動によって「宗教的知識や生活の純粋さの点であまりにも進歩した」ので、英國宣教団にはホノルル周辺の少数の外国人に対して「一人の聖職者」がなすべき仕事以外には何も残されていない、というアメリカン・ボードの主張であった。ステイリーはこう

した主張に対して、HEAが出版した、ハワイの先住民の「精神的・道徳的状態」に関する報告を引用しつつ、1) ハワイ諸島には信仰を告白しない「大勢」があり、その「野（field）」は「新しい代理人」を忙しくさせるのに十分な広さを有している、2) 「名ばかりの信仰告白者」の間には「悲しむべき量の非現実性や無気力」が見られる、3) カルバン派の制度は「カトリック、モルモン教、不信仰を食い止めることや、異教への激しい逆流を止めることにおいて失敗している」と結論付けた⁴⁸。

次にステイリーが指摘したのは、英國宣教団が他のキリスト教徒を改宗させる意図を持たないという点であった。彼はその証拠としてHEA報告書の中にある、同宣教団がホノルルにやってきて主教制教会員と不信仰者を取り込んだ、というL・スミス（L. Smith）牧師の指摘を持ち出した。ステイリーはその際、「文学的・神学的達成の情けない見本」として、「アメリカの大学から神学博士を授与された」スミス牧師の“*This sect have (sic) come...*”という表現や、堅信式に関する誤った解釈をわざわざ取り上げ、こき下ろした。そして自分たちがやって来た目的は「政治的扇動者の役を演じること」ではなく、「空き地」において、「キリストとキリストのチャーチのために」働き、「人々をより高き道徳的生活へと引き上げ絶滅から救う」という「王の偉大なる仕事を助けること」であると主張した⁴⁹。

第三にステイリーが取り上げたのが、英國宣教団がカルバン派の仕事を「評価していない」というアメリカン・ボードの批判であった。それに対して彼は、「欠点や腐敗の下」には「真理の基層」があると言った自らの説教を引き合いに出し、カルバン派に対して「私たちのために道を準備してくれたことへの多大な感謝」を表明した。その一方で、英國宣教団は「キリストのみを通じた救い」という教えに反しているという彼らの発言は「ひどい偽り」であると怒りをあらわにした。そして自らを犠牲にしてハワイの少年少女のために献身する聖職者とシスターたちを「無知と罪の同盟者」扱いする彼らについて、「宗教的不寛容により敵意を募らせ、セクト的嫉妬心によって正気を失ったとき人はどんなことでもしてしまう」と嘆いた⁵⁰。

第四の論点以降はいよいよ教会論に関する議論が中心となってくる。ステイリーが四番目に主張したのは、「チャーチはピューリタン宣教師の教えを無視するのではなく、それに欠けているものを補充する」という点であった。ここでステイリーは、チャーチとピューリタニズムは「信条の事実」を共有することを認めつつも、後者はその事実からの「正当な演繹」ではなく、「宇宙の道徳的諸問題」を解決する能力を欠き、「当諸島に住むあの楽天的な人種、いつも笑っているあの太陽の子たちには全く適していない」と批判した。彼がとりわけ問題視したのが、ピューリタン宣教師たちが運動競技やフラ（hula）などの「適度に楽しめば無害なその他多くのもの」を強制的に禁じたため、「単純で無知な人々」には道徳的に些細なことと重大なことが区別できなくなり、「恐るべき量の非現実性や偽善」を生み出しているという点であった。

ステイリーはこうしたピューリタニズム批判の後で、就任演説で説いた聖別や眞の節制に関する思想を繰り返し、本格的な教会論に入っていく。そこでステイリーはピューリタン宣教師の「教派的 (denominational)」なキリスト教観と自らの「カトリック的」それを対比させる。「カトリック」という語は「全てのセクトが同じ立場にある」という意味でも「ローマと同義語」でもなく、本来は「十二使徒の時代から私たちの時代まで破られることのない連続性のうちに伝わってきた、唯一の可視的・歴史的体 (the one visible historic body)」である。それを通してのみ「私たちは神の愛のすべてを味わえる」のであり、これこそが「英米チャーチの教えである」。ステイリーはこのように説いたうえで、カリフォルニア主教のキップ (Kip) や、ドランシー (DeLancey) 主教、ミネソタ主教のホイップル (Whipple) による同様の見解を引いた。

ステイリーはさらに主教制の優越性に関する議論を続ける。彼によれば、チャーチは「主教の叙任の権限」に依拠した連続性を有するという点において、「今日の様々な教派」とは区別されるべきである。また、チャーチのキリスト教は「形のはっきりしたもの」であり、「信条や式文集やあらかじめ規定された可視的組織のうちに」伝えられてきた。こうした可視的な連続性を持つチャーチに対して、ステイリーは「様々なプロテスタントのセクト」の分裂傾向を対比させ、後者は教義に基づく教えを欠いているために「狂信や不信心」、または「ローマ教会への脱会」を生み出している、と指摘した。ローマ・カトリックがハワイ伝道においてカルバン派に15年の後れを取ったにもかかわらず、ここまで教勢を伸ばし得たのは、実体を伴わない教派制度が「しっかりとまとまったローマの組織にはかなわないからである」。ステイリーはこのように分析したあとで、教派制度のもう一つの特徴として、「聖なるサクラメント、洗礼式」の軽視を受け加えた⁵¹。このようにステイリーのキリスト教二分法では、明確な形を持つ可視的教会とそれを持たない不可視的教会が対比され、前者には英國国教会とローマ・カトリック教会が、後者にはその他の諸教派が分類された。彼にとって前者の優越性は明らかであった。

第五の論点としてステイリーは「改革派カトリック」という名前の由来を取り上げた。「改革派」とは「宗教改革の際、英國国教会が中世の時代にこびりついた付着物を取り除いたという事實を認めたもの」であり、「カトリック」とは「はじめから伝えられてきた、あの唯一の可視的かつ歴史的チャーチの支部」という意味である。したがってそれは、アメリカン・ボードの言うように、「プロテスタントの名を放棄する」という意味ではない、とステイリーは反論した⁵²。

第六の論点では、英國宣教団がアメリカン・ボードの宣教師を「キリストの聖職者として認めない」理由についてステイリーは次のように説明する。主教制を有する「ローマまたはギリ

シアの司教」が私たちのチャーチに改宗する場合はただ単に「通常の教義受諾 (subscriptions)」のみが要求されるが、「長老派や独立派の説教師」の場合は「主教の手による叙任」が必要である。なぜなら「十二使徒の直系の代理人としての主教だけが有効な聖職を授与できる」というのが主教制教会の「体制そのもの」だからである。ステイリーは、英國宣教団の聖職者の一人が到着直後にアメリカ人宣教師からの「連合 (union) 月例祈祷集会」への招待を断った件に言及し、主教制教会の論理からして「教会的平等」は受け入れられないと述べ、連合祈祷集会に英國宣教団の聖職者を招いた彼らの目的は、英國宣教団を主教制教会の論理と社交辞令の間の「ジレンマ」に陥れることであったと批判した⁵³。

第七の論点は、英國宣教団が「アメリカ人宣教師への礼儀を欠いている」という批判への反論であった。ここでステイリーは、第六の論点で「教会的区別」の重要性を訴えたのとは対照的に、「社会生活においては宗教的区別を考慮しない」との原則を述べた。そのうえで「イギリス人主教がここにいるから、神がこの国に災禍をもたらし、王子と王を殺したのだ」とほのめかしたり（カメハメハ四世の息子であったアルバート王子は、ステイリー一行がハワイに到着する直前に四歳で亡くなっている）、イギリス人主教は「王国の独立を切り崩し、彼らから自由を奪おうとしたくらむ政治的密使である」と中傷したりする彼らとは「友人関係になりたくない」という本音をもらした⁵⁴。D・G・ハート (D. G. Hart) は、教会の役割を高く見積もる高教会派（可視的教会重視派）は公私を明確に区別し、私的生活（教会）では不寛容、公的生活（社会・政治・文化）では寛容な傾向がある、と指摘するが⁵⁵、ステイリーの第六・第七の論点はハートの指摘の正しさを示すものであると同時に、実際問題としての公私の区別の難しさを示している。

第八の論点は、「アメリカン・ボードにとって満足のいく体制」についてであった。ステイリーによれば、アメリカン・ボードのアピールは「完全な状態にあるチャーチの存在が気分を害する」と言っているに等しい。それは、「プロテスタント主教制教会の聖職者一人」の派遣であったならば同教会「特有の儀式・教会制度」は「フェアな実験」の機会を与えられたであろうと言うが、主教制をその要諦とする教会が「どうして主教なしでフェアな実験をする機会を得られると言うのであろうか」⁵⁶。つまり、ボードにとっての程度の違いはステイリーにとっては種類の違いであった。

第九の論点としてステイリーが取り上げたのが、英國宣教団の起源であった。彼は、それを英國国教会・米聖公会の「一セクト」または「一派」に帰するボードの見解に対して、同宣教団が英國国教会のすべての党派と米聖公会の協力の下に始まったという経緯を振り返ってみせた。そして英國国教会の強さの秘密は、それが「重要ではないことに関しては意見や慣行の面でかなりの多様性を認める」点にあると付け加えた⁵⁷。

第十の、そして最後の論点は、「礼讃の法の違反」についてであった。この点に関してステイリーは、自分たちはハワイの王に招かれたのにそれがなぜ「侵入」になるのか、いやそれと言うならば「当諸島に存在する他の二つの形のキリスト教」は自分たちと同じように招かれたのか、と逆に問い合わせた。ステイリーはさらに、アメリカ人宣教師の「無礼な干渉」を批判する。彼らは頼まれもしないのに「英米の高位聖職者（Prelates）」に向かって「どんな人物をこの伝道事業に送り出すべきか」や「どの範囲内にそれを限定すべきか」を指示しようとした。そしてステイリーは、英國宣教団が「福音派キリスト教徒の公認団体から発していたならば」礼讃の法の違反となつたであろう、というアピールの文言を逆手にとって、福音派の公認団体に属して「いない」重要人物・組織として、故ハワイ国王（カメハメハ四世）やグレートブリテン女王、イングランド及びアイルランド連合チャーチの四人の大主教（Primates）、他の高位聖職者、福音伝播協会及びキリスト教知識普及協会（Societies for Propagating the Gospel and for Promoting Christian Knowledge）の名を挙げることで、福音派の価値を貶めた。また、ステイリーは礼讃の法の有効性自体に疑問を呈し、それは「空虚かつ無形なる彼らの想像の産物であり、実体を持たない」と切り捨てた⁵⁸。このようにステイリーの福音派（セクト）批判は徹底的にその不可視性に向けられていた。

主教演説の結論部分でステイリーは、自分たちとHEAとローマ・カトリック教会の「兄弟」は、目的は同じで手段が違っているだけであると述べ、「同胞愛の法」を説く一方で、「もしこの地の果てで、現代的ピューリタニズムと原始的カトリシティの戦いが戦われることになれば」、その用意はあることを明らかにした。ステイリーはその際、英國の後援者たちの存在を持ち出し、彼らは英國宣教団が「偏狭かつ失望したセクトの連中による不寛容や事実の歪曲によってつぶされるのを黙ってみてはいないであろう」と威嚇した。演説の最後は次のような展望で締めくくられた。「英米において神がご自分のためにあそこまで強くされた、あの聖なる蔓の側枝が、豊かな枝を茂らせるこの神の国を広げ、『下方向に根を張り、上方向に実を実らせ』、いや『諸国の癒しとなる葉を蓄えるあの生命の木』の実を実らせるのを見ることになるであろう」⁵⁹。ウィリアム・ハッチソン（William Hutchison）によれば、アンダーソンの伝道哲学では「神の国」は「種」としてとらえられていた。宣教師は種をまいた後は立ち去ることを期待されていた⁶⁰。それは、ステイリーが描いた、豊かな枝を茂らせた神の国のイメージとは対照的であった。

このようにステイリーはこの主教演説において可視的教会と不可視的教会を対比させ、前者の優越性を主張した。彼にとって後者は実体を伴わない空虚な観念論であり、それによってハワイは救われていないし、これからも救われないはずであった。

おわりに

ステイリーの主教演説は国王夫妻を筆頭とするホノルル仮大聖堂の教会員の要望により小冊子として出版されることとなった。数か月後にそれが出版されたときは、アンダーソンの新著への反論が「付録」として付け加えられていた⁶¹。他方、福音派は『アバタイザー』紙上で即座に反撃を開始した。1865年1月7日、同紙はステイリー主教の批判的となったアメリカン・ボードの「アピール」の全文を掲載した⁶²。また、主教演説の小冊子版が出版された後の1865年4月15日から7月1日にかけては、ほぼ毎週、W·D·アレキサンダー（W. D. Alexander）によるステイリーへの反論を連続掲載した⁶³。論争はここに来て最高潮に達するが、紙面の都合上、それをここで扱うことはできない。とはいえ、英國カトリック派と福音派の教会論の違いという本稿のテーマに関する両者の議論は、それまでにはほぼ出尽くしていた。可視的教会の働きを重視する英國カトリック派は、初期キリスト教の時代から連綿と継承されてきたと彼らが主張するカトリック・チャーチをハワイに移植しようとした。反対に不可視的教会の働きを重視する福音派は、ハワイに入ってくる主教制教会の伝統を出来るだけ軽くしようとした。前者はその具体的な教会制度の導入によってハワイを救済しようとしたのに対して、後者は抽象的な教会制度によっておのずからハワイは救済されると信じた。この論争は結局、英國カトリック派の敗北に終わった。それはハワイの王や彼の参謀にとって、アメリカ人の影響力に対する抑止力が失われたことを意味した。それが一般の先住民の間で何を意味したのか、という問題は今後研究されるべき課題として残されている。

英國カトリック派の敗因は資金不足と主教制教会員間の不和であったと言われている。1867年、ステイリーは資金集めのためにホノルルを離れ、英國にもどる。2年後に彼はハワイに戻ってくるが、結局、1870年初めには辞職に追い込まれる。HRCCはその2年後にステイリーの後を継いだもう一人の英國カトリック派の主教、アルフレッド・ウィリス（Alfred Willis）の下で「英國国教会ハワイ支部（Anglican Church in Hawaii）」と改名され、その後、30年間にわたってさらなる困難を経験することになる⁶⁴。最終的には、1902年4月1日、ホノルル主教区は英國国教会の管轄から米聖公会のそれへと移された。それは、1898年のアメリカ合衆国によるハワイ併合という政治的変化への対応であった。1860年代の福音派はハワイ王国の「キリストの可視的王国」への併合を危惧したが、皮肉なことに、19世紀末に実際に起こったのはアメリカ合衆国という政体への併合であった。

本稿執筆に当たっての資料収集は、同志社大学一神教学際研究センターの私立大学戦略的研究基盤形成支援事業プロジェクトからの研究費を得て行われた。ここに謝意を表したい。

註

- 1 Ralph S. Kuykendall, *The Hawaiian Kingdom: 1778-1854: Foundation and Transformation* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1938), 100-102.
- 2 Henry Bond Restarick, *Hawaii 1778-1920 from the Viewpoint of a Bishop: Being the Story of English and American Churchmen in Hawaii with Historical Sidelights* (Honolulu: Paradise of the Pacific, 1924), 69-70; Ralph S. Kuykendall, "Introduction of the Episcopal Church into the Hawaiian Islands," *Pacific Historical Review* 15 (June 1946): 135-136; HRCC研究の基盤はレスター・カイケンドールによって築かれた。
- 3 Restarick, *Hawaii 1778-1920*, 62-64; Kuykendall, "Introduction of the Episcopal Church," 145.
- 4 中山和芳「福音伝道と文明化－19世紀アメリカン・ボードの宣教思想－」『キリスト教と文明化の人類学的考察』(国立民族学博物館) 62号(2006年), 203頁。
- 5 シームズは両者の争いについて、「それは表面的には教会秩序・礼拝形式・神学をめぐる相互侮辱・非難の戦争であったが、眞の問題は政治権力であった。これら二つの集団はハワイ諸島をめぐるアメリカ人とイギリス人の間の慢性的緊張を象徴していた」と主張する。Robert Louis Semes, "Hawai'i's Holy War: English Bishop Staley, American Congregationalists, and the Hawaiian Monarchs, 1860-1870," *Hawaiian Journal of History* 34 (2000): 113.
- 6 Phillip H. Harris, "Charles Coffin Harris: An Uncommon Life in the Law," *Hawaiian Journal of History* 27 (1993): 154.
- 7 これらの事実は、アメリカ人宣教師が英国宣教団を批判する際にしばしば持ち出した、後者のハワイ派遣の背後にはハワイでの勢力拡大をもくろむ「英國」の「政治的動機」がある、という主張の反証となっている。Restarick, *Hawaii 1778-1920*, 59-60; Kuykendall, "Introduction of the Episcopal Church," 136-137; Semes, "Hawai'i's Holy War," 116-118, 122.
- 8 Restarick, *Hawaii 1778-1920*, 60, 68-69.
- 9 Ibid, 68, 121; シームズは「皮肉なことに、ステイリーを最も悩ませたのは、ハワイの米聖公会員や英國国教徒であり、彼らの多くは低教会派の一福音派の一背景を持っていた」と述べている。Semes, "Hawai'i's Holy War," 127.
- 10 ピュージー (Pusey) やケブル (Keble) らが率いる同派は、英國宣教団に深い関心を抱

いていた。Restarick, *Hawaii 1778-1920*, 68; ミュアによれば、ステイリー主教や彼の聖職者はもちろん、彼らの到着以前にHRCC設立を主導した5人、すなわちカメハメハ四世、エンマ王妃、オックスフォード主教、ハワイ外務大臣ワイリー、英國のハワイ領事ホプキンズもまた英國カトリック派であった。Andrew Forest Muir, "Edmund Ibbotson (1831-1914): S. P. G. Missionary to Hawaii, 1862-1866," *Historical Magazine of the Protestant Episcopal Church* 19 (September 1950): 213-21; シームズは英國カトリック派の当時としては「リベラルな社会的見解」について述べている。Semes, "Hawai'i's Holy War," 116-118, 124-125.

- 11 Restarick, *Hawaii 1778-1920*, 68, 90; Semes, "Hawai'i's Holy War," 113, 127.
- 12 ハワイ福音派協会の構成については、Kuykendall, *The Hawaiian Kingdom: 1778-1854*, 99-100を参照。
- 13 こうした研究の動向の代表が、ノルとベビングトンが主幹編者を務める福音主義史シリーズ（計5巻）である。Mark A. Noll, *The Rise of Evangelicalism: The Age of Edwards, Whitefield and the Wesleys* (Downers Grove, IL: InterVarsity Press, 2003) はその第一巻である。日本では増井志津代の以下の著作がこの流れに位置付けられる。増井志津代『植民地時代アメリカの宗教思想—ピューリタニズムと大西洋世界』上智大学出版, 2006年。
- 14 これまでにも歴史家たちはアメリカ人宣教師の記述において「福音派」という語を漠然とではあるが用いてきた。カイケンドールは「アメリカ人福音派宣教師の長老・会衆派教会主義」に言及し、シームズは、アメリカ人宣教師は「福音派的カルバン派の伝統に属していた」と言う。Ralph S. Kuykendall, *The Hawaiian Kingdom: 1854-1874: Twenty Critical Years* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1953), 98; Semes, "Hawai'i's Holy War," 113.
- 15 Noll, *The Rise of Evangelicalism*, 18, 119, 127-128.
- 16 回心主義とは「人生は変えられるべきであるという信念」、行動主義とは「福音を努力において表現すること」、聖書主義とは「聖書への特別な尊敬」、十字架中心主義とは「十字架の上のキリストの犠牲の強調」を指す。D. W. Bebbington, *Evangelicalism in Modern Britain: A History from the 1730s to the 1980s* (New York: Routledge, 1989), 3.
- 17 米宗教史の分野において教会論の重要性はこれまであまり重視されてこなかったが、最近、この観点からのアメリカ宗教史の再考を唱えているのがハートである。彼によれば、アメリカの宗教は19世紀から今日に至るまで、「信条主義 (confessionalism)」と「敬虔主義 (pietism)」とに二分されてきた。信条主義とは「教会の儀式・聖職者・教義・礼拝に根差した宗教心を持つプロテスタント」のことであり、彼らの宗教心は「プロテスタンティ

ズムの高教会派的表現であり、リバイバリスト的・パラチャーチ的環境において繁栄する低教会派的プロテスタントの見解と対比できる」。敬虔主義とは後者の低教会派的伝統のことを指し、この伝統から今日の福音派とリベラル派の「双方」が派生した。本稿での考察はハートの議論からヒントを得ている。D. G. Hart, *The Lost Soul of American Protestantism* (Lanham, MD: Rowman and Littlefield, 2002), xi-xiii.

- 18 Grayson Carter, *Anglican Evangelicals: Protestant Secessions from the Via Media, c.1800-1850* (New York: Oxford University Press, 2001), 1, 7-30.
- 19 Kuykendall, *The Hawaiian Kingdom: 1854-1874*, 275; Kuykendall, "The Introduction of the Episcopal Church," 146.
- 20 ミュアによれば、1869年の初め、ステイリーが2年ぶりに英国からハワイに戻ってみると、彼の留守中に、カルバン派の執拗な批判に触発される形で、ホノルルの米英主教制教会員の間での亀裂が深まっていた。Andrew Forest Muir, "George Mason, Priest and Schoolmaster," *British Columbia Historical Quarterly* (January-April 1951): 52.
- 21 Kamehameha IV, *Preface to the Book of Common Prayer* (London: Advertiser Publishing Co., 1949), 11-12; 「序章」の英語版はもともと Society for Propagating Christian Knowledge が1864年に出版した Pamphlet No.1357 に掲載されたものである。Ibid., note.
- 22 Thomas Nettleship Staley, *Two Sermons Preached in Westminster Assembly and the Temporary Cathedral of Honolulu, by the Right Reverend Father in God Thomas, Lord Bishop of Honolulu* (Honolulu: Polynesian Office, 1863), 3-6.
- 23 Ibid., 6-8; このような考え方には、ステイリーが時として見せた先住民の文化に対する比較的寛容な態度に通じている。ステイリーはハワイ到着直後に王の招待を受けて「ルアウ (Luan)」(ハワイ料理の宴会)に出席した際、先住民の習慣にしたがってサーフィンの鑑賞に興じたり、ロースト・ドッグを食べたり、ポイ (タロイモの根の料理) の中に指を突っ込んで食べたり、乾杯したり、頌歌に聞き入ったり、ダンスを楽しんだりしている。Extracts from a Journal of the Bishop of Honolulu, September to November, 1862 (London: Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, 1863), 15-16, http://anglicanhistory.org/hawaii/staley_extracts1862.html.
- 24 Staley, *Two Sermons*, 9.
- 25 Ibid., 9-12.
- 26 Ibid., 18-19.
- 27 Ibid., 19-20.
- 28 Ibid., 20-21.

- 29 *The Pacific Commercial Advertiser*, November 6, November 13, 1862; *The Friend*, November 1, 1862; なお以下の註では『アバタイザー』をPCAと略記する。問題のホブキンズの著作は Manley Hopkins, *Hawaii: The Past, Present, and Future of Its Island-Kingdom; an Historical Account of the Sandwich Islands (Polynesia)* (London: Longman, 1862) である。当時のハワイ各紙の性格については Helen Geracimos Chapin, *Shaping History: The Role of Newspapers in Hawai'i* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1996) を参照。
- 30 PCA, January 22, 1863.
- 31 *Extracts*, 26.
- 32 PCA, January 1, 1863.
- 33 Rufus Anderson, *The Hawaiian Islands: Their Progress and Condition under Missionary Labors* (Boston: Gould and Lincoln, 1864), 353-355.
- 34 Ibid., 355-356; Restarick, *Hawaii 1778-1920*, 127.
- 35 *The Friend*, September 1, 1864.
- 36 *Proceedings of the American Board of Commissioners for Foreign Missions in Relation to a Recent Interference with its Work on the Sandwich Islands* (Worcester, MA: s.n., 1865?), 1; 議事録は *Missionary Herald* の1864年11月版とアメリカン・ボード年次報告において公開されているが、上記の資料はそれとは別にあとから出版されたものである。
- 37 Ibid., 2-4.
- 38 Ibid., 4.
- 39 Ibid., 4-5.
- 40 Ibid., 6-7.
- 41 同著は、アンダーソンの40年以上にわたるハワイ宣教師との文通や、1863年の4か月間のハワイ滞在経験を基にまとめられたものである。Anderson, *The Hawaiian Islands*, vi; アンダーソンの著書は『議事録』内の声明の内容を敷衍したものであり、両者は内容的に重なるところが多い。また次章で見るステイリーの主教演説は、アンダーソンの著書に対してではなく、ボードのアピールに対する反論として展開されている。これらの理由によりここで前者への言及は省略する。
- 42 *Proceedings*, 7.
- 43 Ibid., 8-10; ここで興味深いのが「自然」という言葉の繰り返しである。19世紀中葉以降のアメリカン・ボードはアンダーソンの主導により福音化を文明化から分離し、前者に専念する方向に舵を切っていた。そのような状況下ではここで挙げた数々の成果は「自然」で

あることを強調せざるを得なかったと考えられる。当時のアメリカン・ボードの伝道方針については William R. Hutchison, *Errand to the World: American Protestant Thought and Foreign Missions* (Chicago: University of Chicago Press, 1987), 77-90 を参照。

44 *Proceedings*, 10-11.

45 *Ibid.*, 11-12.

46 この演説のうちに、1865年3月25日付の「序章」と、アンダーソンの新著への反論を目的とした「付録」が付け加えられた形で、同年ハワイアン・ガゼット社から小冊子として出版された。本稿では、主教演説の一次資料としてこの小冊子を参考するが、時系列に沿って論争の展開をたどるために、これらの後付けされた部分は考察から外す。The Right Reverend the Bishop of Honolulu, *A Pastoral Address by the Right Reverend the Bishop of Honolulu with Notes and a Review of the Recent Work of the Rev. Rufus Anderson, D.D. Entitled "The Hawaiian Islands"* (Honolulu: Hawaiian Gazette Office, 1865).

47 *Ibid.*, 3-4.

48 *Ibid.*, 4-8.

49 *Ibid.*, 8-10.

50 *Ibid.*, 10-12.

51 *Ibid.*, 13-18.

52 *Ibid.*, 18-19.

53 *Ibid.*, 20-21; 連合月例祈祷集会の件に関する福音派の見解については、Anderson, *The Hawaiian Islands*, 348-349を参照。

54 The Bishop of Honolulu, *A Pastoral Address*, 20-21.

55 Hart, *The Lost Soul*, chapter 4.

56 The Bishop of Honolulu, *A Pastoral Address*, 21-23.

57 *Ibid.*, 23-28.

58 *Ibid.*, 28-31.

59 *Ibid.*, 31-32.

60 Hutchison, *Errand to the World*, 89.

61 出版の経緯については The Bishop of Honolulu, *A Pastoral Address*, 33, 37を参照。「付録」の中でアンダーソンの著への直接の反論となっているのは注Gである。*Ibid.*, 42-64; PCAは1864年12月31日にアンダーソンの新著を紹介している。PCA, December 31, 1964.

62 PCA, January 7, 1965.

63 PCA, April 15, April 22, April 29, May 6, May 13, May 20, May 27, June 3, June 17, June 24,

July 1, 1865; 6月10日は別の投稿者がステイリー批判を繰り広げている。アレキサンダーの反論は23項目に及ぶが、そのうち14項目はステイリーの小冊子の注5に対する反論である。アレキサンダーの反論は同年、PCA編集長によって出版されている。W. D. Alexander, *A Review of a Pastoral Address by the Right Rev. T.N. Staley, D. D., Reformed Catholic Bishop of Honolulu, Containing a Reply to Some of his Charges against the American Protestant Mission to the Hawaiian Islands* (Honolulu: H. M. Whitney, 1865).

- 64 ステイリーの任期の最後については Restarick, *Hawaii 1778-1920*, 120-121; Andrew Forest Muir, "Royalty and The Church," *Episcopal Churchnews* (May 15, 1955): 33を、ウィリスの任期については Restarick, *Hawaii 1778-1920*, chapters 14-23 を参照。

A Conflict between the Visible Church and an Invisible Church in the Kingdom of Hawai'i: Two Kinds of Ecclesiology and their Cultural Implications

YAMAMOTO Takahiro

Bishop Thomas Nettleship Staley arrived with his two priests in Hawai'i in 1862. They had been sent by the Church of England with the invitation by Kamehameha IV, the King of Hawai'i, whose aim was to counteract the American influence in his kingdom by the presence of the Episcopal Church. It was not long before the English Mission came into conflict with the American missionaries who had already been engaged in the evangelization of Hawai'i. The conflict between the two parties revolved around a variety of issues, the most fundamental of which was the difference in ecclesiology between them. The English Mission organized by "Anglo-Catholics" tried to plant in Hawai'i the "visible" church, which, they claimed, had existed in unbroken continuity from the time of the Apostles. On the other hand, the American missionaries, who were affiliated with the American Board of Commissioners for Foreign Missions, an evangelical organization, had tried to plant an "invisible" church free of denominational differences. This paper will examine the differences in ecclesiology between the English Mission and the American missionaries, and their cultural implications, in an attempt to shed new light on the nature of the controversy that took place in an era preceding the annexation of Hawai'i by the United States of America in 1898.

失われてゆく市民としての私

——ヘンリ・アダムズのもとに集った女性たちと門戸開放帝国主義——

中野博文

1 アンクル・ヘンリの記憶

『ヘンリ・アダムズの教育』について、ハーヴァード大学学長を務めたチャールズ・W・エリオットは「過大評価された男の非常に過大評価された本だ」と述べたという¹。自伝文学の傑作とされ、刊行後にたちまちアメリカ文学の古典とされた同書が、このような批判を招いたのには理由がある。それはアダムズの人柄である。

彼には、大統領であった曾祖父ジョンと祖父ジョン・クインジー、また副大統領候補として選挙に出馬した父チャールズ・フランシスの足跡に従って、政府の要職を得ようと努力しながら、望みが果たせなかつた男というイメージがある。年齢を重ねるごとに鬱屈していき、ついには怨嗟の矛先を才能ある自分を受け入れなかつたアメリカ社会に向けて、アメリカ民主政の危機を声高に唱えた失意の知識人とも評される。こうしたアダムズ理解は、アメリカ研究で一時代を画した史家R・ホフスタッターが時代に取り残された名門の末裔と、彼を位置づけたことで確立したといってよい²。

こうした見方を真っ向から打ち消そうとした者がいる。アダムズの死後に公刊された『ヘンリ・アダムズの教育』が1919年にピューリツァー賞を受賞した翌年、メイベル・ラファルジュはアダムズを回顧した著作を出版する。時代に適応できずに失敗した者の自叙伝として『ヘンリ・アダムズの教育』を読む人々に、アダムズの真実を知つてもらうためである。ラファルジュはアダムズの妻マリアン（通称クローヴァ）の兄エドワード・フーパーの娘、つまり姪である。アダムズのもとには、ラファルジュのような血縁者だけでなく、彼を慕つて集つた多くの女性たちがいた。アダムズは血縁のないものも「姪」として振る舞うことを許したが、こうした女性たちの声を代表して、ラファルジュは同書を出版したのであった。

彼女によれば、さまざまな評価が入り乱れる『ヘンリ・アダムズの教育』のなかで、とくに興味深いのは「語らずにすまされたこと」であった。そこには「沈黙の聖なる入り口」が存在し、姪たちでさえ、踏みいりることを躊躇する空間が広がつていたのである³。

妻クローヴァとともに因襲に支配されたボストンを脱出し、首都ワシントンで文明再建の夢を追つたアダムズは、クローヴァの自殺という悲劇に襲われる。妻を失つて打ちひしがれたアダムズは妻の思い出から逃れるように日本へ南太平洋へと旅をし、異なる文化のなかで新しい

文明観を身につける。また、妻の死後、人との交流を避けるようになった彼の心の慰めとなつたのは、腐敗政治家のもとに嫁いだ女性エリザベス・キャメロンとの交流であった。アダムズは自分の兄弟の娘たち、クローヴァと血のつながったフーパー家の娘たち、そしてエリザベス・キャメロンとその娘や姪たちを慈しみ、彼女たちに自分の持てる限りの知識を与えた。それは彼女ら新時代の女性こそ、次代を託すべき者であると考えたためであった。

自伝にもかかわらず、『ヘンリ・アダムズの教育』にこうした事実は書かれていない。それは故意に隠されたのであって、ラファルジュによれば、「ヘンリ・アダムズは自身の姿を隠すことを熱望し、そのためにあらゆる可能な手段をあみだした」のであった。実際、アダムズは「墓石を守る盾」として同書を執筆したと小説家ヘンリ・ジェイムズに語っている。後の世の伝記作者によってプライバシーを暴露されるのを恐れた彼は、見事な自伝をあらかじめ刊行すれば、伝記の影響を最低限にすることができると考えたのであった。妻との幸せな日々と悲劇、妻の存在を感じさせるものすべてを封印するための自伝出版なのであった⁴。

一方、『ヘンリ・アダムズの教育』の序文を見ると、まったく別の執筆理由が述べられている。非常時に対応可能な若い男性の教育を願っての発表とされているのである。しかし、実のところ、アダムズは目前に迫った世界の危機を解決するには、権力や利益の追求に狂奔する男性たちの行動を根本的に変革する女性たちの働きこそが重要と考えていた。この小論の結論をあらかじめ示せば、彼が説いたのは、破局への道を回避するには、暴力を避けながら異なる価値観を持つ国民同士を共存させていく新しい発想が必要なことであった。その発想を社会に広げていく主体は、豊かな感性を持つ女性をおいてほかにないと彼は考えた。

以下、この小論では彼の自伝には描かれなかった女性たちの姿を素描したい。平和を望むアダムズの思想は、妻とエリザベス・キャメロン、そして彼の娘の世代の女性たちとの語りのなかで紡がれたものであり、彼女たちの存在がなければ生み出されなかつたように思える。ラファルジュはアダムズの人生について、それは段階的に変化しており、「彼の人生のある時期でとくに親しくした者は、他の時期の彼を理解しないできたかもしれない」と述べている。女性たちとの交流は、アダムズ自身、事前には予想もつかなかつた教育を彼に与えたのであった⁵。

晩年のアダムズはヨーロッパ帝国主義に反対して積極的に行動したが、そうしたアダムズの姿を間近で見た女性たちの一部は、彼の死後、帝国主義との戦いを続けていく。以下、アダムズと女性たちが残した文章を通じて、アダムズと彼のもとに集つた女性たちの人生をたどつていこう。

2 リトル・ホワイトハウスの輝ける日々

「ヘンリ叔父さんは彼の存在自身が端正さの一つのヴィジョンになっていました。白いリネ

ンのスーツを身につけた姿は、保守的なクインジーの風景に異質な感じを与えていました」。彼の兄ジョン・クインジー・アダムズ2世の娘アビゲイルはこう回想している。代々のアダムズ家の住まいがあるクインジーに突然現れては去っていくアダムズの姿を評したものである。彼女によれば、アダムズ家が地盤としたボストン社会はヘンリの気性には合わなかった。ハーヴァード大学の教師として落ち着くことができず、彼は生まれ育った町を飛び出したのである⁶。

アダムズ家には異質な服装のセンスをヘンリが身につけたのは、彼の妻クローヴァの影響である。1880年にヘンリが著した小説『デモクラシー』では西部出身の俗悪な政治家がニューヨークの洗練された女性と出会って、国際的に通用する風貌へと変身する情景が描かれている。これはそれまでアダムズ家になかった美的感性を与えてくれた妻への思いを込めた記述とみて良い⁷。

大統領を輩出したとはいえ、アダムズ家は資産家ではない。第二代大統領を務めたジョンは靴職人の息子であった。ジョンが革命戦争に奔走してクインジーを離れたとき、家計が破綻しなかったのは、夫人であったアビゲイルがジョンに代わって働いたからである。地位のない一市民が政府を建設し運営していくというアメリカ革命の理想はアダムズ家に受け継がれ、アメリカ国家への献身を当然とする家風となった。それは革命の原動力となったピューリタニズムの保守的なキリスト教倫理と結びついて、華美を排して一心に国家発展を追求する過酷なまでの勤勉の精神を生み出した。アダムズ家の息子たちへの重圧は過酷であり、ジョン・クインジー・アダムズの弟チャールズは耐えきれずに、酒におぼれて悲惨な死を遂げたのであった。

一方、ヘンリの妻クローヴァの実家であるフーパー家は1635年の入植後、富を築いてきた名家である。彼女の父は医師であったが、芸術の保護者としてボストン美術館の理事を勤めていた。ヘンリが勤めるハーヴァード大学の学部長がクローヴァの姉エレンの夫であったことから二人は親しくなり結婚した。1872年、ヘンリが34歳、クローヴァが28歳の時である。

南北戦争後の社会では婚期が遅れていた。戦争で男女の人口比が崩れるとともに女性の社会参画が求められていたためである。クローヴァの伝記を著したナタリー・ディクストラによれば、クローヴァは戦時に傷痍軍人救済のために創設された団体で活動した後、戦後は困窮した女性児童や解放奴隸の女性のためにつくられた学校の運営にあたっていた⁸。

結婚して5年後の1877年、夫妻の生活に転機が訪れる。この年、ヘンリの兄ジョン・クインジーと弟ブルックスが州議会選挙に出馬し、ともに落選した。アメリカ社会を網の目のように覆う政党の影響力は南北戦争後も揺らぐことはなく、むしろ戦後の復興事業と移民の増大のなかで、腐敗の度を深めながら強まっていた。曾祖父ジョン以来、共和主義精神と国益に導かれた政治を目指したアダムズ家の人々は政党と良好な関係を築けるわけがなく、選挙に勝利して

公職を得ることは困難な情勢となっていた。

兄弟が苦杯をなめるなか、ヘンリイは選挙とは別の世界で身を立てる決意をする。「この世で役に立つことがあるとすれば、政治家にとって信頼できる助言者になることである」と確信し、政治家の求めに応じて顧問として働く道を新たに歩みはじめたのである。なお、ここには家庭の事情もあった。他の兄弟が政治活動や実業の世界で多忙ななか、体調を悪くした母を支えることがヘンリイに期待されていたが、その母と妻の折り合いが悪かったのである。ボストンを出るのなら、その務めから解放されたのであった⁹。

1877年の冬、ヘンリイとクローヴァは首都ワシントンに新居を構え、1879年のヨーロッパ留学を挟んで、1880年にホワイトハウスの斜向かいに転居する。それは「リトル・ホワイトハウス」と呼ばれることになる邸宅であった。1877年の時点からホワイトハウスに程近い彼らの屋敷は、洗練された優雅さで評判であった。クローヴァは父に対し、新居に所蔵する美術品を見て、歴史家であるとともに政治家でもあったジョージ・パンクロフトとその夫人が感嘆したことを誇らしげに書き送っている。また、クローヴァは自宅に人を招く際、ヨーロッパの水準に照らして一流の料理を提供し、調度品や自らの衣装にも細心の配慮を行った。ボストンに壮麗な美術館を建設することになるイザベラ・ガードナーと、ヨーロッパで発表された新作のガウンをどちらが先に身にまとうか競争もしている¹⁰。

首都で夫妻が目指したのは、政治の議論は言うに及ばず世界の第一級の人物を招いて最先端の科学、芸術を論じる場をつくることであった。実際、それは成功し、20世紀前期に花開いたロンドンのブルームズベリ・グループやパリのガートルード・スタインのサロンを凌ぐほど、広範な知識人を結ぶ拠点となった¹¹。とくにアダムズ夫妻が懇意にしたのは、リンカン大統領の秘書を務め、ジャーナリスト、外交官として活躍していたジョン・ハイとその夫人クララ、そして地質学者であり鉱山開発と鉄道建設に尽力したクラレンス・キングであった。ハイもキングも文学者として知られ、芸術と科学を愛した知識人であり、この五人は「ファイヴ・オブ・ハーツ」と呼ばれる固い絆をつくった。

一面で、こうしたサロンの建設は目の前にあるホワイトハウスを意識しての行動であった。ホワイトハウスは、共和政国家アメリカの姿を象徴的に示すために人工的に設計された都市ワシントンにおいて、その中心施設の一つであった。ホワイトハウスに最初に入ったのは首都移転を指揮した大統領ジョン・アダムズであり、その管理を取りしきったのは、彼の妻アビゲイルである。しかし、ジョン夫妻も、またジョンに続いて大統領となったジョン・クインジーとその妻ルイーザも、ホワイトハウスの住人になったことを喜んだわけではなかった。アビゲイルとルイーザは、その住居としてのみすぼらしさを呪い、夫が選挙で敗れた際は退居を心底喜んだのである。建て付けの悪さから冬の寒風に苦しめられることや、大統領官邸にふさわしい

風格がないことは、後に改善されたが、1890年代のクリーヴランド政権期でさえ官邸の人員は不足していた。大統領自身が玄関に人を出迎えたり、電話に直接出たりすることさえあったのである。その来客もまた問題であった。ジャクソン政権期以降、獵官と利権漁りを目的として政党関係者がたむろする場所に変じたのである¹²。共和政と文明の拠点であるべきホワイトハウスが腐敗の巣窟になったとき、その目の前でヨーロッパを凌ぐ政治と文芸のサロンをひらくのがアダムズ夫妻の目指したものであった。

ヘンリイは政治家への道を諦めたがゆえに、選挙から自由に行動でき、目前のホワイトハウスで繰り広げられている選挙目当ての活動から独立して、自分の家に政治と文明を論じる空間をつくることができた。しかし、彼が政治家の顧問として働くとき、悪徳が知らぬ間に忍び寄る可能性がある。これを払いのけるため期待されたのがクローヴァの力であった。

「政治では汚いこともしなければなりません。…私はふくれあがる責任と誘惑から、助力が必要な状況に追い込まれています。私は助力を求め、あなたのみが与えてくれます。あなたは親切で思慮深く、良心的で志が高く、洗練されていて、私の知るどんな女性よりも公共の義務に耐えられる人です。あなたの場所はここにあるのです」。これは小説『デモクラシー』で主人公の女性が求婚される場面での台詞である。それはまた、汚濁のなかで、つきあうべき者と遠ざけるべき者をはっきりさせる助言者を必要としていたヘンリイが、妻への期待を示したものでもあったろう。事実、彼女は良くこの務めを果たした。彼女は相手が誰であれ、招く者を厳しく選別し、自らのサロンのモラルと品格を守ることに努力した。とくに倫理に厳しく、夫の親友ヘンリ・ジェイムズがスキャンダラスな振る舞いで話題となっていた文学学者オスカー・ワイルドを同伴しようとしたとき、「愚か者が私のお墨付きを得て、アメリカ西部をまわることは許しません」と峻拒しているし、英國女優リリー・ラングトリーの訪米では彼女の男性遍歴を理由に付き合う対象ではないとしている¹³。

クローヴァの才知と人柄を知る逸話がある。小説『デモクラシー』は匿名で発表されていた。大統領をはじめとして登場人物のほとんどが誰なのかわかる内幕小説であったため、筆禍を恐れたのである。ベストセラーとなったこともあって、筆者捜しは政界とメディアで加熱したが、そこで名のあがった一人はクローヴァであった。彼女は父への手紙で、「でまわっている『ブラックリスト』に私の名前が挙がっていますから、私が著者であるとお父さんが疑っても、面白がりはしても驚きません」としたうえで、もし自分を著者と考える人に出会ったならば、娘であればもっと上手に書かねば許さぬと言ってほしいと述べている¹⁴。

ここにあるのはヘンリイ以上の文才が自分にあるとの自負であろう。そして、アダムズ家にはそうしたクローヴァを受け入れる家風があった。曾祖母の時代から男女に知的能力の差がないことは当然とされてきたのである。アビゲイルが男女平等を唱えた姿は広く知られ、1876年に

は独立革命百年の記念事業としてアビゲイルとジョンが交わした書簡を集めた著作が公刊されている。祖母ルイーザもアビゲイルに劣らず文芸に秀で、夫とパートナーシップを築いた。クローヴァもフランス語、ドイツ語のほか、古典ギリシャ語で哲学書を読む才媛であった。ただし、彼女の時代に入ると知性の在り方に微妙な変化が現れる。

「心が落ち着いてもっと良い文章が書けるようになるまで、私の手紙を読まないでください。まさにいま生は乱雑な印象の塊で、実際的で冷静なやり方では、そのもつれを解けません。ああ、アビゲイルの文体で書ければいいのに」。これは1872年、新婚旅行中、フィレンツェから父宛てたクローヴァの手紙である。これは文才が劣っていることを示したものではなく、生の表現がアビゲイルとは異なることを表現したものであろう。学生時代に水彩画を学び、日本美術に惹かれたクローヴァは、自己を表現する上で文章に限界があると感じた人であった。彼女は多くの絵画を残しているが、1884年以降になると新しい表現技法である写真に打ち込むようになった。好んで対象とされたのは孤独な男女のポートレイトである¹⁵。

哲学に通じた彼女は物事の本質が見る者の角度によって変化する相対的なものであり、他者には絶対に理解不能な領域が自己のうちに存在すると考えるようになっていたように見える。これは真理が神の言葉によって万人に理解されると信じ、自己を表現したアビゲイルの時代とは根本的に異なる感性である¹⁶。こうした感性はヘンリの政治理解に大きな影響を与えることになる。また、それは神を信じて教会に魂の救済を求める道を自ら閉ざす点で危ういものもあり、アダムズ夫妻の悲劇を招くことにもなる。

3 エリザベス・シャーマン・キャメロンの教育

「アダムズ氏の妻は、この春に亡くなった彼女の父の看病後、神經がまいっていました。これが彼女の本当の死因であることは間違ひありません。夫妻は夫人の回復を待って新居に入ることになっていました」。1885年12月、エリザ・シャーマンは娘エリザベス（通称リジー）が懇意にするヘンリを襲った悲劇をこう記している。クローヴァは、この月の6日、写真の現像に使う青酸をあおったのであった。翌日の訃報に続き、3日後に死因が自殺であったと新聞が報じると、その原因に注目が集まつたのであった¹⁷。

エリザ・シャーマンは知るよしもなかったが、娘リジーが彼女の死と関係していると指摘する者がある。死の直前、クローヴァは妊娠中に体調を壊したリジーを気遣って、その自宅を見舞いに訪れた。リジーの伝記作者アーリン・テハンは、母となる日を心待ちにする28歳のリジーの輝くような美しさは、人生への絶望を深める一因になったのではないかと推測している。クローヴァはこのとき42歳、夫婦仲は睦まじかったが、子を諦める年齢にさしかかっていたのである。確かに、家庭において新たな生が得られないなら、老いと死のみしか残らないかもし

れない。長年、やもめ暮らしを通した父の孤独な死を看取ったとき、自己に子がないことは耐えがたい苦痛になったかもしれない。クローヴァの姉エレンも子がなかったが、1886年に彼女の夫が病死すると神経を病み、翌年に鉄道事故で亡くなった¹⁸。

苦しみを背負うのは残された者である。悲嘆にくれるアダムズは妻のいない生活から逃れるように、海外へ旅するようになる。彼は『合衆国史』をはじめ未完の仕事を抱えていたため、連邦議会の会期中はワシントンの自宅で過ごすことにしたが、その扉は一切の来客を受け付けなくなってしまった。彼を精神的に支える必要があると考えた親族は、彼の兄チャールズ・フランシス・アダムズの娘メアリを同居させることとした。姪との生活は、クローヴァの兄エドワード・フーパーの子を支える方策にもなった。エドワードには5人の娘があったが、1881年に妻が亡くなっていた。叔母エレンも失ったとき、その子たちはアダムズを慕い、彼の家に集まるようになっていた¹⁹。妻を失って絶望するヘンリイはクローヴァの親族のために生きねばならなかつたのである。

もちろん、彼は母親の代わりになれない。アダムズの姪たちに女性の生き方を示したのは、クローヴァが可愛がり、彼女亡き後は首都を代表するサロンの主人となつたリジーであった。クローヴァの死後、リジーとの会話や文通はアダムズの心の支えとなり、アダムズ家やフーパー家の娘たちもリジーと親密になったのである。

リジーはクローヴァと違うタイプの女性である。リジーの父チャールズ・シャーマンは、父が早世したため困窮した家族を支えながら法律家になった苦労人である。兄の奮闘は弟たちを刺激し、その一人ウィリアムは陸軍に入って南北戦争の英雄に、またその下の弟ジョンは連邦政府の要職を務めた。1877年、20歳になったリジーは叔父たちのいるワシントンを訪れる。結婚相手を探すためであった。彼女が選んだのは、ペンシルヴァニア共和党の総帥サイモン・キャメロンの子ジェイムズ・ドナルド（通称ドン）であった。サイモンは貧困の身から新聞事業で財をなし、政界に進出して、1860年大統領選挙ではリンカン当選を支えた人物である。他面、この時期の有力政治家の例に漏れず、サイモンが支配する企業は政党と癒着して巨大な利益をあげていた。彼は汚職によって陸軍長官の職を追われたが、その後も連邦政界で権力を握り、その地位の世襲をはかってドンを陸軍長官にした後、この年、上院議員の座につけていた。ちなみに、結婚の時、ドンは44歳、リジーより24歳の年上で、死別した先妻があり、その子も6人いた。

彼女はそうした一切を承知の上、彼を夫とした。1878年1月5日、彼女は母に、「私の将来が決まったら、私はすぐに手紙を書くと約束しました。いつかそういう日が来ると期待していたことを、いま知る準備をしてください。昨日、私はキャメロン氏と長い時間話しました。その結果、私は彼と結婚することを決めました。私が指定した時にです。彼の指図は受けません。

大部分の男性が多くを約束して少ししか実行しないと承知していますから、最後の点は彼に書面をつくらせました」と書き送っている²⁰。リジーは母にこの結婚が自らの意志であることを強調したのであった。

こうして結婚し、首都の住人となつたリジーがアダムズ夫妻と親しくなるのは、1881年に入ってからである。1878年選挙とアダムズ夫妻の外遊があったためであった。その1月、クローヴァは彼女を自宅に招待した。美貌と若さが溢れたリジーは、その天性の明るさが気に入られ、夫妻のサロンの常連となる。クローヴァが彼女を可愛がったとき、そこには若くして政治家夫人としての仕事をせねばならないリジーへの同情があった。クローヴァは翌年2月、「昨日、ドン・キャメロン夫人がニューヨークでの6週間の体調不良から回復し、こちらに戻りました。私はいまからこの気の毒な少女に会うことになっています。金と邸宅に惹かれて、はずれくじをひいたのではないかと思うのです。彼女はまだ23歳にもなっていない本当の子供です」²¹と述べている。

クローヴァはリジーの夫の政治的将来を見通していた。1878年、共和党全国委員会委員長への就任を最盛期として、ドンはその影響力を失っていく。キャメロン家の腐敗とその強権的な組織運営を批判され、1881年にはペンシルヴァニア共和党は分裂する事態となった。1883年、キャメロン夫妻がヨーロッパ旅行に旅立つとき、クローヴァは深夜までリジーと話している。そのときのことを父に伝えた手紙で、「私たちは彼女がいなくなると本当に寂しくなるでしょう。ドンはいずれにせよ上院議員ではなくなります。共和党内部の取引で、多分、そうなるでしょう」と述べている。この州党の内紛はドンの父サイモンの右腕であったマット・キーによって修復されるが、この結果、キーが党组织の実権を握るようになり、1896年、ドンはキーによって政界から引退させられるのであった。クローヴァの鋭い目はドンのことだけでなく、リジーのことも見抜いていた。彼女は「政治の世界にずっとつづかっていて、足の先まで忠実な政党員（Stalwart）」なのであった²²。

クローヴァの死の翌年、リジーが姉メアリに送った手紙が残っている。1885年、民主党クリーヴランド政権が成立すると、共和党時代とは大幅に異なる人事が発動される。リジーは陸軍軍人であるネルソン・マイルズの妻となった姉メアリに対して、難航しているマイルズの昇進を実現するためにドンに大統領との面会を取り付けさせたことを述べている。そこでは、共和党保守派である夫の影響力が限定されていることを述べた上で、人事を通すための「つて（wire）」をヘンリ・アダムズに紹介してもらったことを説明している²³。アダムズは、選挙で民主党と提携することもある共和党改革派の人々と太いつつながりを持つだけでなく、兄ジョン・クインジーが民主党で活動していることもあるって、夫にはない人脈をリジーに提供していたのである。

リジーと親族の間の手紙を見ると、彼女は自己の親族や関係者が望む官職や利権を手に入れるために政治家へ接近するのを何らためらわなかった。中西部の地方都市であるオハイオ州マансフィールドに育った彼女にとって、政党は人々が必要とする利益の分配装置として生活の隅々にまで浸透していた。それが身近なものであったために、ワシントンでの生活は政党政治家を操縦する技術に習熟することであると考えることができたのである。テハンが著したリジーの伝記は、アダムズの兄の娘が、「彼女を『社交界の指導者』とか『優雅な女主人』と呼んで、その真の姿を見失ってはいけません。…彼女は政治権力者であり、彼女のサロンは何よりも政治目的のものなのです」と述べたことを紹介している²⁴。しかも、彼女は夫のためではなく、自身が望む政治目的を達成するため行動していた。

こうした彼女は政党の集票活動を避けて暮らした。それはリジーがキャメロン家の人々やその配下の人々がいるペンシルヴァニアでの生活を嫌ったためであったが、それを許す環境も存在した。南北戦争以前から女性は政党で盛んに活動し、議員夫人であれば相応の働きが期待されたが、選挙民との接触が苦手なドンはリジーに、それを求めなかつたのである。それでも彼が議席を守れたのは、上述したマット・キーがドンを支え続けたからである²⁵。

キーは生活に困って政党から裁判所書記の仕事を得たのをきっかけに、政党政治の世界へ入った人物であった。彼は南北戦争がはじまると州知事の補佐に転じ、出征兵士の陳情処理を行って見事な能力を示した。彼は兵士が寄せた膨大な手紙を読んで必要な対策を行い、知事の名で返信したのである。この実務的腕をドンの父に買われて、州の共和党组织を取り仕切る人物になった。南北戦争後の復興期、州民の要求が爆発していた。キーは州民が求めるものをきめ細かく汲み上げて、必要な資源を連邦政府や民間から調達して配分すると引きかえに、選挙で票を獲得するシステムを築き上げた。それはアダムズが「粗野な手段を用いて粗野な利益のため」に活動し成功を収めた点で、アメリカ史上でもっとも興味深い対象と述べたものであった²⁶。兵士の苦境を示した手紙を集票の基礎となる利益に変換して政策を打ち出したキーの能力は、米国を代表するマシーン建設に発揮されたのである。

ちなみに、こうしたマシーン支配はリジーの女性参政権への無関心を生み出すことにもなった。クローヴァの場合も、女性を蔑視する歴史家フランシス・パークマンに憤激し、女性参政権の演説をしたくなかったと述べたことがあったものの、女性参政権運動にかかわったことはなかった。男女の力に優劣がないことを信じる彼女らがこうした態度を取ったことは、不思議に思える。その背景には、1874年に女性参政権運動家の一部がヘンリ・ビーチャー牧師の不倫スキャンダルを騒ぎ立てたことで、運動全体に「下劣な一団」というイメージが与えられたことがある²⁷。しかし、それ以上に重要な点は、マシーンの実態とその力をよく知る彼女らが、女性参政権の承認後、マシーンの悪徳が女性たちに及ぶのを恐れたことであろう。女性参政権を

当然と考えても、女性の権利や利益の保護を理由に腐敗政治家が女性を支持基盤へと転化しようと近づく過程を想像すれば、女性参政権承認によって失うものの方が大きいと感じられたのである。

リジーはクローヴァからサロンを主催するのに必要なマナーを学ぶとともに、夫妻が築き上げた内外の人脈と近づき、政治経済から文芸に至る幅広い教養を磨いた。アダムズの兄の娘アビゲイルは大邸宅を見事に切り回すリジーの手腕を賞賛している。リジーの姪エリザベス・ホイトとともに造園家になるため、ヨーロッパに留学していたグラディス・ライスは、リジーがヨーロッパの上流階級と対等に交際していることを見て、感嘆している²⁸。彼女はアダムズの姪たちにとって女性の手本なのであった。

4 帝国主義への挑戦 —— 門戸開放外交の舞台裏で

1898年、アダムズは結婚を控えた姪メイベルから相談をうけている。そのとき彼は結婚は自分で決めることであり、自分の父も一切口出ししなかったと述べた。そして、自分の気持ちをひたすらに信じて、男性との協調など考えず行動せよと忠告した。彼は「人生で価値ある時期は幸せな結婚の最初の5年から10年のみです。この時期、一人の世界を求めることがあります。人生は充実していて、自分の個性の色を補ってくれる背景としてしか、周りの世界を必要としません。この充実した世界から中年期に入っていく時、自立して歩んでいくことを無意識に学んでいるのです」と述べている²⁹。

姪たちの話に辛抱強く耳を傾けるアダムズは、常に「自身の考えを持ち、人の考えに縛られてはいけない」と教えた。この点、リジーは姪たちにとって自信を持って生きている女性の象徴であった。アビゲイル・アダムズはリジーのことを「おそらく厳密な意味では美人ではありませんが、洗練されていて完璧な自信に満ちているので美しい感じを常に与えていました」と述べている。グラディス・ライスも、自己の判断を絶対と信じるリジーに会って、それまでの常識が覆されたと記している。もっとも、こうしたグラディスも母から自立を教えられている。結婚で何を頼ってよいか訊ねたとき、「自分自身、自己の勇気、自己の強さ、自己の徳のみを頼りにしなさい」と諭されたのであった。グラディスはニューヨーク出身で、アダムズやリジーとは違う文化で育ったが、独立不羈の信条を親から与えられたのであった³⁰。

フーパー家の娘たちが20歳代を迎える、結婚を意識し始めたのは、1890年代後半から1900年代前半であった。それは、アダムズがもっともアメリカ外交に働きかけた時期でもあった。リジーの叔父ジョン・シャーマンに続いて、親友ヘイが国務長官になったため、彼は長官の私的顧問として働いていた。こうしたアダムズを突き動かしていたのは、経済的利益のために他国の民衆を犠牲にするヨーロッパ帝国主義への怒りであった。

1901年11月2日、ボーア戦争に際して彼がヘイに送った手紙では、植民地支配への反抗を力で弾圧する英国は、アメリカ独立革命の時とまったく同じことをしていると指摘し、弾圧が続くようなら制裁措置としてカナダ侵略を英國に示唆すべきであると説いている。三代にわたって米国の駐英公使を務めたアダムズ家の人間として、反英運動家に人権を認めぬ姿勢を許せないと憤激したのである³¹。

一方、アダムズは世界情勢の分析に基づいて、自国が取るべき外交戦略も打ち出していた。ヘイへの書簡の翌日、弟ブルックス宛てた手紙は、「われわれのすべての利益は、経済戦争を実施可能にする政治的平和の達成にかかっています」と述べている。彼は「ヨーロッパが常に言うのは、貿易か戦争の二者択一です。…彼らの古い手法は危険を取り除く以上に、危険を創造し、拡大し、そのままにしています」と批判し、返す刀で、米国自身も米西戦争によるフィリピン保有で、力による植民地支配を行ったスペインや英國の愚を繰り返していると論じた。アダムズが目指したのは、帝国主義戦争を避けながら、経済発展が遅れた地域を自由経済システムに組み込んでいき、世界全体が協調して発展する仕組みをつくることであった。「ボーア人、中国人、アイルランド人、トルコ人、黒人といった経済的なやり方をとれない旧人種を何とかしてわれわれのシステムの構成要素にしなければならないのです」と彼は記している³²。

自由経済システムを唱えた、この書簡でもっとも注目すべきことは、「進むべき真の道は北に出てロシアを支えることです」と彼が断じていることであろう。彼が懸念したのは、革命運動が激化し社会情勢が不安なロシアが、極東において戦争を行い、国家崩壊への道を歩むことであった。こうした事態を避けようとするとき鍵となるのは中国であった。ここで勢力均衡を創造して和平を保つとともに、ロシアの工業化と民主化を可能にする国際経済体制を築くのがアダムズの目指したものであった。こうしたヴィジョンのもと、アダムズがヘイ国務長官と協力し実施したものが門戸開放通牒とそれに続く日露戦争外交であった。それは勢力均衡と米国の利権確保を目的としたことから、後に門戸開放帝国主義と批判されることにもなるものであった。

アダムズがこうした政策に思いをめぐらせていたとき、1897年から1904年までの8年の歳月をかけて執筆した書物がある。『モンサンミッシェルとシャルトル』である。それは直接には11世紀から13世紀の中世フランスの精神世界の変化を解説したものであったが、実際には帝国主義を超克する新しい社会原理を説明したものであった。

この書にアダムズが込めた思いは、対象とする読者によくあらわれている。その序文を見ると、男性から文芸の関心が失せた現代、先人の残した文章の真意を解するのは女性のみであると記されている。この言葉の後、この書はその著者を叔父として慕い、その意図したところを受け継ごうとする姪たちのために書かれたと述べられている。実際、同書は1913年まで刊行さ

れず、アダムズが批評を得るために送付した一部の知識人や教育組織を除くと、その内容に触れることができたのは、彼の自宅やリジーのサロンを訪れた女性たちであった。

彼が公刊を避けたのには理由があった。『ノース・アメリカン・レビュー』の編集者として活躍したアダムズは、出版社に対する圧力で、いかに論文や書物の内容が歪曲されるかを承知していた。このため、畢生の大作『合衆国史』を完成させた後は、自らの作品を親しい人々への手紙として送るのを常とした。アメリカ歴史学会の会長演説でさえ演説は行わず、会員への手紙として文書で発表したのである。

『モンサンミシェルとシャルトル』の場合、アダムズは手紙以上により直接的な接触を望み、彼のワシントンの自宅やヨーロッパの住まいでの人々に読み聞かせるのを好んでいた。また、リジーの夫が政界を引退した後、リジーは娘マーサの教育のためヨーロッパに暮らすようになったが、リジーの家でも朗読している。アダムズをはじめとして米国有力者の集まる彼女の家は、ヨーロッパの政治家や官僚や、そうした人々と結婚した米国女性が集まる場所となっていた。

たとえば、1898年夏、英國ケント州サレンダー・デリングに借り上げた邸宅は、当時、駐英大使であったヘイガードアダムズらと政策を議論する中心となり、そこには英国外務次官G・カーラー、後に駐米英國大使となるJ・プライスも集っており、前年の冬以来、懸案となっていた英米協調が論じられた。メイベル・ラファルジュの回想では、アダムズは大戦を予言し、戦争勃発のはるか以前から「そのおぞましさと紛争の原因について、すべてを描ききっていた」。そうした彼は、米国人以外も集まるサロンで中世哲学に仮託して世界の危機を回避する道を、とくに女性に向けて伝えたのである³³。

ここで『モンサンミシェルとシャルトル』に触れた女性たちの文章を見てみよう。新婚旅行でパリのアダムズの家を訪れたアビゲイル・アダムズ・ホマンスは、アダムズの案内で夫とともにシャルトルの教会を訪れた時のことを、「そこでヘンリイ叔父さんは予言者として振る舞いましたし、わたしたちもそのように叔父さんと接しました。…わたしたち偏狭なニューアイングランド人にとって、ほとんどそれは啓示でした」と回想している³⁴。

アダムズと接する時間がアビゲイルよりも長いメイベル・ラファルジュは、アダムズがシャルトル教会の研究をするきっかけになった出来事を紹介している。彼女によれば、『モンサンミシェルとシャルトル』が完成する9年ほど前、彼はパリでの姪たちとの生活を抜け出して一人で教会を訪れ、聖母子を前に過去になかった衝撃を経験したという。この時期、アダムズの精神は戦争を回避するための目も眩むような理論を組み立てていた。こうしたアダムズの魂はシャルトルを訪れて「永遠に安息する場所を見いだした」というのである。大聖堂の聖母子に、クローヴァと、彼女と自身が望んで得ることのできなかった子供とを重ね合わせたからである³⁵。

多くの姪たちがシャルトル教会から発せられる宗教的崇高さを強調するなか、教会の美の根

源を記したのはグラディス・ライスである。彼女はパリのリジーの住まいに滞在した時、リジーから若い女性が心を落ち着かせるのに良いと勧められた刺繡をしながら、アダムズの朗読を聞いた。そして、シャルトル教会の南側尖塔が世界で最も完成された建築芸術である理由が「異なるパートの正確で熟練した均整の取り方にある」と言われて興味をそそられる。また、シャルトル教会は人類のためでも聖職者のためでもローマ法王庁のためでもなく、ただ聖母のためにあると教えられたことを記している³⁶。

グラディスが関心を持った点は『モンサンミシェルとシャルトル』の核心であった。南側尖塔の記述は第5章「塔と門」にあるが、それは最終章「聖トマス・アキナス」の末尾に直結する重要な部分である。アダムズが南側尖塔に見たものは、さまざまな時代に創られた過去のパートをそのまま残しながら、重心を一点に集中させる一方で、負荷を各パートに巧妙に配分し、見事に全体の調和を保っている技術であった。

彼はゴシック様式の大聖堂が表象するもののうち、もっとも重要で完成されたものは天井を支える補強材の細さであると言う。それは巨大な重量を耐え凌ぐ姿を可視化したもので、「信仰が崩れたとき天界も失われる」ことを象徴しているのである。「重い塔、不安定な屋根、頼りない補強材がもたらす危険、…教会につきまとう問題のすべては人間の苦悩の叫びのようにゴシック様式の大聖堂に力強く表現されている。それは希望を持って生きることの喜びを天に向かってまっすぐ伸ばし、自己破壊の衝動と不信の苦しみを地中に最後まで秘している。そこにはあなたは自身の若さと自信を満足させるものを見いだすことができよう」。これは同書の最後の言葉である³⁷。

この記述を読んで疑問として浮かぶのは、倒壊の不安のなかで生きる力を与えるものとは、何かである。アダムズは結婚を控えた女性たちに自分を信じて生きるように説いたが、この問いは女性たちの自己を信じる力とも関係しているよう。

この点、彼はその答えを自由を求める一心な願いに見いだした。第13章「ノートルダムの奇跡」において、12世紀から13世紀の人々が聖母の奇跡を信じたのは、キリスト教会の正統教義が冷徹な合理的支配を絶対化していたためであったと説かれている。その支配では一つの正義、一つの法が貫徹し一切の誤謬はないとしていた。「そのシステムにはまったく矛盾がない。…人は残忍なその論理に徹底的に追い込まれていき、ついには救いを求めて聖母にすがるのである。…いかに激しく聖母が求められたかはシャルトル大聖堂を見ればわかる」³⁸。

ここでアダムズが教会支配に重ねあわせているのが、米国の政党支配と帝国主義戦争の原因となっている資本主義経済であるのは容易に想像がつく。キャメロンやキーをボスとした州党組織は選挙勝利を目指して選挙民の利益分配を見事に調整するシステムであり、こうした州党の取引のうえに米国大統領の選出がなされていた。また、資本主義の発達は巨大企業の支配を

生み、そこで人は組織人として会社の利益に従属して動くようになっていた。20世紀初頭のアメリカ、否、先進国で生きるとは産業社会が生み出した利益システムの構成要素として円滑に作動することになっていたのである。システムのなかで暮らす限り、安定した生活が保障されているものの、一度、その外部からシステムを眺めるならば、理性の力で人を追い詰める、そのおぞましい姿に慄然とすることになるのであった。

人を支配するシステムの外部に脱出したいという人類の願いが結晶したものとして、アダムズはシャルトル大聖堂を語った。そして、大聖堂の偉容は聖母にすがる人々が身を捧げるためにつくったがゆえに美しく、矛盾と危機に耐えながら自己の信じるものを貫こうとする点に美的本質があるとしたのである。これが、米国建国の理念を奉じて20世紀初頭の帝国主義と戦っていたとき、女性たちにアダムズが語ったことであった。

5 世界戦争の時代と女性たちの戦い

アダムズが懸念したとおり、出版界でもてはやされた作品では読者に真のメッセージが伝わらない。労働組合運動の女性活動家であったローズ・シュナイダーマンは、フランクリン・ローズヴェルトのニューヨーク州知事時代、ローズヴェルトのサロンで彼の妻エレノアが『ヘンリ・アダムズの教育』を朗読するのを聞き、感銘を受けたと回顧している。官職と利権の配分で権力拡大を図るローズヴェルトに、政治権力による組合保護を期待してシュナイダーマンが接近したとき、政党政治の醜悪さを赤裸々に暴露した同書が読まれたのである。シュナイダーマンはそれを教養ある人間が読む一冊と素直に思い、学問が重要と考えたのであった³⁹。

自らが利益政治に取り込まれマシーンの一部と化していることに彼女が気づかなかったのは、労働運動の大義を信じたためであろうか。アダムズにせよ、彼の薰陶を受けた女性たちにせよ、システムの一部になって市民としての自立した行動ができなくなり、さらには自分の人間らしい感性さえもが奪われていったとき、その先にあるものが戦争であることを熟知していた。さらにまた、そうした理解があるからといって、戦争の回避も、また人として幸せな人生を送ることも簡単ではないことも承知していた。

極東での勢力均衡はできたものの、ロシアの膨張は止まらず、ついに1914年に大戦が始まる。そして、大戦下の1918年3月27日、ヘンリ・アダムズはこの世を去った。看取ったのは兄チャールズ・フランシスの娘エルジー・アダムズとリジーの姉リダの娘エリザベス・ホイトら、彼とともに暮らす女性たちであった。その翌日、エリザベス・ホイトはアダムズがクローヴァの死の直後に書いた手紙を読んで、心を救われる。そこには「この世がいかに移り変わろうと、これまで知られている地上界、天界のどんな力を用いようと、過ぎ去った日の幸せを打ち壊することはできない」とあった⁴⁰。

現世は酷薄である。クローヴァの亡くなる時にリジーが身ごもっていたマーサは夫ロナルド・リンゼーの赴任地カイロで病を得て、同年4月28日に早世する。リジーは娘が英國貴族で外交官でもあったロナルドと結婚したのを機に、ドンと別居してパリで生活をはじめ、第一次世界大戦が勃発すると難民救済に活躍していたが、アダムズに続いてマーサも失って絶望の淵に沈むことになった⁴¹。

そうしたリジーを慰めるため、アダムズを見取ったエリザベス・ホイトは、大戦のなかヨーロッパに渡った。そして、パリで赤十字活動に身を捧げ、ドイツ軍の爆弾が炸裂するなか捕虜や難民を救うために全力を尽くす。リジーの難民救済活動は赤十字に引き継がれていたが、米国陸軍の一部として行動するアメリカ赤十字でエリザベスは自分の天職を発見したのであった。パーシング将軍から厚遇されたエリザベスは「自分が陸軍生活を望んでいること」に気づき、赤十字で働く女性たちを統括して棘腕をふるった。そして、戦後は難民救済で勇名を馳せたハーバート・フーヴァーの大統領選挙の支援や企業経営を行ったのである⁴²。

エリザベスは38歳まで独身を通したが、1923年、リジーによって娘婿であったロナルドの後妻になることを勧められ、彼女もそれを承諾した。英国外交官の義理の母となった彼女は、ロナルドを通じて英国政治に働きかけていたが、そのロナルドを出世させるには有能な姪が必要なのであった。リジーはこの結婚の直前、「傍らに女性がいない男性は足のない駄のようなもの、飛ぶことを語るのはおろか、地上から離れることもできません」と述べている⁴³。エリザベスは世界恐慌、そして新たな大戦へと向かう波乱の時期、夫とともに働き、1929年には駐米大使となった夫とともに自らの母国に帰国して緊迫した英米関係を鎮静させるべく努力した。

帝国主義に挑戦し平和を願ったアダムズの遺志を、もっとも受け継いだのはリジーの娘マーサと、リジーに勧められて結婚したエリザベスであったかもしれない。彼女たちは米国籍を離れて英国外交官の妻として働いたのであった。そんな彼女たちを支えたのは、ヘンリ・アダムズ夫妻とリジーがつくった国際的な人のつながり、そしてそうした人々による語りの場と手紙の交換であった。こうした人のつながりはヘンリ夫妻の場合がそうであったように、エリザベスの場合も死後の思い出を語る場となる。エリザベスが残した手紙と日記は、彼女の記憶をとどめるため、アダムズ夫妻の親友ウイリアム・ジェイムズの息子ヘンリの妻オリヴィアによって私家版として出版されることとなった。

リジーやエリザベスの活動を人はアダムズが提案した門戸開放外交の延長で捉え、それをヨーロッパ列強の行動と何らかわらない帝国主義と言うかもしれない。実際、米軍の軍服をまとった後に英国外交官の妻となったエリザベスにせよ、娘の死後もエリザベスを通じて政治への影響力を保とうとしたリジーにせよ、米国の孤立主義者から見れば、否定すべき帝国主義者である。彼女たちがどのような意識を持っていたにせよ、政治の世界に生きる以上、こうした非

難はいつでもつきまと。そのような非難に耐える一方で、自己の信じた理想にしたがって生きることは、余程の覚悟と判断力がなければできない。「正確で熟練した均整」を取らなければ崩壊してしまう大聖堂のように、市民として生きる道は容易に失われてしまうのである。

ヘンリ・アダムズは、自由を求める戦いは英國支配と戦ったジョン・アダムズの時代から続けられてきたことを語り、戦争の原因となっているシステムに男性が取り込まれた状況では、システムへの対抗ができる主体は女性であると唱えた。このアダムズの思いを受け継いだ人々の人生の軌跡を、人と人の語りの場に支えられた脱システムへの行動と位置づければ、これをハンナ・アレントの提唱した公共性の復権の文脈で理解することも、あながち的外れではないかもしれない。ギリシャ古典に通じたクローヴァに導かれたアダムズは、芸術家ジョン・ラファルジュを伴った世界旅行を通じてデカルトの近代知を越える地平に到達していた。『ヘンリ・アダムズの教育』でも、他者性の承認を導く感性が合理的理解に優先することを訴えていたのである⁴⁴。アダムズ夫妻が生み出した人々のつながりは、独立革命の精神を受け継ぐものであると同時に、20世紀後半の市民権運動、ヴェトナム反戦運動に通じる一つの窓と見ることもできよう。

* この小論は平成21年度から23年度にかけて行われた科学研究費助成事業「ヨーロッパ・アメリカにおける「市民の自分史」の調査研究」(基盤研究(B)21320139 代表者横原茂)の成果である。

註

- 1 Ernest Samuels, *Henry Adams: The Major Phase* (Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 1964), 334.
- 2 ホフスタッターがアダムズをピューリタン的でアングロサクソン的なアメリカの典型と嫌悪したことについて、David S. Brown, *Richard Hofstadter: An Intellectual Biography* (Chicago: The University of Chicago Press, 2006), 35; 中野博文「危機のなかの自由主義－アメリカ改革政治についての一つの試論－」『アメリカ史研究』(no.35 (2012年8月), 100頁)。
- 3 Mabel La Farge, "Henry Adams: A Niece's Memories," in Henry Adams, *Letters to a Nieces and Prayer to the Virgin of Chartres* (Boston: Houghton Mifflin, 1920), 6.
- 4 *Ibid.*, 5; Henry Adams to Henry James, May 6, 1908, in J. C. Levenson et al.eds., *The Letters of Henry Adams* vol. VI (Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 1988), 136; Samuels, *Henry Adams: The Major Phase*, 312-313.

- 5 La Farge, "Henry Adams," 26.
- 6 Abigail Adams Homans, *Education by Uncles*, (Boston: Houghton Mifflin, 1966), 20, 19.
- 7 Henry Adams, "Democracy," in Henry Adams, *Novels, Mont Saint Michel, The Education* (New York: The Library of America, 1983), 152-153.
- 8 Natalie Dykstra, *Clover Adams: A Gilded and Heartbreaking Life* (Boston: Houghton Mifflin Harcourt, 2012), 28, 44-45. ちなみに、こうした独身時代のクローヴァは、後にヘンリにより彼の小説『エスター』の主人公の姿として描かれている。
- 9 Henry Adams, edited with an Introduction and Notes by Ira B. Nadel, *The Education of Henry Adams* (Oxford: Oxford University Press, 1999), 267; Dykstra, *Clover Adams*, 54, 91.
- 10 Jan.15,1882, in Ward Thoron, ed., *The Letters of Mrs. Henry Adams, 1865-1883* (Boston: Little, Brown, 1936), 321. 以下、この書はLMHAと略す。また、書簡の宛先を明記しない場合、父宛である; Nov. 30,1879, *ibid.*, 213.
- 11 Patricia O'Toole, *The Five of Hearts: An Intimate Portrait of Henry Adams and His Friends, 1880-1918* (New York: Simon & Schuster, 1990), xii.
- 12 Paul C. Nagel, *The Adams Women: Abigail and Louisa, Their Sisters and Daughters* (Cambridge: Harvard University Press, 2002), 4-6; Ballard C. Campbell, *The Growth of American Government: Governance from the Cleveland Era to the Present* (Bloomington: Indiana University Press, 1995), 20; Robert H. Wiebe, *Self-Rule: A Cultural History of American Democracy* (Chicago: The University of Chicago Press, 1995), 63-65.
- 13 Adams, "Democracy," 153-154; Jan. 18, 1882, LMHA, 328; Nov. 26, 1882, *ibid.*, 402.
- 14 Dec. 21, 1880, *ibid.*, 246-247.
- 15 Nov. 5, 1872, *ibid.*, 56; Dykstra, *Clover Adams*, 172, 176-181.
- 16 Nagel, *The Adams Women*, 74.
- 17 Eliza Sherman to Elizabeth Cameron, Dec. 21, 1885 in Elizabeth Sherman Cameron Papers housed in Massachusetts Historical Society. 以下、この文書はESCPと略す; Ernest Samuels, *Henry Adams The Middle Years* (Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 1958), 271-274.
- 18 Arline Boucher Tahan, *Henry Adams in Love: The Pursuit of Elizabeth Sherman Cameron* (New York: Universe Books, 1983), 88; Dykstra, *Clover Adams*, 211-213.
- 19 Homans, *Education by Uncles*, 41; Samuels, *Henry Adams: The Middle Years*, 324.
- 20 Elizabeth Sherman to Eliza Sherman, Jan. 5, 1878, ESCP.

- 21 Jan. 16, 1881, LMHA, 256-257; Feb. 19, 1882, *ibid.*, 352.
- 22 May 20, 1883, *ibid.*, 450-451; James A. Kehl, *Boss Rule in the Gilded Age: Matt Quay of Pennsylvania* (Pittsburgh: The University of Pittsburgh Press, 1981), 39, 46, 51-55, 59, 209; Nov. 6, 1881, LMHA, 296.
- 23 Elizabeth Sherman Cameron to Mary Miles, 1886, ESCP. この書簡には月日が記載されていない。
- 24 Tehan, *Henry Adams in Love*, 95.
- 25 Kehl, *Boss Rule in the Gilded Age*, 45-46.
- 26 Ibid., 9-11, 31-38; Adams, *The Education of Henry Adams*, 280.
- 27 Nov. 30, 1879, LMHA, 213; Henry Adams to Charles Milnes Gaskell, Aug. 18, 1874, J. C. Levenson et al. eds., *The Letters of Henry Adams* vol. II (Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 1982), 204. 「下劣な一団」とはアダムズの表現である。
- 28 Homans, *Education by Uncles*, 94-95; Gladys Brooks, *Boston and Return: Impressions and Memories of Two Cities, Two Continents, and Many People* (New York: Atheneum, 1962), 96-97.
- 29 Henry Adams to Mabel Hooper, May 28, 1898, J. C. Levenson et al. eds., *The Letters of Henry Adams*, vol. IV (Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 1988), 595, 596.
- 30 Homans, *Education by Uncles*, 49; Brooks, *Boston and Return*, 96-97, 4.
- 31 Henry Adams to Hay, Nov. 2, 1901, J. C. Levenson et al. eds., *The Letters of Henry Adams* vol. V (Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 1982), 302-303.
- 32 Henry Adams to Brooks Adams, Nov. 3, 1901, *ibid.*, 306.
- 33 Homans, *Education by Uncles*, 90-91; La Farge, "Henry Adams," 24.
- 34 Homans, *Education by Uncles*, 142.
- 35 La Farge, "A Henry Adams," 20-21, 23.
- 36 Brooks, *Boston and Return*, 101, 108, 103.
- 37 Henry Adams, "Mont Saint Michel and Chartres," in Adams, *Novels, Mont Saint Michel, The Education*, 695.
- 38 *Ibid.*, 574,
- 39 Rose Schneiderman with Lucy Goldthwaite, *All for One* (New York: Paul S. Erksson, 1967), 181.この資料については、寺田由美氏の教示を受けた。同氏に感謝する。
- 40 Elizabeth Sherman Hoyt to Olivia James, March 28, 1918 in Olivia James, ed., *The Letters*

- of Elizabeth Sherman Lindsay 1911-1954 (New York: Privately Printed, 1960), 47.
- 41 Tehan, Henry Adams in Love, 261, 266, 256.
- 42 Elizabeth Sherman Hoyt to Olivia James, Sep. 9, 1917, James, ed., *The Letters of Elizabeth Sherman Lindsay*, 37; *ibid.*, 92.
- 43 Elizabeth Cameron to Sherman Miles, Apr. 29, 1923, ESCP.
- 44 Adams, *The Education of Henry Adams*, 309. ここでアダムズは岡倉天心の思想を論じ、合理性に沿って物事を理解する西洋文明の限界を説いている。

Dissolving the Traditional American Self: The Education of Henry Adams's Nieces and their Challenge to European Imperialism

NAKANO Hirofumi

The purpose of this article is to show a historical change of ideas Americans had concerning the construction of the self. The traditional attitude toward self-construction in America was that individuals should develop human potentialities with their own power of rational reflection upon their own behavior. This modern understanding was challenged in the late nineteenth century. In this article, I describe the emergence of the new thinking of self-construction by paying attention to intellectuals' act of a writing performance. The traditional self-construction was bound by the truth and acceptable to God, while the new one was not bound by any absolute existence. The new attitude of construction rejected an old idea that human life could be fully expressed with written text. It also demanded a search for a new communicative method toward others who could not share common beliefs in the truth.

The persons I examined are the wife and the female friends of the historian Henry Adams. Adams's family is well known for they made contributions to American civic life. His great-grandfather John and his grandfather John Quincy were the presidents of the United States, and his father Charles Francis was a vice president nominee in 1848. It's also known that his family supported the right of women. Abigail, John Adams's wife, expressed her sincere desire for a woman's right of education in the late 18 century.

Until the Civil War, the family tradition presented the dominant model of self-construction for family members. Puritanism, Republicanism that John and Abigail believed in

forced their descendants into a conservative and solid mold. The changes occurred to the generations of Henry Adams's wife and nieces. Clover, Henry's wife, who had a broad knowledge of philosophy and the fine arts, gave her husband a postmodern perspective to the truth. After she passed away with no child, he devoted his personal life to educate his nieces to be good citizens. With the support of his intimate friend, Elizabeth Sherman Cameron, he taught them the necessity of decent morality and the importance of self-confidence. Henry's teaching was greatly influenced by Clover's liberal thought.

The Open Door notes were issued with Henry Adams's advice to Secretary of State John Hay in 1899 and 1900. At this period, Adams's nieces were entering marriage. Anti-imperialistic principles of the Open Door notes were created under circumstances that Adams and his nieces were communicating with each other about truly happy life. The self-decision, the escape from cruel materialistic social system, and the removal of any parasite on the community were the basic themes that appeared in their dialogue. Adams hoped that as the influence of virtuous women grew, the possibility of imperial wars could diminish.

Although the world war broke out in 1914, the emergence of this anti-imperialistic circle was a remarkable event, because the thinking and practice of Adams and his nieces can be regarded as the embodiment of an anti-modernistic civic philosophy in the mid-twentieth century, such as Hannah Arendt's thought.

白人性とアメリカの夢を超えて — Russell Banksの*Continental Drift*にみる社会規範からの肯定的逸脱 —

栗 原 武 士

序

1985年に発表され、ピュリツァー賞にもノミネートされたRussell Banks(1940-)の*Continental Drift*は、同時代のアメリカを舞台に、よりよい生活を求めてニュー・イングランドからフロリダに移住する白人労働者と、政治的腐敗と貧困のなか、生き延びるために故郷を捨ててアメリカを目指すハイチ人たちが運命的に出会い、そこで起こる悲劇を描いた作品である。James Atlasが「*Continental Drift*は私が知る限り最も説得力のある現代アメリカのポートレートである」(97)と指摘するように、Banksはこの作品において、労働者階級に属する白人男性Bob Duboisの悲劇的な人生の中に、初期グローバリズム時代の構造的な経済的不平等や、人種とジェンダーにまつわる作家自身の政治的問題意識を複雑に織り込んで見せた。

あるインタビューにおいて、「私は全てのことが政治的であるという認識のもとに世界を見るようになった」(Roche 176)と自ら述べているように、Banksの作品群はその極めて鋭敏な政治的態度によって特徴づけられる。そして彼の作品に底流する政治性を語る上でまず認識する必要があるのは、彼の人種問題への並々ならぬ関心であろう。大学時代に出会った公民権運動に大きな影響を受けたという彼は、「人種的差異化はアメリカの想像力のまさに中心に位置づけられた。そしてそれはいまだにそこにある。それはいまだに中心的な場所なのだ」(Dreaming 27)と述べ、現代の人種問題をアメリカの歴史の中に俯瞰的に位置づけようとする。

William Faulknerに比肩する人種感覚の持ち主であるとBanksを評するAnthony Hutchisonの言を待つまでもなく(Hutchison 67)、彼の*Rule of the Bone* (1995) や*Cloudsplitter* (1998)などの作品群には、人種にまつわる彼の巨視的な政治的問題意識が高度に結晶しているのがみてとれる。労働者階級に属する白人男性であるBobの人生と、ハイチからの密航者であるVanise Dorsinvilleの人生を交差させる*Continental Drift*においても、Banksは例に漏れず人種に対する政治性を非常に強く打ち出している。Banksがあるインタビューにおいて、黒人のディアスボラについて白人の視点から書くことが自分の作家としてのオブセッションであると述べているように(Trucks 95)、本作品において彼は白人男性であるBobが抱える黒人への憧れと嫌悪というアンビバレンスを通して、現代アメリカの一般的な人種問題を、Bob自身の白人性の問題へと収斂させる。

人種的マイノリティの問題を白人性の問題として考察するホワイトネス・スタディーズは、1990年代にアメリカのアカデミアにおいて始まった。Alexander Saxtonの *The Rise and Fall of the White Republic* や David R. Roediger の *The Wages of Whiteness*などを端緒とするこれら一連の研究活動が明らかにしたのは、白人性という支配的概念が独立性や自立性といったアメリカの伝統的美德と結び付けられることによって、人種というカテゴリーのみならず、ジェンダーや階級といった区分をも横断する形で、非白人に対する特権的地位を歴史的に構築してきたということだった。しかしながら、*Continental Drift*では、本来人種とジェンダーのパラダイムにおいて最上位に定位すべき白人男性であるBobは、1980年代の構造的な経済的不平等の渦に巻き込まれ、支配的な白人性から逸脱する存在として描かれている。本稿では *Continental Drift*において前景化される、労働者階級に属するが故の白人男性の精神的苦境と、そこからのラディカルな跳躍の可能性を描き出す Banks の政治的問題意識を、一連の白人性研究の業績に依拠しつつ考察していきたい。

1. 社会規範としての白人性

本稿はまず、労働者階級に属する白人男性としての Bob に着目し、彼が自らの白人性をどのように認識しているかを分析したい。白人性を研究対象とするホワイトネス・スタディーズは、非白人を能力的、道徳的に劣っていると措定することで白人の優越を担保するプロセスについての批判的考察を提示してきた。このようなホワイトネス・スタディーズには、当然ながら、非白人の立場からの、あるいは非白人になりかわっての、白人性への批判的考察という側面が存在する。この一連の学際的研究は、白人による非白人への優越感という精神的な特権のみならず、George Lipsitz が明らかにしたように、様々な社会的領域において白人が享受する物質的・金銭的特権をも前景化させてきた。

その一方で、ホワイトネス・スタディーズがもたらした知見の一つは、それらさまざまな美德と結び付けられた一種のステレオタイプとしての白人性が、白人の行動様式の一つの参照点として機能する可能性を孕んでいるということである。抽象的概念としての「白人」が、歴史的にいかに特権的地位を構築してきたのかを批判的に考察する Saxton や Roediger をはじめとするホワイトネス・スタディーズの一般的傾向に対して、Annalee Newitz と Matt Wray は、「白人性は社会的不平等を生み出し、それを維持する抑圧的かつイデオロギー的構造物である。それは非白人と白人の両方に多大な物質的かつ精神的な害をなしている」(3) と述べ、白人性が非白人のみならず、白人—特に白人ステレオタイプから逸脱する貧困層の白人—にとっても有害であると主張する。彼らの編集による研究論集 *White Trash: Race and Class in America*において、Constance Penley は、一枚岩の白人ステレオタイプにホワイト・トラッシュを対置して、

以下のように述べる。

もしあなたがホワイト・トラッシュであれば、あなたは自分自身を他と峻別するという終わりのない作業に従事しなくてはならない。すなわちあなた自身の振る舞いをコード化し、黒さとの違いを明らかに示すことで、たとえ哀れに見えようとも、あなたの—あるいは少なくともあなたに「ホワイト・トラッシュ」という綽名をつけて、あなたがいかに救いようがないかを強調するような、あなたの上にいる人々の—ささやかな文化的優越の度合いを説明しなくてはならないのである。(90)

一般的に物質的特権と結び付けられる理想的白人像に自己同一化することのできない貧困層の白人たちに注視するこれらの論考は、カラーラインと階級区分の同一化(同一視)に抵抗する。その主張は、リバタリアン的な福祉政策のただなかでアファーマティブ・アクションからもこぼれおちる白人貧困層への社会的関心を喚起すると同時に、白人貧困層の存在を起爆剤として白人ステレオタイプを動搖させることで、白人／非白人という硬直した人種観に亀裂を生じさせる可能性を提示しているという点で、非常に有益なものといつていい。

しかしながら、Roedigerが「(この研究は,) 労働者階級の白人性を、男性的な憧れと、共和国市民として男性がもつ不安と誇りを表現すると同時に抑圧するような、ジェンダー化された現象であるとみなす」(11)と述べ、ホワイトネスとジェンダーの不可分性を指摘するように、現代アメリカにおける白人性の問題は、人種と階級を接続することだけではその全体像を補足することは困難である。我々は、白人性にはアメリカにおける理想的男性像が常に織り込まれていることに留意しなければならないだろう。つまり、アメリカの人種とジェンダーのパラダイムで最上位に位置する白人男性のホワイトネスは、アメリカの共和国思想の中で称揚され理想化される、独立した男性の社会的役割と重ねあわされる形で、社会規範として機能するのである。その結果白人男性は、常に自分と非白人を比較することで優越感を得るか、さもなければ煩悶することになる。

社会的な準拠枠として機能する白人性が、現代アメリカの、特に1970年代以降の経済不況の中で、やっとのことで生計を立てることができるレベルの労働者階級に属する白人男性に、白人としてのアイデンティティの危機をもたらすことは想像に難くない。なぜなら理想的男性像・女性像に立脚するジェンダーロールが、すべての男女に劣等感と罪悪感をもたらすのと同様に、様々な男性的美德と結びつけられた白人性もまた、理想的自己実現を果たせない白人男性に失敗者としてのアイデンティティを押し付けるからである。

このような社会規範としての白人性という視点は、Banksの*Continental Drift*を考察する上で、二つの重要な論点を提供してくれるようと思われる。ひとつは準拠枠としての白人男性ジェンダーロールが、主人公Bobにどのような精神的拘束をもたらすかという点であり、いまひ

とつは、理想的白人男性像がどのようにアメリカ社会全体に構築・散種され、Bobがどのようにそのイデオロギーの虜囚となるのか—あるいはどのようにそのイデオロギーを進んで受け入れるようになるのか—という点である。本論では以下、本作の主人公Bobの人種観を詳細に分析することで、階級やジェンダーと複雑に絡み合う現代アメリカの社会規範としての白人性を、Banksが批判的に描き出していることを明らかにしていきたい。

2. Bobの白人性への不安

*Continental Drift*の主人公のBobは、ニューハンプシャー州の架空の町カタマウントで生まれ育った白人労働者である。ボイラーの修理という低賃金労働に従事する彼は、ある日突然自分の人生の全てが嫌になってしまい、家族を連れてフロリダに移住する。彼は兄の酒屋の店員として働くが、やがて兄と仲違いをし、発作的に仕事を辞めてしまう。仕事に困った彼は、モレイ・キーで幼馴染のAveの所有する釣り船の船長として働き始めるものの、その稼ぎは一家を養うのに十分な金額ではない。度重なる転職で行き場を失った彼は、Aveの船を使ってハイチ人の密航を手助けすることを決意するが、決行の当日、嵐の中で沿岸警備隊に追われた彼は、結局15人ものハイチ人たちを溺死させてしまう。良心の呵責に苛まれたBobは、密航の報酬を唯一生き残ったハイチ人女性Vaniseに渡そうとするも、彼女はそれを拒否し、Bobは金を奪おうとするギャングに刺されて死んでしまう。

物語の冒頭、ほぼ白人しか住んでいないカタマウントを出たBobは、フロリダで初めて多数の非白人と接触する。わずかな家財をトレイラーに詰め込み、オンボロのステーション・ワゴンでフロリダにやってきたBobは、多くの黒人たちに囲まれ、彼らの黒さへの恐怖とともに、自らの白さを恥じる感覚を人生で初めて覚えることとなる(62)。Robert NiemiがこのBobの精神状態について、「階級区分にかかわらず、白人は〔有色〕人種の集団に直面して初めて、自分自身が色を持っていることを認識するのである」(109)と述べているように、彼はフロリダに来ることで、人生で初めて自らの白人性に直面せざるを得ない状況に置かれるのである。

ここで注目すべきは、“He (Bob) feels ugly in his winter-gray skin, ashamed of his wife's plain looks and his children's skinny arms and legs” (62)と語り手が語るように、Bobが感じる自らの白さが、自分の家族の本質的な貧しさと、それに起因する外見的なみすぼらしさへと接続されているということである。RoedigerはW. E. B. Duboisの議論を敷衍して、かつては白人である喜びが白人労働者階級にとっては一種の報酬として機能しており、たとえ低賃金労働に従事していたとしても、自らが黒人でないというアイデンティティを持てることで、貧しさを埋め合わせることができたと述べている(13)。しかしながら、1980年前後のアメリカに生きるBobにとっては、彼の白い肌は黒人に対する劣等感の象徴にすぎない。レーガノミクスに代表

されるような1980年代の新自由主義的経済政策が、労働者階級をさらなる経済的苦境へと追いやった事実を踏まえ、Jessica Livingstonは、「Bobは白人男性であることから喜びや特権的なステータスの感覚を引きだしてはいない。むしろ、[...] 彼は抑圧された白人男性というペルソナを構築することになる」(273)と述べる。つまり、本来経済的・物質的特権を享受するはずの白人でありながら経済的に困窮しているBobは、自らの階級的逸脱に対して不安と罪悪感を抱いているのである。

しかしながら、階級そのものより、階級によって生み出される心理的問題の方が重要だと述べるBanksは(Davidson and Arroyo 59)、Bobの逸脱的な白人性に、単なる経済上の理由のみならず、労働者階級に属する白人男性の精神状態へのより深い洞察を投影しているように思われる。その手掛かりは、酒屋を辞めて釣り船の船長になったBobの姿が、通りすがりの観光客からの視点で描かれる以下の場面に見出されるだろう。

旅行で家族を連れてキーウエストに向けてハイウェイをドライブする父親は、海上で颶爽と船を走らせるBobの姿を次のように称賛する。

I should be that man, who is free, who owns his own life simply because he knows whether to use live or dead shrimp for bait, jigs or flies, and where the bone fish feed, [...] and he's been able to trade his knowledge for power and control over his own life. His knowledge is worth something. (241-42)

しかしながら、このように理想化された自由な船長というイメージとは裏腹に、実際には彼の釣りの知識は周辺の海域を熟知したジャマイカ人の相棒が提供してくれるものであり、なおかつBobは雇われ船長に過ぎず、釣り船で稼ぐ給料だけでは一家を支えることができない。観光客がBobに羨望のまなざしを投げかけるこのシーンは、そのようなBobの現実を、アイロニーを込めて描き出しているといえるだろう。

ここで我々は、釣りや操船についての特別な知識や技能を身につけ、他人と交換不可能な労働力であることが、伝統的に男性的領域に位置づけられる釣りのイメージと相まって、理想的な男性像と結び付けて描かれていること—同時に、現実のBobが一般的な男性ジェンダー・モデルのみならず、理想的な白人像からも逸脱していることを暴露していること—を見落とすべきではないだろう。白人性と独立性賛美の共犯的関係について、Roedigerは「共和国思想は、強さと美德、そして不退転の覚悟があれば、人々は奴隸にならなくて済むということ、そして最も依存的な人々は、弱さと奴隸根性をもっているがゆえに権力者や陰謀をたくらむ人々の手先となり、共和国の脅威になってしまうということを、長らく強調してきた」(35)と述べている。共和国思想に膚浅するこの独立性賛美は、もともとは黒人に対する抑圧の正当性を、黒人自身の卑しさに還元するレトリックとして機能してきたが、現代アメリカの労働者階級の白人

男性にとっては、経済的自立を達成できず、依存的存在になることへの不安を喚起し、白人としてのアイデンティティを動搖させる諸刃の剣として機能しているといつていい。

このような階級とジェンダーを包摂する白人性という概念が最も明確に示されるのが、Bobと黒人女性Margueriteが不倫を犯す場面である。彼女を性的に満足させることができなかつた（と考えている）Bobは、自分の性的能力への不安に苛まれ、彼女が自分と別れた後、ソウルミュージックがかかる黒人バーで黒人の男と一杯ひっかけ、そのまま彼の家で激しくセックスする場面を想像する。

[S] he'll leave with the guy and go back to his apartment, smoke some marijuana and have wild, Negro sex with him. Afterwards, they'll lie back on his purple satin sheets, and she'll fondle his huge prick and wonder why on earth she tried to make it with the liquor store clerk when, any time she wanted, she could have *this*. (111)

このシーンでは、Bobが抱く自らの性的能力への不安は、白人男性としての彼のアイデンティティに結び付けられている。初めて黒人女性とのセックスに臨み、彼は白人男性としての性的能力が黒人からどのように受け止められるかを想像できずにいるのである。

しかし彼が抱く自らの白人性への不安を最も端的に示しているのが、彼が自分のことをしない「酒屋の店員」であると自嘲気味に自己規定している点である。Banksは、Bobの白人性と男性性が同時に不安に曝されるこの場面においてわざわざBobの職業に言及することで、交換可能な労働者であること一すなわち雇い主の意向でいつでも解雇されうる、経済的な依存状態にあることへの劣等感を彼が抱いていることを強調している。フロリダに移住した彼は、酒屋の店員や雇われ船長という、特別な技能も必要とされない、交換可能な労働力としてのアイデンティティしか獲得できないでいる。兄や友人のAveの経済力に依存することは、彼の人類的・階級的アイデンティティを大きく揺さぶり、白人男性としての理想的自己実現を果たせないことへの罪悪感と羞恥心を彼に押し付けるのである。

彼が妻と口論する場面において、Bobは“You think it's all my fault because we're broke all the time and living like niggers in a shack in the middle of nowhere, eating goddamned macaroni and cheese [...]” (271)と怒鳴り、一家の賃貸トレイラーハウスを破壊する。Bobが内在化する理想的白人像は、Roedigerがホワイトネスを「ジェンダー化された現象」と呼んでいるように、一家の経済的な支え手としての伝統的な理想的男性像と重なり合う形で、彼が自らを律する準拠枠として機能している。そしてそこから逸脱した現実の暮らしを「黒人のような暮らし」と呼ぶBobの姿は、理想的な白人性から逸脱したことに対する彼の不安と絶望を明瞭に示しているといえるだろう。

3. 白人性とアメリカの夢

以上に見てきたように、経済的自立と家長としての責任を全うできないBobの白人性は、理想的白人像から完全に逸脱している。彼の人生のこのような転落は、格差社会アメリカの非人間性を浮き彫りにするだけでなく、困窮する白人であることそのものに起因する精神的苦痛のありようを提起している。*Continental Drift*においてBobのミクロな悲劇を描くことで、Banksは彼を取り巻くマクロな社会環境—すなわち現代アメリカ社会の白人性と経済的不平等—に対する批判的な視線を投げかけているのである。

Bobが犯した失敗は、彼自身も認識しているように、住み慣れたカタマウントを離れ、フロリダに移住してきたことにほかならない。そもそもカタマウントにいたころ、彼は定職と、他人に貸すスペースを持った二世帯住宅、それに彼のことを愛している妻と二人の娘、船外機付きの13フィートのボート、シヴォレーのステーション・ワゴンを所有しており、必ずしも貧しい暮らしぶりではなく、ましてやこの作品のもう一方の物語で語られるハイチ人の境遇と比べれば、特権階級といつてもおかしくない。それでもなお彼が自分の人生を嫌悪し、フロリダで兄やAveのような経済的成功を掴もうとする背景には、語り手が“Bob has survived in a world where mere survival is insufficient”(14)と述べるように、人生の成功の尺度としての物質的成功の追求を画一的に強いる、アメリカの夢のイデオロギーとしての側面がある。

Banksは、「人は成功を通じて変わることができ、成功がまた人を変える—それはアメリカの夢だ—古い人格を捨て、新たな人間に生まれ変わる。そんなのはまやかしだ」(Reeves 25)と述べているが、これは新天地での自助の努力を通して経済的なはしごを登っていくという、伝統的な成功神話としてのアメリカの夢の主要なバリエーションのひとつであり、フロリダへの移住に経済的成功の希望を託そうとするBobの精神もまた、この言説に拘束されている。

Christopher Douglasは、かつてはアメリカ人の希望とアメリカ人としてのアイデンティティを規定していたアメリカの夢という言説が、現在では物質主義に組み込まれ、定型的な消費活動を促すだけのクリシェになり下がっていること、そしてその夢の実現の見込みが限りなく低くなってしまった1970年代～1980年代に至ってもなお、アメリカ社会において支配的影響力を維持していることを指摘している。その上でDouglasは、*Continental Drift*におけるBanksの政治的問題意識を、「アメリカの夢の言説というクリシェに対するBanksの怒りは、それらの内在化の過程と、そのようなクリシェを流通させる文化に向けられている」と説明する(53)。1950年代から60年代にかけての相対的な好景気の時代が終焉を迎え、オイル・ショックを経てアメリカの経済が傾き始めた1970年代に入ってもなお、アメリカの夢の信憑は、様々なメディアを通して再生産される。DouglasはBobの転落を、当時のアメリカの経済状況の悪化にもか

かわらず社会全般に膾炙する、アメリカの夢という成功神話が持つ強い求心力に還元するのである。

このように、Bobの悲劇をアメリカの夢の幻滅と結び付け、*Continental Drift*が提示する政治的問題意識を主として経済と階級の地平で議論することには、作品解釈上一定の利点があるようと思われる。しかしながら我々が見落とすべきでないのは、アメリカにおいて階級は人種と不可分の関係を取り結ぶということ、そしてそれは経済的成功をひとつのゴールとして規定するアメリカの夢という成功神話においても例外ではないということである。なぜならアメリカの夢という成功神話が賛美する経済的独立という幻想は、Bobが希求する経済的成功と、それにともなう家長としての理想的自己実現とがオーバーラップする形で、彼の理想的白人像を内包しているからである。

このアメリカの夢と白人性の結託については、Jennifer L. Hochschildが批判的な考察を提示している。彼女は、自助の努力を不斷に続けることで、経済的であれその他の形であれ、ある種の成功を誰もがつかむことができるというアメリカの夢という概念が、一種のイデオロギーとしてアメリカ人のアイデンティティを規定する一方、ますます多くの黒人がそのアイデンティティに自らの人種を重ね合わせることができなくなっていることを問題視している(4)。アメリカの夢というイデオロギーを考察するにあたって人種という変数を勘案するHochschildの議論を敷衍する形で、Manuel Madriagaは「アメリカの夢は【我々】という感覚、普遍主義の感覚、あるいは市民文化の感覚とでも呼ぶべきものをもたらしてくれる。 [...] そのなかでは民族的ないし人種的差異は認識されず、これからもされることはない。まさにここにおいて、[白人性]は不可視化されるのだ」(7.1)と述べ、アメリカの夢が提示する普遍的かつ理想的なアメリカ市民像に、常に白人性が潜んでいることを指摘している。

このことは作品中でBobが追求するアメリカの夢と、彼の理想的自己イメージにも端的に表れている。そもそもフロリダで自己実現を果たしたいと願うBobが抱く自己理想像は、友人のAveが高校時代に彼に見せた広告の切り抜きに描かれる、裕福でスマートな男性モデルの姿に端を発する。

And he(Ave) pulled this ad out of his wallet and unfolded it and handed it to me. It was a whiskey ad, and there was this handsome guy wearing his trousers rolled up to his knees and no shirt on, walking ashore on some tropical island. And he's got this case of Haig & Haig on his shoulder and a dinghy on the shore behind him and a nice forty-foot catamaran sitting out in the bay.(28)

このように、Bobのセリフのなかで描写される広告のモデルについては、Banksはその人種を明らかにしていない。しかしながら、モデルの人種について沈黙するBanksのテクストは、こ

の一見カラー・ブラインドな理想的男性像の中に、Madriagaが指摘するように、Bobのみならず我々読者もまた知らず知らずのうちに白人性を見出してしまう可能性があることを、一種の倫理的陥穽として提示している。このようにイデオロギーとしてのアメリカの夢は、経済的成功と白人性を分離不可能な形で内包することにより、Bobの準拠枠として強力に作用し、彼をして経済的成功と理想的な白人としての自己実現を希求せしめることになる。Hochschildが「概して貧しい白人もまた、アメリカの夢が体現する希望と規律に、不条理にも拘泥してしまう」(252)と述べるように、自らの肌の白さと経済的な優越を無意識的に同一視してしまうことにより、予想される様々な経済的不利益を顧みず、Bobはカタマウントを出て「ひと山当てる（“making a killing”）」という一種投機的な夢を盲目的に追求する(*Continental Drift* 28)。白人性を不可避的に内包するアメリカの夢というイデオロギーに精神的に拘束された結果、彼の人生は悲劇的な結末へと導かれることになるのである。

4. 社会規範からの肯定的逸脱の可能性

作品の結末で、密航の報酬としてハイチ人から得た金に固執するBobは、金を奪おうとするハイチ人ギャングに対して“No! This money is mine!”(407)と叫び、刺殺される。彼のこの振舞いを「愚かで強欲」(Livingston 272)なものと断ずるLivingstonの見解では、Bobは新自由主義経済へのマクロな変化を理解できずに、すでに崩壊しつつあるアメリカの夢という幻想に投機した、いわばアメリカ社会とその消費主義的イデオロギーの犠牲者として捉えられている(265)。確かに、Banks自身「Bobは、想像力の欠如によって人生が非常に多くの面で決定されている男である」(Reeves 17)と述べていることからも、Bobの悲劇を決定論的に捉えることは必ずしも間違いではない。

しかしながら、Lois Tysonが「もちろん我々の選択肢は、我々が生きる社会と生まれによって限定されているものの、その限定に対し、どのように我々が対応するかという点に関して、我々はなお有責である」(3)と述べているように、個人を完全な自立的存在ととらえるか、あるいは社会的産物と捉えるかという二項対立は、すでにその有効性を失いつつある。Tysonは現代社会の主体を強力に規定する様々な社会規範の存在を認めつつも、そこに主体の実存的選択の痕跡をも見出そうとして、経済や人種といった社会現象の地平にとどまらない、人間の営為のダイナミクスをすくい取る作業の重要性を指摘する。

確かにBobは敗北する。しかしながら、果たして彼には本当にエピファニーは訪れなかったのだろうか。Banksの分身たる語り手が*Continental Drift*の結びにおいて“Sabotage and subversion, then, are this book's objective. Go, my book, and help destroy the world as it is”(410)と述べ、読者がBobの人生を悼むことによって貪欲な世界を動搖させることができが小説の主

眼として明示されていることを鑑みれば、Banksがその世界に対するオルタナティブを提示している可能性はゼロではないはずだ。さらに「作品中で開示されつつある人物たちに対し、読者が優越感を抱くように仕向ける類の小説を私は好まない」(McEneaney 72)と述べるBanksが、登場人物の人間性に対して一定の信頼を置いていることを考慮に入れるとすれば、Bobをアメリカ社会の決定論的な犠牲者としてのみ捉えるのではなく、様々な社会規範によって精神を拘束されながらも、それに対して、たとえささやかではあれ、抵抗を試みる実存的主体としてのBobと、彼が到達するエピファニーの断片を作品中に読み取ることも可能なのではないか。

本稿では、そのエピファニーの断片を、ハイチ人密航者たちを乗せてフロリダへと走る船上で、Bobが体験するハイチ人たちとの精神的交流の場面に求めたい。小説のその時点では、かつて羽振りが良かった（ように見えた）Bobの兄Eddieは、すでに借金苦から自殺を遂げている。兄の二の舞を避けて自力で生活を立て直すため、Bobは親友のAveからボートの所有権を買い取ろうとするが、ボートはすでに銀行の抵当に入っていることを打ち明けられる。自力での人生の立て直しに絶望したBobは、アメリカの夢の本質についての以下のような洞察を得る。

Bob believes that he gave away everything in exchange for nothing, for a fantasy, a dream, a wish, that he allowed to get embellished and manipulated by his brother, by his friend, by magazine articles and advertisements, by rumor, by images of men with graying hair in red sports cars driving under moonlight to meet a beautiful woman. (347)

高校時代にAveがBobに見せた雑誌広告に代表されるように、様々なメディアを通して現代社会に散種されるアメリカの夢が、消費主義だけでなく男性性や白人性と共振する形で、ひとつの社会規範としてBobを精神的に拘束することはすでに上述した。この場面でのBobは、確かにLivingstonが言うように新自由主義経済についての洞察を得たとは言い難いものの、イデオロギーとしてのアメリカの夢が、どのように市民を画一的な消費へと駆り立てるのかについての漠然とした理解に至ったと言っていい。

Aveのボートの所有権を手に入れることができないことを知ったBobは、「ひと山あてる」ためではなく、ただ生き延びるために、ハイチ人の密航に手を染める。上述したように、作品の冒頭で語り手が「ただ生き延びるだけでは不十分である」と述べ、Bobがカタマウントを出て経済的成功を追求しようとした背景に、人生の成功と物質的成功を同一視するアメリカの夢というイデオロギーがあったことを示唆していることを思えば、「ただ生き延びる」ことだけに積極的な意義を見出すBobのこの精神的境地は、作品上重要な論理的転回点になっていると言えよう。

そしてより重要なのは、語り手が “it seemed to Bob that he was now truly poor, that he

could begin to give up clinging to fantasies of becoming rich. [...] [H]e gave up envying those he saw as rich. That's what freed him, he believes [...]" (342) と述べているように、Bob自身はイデオロギーとしてのアメリカの夢からのこの逸脱を、ネガティブでニヒリスティックな逃避ではなく、ポジティブな解放として捉えているという点である。そこにBobの周縁的アイデンティティへのルサンチマンの痕跡を見出すことは困難である。それどころか、経済的成功の追求という勝ち目のないゲームから主体的に降りることによって、Bobはかつて自分を成功のための手段として搾取した兄Eddieを赦し、彼を再び愛するようになるのである。このことは、基本的に排他的競争原理であるアメリカの夢というイデオロギーを超克しつつあるBobの人間性を、端的に示していると言える。

これに伴い、アメリカの夢と不可避的に結合する白人性に対するBobの態度にも、Banksは肯定的な変化の兆しを作品中に描き出している。密航船に乗り込んでくるハイチ人たちをつぶさに観察するBobは、政治的腐敗と貧困にあえぐ祖国を捨て、アメリカに渡って生き延びようとする彼らの意志の強さに打たれ、“He (Bob) can't stop himself, however, from believing that these silent, black-skinned, utterly foreign people know something that, if he learns it himself, will make his mere survival more than possible” (343) と語り手が述べるように、彼らの中に「ただ生き延びる」ための手掛けりを見出そうとする。そこにはイデオロギーによって画一的な消費を強制された受動的な物質的欲望ではなく、自己の生存のための能動的な意志を共有する人間同士の共感と連帯を見て取ることができよう。

Bobは本来積み荷にすぎないハイチ人密航者たちに水や煙草を与え、防水シートの下に隠れている彼らが暑かったり息苦しかったりするのではないかと気を使い、一人のハイチ人少年に対し、彼がまるで自分の家族であるかのように接する。

“You want to take the wheel?” he (Bob) asks the boy. [S]hyly, the lad moves up and places his hands on the wheel, and Bob smiles. “You look good, son! A real captain.” The boy lets a smile creep over his lips. “Here,” Bob says. “You need a captain’s hat,” and he removes his hat and sets it on the boy’s head [...]. (348-49)

かつてのBobは、黒人一般を白人としての自らの理想的自己実現を阻害する他者として認識していた。しかしながら、今やイデオロギーによって受動的に押し付けられた画一的な白人理想像からの逸脱を肯定的に受け入れつつある彼にとって、目の前のハイチ人密航者たちは、経済的成功のために競争すべき相手ではなく、肌の色の違いこそあれ、「商業社会の歯車(“the wheel of commerce”)」(Continental Drift 410)に対する抵抗に参画する同志と呼ぶべき存在に近いのである。

Bobの、ひいてはBanksの、この人種に対する政治的態度は、人種問題は階級問題のサブカ

テゴリーとして存在し、人種主義とは労働者階級の団結を阻害するためにブルジョアジーによって用いられるイデオロギーであるとするマルクス主義的人種觀と、一見軌を一にするようにみえるかもしれない。このマルクス主義的人種觀は、昨今の様々な人種研究において、現実社会の実質的な人種差別を無視するものとして批判されることが多いが、後述するように、Banksは必ずしもイデオロギー的な作家ではないし、Bobが消費主義的自己実現から逸脱することによって人種問題が霧散するという、ユートピア的な結論を作品から引き出そうとしているわけでもない。事実、この後沿岸警備隊に追われた彼は、相棒のTyronが逃走のためにハイチ人密航者を海に突き落とすのを一度は黙認するのである(352)。Bobのこの非情な決断は、恐怖とパニックの中での咄嗟の判断として描かれており、Banksは論理的な理由付けを明確にしていない。しかしだからこそ、Livingstonが「Bobは直観的に、白人アメリカ人男性として異なった運命を辿る特権を有していると感じている」(272)と解釈するように、その根底にBobの人種主義が、たとえ無意識的にせよ、介在した可能性は排除できない。

このように、イデオロギーとしてのアメリカの夢と白人性に対するBobの開眼は至極限定的なものに留まっている。確かにそれはエピファニーの断片でしかなく、貪欲な世界経済に対する彼の抵抗の痕跡とようやく呼ぶことができる程度のものである。しかしながら、地殻変動が大陸を少しづつ動かすように、見えざる必然的な力に導かれてそれぞれフロリダへとやってきた、境遇も人種も言語も全く異なるBobとハイチ人たちが、てらいなくコミュニケーションを交わす姿は、間違いなくこの作品中最も肯定的な空気に満ちたシーンである。Banksが「私はニヒリストではない。私は、もし我々が目を開けて見さえすれば、我々が人々と接するやりかたを変えることができるという、ヒューマニティへの信頼を抱いている」(Reeves 16-17)と述べているように、物質的にすべてを失ってなお人間的な感受性を發揮するBobの姿は、作品全体の決定論的な悲劇的色彩のなかにあって、Banksが抱く本質的な人間性への信頼を一筋の暖色光として示すものだといえよう。

結論

幻想的なアメリカの夢と同じく、あるいはアメリカの夢と共鳴する形で、白人性は、非白人だけでなく、そこから逸脱する白人自身に対しても抑圧的な社会規範として機能する。Banksは*Continental Drift*において、白人労働者階級に属するBobの、白人であるが故の個人的な悲劇を丹念に描くことで、彼を抑圧し搾取する矛盾に満ちた現代アメリカの政治的文脈を遠景として批判的に描き出すことに成功している。

しかしながら、「登場人物は、政治的目的を遂行するために存在するのではない」(Roche 177)と語るBanksは、必ずしもイデオロギー的な作家ではない。彼は作中において所与の支配

的イデオロギーに対抗する新たなイデオロギーを処方するというよりはむしろ、「すべての真摯な文学は、人間であるということはどういうことなのかを我々に認識させてくれるイメージを本質的に創り出すために機能している」(Rooke 3)と語るように、そのようなイデオロギー以前のヒューマニティに重きを置いているように見える。それは*Continental Drift*においても顕著にみられるような、社会的弱者への人道的で同情的なまなざしや、社会的不平等に対する義憤、そしてBobと似たような境遇に生きる労働者たちの草の根的な意識改革を通して達成される、現前してしかるべきアメリカの一あるいは世界の一理想的民主主義への信頼といつてもいいだろう。

1985年に発表された本作において、社会規範としての白人性とアメリカの夢が押し付ける、画一的な消費と経済的成功への強迫観念からのBobの逸脱を、たとえ断片的なものに留まっているにせよ、肯定的なものとして言祝ぐBanksの筆致は、経済至上主義のネットワークに亀裂を生じさせるという点で、1990年代半ばから現在に渡り世界的な運動へと成長しつつある反グローバリゼーション／反企業の闘争の嚆矢のひとつとして捉えることができる。

この運動に理論的バックボーンを与えた批評家のひとりであるDavid C. Kortenは、市民の生活と意識の変革を通して新たな民主主義を構築しようとする草の根的な市民運動である“*The living democracy movement*”について、「それは貨幣への愛ではなく、生命への愛によって駆動される。その力の源は、新しい文化意識の目覚めである。その明らかな目標は、民主的かつ人道的な社会である」(323)と述べる。新自由主義経済に依存する大企業型資本主義社会からより民主的で人道的な社会への変革は、政治的領域におけるイデオロギー的転回によるのではなく、むしろ文化を織りなす市民一人一人の意識的変化によって達成されるというKortenの主張は、経済的成功と理想的白人像を結びつける様々な社会規範を超克し、それを肯定的な逸脱として束の間受け入れるBobのささやかなエピファニーと、その結果として彼が獲得する他者との共感と連帯とに重なり合う。人種と階級という地平から跳躍しようとするBobの意識的変革は、21世紀に至ってもいまだ達成されないままの、より人間的な民主主義の青写真としての政治的価値を有しているのである。

※本論文は、中・四国アメリカ学会第39回年次大会（平成23年11月26日於広島経済大学立町キャンパス）において、「白人による〈アメリカ〉の問い合わせ：ラッセル・バンクスの*Continental Drift*とその政治的問題意識」の題目で口頭発表した内容を、加筆・修正したものである。

※本研究はJSPS科研費23720159の助成を受けたものである。

引用文献

- Atlas, James. "A Great American Novel." *The Atlantic* (Feb. 1985): 94, 96-97. Print.
- Banks, Russell. *Continental Drift*. 1985. New York: Harper Perennial, 2000. Print.
- . *Dreaming Up America*. 2008. New York: Seven Stories, 2009. Print.
- Davidson, Rob and Fred Santiago Arroyo. "Finding the Melody: An Interview with Russell Banks." *Conversations with Russell Banks*. 48-70. Print.
- Douglas, Christopher. *Reciting America: Culture and Cliché in Contemporary U.S. Fiction*. Illinois: U of Illinois P, 2001. Print.
- Hochschild, Jennifer L. *Facing Up to the American Dream: Race, Class and the Soul of the Nation*. Princeton: Princeton UP, 1995. Print.
- Hutchison, Anthony. "Representative Man: John Brown and the Politics of Redemption in Russell Banks's *Cloudsplitter*." *Journal of American Studies* Vol. 41 (2007), No. 1: 67-82. Print.
- Korten, David C. *When Corporations Rule the World, Second Edition*. Sterling: Kumarian, 2001. Print.
- Lipsitz, George. "The Possessive Investment in Whiteness: Racialized Social Democracy and the 'White' Problem in American Studies." *American Quarterly* Vol. 47, No. 3 (September 1995): 369-87. Print.
- Livingston, Jessica. "The Crisis of 'A Man's Man': Neoliberal Ideology in *Continental Drift*." *The Journal of American Culture* Vol. 34, No. 3 (September 2011): 264-74. Print.
- Madriaga, Manuel. "Understanding the Symbolic Idea of the American Dream and Its Relationship with the Category of 'Whiteness.'" *Sociological Research Online* Vol. 10, No. 3. Web. 15 October 2012.
- McEneaney, Kevin T. *Russell Banks: In Search of Freedom*. Santa Barbara: Praeger, 2010. Print.
- Newitz, Annalee, and Matt Wray. "Introduction." *White Trash: Race and Class in America*. 1-12. Print.
- Niemi, Robert. *Russell Banks*. Boston: Twayne, 1997. Print.
- Penley, Constance. "Crackers and Whackers: The White Trashing of Porn." *White Trash: Race and Class in America*. 89-112. Print.

- Reeves, Trish. "The Search for Clarity: An Interview with Russell Banks." *Conversations with Russell Banks*. 15-25. Print.
- Roche, David, ed. *Conversations with Russell Banks*. Jackson: UP of Mississippi, 2010.
- . "Toulouse 2006." *Conversations with Russell Banks*. 163-81. Print.
- Roediger, David R. *The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class*. 1991. New York: Verso, 2007. Print. (デイヴィッド・R・ローディガー『アメリカにおける白人意識の構築：労働者階級の形成と人種』 小原豊志他訳, 明石書店, 2006.)
- Rooke, Constance. "Russell Banks: An Interview." *Conversations with Russell Banks*. 15-25. Print.
- Saxton, Alexander. *The Rise and Fall of the White Republic: Class Politics and Mass Culture in Nineteenth-Century America*. 1990. London: Verso, 2003. Print.
- Trucks, Rob. "Interview: Rob Trucks / 1999." *Conversations with Russell Banks*. 94-108. Print.
- Tyson, Lois. *Psychological Politics of the American Dream: The Commodification of Subjectivity in Twentieth-Century American Literature*. Columbus: Ohio State UP, 1994. Print.
- Wray, Matt, and Newitz Annalee, eds. *White Trash: Race and Class in America*. New York: Routledge, 1997. Print.

**Overcoming Whiteness and the American Dream:
The Positive Deviation from the Social Norms in Russell Banks' *Continental Drift***

KURIHARA Takeshi

In his Pulitzer Prize-nominated *Continental Drift*, Russell Banks portrayed a working-class white male named Bob Dubois, who is obsessed with the dream of a better life and emigrates from New Hampshire to Florida in a desperate search for material success. Many critics have discussed the novel from an economic viewpoint, maintaining that the root of Bob Dubois' tragedy can be traced back to his obsession with the American dream of financial success. We need to take a look, however, at Bob's sense of being white in order to reach a

better understanding of his self-destructive behaviors, since the American dream of financial success has been frequently associated with the ideal of independence of the American white male.

Thanks to the recent achievements of whiteness studies, we not only have the critical standpoints towards white centrism but also the notion of the possibility that whiteness itself, combined with various virtues and ideals, works as a social norm or a frame of reference for white people. Moreover, many critics have pointed out the conspiratorial relationship between whiteness and the American dream, which together influence the psyche of the American working-class white male as an obsessive ideology. Whiteness and the American dream as a social norm overlap the idealized male gender role and the virtue of independence, and always remind him of what he is supposed to be like.

By examining Banks' representation of the suffering working-class white male, we will discuss Bob's psychological predicament caused by whiteness itself. In the course of the study, the discussion of economic disparity, which usually takes place only on the horizon of the color-blind economy, will be developed into a more complex analysis of the psychological alienation of the white male. Also, we will explore the possible epiphany Bob experiences at the end of the novel: his spontaneous abandoning of the dream to become rich — a positive deviation from pursuing material success — potentially liberates Bob from the ideological self-confinement imposed on him by the social norms of whiteness and the American dream.

ハワイ先住民によるハワイ語新聞発行の原点を求めて

佐野恒子

はじめに

19世紀初めハワイは既に太平洋貿易の主要な寄港地で、ハワイ先住民（以下、先住民と略記）の王族や族長は列強による植民地化を免れるため、政府の要職に白人を起用して近代化を進める必要があった。これらの白人の多くは1819年から12回にわたり、ボストンのアメリカ海外伝道評議会（以下、ABCFMと略記）が派遣したアメリカ宣教師（以下、宣教師と略記）とその家族であった。彼らは布教活動とともに先住民にハワイ語と英語の文字を教え、アメリカの価値観を広めるためハワイ語新聞を発行した。その紙上では「共和国の母」像がしばしば称揚され、彼らは先住民女性にアメリカ中産階級のジェンダー規範を押し付けた。さらに宣教師はハワイ先住民のアメリカ化を促すとともに、この地で出回っている印刷物を厳しく検閲して先住民の思想や活動を監視した。

いっぽう宣教師のお陰で先住民の間にハワイ語の読み書きが普及し、1840年までに先住民の識字率は、スコットランド、ニューイングランドに次いで世界で3番目と言われるほど高かった¹。そのため、ハワイ語文字は高位の先住民と一般の先住民との間でコミュニケーションを容易にさせ、読み書きは政治力の源になった。また、先住民は西洋の歴史と植民地主義についての知識も得ることができた。

しかし、教育や公的な場所でハワイ語に代わって英語が主要言語として使用されるようになると、ハワイの伝統文化に誇りを抱いていた先住民は、ハワイ語新聞を通してハワイの伝統的な生活や文化を次世代に引き継ぎ、宣教師に対する反対意見を自由に掲載することを望んだ。1861年、先住民は宣教師の検閲制度を無視して、ハワイ語新聞『太平洋の星』（*Ka Hoku O Ka Pakipika, 1861-63*）を発行した。しかし、検閲なしの新聞発行は宣教師に対する反体制を意味した。

19世紀後半期、父母や祖父母からハワイ語やハワイの文化を受け継ぎ、王を中心とする先住民の伝統文化は、共和制を掲げるアメリカ人の価値観とは相容れなかった。先住民は紙上という公開の場で併合派と論戦を展開し、「知の歴史」²を築くことができたのは彼らの識字率の高さの所以であった。

そこで本稿は、文字を有益な道具に自治独立を求めた反併合運動の原点にさかのぼり、ハワイにおける印刷物や新聞発行の経緯をたどりながら、『太平洋の星』紙を発行した背景を検討

する。その際、先住民が植民地化を避けるため、戦略的に一気に進めた近代化が、ハワイの西洋化を意味するものではなかったことも含めて考察したい。

1 ハワイ語文字と印刷物

18世紀末からハワイは北太平洋の理想的な寄港地として、毛皮や白檀の貿易を中心に欧米の商船が往来し、19世紀前半期には捕鯨船で栄えていた。そのため、高位の先住民女性や先住民男性は文字の重要性から、宣教師渡来以前すでに英語の読み書きができる者もいた³。また、先住民の中には航海技術を学び、通商を求めて広東、イギリス、アメリカ北西海岸へ航海する者もいた。こうした中で1795年、カメハメハ (Kamehameha, 1819年没) は西洋人を配下に西洋式の武器と海軍を備えてハワイを統治し、西洋式の住宅で西洋風に装い、先住民部下に欧米人のあだ名をつけていた。例えば首相のカラニモク (Kalanimoku) をビリー=ピット、族長をウイリアム=コベット、チャーリイ=フォックス、トーマス=ジェファソン、ジェイムズ=マディソン、ボナパルト、トム=ペインと呼んでいた⁴。

高位の先住民にとって欧米諸国をいかにコントロールするかが課題であり、ハワイの近代化とキリスト教化が急務だと考えた。若い先住民の中には留学を目指して、捕鯨船や商船でニューイングランドに渡る者もいた。1815年、先住民留学生のヘンリイ=オボオキア (Henry Obookiah) はキリスト教に改宗した後、コネティカット州のコーンウォル外国人宣教師学校 (Foreign Mission School at Cornwall) で、他の先住民仲間とともに、医学、農業、ラテン語、ヘブライ語などを学んでいたが、1818年2月にニューイングランドで病死した。彼の志はハワイ王国の繁栄のために学校を設立してキリスト教を広めることだった。

1819年、ABCFMはオボオキアの病死を機に宣教師をハワイへ派遣した。その際ハワイでの案内役として、オボオキアの先住民級友のトーマス=ホプ (Thomas Hopu), ジョン=ホノリイ (John Honolii), ウィリアム=カヌイ (William Kanui) と、洗礼を受けずに米海軍兵士になったハワイの王子ジョージ=サンドウイッチ (George Sandwich) の4人を加えて乗船させた⁵。また、2番目や3番目の宣教師団にも、同校の先住民を同船させた。これらの先住民はハワイで宣教師の布教活動を円滑にするため、ハワイへ向かう船上で宣教師にハワイ語と伝統文化を教えた。しかしながら、皮肉にもオボオキアの意志とは裏腹に、19世紀末に王国はこれらの宣教師子孫によって消滅の道を歩むことになった。第二次大覚醒の時期に、世界の異教徒をキリスト教に改宗させるという伝道活動は、アメリカ化に他ならなかったのである。

1820年に到着した最初の宣教師団員のエリシャ=ルーミス (Elisha Loomis) は、印刷機をハワイへ初めて持ち込んだニューヨーク出身の印刷工だった。印刷機は1時間に100枚程度の印刷が可能だった。2年後、ロンドン宣教師協会のウィリアム=エリス⁶ (Rev. William Ellis)

牧師やアメリカ宣教師は、コーンウォル校出身の先住民や一般の先住民とともに総出でハワイ語文字を創り出した。そして、ローマ字化したハワイ語を紹介する16頁の小冊子を2,500部刷った⁷。数年後には学校用にアルファベット、聖書の手引き、贊美歌集、聖書の一部をハワイ語で印刷して冊子にした。その後、ヘブライ語からハワイ語に翻訳された旧約聖書と新約聖書の一部が印刷された。さらにアメリカでも宣教師支援のため、ハワイ語の聖書の一部が印刷されてハワイへ持ち込まれた。

3番目の宣教師団の印刷工ステファン=シェファード (Stephen Shephard) は、1828年3月に最初の古いラメージ印刷機 (Ramage Press) よりも大型で改良された印刷機、タイプライター、印刷用紙、4万冊のハワイ語聖書の小冊子などを積みハワイに到着した。1830年までに28種類の小冊子、パンフレット、本など40万枚近くがハワイ語で印刷された⁸。翌年には8頁のハワイ語の教科書が9版以上を重ねて合計19万冊に上り、1839年にはハワイ語の旧約聖書と新約聖書の完全版ができた⁹。結局、ハワイで聖書も含めたハワイ語の印刷物は、1858年に宣教師ホノルル印刷所が閉鎖されるまでに、1億1300万枚以上刷られていた¹⁰。

宣教師が先住民に読み書きを学ばせた本来の目的は、キリスト教徒としての根源である聖書に書かれた神である主を理解させることであり、聖書を通してアメリカ化を広めることだった。そのため宣教師は先ず読み書きとともに、王や族長に唯一の神である主を語った。一方、宗教と政治を密着させて統治していた王や族長は、主をハワイ神話の神々に加わる新しい神と捉え、統治にキリスト教を積極的に利用し、1827年にキリスト教を国教にした¹¹。そして、ハワイ語文字が伝達手段として役立つことから、読み書きが普及するように学校教育を奨励した。

2 ハワイの近代化と宣教師によるハワイ語新聞発行

宣教師にとって教育とは学校を意味した。一般の先住民は統治者や族長を尊敬していたことから、宣教師は高位の先住民から徐々に一般の先住民へと学校教育を広めていく必要があると考えた。初めはハワイ語の読み書きから始め、徐々に英語を習得させることにした。宣教師は先住民女性にも男性と同様に学校で学ばせた。というのは、彼女たちが家庭で子ども達に、ハワイ語の読み書きとともに英語を教えることができると期待したからであり、学校で白人社会を学ばせることで、西洋の生活様式を身に付けさせ、女性を家庭内に留めることができると考えたからであった¹²。それは家事と育児に専念する女性を理想像に、女性は劣性で男性への従属と貞淑というヴィクトリア朝の女性をハワイで再現することだった。

一方、先住民女性は家事よりも読み書きを学ぶことに興味があり、西洋の裕福な女性よりも自由で社会的にも解放されていた。1824年カメハメハ大王の妻のカアフマヌ (Ka 'ahumanu) 首相は、積極的に学校設立に関わった。1827年までには成人先住民の全員が、ハワイ語で読み

書きを学び始めた。この頃の宣教師数はせいぜい数十人であったため、習得の早い先住民は学びの遅い者に教え、さらに教師として新しい学校へ赴任した。1831年にはハワイ諸島の学校数は約1,100あり、生徒数は全人口の40パーセントにあたる約52,000人だった¹³。そこで、アメリカの学校制度に準じて対象とする生徒を大人から子どもに代えて、年齢別のクラス編成にした。

1830年代、宣教師は先住民とともに先住民教師養成のラハイナ・ルナ高等学校 (Lāhaināluna)¹⁴ を始めとして、ハワイ諸島の主な地域に先住民男子と女子の高等教育向けの全寮制学校を設立した。さらに、王族や族長の子どもを対象にした王立のロイヤル・スクール、先住民混血の子どもたちのためのオアフ・チャリティ・スクールなどが、次々に創立された。1842年、宣教師は自分たちの子孫のために、白人だけのプナホウ高等学校 (Punahou) を開校し、白人の子どもには農場経営を教える一方、先住民男子の全寮制学校では、土地を開墾して農作業を行う方法を学ばせていた¹⁵。それは、先住民を労働者階級に貶めることを意味した。

3番目の宣教師団員だったローリン=アンドリューズ (Lorrin Andrews) が、ラハイナ・ルナ校長に就任し、最初のハワイ語新聞『ハワイの光』 (Ka Lama Hawaii, 1834) を発行した。彼はケンタッキー州のオハイオで植字工と新聞記者の経験があり、先住民学生に情報収集から意見の伝達方法、編集、印刷、配布の仕方を教えた。数ヶ月間、新聞は200部刷られて無料で配布された¹⁶。アンドリューズはABCFMが奴隸州から支援を受けていることを知り、1845年に宣教師を辞職し、1847年にホノルルの最高裁判所の裁判官に就任した。

1834年11月に4番目の宣教師団員だったルーベン=ティンカー (Reuben Tinker) が、2番目のハワイ語新聞『ハワイの先生』 (Ke Kumu Hawaii, 1834-39) を発行した。ティンカーはマサチューセッツ州の元新聞記者で、彼も奴隸州からの宣教師基金を拒否した。編集者のティンカーは仲間の宣教師や先住民とともに記事を書き、ホノルルの宣教師印刷所で月2回1,500~3,000部を印刷した。先住民記者はラハイナ・ルナ校で学んだ学者のデイビッド=マロ (David Malo) や、歴史家のサミュエル=カマカウ (Samuel Kamakau) 等を始めとして146人に達していた¹⁷。また1837年、ティンカーは子どものためのハワイ語新聞『子どもの先生』 (Ke Kumu Kamalii, 1837) も発行した。彼は言論と報道の自由を保障したアメリカ憲法修正第1条をハワイでも適用すべきだと主張し、厳しい検閲を実施していたABCFMに反対して1840年にハワイを去った¹⁸。

ABCFMの検閲は宣教師に対する批判を印刷物から取り去り、印刷物を通してアメリカ化を促し、先住民を劣性人種とみなしてプランテーション労働者にすることだった。宣教師の中にはティンカーのようにABCFMの政策を独裁的と考える者もいたが、宣教師が発行する新聞は、アメリカ様式の政府を確立してアメリカ文化の至上主義とプロテスタンントの勤労倫理を先住民に広めようとしていた¹⁹。

1838年に2番目の宣教師団員のウィリアム＝リチャーズ（William Richards）は、王の顧問になり多くの法律を草案した。1840年に最初の憲法が英語で発布され、ハワイは立憲君主国になった。憲法には宗教の自由、抑圧からの自由、財産を築き保持する自由、公平な裁判権、政府の三権分立について述べられていた。高位の先住民からなる評議会は貴族院議員を指名し、人民は下院議員を投票で選び、議会制度が確立された。先住民女性も参政権があり、議席が確保されていた。同年、先住民に義務教育も課された。また、リチャーズは王の指名で土地分割委員会の会長に就任し、私有地に関する法案を作成した。1850年に外国人の私有地を認める法律が成立し、土地の分割で砂糖プランテーションが拡大する一方、一般的の先住民は土地を失った。

しかし、ハワイが西洋化されたわけでもハワイの伝統文化や教育方法が途絶えたわけでもなかった。例えば、1836年に王はハワイの音楽を守り若い音楽家を育てるため、ロイヤル・ハワイアンバンドを設立した。1841年にはラハイナ・ルナ校の卒業生がハワイ歴史協会²⁰を創立し、デイビッド＝マロやサミュエル＝カマカウ、また政治家で歴史家のジョン＝パパ＝イイ（John Papa ‘I‘i）等が、伝統的口述の知識をハワイ語文字で記録して後世に伝えた。これらの先住民エリートは、ハワイの植民地化を避けるために近代化を図ったが、西洋人には西洋人の方法があるように先住民には先住民の方法があると、ハワイの西洋化に反対した。また王国の独立を危ぶみ、独立危機に備えることをカメハメハ大王の娘のキナウ首相（Kina‘u）に警告し、白人が政府の要職に就くことを強く拒絶した²¹。

一方、国内だけでなく国外からも独立を脅かす出来事があった。ハワイは1836年のイギリス協定、1837年のフランス協定に次いで、1839年に対仏不平等条約、1844年の対英不平等条約の締結を強いられた。1840年には、米海軍士官で冒険家のチャールズ＝ウィルクス（Charles Wilkes）がハワイに寄航し、1887年にアメリカが独占権を取得する真珠湾などを調査していた。また、太平洋において列強による植民地化が進むなか、ハワイでも占領事件（1843年英、1849年仏）が起こり、ハワイが文明国であることを世界に示す必要から近代化が急務であった²²。

3 外国人による英字新聞の発行

1836年、最初の英字新聞『サンドウェッチ・アイランド・ガゼット・アンド・ジャーナル・オブ・コマース』（1836-39）が、外国人コミュニティ向けに発行された。編集者はボストン出身のユニテリアン派で、報道の自由を主義としたステファン＝マッキントッシュ（Stephan MacIntosh）だった。アメリカ宣教師が教会の建設に先住民を牛馬のように働かせていたため、マッキントッシュはこのことを紙上で野蛮と非難した。そのため、彼は新聞発行に行き詰まり、止む無くハワイを去った。そこで、R. J. ハワード（R.J. Howard）はマッキントッシュの意思を受け継ぎ、アメリカ商人の支援を受けて英字新聞『サンドウェッチ・アイランド・ミラー・

『アンド・コマーシャル・ガゼット』(1839-40) を発行した²³。

1840年にボストン出身のジェイムズ＝ジャーブズ (James Jackson Jarves) は、『サンドウィッチ・アイランド・ミラー・アンド・コマーシャル・ガゼット』紙に対抗するかのように、英字新聞『ポリネシアン』(1840-41) を発行した。商人からの広告料と友人の宣教師からの支援で発行していたが、商人と宣教師の狭間で新聞発行が難しくなった。1844年、ジャーブズは政府の要職に就いていた元宣教師の下で、政府公認の新聞として『ポリネシアン』紙 (1844-61) を再び発行し始めた。そのため新聞記事は宣教師支持に傾いた。ジャーブズは先住民が劣性人種で野蛮であり、ポリネシア文化は価値がないと信じていた。彼は先住民の墓を掘り起こして頭蓋骨を集め、ニューイングランドの父親に送るという野蛮的行為をしていたため、先住民から頭蓋骨人と呼ばれていた²⁴。

『ポリネシアン』紙に対抗して英字新聞『ホノルル・タイムズ』(1849-51) を発行し、カルヴァン派の宣教師に真っ向から挑戦したのは、ヘンリー＝シェルダン (Henry Sheldon) だった。彼はロード・アイランド出身の印刷工で、先住民女性と結婚した最初のアメリカ人ジャーナリストだった。シェルダンは一貫して反宣教師体制を主張し、王のお抱えの欲深い元宣教師を軽蔑し、土地を分割する新しい法律に反対した。彼はアメリカ政府の平等や自由といったアメリカ憲法の理念に基づくハワイ政府を望んでいた。また、宣教師は欧米人がもたらした伝染病に対処しなかったため、先住民人口が激減したことから布教活動よりも先に衛生医療を改善することを要求した。そして、参政権を制限しようとした1852年憲法を紙上で糾弾し、言論と出版の自由条項をこの憲法に盛り込ませた²⁵。

シェルダンと同様にハワイ文化を理解し尊重した外国人に、スウェーデン出身の編集者エブラハム＝フォルナンダー (Abraham Fornander) がいた。彼は英字新聞『ウイークリー・アルゴス』(1852-53) を発行し、政府の要職に就いた白人の虚偽を攻撃した。例えば1853年にハワイで天然痘が流行したとき、元宣教師で政府衛生省の高官ゲリット=P=ジャッド (Gerrit Parmele Judd)²⁶は、白人には天然痘に対する警告を発しながら、先住民への注意を怠ったため、多数の先住民死者を出したことを紙上で酷評した。フォルナンダーはカルヴァン派の主義主張に鋭くメスを入れるため、新聞の名称を『ニュー・エラ・アンド・ウイークリー・アルゴス』紙 (1853-55) に変更し、彼らの不正を紙上で暴露して解職を王に促した²⁷。これに反感を抱く白人は新聞広告をボイコットしたため、フォルナンダーは破産した。

19世紀半ばになるとハワイの宗教は多様化していた。1843年にカトリックの大聖堂が完成し、1853年にカトリック教徒は11,401人に達し、カトリック学校の生徒も全体の約20パーセントで定着していた。1852年に次いで1858年にカトリック教のハワイ語新聞を発行して以来、公共の場でのプロテスタント批判も行われていた。一方、1850年に若いモルモン宣教師が渡来し、

1853年の大会では3,000人以上の先住民信者が出席した。これらの宣教師はモルモンの書物をハワイ語に翻訳し、先住民を役職に起用してハワイ社会に溶け込みつつあった。プロテスタン卜では、宣教師はABCFMの組織「サンドウィッチ諸島教団」(Sandwich Islands Mission)を解散し、1854年にABCFMから独立して「ハワイ福音協会」(Hawaiian Evangelical Association)を設立した。この協会の関心は宗教よりもプランテーションの利益と農業に必要な労働力があり、1857年に「ハワイ福音協会」はフラやサーフィンを邪魔で時間の浪費と非難した。

4 先住民による最初のハワイ語新聞発行

1839年5月にハワイ語新聞『ハワイの先生』が廃刊されてから2年余り経た1841年7月、5番目の宣教師団員のリチャード=アームストロング (Richard Armstrong) は、ハワイ語新聞『蟻』(Ka Nonanona, 1841-45) を発行した。彼はスコットランド系北アイルランド出身の子孫で、1842年に建てられた王族のためのカワイアハオ教会 (Kawaiahā 'o Church) の牧師経験もあったが、ハワイの産業化と農業開発に非常に興味を持っていた。『蟻』紙の名前の由来はイソップ寓話の『蟻とキリギリス (セミ)』で、先住民に蟻のように働くことを説いた。新聞は月2回3,000部ずつ発行され、ハワイ諸島全域の先住民の間で読まれていたが、1845年4月に『蟻』紙の名称を『ハワイの使者』紙 (Ka Elele Hawaii, 1845-55) に変更し、月2回1,000~1,500部発行した²⁸。これらの新聞の目的は、先住民が産業化や憲法発布など近代化を図る一方、伝統文化を維持していたため、アメリカ化とキリスト教の勤労を広めることだった²⁹。

1848年、アームストロングは宣教師を辞めて公教育大臣の職に就き、先住民の英語教育の強化を主張し、より効果的にアメリカ化を進めようとした。1856年3月、彼は政府公認のハワイ語新聞『ハワイの旗』(Ka Hae Hawaii, 1856-61) を発行した。雇われ編集者はJ. フラー (J. Fuller) で、政府が俸給を支払っていたので年間購読料はわずか1ドルだった。この新聞の目的は先住民女性を社会から排除して家庭内に留め、資本主義社会を形成していくことだった³⁰。

『ハワイの旗』紙に次いで1859年に、ヘンリー=パーカー (Henry Parker) はハワイ語新聞『遠い星』(Ka Hoku Loa, 1859-64) を発行した。彼は6番目の宣教師団員だったベンジャミン=パーカーの息子で、カワイアハオ教会の牧師であった。「ハワイ福音協会」の下で発行された『遠い星』紙は名目上は先住民の文明化と救済を掲げ、プロテスタン卜の徳は勤労であると説いて、先住民を劣性人種に見なしてプランテーションで働くことを正当化していた³¹。

いっぽう先住民は、宣教師を始め様々な立場の欧米人が、互いに対立しながら発行してきた新聞を読み続け、『ハワイの旗』紙と『遠い星』紙の記事に憤慨していた。そして、ハワイ語の維持とハワイの出来事を後世に残すことを考えた。また、プロテスタン卜を弱体化させるため、カトリック教やモルモン教等を支持してバランスを図ろうとした。宣教師は海外のニュー

スも統制していたため、王国の独立を維持するには政治や経済を始め、外国の出来事や正しい情報を必要とした。そこで、先住民は独自にハワイ語新聞を発行するため、白人も含む男性22人で「ホノルル自由独立新聞発行協会」を設立した³²。

40年前に宣教師から読み書きを学び始め、西洋文化に精通した先住民は、宣教師から独立して自由に新聞を発行する大人に成長していた。今や先住民指導者は宣教師の言説に抵抗し、新聞を通して仲間を啓蒙し始めていた。宣教師が最初のハワイ語新聞を発行してから27年目の1861年9月26日、新聞発行の全ての技術を習得していた先住民は、政府やどの宗派からも束縛されないハワイ語新聞『太平洋の星』を発行した³³。先住民が記事から配布までの全ての役割を担当した最初の新聞だった。後援者は1874年に王位を継承し、編集王と呼ばれたデイビッド＝カラカウア (David Kalākaua) だった。編集長は先住民のカウワヒ (J.W.H. Kauwahi), 主な編集者はカオラヌイ (S.K. Kaolanui), カーネプウ (J.H. Kānepu'u), カウナマノ (J.K. Kaunamano) で、白人のミラ (G.W. Mila) も編集に助力した。

『太平洋の星』紙はカルヴァン主義に異議を唱え、ハワイ伝統のメレ (mele, 歌), 政府や教会の動向、農業や人々の生活、祖父母から受け継がれた知識、先住民の自由な意見などを掲載した。社会から排除されていた先住民女性の主張も取り上げた。そして、先住民を野蛮人と表現したことに対して紙上で反撃し、先住民に伝統文化を持ち続けるように呼びかけた。というのは、列強は植民地政策を文明化という大義名分で正当化していたため、先住民の中には伝統や慣習を捨てることで、ハワイの独立が維持できると考える者もいたからだった³⁴。

全ての印刷物を厳しく検閲していた宣教師は、先住民の突然のハワイ語新聞発行に驚きと激怒を露にした。検閲無視の新聞発行は、紙上における反植民地闘争の始まりでもあった。宣教師は『太平洋の星』紙を悪魔、邪悪と主張し、購読や配達代理店を妨害し始めた。『ハワイの旗』紙は『太平洋の星』紙を恥すべき無価値な新聞と述べ、新聞の廃刊を呼びかけた³⁵。そして、先住民は宣教師の子どもという考え方から父親的温情主義を掲げた。元宣教師が後援する政府発行の『ポリネシアン』紙は、『太平洋の星』紙を不道徳で悪意に満ちた新聞だと報じた³⁶。

そこで、先住民を支持してきたエブラハム＝フォルナンダーは、『ポリネシアン』紙 (1861-64) を買収して、発行の権利を政府から獲得した。1861年11月23日、彼は紙上で先住民の自由を掲げて宣教師子孫の圧制に反撃し、『太平洋の星』紙を支援した。フォルナンダーは先住民による新聞発行を「知的革命」と呼び、宣教師は無能だと言及した。彼のように『太平洋の星』紙を支持し、検閲制度に反対した白人は100人以上いた³⁷。

5 ハワイ語新聞『独立新聞』の発行とナショナリズム

先住民ジャーナリスト自ら発行した『太平洋の星』紙は、わずか2年足らずで廃刊になった。

その理由は『太平洋の星』紙が発行されて、わずか1週間後の10月1日に新たなハワイ語新聞『独立新聞』(Ka Nupepa Kuokoa, 1861-1927)が発行されたことに依拠した。『独立新聞』紙の発行者は、最初の宣教師団で渡航してきたサミュエル=ホイットニ(Samuel)の息子のヘンリー=ホイットニ(Henry Whitney)だった。

ヘンリー=ホイットニは、英字新聞とハワイ語新聞の編集者や発行者のなかで、ハワイで長年にわたり最も精力的に活動したジャーナリストだった。ハワイ生まれの宣教師の子どもたちの多くが高等教育を受けるために、アメリカ東海岸で過ごしたように彼も渡米した。1849年に彼はハワイへ戻り、ハワイ政府発行の『ポリネシアン』紙の印刷工になったが、2年後に郵便局長の職に就き、1856年には事務用品や印刷物の起業家として成功し、印刷機を手に入れた。ホイットニは、ニューヨークで『ニューヨーク・コマーシャル・アドバタイザー』紙発行の経験もあり、ハワイで発行される全ての英字新聞とハワイ語新聞を統制することを考えていた。彼はハワイの独立を維持し、別の宗教を容認する点では他の宣教師子孫とは異なっていた。そして、ジェファソン流の農本主義的な共和国を信奉していた。それはアメリカの田園地方のような構想で、先住民とともにハワイの土地を開拓し、先住民を自営農民にすることだった³⁸。そこで1856年にハワイの商業や農業の発展のため、4頁の英字新聞『パシフィック・コマーシャル・アドバタイザー』(1856-現在)と、1頁のハワイ語新聞『ハワイの明けの明星』(Ka Hoku Loa O Hawaii, 1856年7-9月)を発行した³⁹。しかし、ハワイ語新聞は不評で直ぐに廃刊にされた。

『ハワイの明けの明星』紙の発行に失敗し、特にハワイ語新聞の発行に意欲を燃やしていたヘンリー=ホイットニは、先住民が『太平洋の星』紙を発行することを知って、印刷機の貸し出しを済った。先住民ジャーナリストは彼から印刷機を借り受けるためには、ハワイ語新聞の発行に固執していたホイットニに従って、別のハワイ語新聞を発行する必要があると考えた。そこで、先住民ジャーナリストは苦渋の策として、彼の下で新たにハワイ語新聞を編集する者と、『太平洋の星』紙を編集する者とに分かれた。そのため、全ての新聞を支配下に置くことを考えていたホイットニは、『太平洋の星』紙を彼の下で発行することは不可能だと分かり、1861年10月1日に『太平洋の星』紙のライバル新聞として、『独立新聞』紙を発行したのであった⁴⁰。

ホイットニは『独立新聞』紙の編集者に、カワイヌイ(Joseph Kawainui), マホエ(S. K. Mahoe), ポエポエ(J. M. Poepoe)等の有能な先住民を雇い入れた。編集長は白人と先住民との間で度々入れ替わった。3番目の宣教師団で渡來したピーター=グリック牧師の息子のルーサー=グリック(Luther H. Gulick)⁴¹は、精力的にホイットニと編集に関わった。

1862年に『太平洋の星』紙は2,700部、『独立新聞』紙は3,000部を印刷し、どちらも年間購読

料は2ドルの低料金だった⁴²。1862年の先住民人口は約6万3千人で、彼らの生活は祖父母から孫まで住居を共にする大家族で、新聞はコミュニティの間でも回覧されていたことから、これらの新聞の発行部数は全家庭に流通していたことを物語っていた。

『独立新聞』紙の記事は外国の物語、南北戦争の状況、ハワイの伝統文化、先住民の系図、ハワイ史、日々の出来事、神々の物語、鳥や魚の捕獲やカヌー建造の方法、薬草、ハワイ諸島巡り、ハワイ語の話し方など多彩だった。1862年1月、新聞の新年版第1面に、赤と青で色刷りしたハワイの国旗を掲載して先住民の注目を浴びた。そして、パパ=イイヤサミュエル=カマカウによるハワイ史を約5年間連載して先住民に好評を博した⁴³。『独立新聞』紙の豊富な記事は『太平洋の星』紙よりも人気があった。そのため、1863年5月14日を最後に『太平洋の星』紙は廃刊されたが、『独立新聞』紙は次世代の先住民に受け継がれ、その発行部数は他のどの新聞よりも多い5,000部で、実に1927年まで最も長く続いたハワイ語新聞であった⁴⁴。

19世紀後半期、ハワイ語新聞は各諸島の先住民に情報を伝達する手段となり、先住民の連帯感を強めて彼らのナショナリズムが高揚し、ハワイの政治経済を牛耳る白人に対する先住民の反発は一層激しくなった。1870年代以降、併合派と反併合派は互いに対立しながら多種多様な新聞を発行した。ハワイ独立を掲げたナショナリストの新聞は様々な立場で発行されたが、基本的な考えは、①先住民にとってハワイ文化が最良という確信、②先住民の人口減少の重大さ、③ハワイ独立維持の主張、④王への深い敬意と土地への大きな愛、という点で一致していた⁴⁵。19世紀末、王国転覆後に共和国を樹立し、ハワイ併合を主導した宣教師子孫に対して、先住民は自治独立を求める反併合署名運動を平和的に全諸島に拡大した。そして、共和国アメリカの正義を問うため、アメリカ独立宣言に掲げた「被治者の同意を得る」国民投票をアメリカとハワイの両共和国政府に要求した。このような政治的抵抗運動に大きな役割を果たしたのは、彼らが発行を続けてきたハワイ語新聞であった。それは先住民が銃ではなくペンを持ち、赤い血ではなくインクの青い血を流したと言われる所以であった。

おわりに

19世紀前半期、宣教師は布教とともに文字を先住民に教え、印刷物を通してハワイのアメリカ化を目指した。一方、先住民は文字を習得するとともに西洋文化に精通し、白人からハワイの独立を如何にして守るかをも学んだ。ハワイ語文字は、ハワイの伝統文化を次世代に引き継ぐ道具でもあった。1861年、先住民は宣教師の検閲制度を無視して合衆国憲法における言論の自由を主張し、先住民自ら最初のハワイ語新聞『太平洋の星』を発行した。『太平洋の星』紙は2年足らずで廃刊されたが、先住民が発行を続けたハワイ語新聞の原点でもあった。

19世紀末、アメリカの膨張主義者と併合を首謀する宣教師子孫の勢いが増す中、先住民はハ

ハワイ語新聞の発行を続け、一丸となって反併合運動を展開した。1880年代から併合されるまでの間に発行された新たなハワイ語新聞は30を数えた。ハワイ語新聞は正確な情報を提供しながら先住民を啓蒙し、さらに運動に活力を与えて大衆運動を可能にし、マスメディアとして草の根運動の拡大に寄与することができたのであった⁴⁶。結果として1898年、米西戦争を機にハワイはアメリカに併合されたが、ハワイ語新聞は先住民の声を代弁し、不当な権力に対する挑戦の武器であった。1世紀を経た現在、ハワイ語新聞は明らかにされてこなかったハワイの歴史を現代の人々に語る役割をも担っている。

註

- 1 Laura Fish Judd, *Honolulu: Sketches of the Life, Social, and Religious in the Hawaiian Islands from 1828 to 1861* (Honolulu: Honolulu Star-Bulletin, 1928), 62. 1860年の識字率は、スコットランドが85%，ハワイが70~75%，合衆国が40~50%だったと言われる。
- 2 Noenoe K. Silva, "Early Hawaiian Newspapers and Kanaka Maoli Intellectual History, 1834-1855," *The Hawaiian Journal of History*, vol. 42, (Honolulu: Hawaiian Historical Society, 2008), 105.
- 3 Noenoe K. Silva, *Aloha Betrayed : Native Hawaiian Resistance to American Colonialism* (Durban & London: Duke University Press, 2004), 32.
- 4 Gavan Daws, *Shoal of Time: A History of the Hawaiian Islands* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1974), 48.
- 5 Niklaus R. Schweizer, *Turning Tide: The Ebb and Flow of Hawaiian Nationality* (Berne: Peter Lang AG, 1999), 85-89. サンドウィッチの父カウムアリイ王(Kaumuali'i)は、列強による植民地化からハワイを守るために、ハワイの近代化を痛感して幼い王子をアメリカで学ばせた。
- 6 Ralph S. Kuykendall, *The Hawaiian Kingdom 1, 1778-1854: Foundation and Transformation* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1965), 103-105. エリス牧師は宣教師の要請で伝道所設立にも貢献した。
- 7 Puakea Nogelmeier, *Mai Pa'a I Ka Leo: Historical Voice in Hawaiian Primary Materials, Looking Forward and Listening Back* (Honolulu: Bishop Museum Press, 2010), 69. 最初に母音や子音を示し、よく知られた言葉や熟語を紹介した。
- 8 Nogelmeier, *op.cit.*, 72.
- 9 Kuykendall, *op.cit.*, 104-105, 107. 1832年に5番目の宣教師団の印刷工エドモンド=ロジャーズ(Edmund H. Rogers), 1833年に6番目の宣教師団の印刷工レミュエル=フラー(Lemuel Fuller), 1835年に7番目の宣教師団の印刷工エドワイン=ホール(Edwin O.

- Hall)が、各々印刷機をホノルルに持ち込んだ。印刷工と印刷機の情報は Sesquicentennial Edition published by the Hawaiian Mission Children's Society, *Missionary Album: Portraits and Biographical Sketches of the American Protestant Missionaries to the Hawaiian Islands* (Honolulu: Edward Enterprises, Inc., 1969), 101, 112, 164, 171.
- 10 Nogelmeier, *op.cit.*, 73. 1830年代、ハワイ語から英語表記へ徐々に移った。
- 11 Sally Engle Merry, *Colonizing Hawai'i* (New Jersey: Princeton University Press, 2000), 63-65. ハワイの神は40万あり、先住民にとって神が一つ増えても同じことだった。
- 12 Joyce N. Chinen, Kathleen O. Kane, and Ida M. Yoshinaga, eds., *Women in Hawai'i: Sites, Identities, and Voice* (University of Hawai'i: Special Issue of Social Process in Hawaii, 1997), 5. Maxine Mrantz, *Women of Old Hawaiian* (Honolulu: Aloha Graphics and Sales, 1975), 5-6. 先住民女性も部族間戦争では武器を用いて男性兵士と戦った。
- 13 Kuykendall, *op.cit.*, 106.
- 14 Kikue Takakura (Mookini), "A Brief Survey of the Hawaiian Language Newspapers" (Submitted to the Committee on Library Prizes, 1967), 3. 1831年当時、首都があったマウイ島に神学校として設立し、初年度は全諸島から25人の聰明な既婚先住民男性が入学し、1836年に10代の男子全寮制高等学校になるまで計91人が学んだ。学校ではニューアイングランドの教科書を使用し、英語とハワイ語で地理や算数も教えられた。
- 15 Kuykendall, *op.cit.*, 112-113; Linda K. Menton and Eileen H. Tamura, *A History of Hawai'i* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1989), 76-80. プナホウ校の創立者は9番目の宣教師団員のダニエル=ドールで、併合を首謀した彼の子息はハワイ共和国の初代大統領だった。
- 16 Takakura (Mookini), *op.cit.*, 4. 皮肉にもアンドリューズの外孫は併合首謀者のローリン=サーストンで、反併合運動の先住民指導者はラハイナ・ルナ校の卒業生だった。
- 17 Silva, "Early Hawaiian Newspapers and Kanaka Maoli Intellectual History, 1834-1855," 112.
- 18 Esther K. Mookini, *The Hawaiian Newspapers* (Honolulu: Topgallant Publishing Company, Ltd., 1974), iv-v. Albert J. Schütz, *The Voices of Eden: A History of Hawaiian Language Studies* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1994), 172. 太平洋で最初の季刊誌『ハワイアン・スペクターター』 (*Hawaiian Spectator*, 1838-39) も発行された。
- 19 Helen Geracimos Chapin, *Shaping History: The Role of Newspapers in Hawai'i* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1996), 15-18.
- 20 Historical Society in Hawaii: 1892年1月に設立された現在のHawaiian Historical Society (ハワイ歴史協会) とは別である。
- 21 Linda K. Menton and Eileen H. Tamura, *op.cit.*, 7-8.

- 22 ハワイは1846年にイギリス・アイルランドと、1848年にデンマーク・ハンブルグと、1849年にアメリカと各条約を締結した。列強によるピトケアン諸島（1838年英）、ニュージーランド（1840年英）、マルケサス諸島（1842年仏）、ソサイティ諸島（タヒチ1847年仏）の植民地化が進んでいた。1841年にアメリカはウェイク島に海軍基地を設置した。
- 23 Chapin, *op.cit.*, 19-22. アメリカ宣教師は、1827年以来ヨーロッパからハワイへ渡来してきたカトリック宣教師を迫害していた。1841年にローマ・カトリック宣教師のマイグレット（L. D. Maigret）がマッキントッシュの印刷機を購入し、1852年にハワイ語新聞『神の御許でいつも勤勉に』を発行した。
- 24 Chapin, *op.cit.*, 23-27. 歴史家のジャーブズは、イギリス人が名づけた「サンドウィッチ諸島」の呼び名を「ハワイ諸島」に変えてアメリカ化を強調した。
1843年に捕鯨船チャップレンのサミュエル＝デイモンは『フレンド』紙（1843-54）を発行し、またハワイの女性に呼びかけるため、1855年に「女性権利の1848年セネカ＝フォールズ」を、最初のフェミニスト新聞『フォリオ』（編集者はデイモンの妻ジュリアとヘンリー＝ホイットニの妻キャサリン）にして発行した。ロッキー山脈西側で発行されたフェミニストの最初の印刷物であった。
- 25 Chapin, *op.cit.*, 41-45.
- 26 ジャッドは3番目の宣教師団の医師として渡来し、1840年代から財務大臣など様々な要職に就いたが、天然痘流行の件では衛生省を解職された。彼の子孫はサーストンとともに併合主導者として陰謀を誂った。
- 27 Chapin, *op.cit.*, 48-52. 新聞はアメリカやイギリスでも好評だったと言われる。
- 28 Takakura (Mookini), *op.cit.*, 6-7.
- 29 Chapin, *op.cit.*, 17-18.
- 30 Joyce N. Chinen, Kathleen O. Kane, and Ida M. Yoshinaga, eds., *op.cit.*, 4-5. 1856年3月19日、『ハワイの旗』紙は、先住民女性は裁縫、育児、家事をすることで快適な生活が過ごせると掲載した。というのは1850年代においても、彼女たちは夫への服従や家事と育児に専念する「共和国の母」ではなかったからだ。
- 31 Silva, *Aloha Betrayed*, 52-54, 57-58.
- 32 Silva, *op.cit.*, 63-64. 協会はハワイ語で‘Ahahui Ho‘opuka Nūpepa Kūikawā o Honolulu’.
- 33 先住民は文字文化の中で口承文化を引き継ぎ、伝統文化や歴史を次世代に伝えていた。
- 34 Silva, *op.cit.*, 55, 72-73. Nogelmeier, *op.cit.*, 83.
- 35 Silva, *op.cit.*, 64-65.
- 36 Silva, *op.cit.*, 71. 『ポリネシアン』紙、1861年10月19日発行。

- 37 Silva, *op.cit.*, 69-72. 1864年に元宣教師からの妨害で『ポリネシアン』紙発行が不可能になったが、フォルナンダーは新たに歴史雑誌『サンドウィッチ・アイランド・マンスリー』を発行して書き続けた。
- 38 Chapin, *op.cit.*, 55-56, 66. 南北戦争後の1868~70年、ホイットニは『アドバタイザー』紙と『独立新聞』紙に、奴隸制と呼ばれた砂糖産業に従事するアジア人に課した労働契約制度に対して反対運動を行った。彼は宣教師の息子のルーサー＝グリック（編集者で宣教師）と共に労働者への権利乱用について掲載し、クーリー制度（低賃金未熟練労務者制度）と、プランテーションにおける主従条例（the Masters and Servants Act）の一部廃止を求めた。慢心に満ちたプランテーション経営者がハワイの肥沃な土地を搾取したため、彼らの土地を100~200エーカーの小区画にして先住民に分け、農産物を共同で加工するという構想を大胆にも新聞に掲載した。この記事は『アドバタイザー』紙を支持してきた購読者を脅かし、プランテーション経営者から敵視された。1870年8月にマウイ島のプランテーション経営者は、新聞の生命線である広告を全面的に取りやめた。先住民を下層民に貶める白人に対して鬪った他の新聞発行者と同様に、ホイットニは1ヶ月も経たないうちに資金難に陥った。心情的にも力尽き、印刷機をジャーナリストのジェイムズ＝ブラック（James H. Black）とウィリアム＝オウルド（William Auld）に売却した。後に新聞好きのホイットニは、新たに『ハワイアン・ガゼット』紙や『プランターズ・マンスリー』誌の編集を始めた。
- 39 Silva, *op.cit.*, 55, 57.
- 40 Silva, *op.cit.*, 68.
- 41 アメリカで医師の資格を取得して太平洋諸島で伝道所を開き、ハワイに戻り1862-63年に「ハワイ福音協会」会長に就任した。カトリック、英國国教会、立憲君主政体に反対だった。
- 42 Nogelmeier, *op.cit.*, 80-81. 1948年まで、先住民発行の週刊ハワイ語新聞の年間購読料は、90年近く2ドルのまま据え置かれた。
- 43 Nogelmeier, *op.cit.*, 107. 連載は『新時代』紙（Ke Au Okoa, 1865-73）に引き継がれ、当新聞は『独立新聞』紙に合併された。
- 44 Chapin, *op.cit.*, 56-57. 『独立新聞』紙の発行部数は『アドバタイザー』紙を超えていた。元宣教師後援の『ハワイの旗』紙の発行部数は約3,000であったが、1861年末に廃刊、『遠い星』紙は1864年12月に廃刊を余儀なくされた。
- 45 Chapin, *op.cit.*, 61-62.
- 46 佐野恒子、「アメリカの海外膨張とハワイ先住民の併合反対運動」、肥後本芳男・山澄亭・小野沢透編、『現代アメリカの政治文化と世界』（昭和堂、2010年）、66, 67, 72, 74頁。

ハワイ先住民によるハワイ語新聞発行の原点を求めて

ハワイ語新聞と英字新聞のリスト（1834年～1865年）

新聞名（意味）、編集人	言語	発行期間・回数・場所、発行所	目的、発行部数、ページ数など
1 「カ・ラマ・ハワイ」（ハワイの光）宣教師ローリン=アンドリューズ	ハワイ語	1834年2月14日-12月26日, 1841年1月, 月刊, 月2回, マウイ島 ラハイナルナ神学校	エリート男子先住民学生に新聞作成を指導, 憲法に関する記事, 世界中の動物画, 200部無料発行
2 「ケ・クム・ハワイ」（ハワイの先生）宣教師ルーベン=ティンカー	ハワイ語	1834年11月12日-1839年5月22日, 月2回, ホノルル, ミッショニ・プレス	ABC FM伝道活動の1つとして豊富な知識の提供, 4~8頁, 1500~3000部発行
3 「サンドウイッチ・アイランド・ガゼット・アンド・ジャーナル・オブ・コマース」ステファン=マッキントッシュ	英語	1836年7月30日-1839年7月27日 週刊, ホノルル, S. マッキントッシュ & ネルソン=ホール	世界貿易・資本主義の促進, 海外のニュース, 宣教師の検閲に対抗して報道の自由を主張, 王国へのローマカトリックを容認, 4頁
4 「ケ・クム・カマリ」（子どもの先生）宣教師ルーベン=ティンカー	ハワイ語	1837年1月-12月, 月刊, ホノルル	曜学校子供向け教会新聞, 12頁, (初めの名称は「クム・ハマリ」)
5 「サンドウイッチ・アイランド・ミラー・アンド・コマーシャル・ガゼット」 R.L.ハワード	英語	1839年8月15日-1840年7月15日 月刊, ホノルル, ハワイ外国協会	非宗教的新聞, 報道の自由を主張, アメリカのビジネス事業促進, マッキントッシュの継続版
6 「ボリネシア」, ジュイムズ=ジャーブス(妻エリザベス), チャールズ=ヒッチコック(1848-) エラハム=フォルナンダー(1861-) ハワイ語	英語と	1840年6月6日-1841年12月11日, 1844年5月18日-1844年2月6日, 週刊, ホノルル, (複数の編集・発行者)	国内外の情報, 1844年7月から政府制定の法律情報を提供, ビジネス情報, 宣教師支給アメリカへ送付, 4-6頁, 年間購読料\$6-8
7 「カ・ノナノ」（職）宣教師リチャード=アームストロング	ハワイ語	1844年1月-1854年1月, 月刊, ホノルル, ミッショニ・プレス	ハワイニュース勧説的重要性, 神の意, ハワイ語で公教が広がる, 従事記録
8 「ザ・フレンド」, 牧師サミュエル=チエナイ=デイモン, 後にセレノ=ビショップ J. リーディングガム	英語	1843年5月20日-1954年, 月刊, ホノルル, ハワイミッション, ハワイ福音協会	船員向け, 捕鯨情報, 禁酒・社会浄化・女性の権利, 先住民の健康促進, 4-12頁, 無料(1954年後も年10回キリスト教団により発行)
9 「カ・エレレ・ハワイ」（ハワイの使者）宣教師リチャード=アームストロング	ハワイ語	1845年4月1日-1855年7月, 月2回 サンドウイッチ諸島教団	プロテスタント教育, 酒・煙草・公共娛樂反対, 1000~1500部発行, 「カ・ノナノ」の継続版
10 「ホノルル・タイムズ」ヘンリー=L.=シェルダン, E.C.ムン	英語	1849年11月8日-1851年2月19日, 週刊, ホノルル	宣教師体制に反対, 良いアメリカ化を推進, 反「ボリネシア」, 王国保護, 言論の自由
11 「アマチュア」, 教師A.W.カーター	英語	1852年, ホノルル, ハワイ青年協会	若者向けのプロテスタント宗教紙
12 「ザ・ウイーカリー・アルゴス」 A.フォルナンダー, マット=K=スミス	英語と	1852年1月14日-1853年9月28日 週刊, ホノルル, フォルナンダー	先住民の文化と権利の擁護, 宣教師批判, 特にゲリット=ジャッドとその影響を批判, 4頁
13 「ヘ・マウ・ハナ・イハナイア」(神の御許でいつも勤勉に), L.D.マイグレット神父	ハワイ語	1852年-1859年(?), 不規則に発行, ホノルル, カトリック教団	オアフ島・モロカイ島・ハワイ島のカトリック学校からのニュース
14 「ニュー・エラ・アンド・ウイーカリー・アルゴス」, A.フォルナンダー	英語	1853年10月22日-1855年6月28日, ホノルル	ハワイ政府への宣教師の影響を批判, 国内外のニュース, 「ウイーカリー・アルゴス」の継続版
15 「ザ・フォリオ」, ジュリア=デイモン(サミュエルの妻), キャサリン=ホイットニ(ヘンリーの妻)	英語	1855年11月-12月, ホノルル	フェミニスト紙, 「ザ・フレンド」に差し挟む, N.Y.セネカ・フォールでの女性運動, 4頁
16 「カ・ミ・ミッショナリ・ハワイ」	ハワイ語	1856-1857年, ホノルル, 5回発行	南太平洋での宣教活動報告
17 「カ・エ・ハ・ハワイ」（ハワイの旗）J.ブラー(マーク), 匿名(アームストロング)	ハワイ語	1856年3月5日-1861年12月31日, 週刊, ホノルル, 公教育省発行	ハワイ政府新聞, プロテスタント文化促進, 人種主義, 女性の役割, 「カ・エレレ」の継続版, 1500~3000部発行
18 「ハワイクコマーシャル・アドバイザー」(匿名)「ティーパ・ワイ・コマーシャル・アドバイザー」, 宣教師の息子ヘンリー=ホイットニ	英語	1856年7月2日-1921年3月30日, 1882年に週刊から日刊(日曜除く), ホノルル, ヘンリー=ホイットニ	商業新聞, 併合派が継続, 最初は1300部発行(編集者はウォルター=ブラー, H.L.シャエルダン, H.P.カーター, サーストン等), 購読料\$6
19 「カ・ホ・クロ・ア・オ・ハワイ」（ハワイの遠い星, 明星）, ヘンリー=ホイットニ	ハワイ語	1856年7月2日-9月18日, 週刊, ホノルル	【パシフィック・コマーシャル・アドバタイザー】に挟む, 国内外のニュース, 貿易・政府情報, 1頁
20 「ハイマナバ』(年代記)	ハワイ語	1858年1月-1859年12月, 月刊(不規則), ホノルル, カトリック教団	ハワイのカトリック教の年代記
21 「ノ・タ・ハ・エ・ハ・ハイ」(ハワイの旗に)	ハワイ語	1858年, ホノルル, カトリック	教会新聞
22 「ホオイリイ・ハ・ハイ」(ハワイの伝統)	ハワイ語	1858年8月-1860年1月, カトリック	カトリック教会新聞, ハワイの行事・思想等
23 「ヘ・マウ・ハナ」(いつも勤勉に)	ハワイ語	1859年, 不規則, ホノルル	カトリック教会の情報, 宗教のレッスン
24 「ヘ・マウ・マナオ」(確固たる思い)	ハワイ語	1859年9月-12月, 月刊, ホノルル, カトリック教団	カトリック教会新聞, 当時のカトリックとプロテスタントの不一致について
25 「ナヘルカラビナ」(プロテスタントのパンフレット)	ハワイ語	1859年-1860年, ホノルル, カトリック教団	カトリック教会新聞, 聖書, 祈り, 教会に従順
26 「カ・ホ・ク・ロア」(遠い星), 宣教師H.H.バーカー, L.H.グリック	ハワイ語	1859年7月2日-1864年12月, 月刊, ホノルル, ハワイ委員会	先住民女性の社会的排除, 先住民文化の劣性視, ハワイ福音協会の報告
27 「ノ・タ・ホ・ク・ロ・ア・カラビナ!!!」(プロテスタントの遠い星)	ハワイ語	1859年7月2日-1859年12月, 月刊, ホノルル, カトリック教団	【クム・ハワイ】『ノノナ』『エレレ』などに対抗, プロテスタント宣教師を攻撃
28 「アンビュレット」(Ambulet)	英語	1860年?, ホノルル	フェミニスト, 禁酒運動
29 「オ・カ・ハ・エ・キリティニア」(キリスト教徒の規範)	ハワイ語	1860年1月-1863年, 月刊, ホノルル, カトリック教団	宗教新聞, 信仰, 外国の宗教ニュース, プロテスタントの教義と信仰の批判
30 「カ・ホ・ク・オ・カ・バ・キ・カ」(太平洋の星), J.W.カウワヒ, G.W.ミラ, アイビッド=カラカウア(別名:編集者)	ハワイ語	1861年9月26日-1863年5月14日, 週刊, ホノルル, 先住民による最初の新聞	反宣教師, ハワイ語・ハワイ文化維持, 海外ニュース, 出版の自由, 先住民女性の声を代表, 反文明化, 先住民の固陋, 善きな宗教を認める
31 「カ・ヌ・ベ・パ・カ・コア」(独立新聞), ヘンリー=ホイットニ, L.H.グリック, J.カワイイ, トマス=スラム等	ハワイ語 (一部英語)	1861年10月-1927年12月29日, 1862年1月から週刊, ホノルル, ホノルル, ガゼット・カンパニー	国内外ニュース, 先住民文化, 外国物語, 王族長への忠節, 【カ・ホ・ク・オ・バ・キ・カ】に対抗して発行, 4頁, 5000部発行
32 「カ・ア・ハ・エ・レ・レ」(会議), ヘンリー=L.=シェルダン	ハワイ語と英語	1864年7月14日-8月31日, 日刊, ホノルル, ハワイ政府発行	1864年憲法会議のディベート記録
33 「ケ・アウ・オ・コア」(新時代), J.M.カペナ, ジヨン=マキニ=カペナ(カラカウアの親戚)	ハワイ語	1865年4月24日-1873年5月27日, 週刊, ホノルル, ハワイ政府	王国独立を支持, 国内外のニュース, ハワイの歌, 1873年に「カ・ヌ・ベ・パ・カ・コア」と合併
34 「ザ・ハワイアン・ガゼット」, J.H.ブラック, 後に併合派個人所有: ジヨン=モット・スミス(歯科医), M.ラブリイ, H.ホイットニ, C.T.ロジャーズ	英語 (ハワイ語含む)	1865年1月21日-1873年, ハワイ政府, 1887年8月-1888年(「デイリイ・ハワイアン・ガゼット」), 1918年11月29日まで継続, 週刊, 日刊, ホノルル	一般に流通, 砂糖産業, 契約労働雇用, 米布互惠条約の推進, 1873年以降カラカウアと対立, 反立憲君主制, 1890年代「パフィック・コマーシャル・アドバタイザー」と非公式合併, 4-8頁

出典: Mookini, *The Hawaiian Newspapers*; Chapin, *Shaping History*; Silva, *Aloha Betrayed*; Nogelmeier, *Mai Pa'a I Ka Leo*などをもとに作成。

Seeking the Origin of the Publication of the First Hawaiian Newspaper
by Native Hawaiians

SANO Tsuneko

The Hawaiian Islands became involved with a global mercantile economy and served as the stopping place in the North Pacific by the nineteenth century. The colonization of Hawai'i has become the most serious problem in keeping independence for Native Hawaiians during the nineteenth century. Therefore, the leading Native Hawaiians quickly tried to modernize Hawai'i. However, it didn't mean that Native Hawaiians became westernized. It meant they became familiar with the western culture.

The missionaries from the American Board of Commissioners for Foreign Missions started to develop an alphabet for Hawaiian in 1820 and began to print the Bible, textbooks, and newspapers. Hundreds and thousands of the native Hawaiians learned reading and writing. As a result, Hawaiian literacy was greater than any other country in the world except Scotland and New England in 1839. They read both Hawaiian and English newspapers published by the western people. Mission editors promoted American values through the newspapers, and Calvinist Missionaries in particular took the position in the chief cabinet to bring a new political ideology to Hawai'i. However, the republic was incompatible with the constitutional monarchy. They also censored all publications heavily to begin their colonization of the Hawaiian Islands. They wanted to control the government.

On the other hand, Native Hawaiians and their sympathizers protected the traditional culture and tried to keep the self-governance through the newspapers. Native Hawaiians suddenly published their own independent Hawaiian Press, *The star of the Pacific* (*Ka Hoku o ka Pakipika*), with complete disregard for the censorship in 1861. It meant anti-colonial resistance to Calvinist missionaries. They were shocked and outraged by this paper and called it evil.

Native editors were unafraid of printing. They continued to publish the new Hawaiian newspapers to preserve the cultural identity and their history holding a large circulation. Native Hawaiians against the missionary descendants, leading the annexation, expanded the anti-annexation movement through the various Hawaiian nationalist press. Although the United States seized Hawai'i's government with an illegal joint resolution bill in 1898, Native Hawaiians handed down posterity records describing their history as Hawaiian intellectual history.

20世紀への転換期アメリカにおける 州紙巻きタバコ販売等禁止法

—その成立と廃止の背景—

岡 本 勝

はじめに

20世紀の中頃以降、先進国を中心に喫煙だけではなくタバコ製品の販売や広告などが、自由に行えない状況になってきている。このような状況が生じているのは、第二次世界大戦後主にアメリカ合衆国（以下、アメリカ）とヨーロッパ諸国においてあいついで発表された喫煙が原因とされる健康被害に関する医学的および科学的研究の成果を、国民の健康増進を司る各国の政府機関が公式に認めたためである。

アメリカでは、1964年に厚生省の医務長官テリー(Luther Terry)が「喫煙と健康－公衆衛生局医務長官諮問委員会報告書－」を発表して、肺ガンなど具体的な病名を挙げながら喫煙に警鐘を鳴らした。その後研究は進み、喫煙する本人だけではなく周囲にいる非喫煙者の健康も脅かされること、つまり「受動喫煙」の危険性が否定しがたい事実として公表されると、国民の多くは喫煙をより深刻に捉えるようになった。1980年頃から現在にいたるまで、タバコに関する規制はますます強化されてきているし、今後もこの傾向はつづくものと思われる。かつて、喫煙が人びとにとって当然の権利として許された列車や航空機などの交通機関、映画館やレストランなど不特定多数の人が集まる屋内スペースだけではなく、公園やスポーツ施設、さらには繁華街の道路といった野外においてさえも、今では灰皿が置かれた指定場所をのぞいて、立法などによる禁煙措置が全国的にとられている。

タバコ使用に反対する人たちが、このような立法という強制的手段によって自分たちの目的を達成しようとする試みは、20世紀の第4四半世紀が初めてではなかった。今から1世紀ほど前のアメリカでは、酒類の製造や販売などを禁止する法律を求めた運動が活発化し、修正第18条——全国禁酒法——が合衆国憲法へ書き加えられることになった。この事実は、アメリカ史に関心をもつ者には広く知られているが、ほぼ同じ時期に紙巻きタバコの販売を、また州によっては製造や広告も禁止する法律を求めた運動が行われ、実際に10余州で一時的にせよそのような法律が成立したことは、アメリカ人のあいだでも詳しく知るものは少ない。

この運動で標的にされた紙巻きタバコは、アメリカでは南北戦争期に商品化された比較的新しい形態で、1869年には職人や喫煙者自らによる手巻きのものが約175万本消費された。また

1880年代前半に考案された紙巻き機の導入によって製造効率は飛躍的に上がったが、19世紀末の時点ではほかの形態のタバコと比べて人気はなかった。例えば、1900年から04年までの5年間の平均で全葉タバコのうち嗜みタバコへは40.7%，パイプ・タバコへは26.8%，葉巻へは26.1%，喫ぎタバコへは4.0%が加工されたが、紙巻きタバコへはわずか2.4%だった。¹

それにもかかわらず紙巻きタバコが標的にされたのであるが、当時このタバコは「棺の釘」^{コフィンズ・ネイル}とか「悪魔の爪楊枝」などと呼ばれていたこともあり、しばしば嫌惡の対象になった。しかし、このことだけで紙巻きタバコが標的にされた理由を語っているわけではない。そもそも、ほかの形態ではなくこのタバコの使用に反対する運動が、20世紀への転換期に活発化したのはなぜだったのか。そして、反紙巻きタバコ派とはどのような人たちで、何を目的として、またどのような言説を用いて運動を推進しようとしたのか。さらに、この運動は最終的にどのような結果をもたらしたのであろうか。以下、これらの点を中心に考察してみたい。

I : 反紙巻きタバコ運動のはじまり

アメリカにおいて、過度の飲酒に警鐘を鳴らす活動は植民地時代から行われてきたが、それが組織化されたのは19世紀への転換期であった。当初は教会関係者が中心になって集会を開いて説教をしたり誓約書への署名を集めるなどの手段によって、個人を対象に「節酒」や「断酒」をするよう働きかけがなされたのである。ちなみに、このような「道徳的説論」を優先させるものは、テンペランス運動と呼ばれた。しかし、実際に説論だけで国民の飲酒量を減らすことは困難で、それどころか1830年にはそれが歴史上最高の値にまで上昇した。そこで、1840年代になると酒類の製造や販売などを州レベルで禁止する立法を求める禁酒法運動が始まり^{プロヒビジョン}、1850年代には北部を中心として11州と2准州においてそのような法律が成立した。しかし、禁酒法は強制をともなったため激しい反発を招き、ほとんどの州では数年以内に廃止されてしまった。²

その後、産業化が進み東および南ヨーロッパからの移民労働者が急増し始めた19世紀末には再び州レベルで、さらに1910年代には連邦レベルで、この運動は復活したのである。その結果、最終的に30を超える州で禁酒法が成立したことにくわえ、1919年1月には合衆国憲法修正第18条が確定し、翌20年1月16日の深夜から施行されることになった。この修正条項を成立へと導いたのは、教会関係者を指導者とする反酒場連盟という組織だったが、その活動は社会の主流派を形成していた産業資本家や政治家たちによって支えられていた。³

一方、タバコに関しても早くからその使用に反対する声はあったが、当初は集会を開催してタバコの不使用を呼びかけたり、その誓約書への署名を集めなど、やはり道徳的説論の範疇で活動が行われた。ところが、19世紀末になって説論という手段だけでは不十分と考えはじめた反タバコ派が増え、酒類の問題と同様、法律による規制を求めるようになった。このとき注

目すべきは反タバコ派が二つのグループ、つまり全形態のタバコの使用に反対する人たちと、紙巻きタバコのみに反対する人たちに分かれたこと、そして後者が圧倒的多数を占めたという事実であった。したがって、20世紀への転換期に行われた反タバコ運動とは、事実上「反紙巻きタバコ運動」を意味したのである。

ほかの形態ではなく、紙巻きタバコが槍玉に挙がったのには次のような状況があった。それは、19世紀末の時点でアメリカ社会を支配していた主流派——その多くはワスプに属す成人男性——のほとんどが、有煙タバコに関してはパイプ・タバコや葉巻など「伝統的な形態」のタバコを愛用していた一方で、紙巻きタバコは社会の非主流派の人たち——マイナー⁴、女性、移民労働者など——によって好まれる傾向があったことだ。その理由としてまず挙げられるのは、後発であったこのタバコの値段が相対的に安価だった点である。1880年代初頭に実現した紙巻き作業の機械化によって大量生産が可能になり、また紙巻きタバコに対する減税措置があったため、このタバコの値段は大幅に下がって10本入り1箱が平均的な葉巻1本分の価格である5セント程度になった。この低価格こそ、購買力に乏しいマイナーや労働者たちを紙巻きタバコに近づけたのである。これに関して「金持ちの家でも貧乏人の家でも、10歳にもならない腕白小僧による大量喫煙を可能にさせるなど、紙巻きタバコの危険性はその値段の安さにある」と警告する新聞記事もあった。⁵

価格以外に、社会の非主流派が紙巻きタバコを選択した理由として、葉巻やパイプ・タバコと比べ、煙の刺激が弱く味がマイルドだったことも考えられた。そもそも、トルコやキューバなど味や香りの強い外国産の葉タバコが多く使われていた葉巻やパイプ・タバコとは異なり、国内産を中心にまろやかな味のものが多くブレンドされた紙巻きタバコは、強い刺激を嫌がる傾向にあるマイナーや女性によって好まれた。ちなみに、当時の成人男性はそのような紙巻きタバコを「女々しいタバコ」と呼び、敬遠する者が多かった。

また、紙巻きタバコはその携行や使用が比較的容易で手間暇がかからなかったことも、特定の人たちによって支持された理由であった。就業中に休み時間がほとんど与えられることのなかつた労働者や、タバコ使用自体を否定的に眺められていたマイナーや女性にとって、紙巻きタバコは短時間に嗜むことができて目立ちにくかったため、そのような人たちに好まれた。さらに、1890年代に出回りはじめた携帯可能な安全マッチも、外出先や職場の片隅での使用を容易にしたため、非主流派による紙巻きタバコ喫煙に拍車をかけたのである。

このように、特定の社会集団が好むタバコの使用を規制しようとした世紀転換期の反タバコ運動には、自らの飲酒ではなく移民労働者のそれを規制するために、彼らが集まる酒場を標的にした禁酒法運動との共通点があり、そのことは、これらの運動がタバコと酒類を否定的に結びつける指導者によってなされた点にも表れている。指導者とは、先ほど述べたように、社会

改革を目指すプロテスタント教会の関係者、産業資本家、そして政治家などであり、彼らはタバコ使用が飲酒と結びつくことを、プロパガンダとして頻繁に伝えたのである。次の引用文は、
1874年に結成された世紀転換期最大の飲酒に反対する女性組織「女性キリスト教テンペランス
ユニオン 同盟」(以下、WCTU)の活動家で、しばしば講演を行った安息日再臨派に属す敬虔なキリスト教徒ホワイト(Ellen White)が語ったものだが、当時の指導者たちによって繰り返された典型的な反タバコ言説だった。

タバコ依存者がどんどん増えています。この悪行について、私たちは何を語るべきなのでしょうか？ タバコは汚らしい麻薬であり、感覚を鈍らせて自由な意志決定の能力を奪うこと、使用者を克服困難な隸属的習慣の犠牲者に留めおきます。悪魔がその使用を推奨しているタバコは、真理と崇高を罪悪と腐敗から切り離すために必要とする明晰な精神の知覚作用を破壊するのです。タバコへの欲求は自壊的で、それは使用者を何かより強い刺激物へと導くのですが、結局は発酵酒であるワインや蒸留酒であるウイスキーなどすべてが致酔性のある飲料へ向かわせることになります。⁶ (傍点は筆者)

WCTUを影響力のある女性組織にした第二代会長ウイラード(Frances Willard)は、飲酒による弊害をなくすために禁酒法の成立を最優先に考えたが、その一方で「あらゆる改革への参加」をスローガンに、女性参政権の獲得や売春婦の救済などのほか、タバコ、特に紙巻きタバコの問題にも取り組んだ。⁷ WCTUは、1883年に「タバコ使用習慣廃絶部会」を立ち上げ、タバコの問題へ対応するようになった。この部会は、後に「反麻薬部会」へと改称され、セントルイス出身のインガルズ(Eliza Ingalls)が部会長に就任した頃から、以下で触れるギャストン(Lucy Gaston)の活動を支えるのであった。

部会に関するこの名称変更は、「紙巻きタバコには、アヘン、コカイン、その他の麻薬が含まれているので依存という特性を生む」と、当時多くの人が漠然と信じ込んでいたことが背景にあった。⁸ 後になって、この「依存という特性」は麻薬ではなく、もともと葉タバコに含まれるニコチンという物質によって引き起こされることが科学的に証明されるが、19世紀末の時点では、紙巻きタバコを麻薬と結びつけて非難することがしばしば行われたのである。ウイラードもそのように考えた1人であり、WCTUの年次大会などでも、この「呪われた草(麻薬)」を社会から追放するよう訴えつけた。⁹ 後述するように、WCTUは1890年代以降紙巻きタバコの販売などを禁止する法律の成立を目指した活動を行うのであるが、麻薬が含まれている紙巻きタバコを禁制品にすべきというプロパガンダがしばしば流された。

しかし、ウイラードはあくまでも禁酒法の成立を優先させたため、タバコ規制を求めた活動

で中心的役割を果たすことはなかった。そこで、彼女の代わりにその役割を担ったのが、シカゴを拠点に活動したギャストンであった。彼女はノーベル賞作家ルイス(Sinclair Lewis)の小説『アロースミス』に登場しており、そのなかで「シカゴからやってきた反ニコチン女性」として紹介されている。¹⁰ ギャストンは、1860年にオハイオ州デラウェアで生まれ、後にイリノイ州レイコンへ移り住むのであるが、彼女の改革者精神は主に家庭環境によって育まれたものと考えられる。父アレグザンダー(Alexander Gaston)はかつて奴隸制廃止運動で活動したことがあり、日常生活においても酒類とタバコを遠ざけた敬虔なキリスト教徒であった。また母ヘンリエッタ(Henrietta Gaston)がウイラードと友人関係にあったため、ギャストンは早くからWCTUの活動に参加しており、機関誌『ユニオン・シグナル』などへ投稿したことがあった。¹¹

ギャストンはシカゴを拠点にして実業家から支援を受けながら活動し、反タバコ運動の指導者を目指して1899年に「シカゴ反紙巻きタバコ連盟」を結成した。その後この組織は、各地の反紙巻きタバコ派と連携しながら州境を越えて活動の輪を広げたため、1901年には「全国反紙巻きタバコ連盟」となり、同年7月にニューヨーク州バッファローで開催された大会では、会員数が30万人近くになったことが誇らしげに報告されている。さらにこの組織は、1910年代にはカナダへ進出したため「アメリカ反紙巻きタバコ連盟」(以下、ACLA)へ改称され、会員数も50万人に達したと『ニューヨーク・タイムズ』紙は伝えている。ACLAになっても本拠はやはりシカゴで、そこを拠点として「海岸線から海岸線にいたる下部組織の全国ネットワークが作られ」、各地の活動を支援するために人材が派遣されたり、プロパガンダ冊子などが発送されたのである。¹²

ACLAの役員として名前を連ねたのは、スタンフォード大学の初代学長を務めたジョーダン(David Jordan)，著名な判事のリンゼイ(Benjamin Lindsey)，経済学者のフィッシャー(Iving Fisher)，シリアル会社を設立して財をなした医学博士の学位をもつケロッグ(John Kellogg)，そして自動車製造業者のフォード(Henry Ford)などであった。そのほかにもウィルソン(Clarence Wilson)，クラーク(Francis Clark)，ポリング(Daniel Poling)，ストロング(Josiah Strong)などのプロテスタント諸教派、特にメソジスト派に属す聖職者もACLAの役員になったが、彼らはすべて禁酒法の支持者としても知っていた。¹³

ACLAのなかで、フォードやケロッグのような産業資本家が主に行なったのは、運動を支えるための資金を拠出したり、反タバコのプロパガンダを書くことであった。彼らは本業のビジネスで多忙だったため、例えば集会を開催したり冊子の編集や禁煙誓約書の配布、さらには立法を求めて議員へ嘆願書を書き送る活動などは、主に教会関係者によってなされたのである。このような「役割分担」は、禁酒法運動における活動と共通するものであった。

II : 特定社会集団を標的にした紙巻きタバコ規制

前節で論じたように、紙巻きタバコが集中砲火を浴びたのは、この形態のタバコが主に社会の非主流派によって使用されていたからであった。そこでここでは、そのような人たちによる喫煙に関して反タバコ派が具体的に何を問題視したのかを考察するが、まずマイナーについて見てみたい。教員の経歴をもつギャストンは、ACLAを結成する以前からマイナーによる喫煙に反対しており、紙巻きタバコの販売を連邦レベルで禁止する立法を求めたのも、それが流通する限り直接的でなくとも彼らの手に渡ることや、「[紙巻きタバコを購入した]成人がマイナーにとっての悪い見本になること」を危惧したためであった。¹⁴ ACLAは、『少年』という機関誌をプロパガンダとして配布したほか、彼らを対象とした講演会を開催したり、誓約書へ署名させるなどの活動を精力的に行った。特に署名集めは積極的になされ、子供に対しては「禁酒誓約書」を参考にして次のような「汚れなき人生の誓い」が準備され、集会の場だけではなく学校や教会を通しても手渡された。

私は少なくとも21歳になるまで、紙巻きタバコおよびほかのいかなる形態のタバコについてもその使用を慎むことを、さらには友人に同じ誓いをたてるよう勧めることを、自らの名誉にかけてここに誓います。¹⁵

余談だが、当時タバコとはほぼ無縁と考えられていた少女たちにも、それを使用する少年とは口をきかないという内容の誓約書が作られたのである。¹⁶

エジソン(Thomas Edison)もまた、マイナーによる紙巻きタバコ喫煙に警鐘を鳴らす1人だった。自らは葉巻や嗜みタバコを嗜んでいたため、彼の研究所内では紙巻きタバコのみ使用禁止にされたが、エジソンはこの問題に対する考え方を共有するフォードへの書簡で、次のように述べている。

紙巻きタバコに関して有害な物質は、主に巻紙を燃焼させることによって生じる。その物質は「アクロレイン」と呼ばれ、神経の中枢に激しく作用して脳細胞を退化させるが、これはとりわけ少年の場合急激に起こる傾向にある。ほかのほとんどの麻薬と異なり、アクロレインによる退化現象は途中で停止したり、また抑制されることはない。したがって、私自身紙巻きタバコ使用者を雇用することは考えていない。¹⁷

エジソンやフォードたちがマイナーによる喫煙に反対したのは、子供の健全な成長を見守るパタナリズムだけが理由ではなかった。それは、子供が近い将来に「労働者」となることを念頭に置いたもので、生産効率の低下を避けたい経営者としての思惑からでもあった。マイナーの喫煙に反対する人々は、彼らを「紙巻きタバコ狂」と否定的に呼び、かつて栄華を誇ったスペインが紙巻きタバコの流行によって没落の道を辿ったと主張しながら、怠惰に陥る子供の増加に警告を発するのであった。¹⁸

さらに、紙巻きタバコ喫煙がマイナーにもたらす問題として、犯罪との関係を指摘した者が少なからずおり、ACLA役員のリンズイ判事もその1人であった。デンバーで主に少年による犯罪を担当してきた彼は、「紙巻きタバコの喫煙は酒類や麻薬だけでなく、犯罪とも結びつく傾向にあること」を繰り返し訴えた。リンズイは、犯罪が喫煙という「堕落」から始まる場合が多いと考え、罪を犯した少年に実刑ではなく保護観察処分をくだす場合には、禁煙誓約書への署名を条件としたのである。¹⁹ ロサンジェルスでは、市警察の青少年課長マースデン(Leo Marsden)が、犯罪を犯す少年と喫煙の関係を指摘する人物だった。彼は「21歳以下の若者で逮捕されて自分のところへ連れてこられた者のうち、90%以上が紙巻きタバコの喫煙者である」としばしば裁判で証言している。また、ニューヨーク市でも同じように語られており、『ニューヨーク・タイムズ』紙は「紙巻きタバコ戦争」という記事の中で、「私が担当した少年の99%は、タバコの脂で指が黄色く変色していた」というある治安判事の発言を載せている。²⁰

マイナーによる喫煙は不道徳な行為であり、精神的および肉体的成长に悪影響をおよぼすという考え方を多くの人が受け入れたため、1880年代にはニュージャージー、ペンシルヴァニア、カンザスなど数州において、彼らへのタバコ販売を禁止する法律が大きな反対もなく成立はじめた。そして、この動きは1890年までに20余の州および准州へと拡大したのであるが、法律の内容については異なる点があった。例えば、販売以外にも無料配布を禁止する州、紙巻きタバコだけではなく全形態のタバコに言及する州、またペンシルヴァニアのように、自分で巻くための巻紙を販売禁止にする州があった。さらに、これらの違法行為をする業者に科せられた罰金にも相違が見られ、上限を数ドル程度に設定する州から300ドルにする州まであったが、平均は20ドル台前半だった。²¹ 1890年代以降もマイナーへのタバコ販売を禁止する州は増えづけ、最終的にはほぼすべての州においてそのような法律が成立したのである。

マイナーに関しては、紙巻きタバコの販売を禁止すること以外にもさまざまな制約が設けられた。例えばフロリダ州のように、彼らに喫煙するよう「勧誘、忠告、助言もしくは強要」することが禁止されたところがあった。さらに、マイナーをタバコから遠ざける試みとして、20世紀初頭のウエスト・ヴァージニア州やケンタッキー州では、学校の敷地内およびその周辺地域での喫煙が禁止されたほか、喫煙者を教員として採用しない学区もあった。²²

通常、マイナーへタバコを販売する業者の罪が問われたのであるが、使用する本人も取り締まりの対象になることがあった。例えば1909年に成立したカンザス州法では、「公道、市街、裏通り、公園もしくはそのほかの一般人が使用する場所、または〔レストランなど〕営業中の屋内空間において、紙巻きタバコ、葉巻、パイプ・タバコを喫煙するマイナーは違法な行為をしていると見なされる」ことになった。²³ また、自治体レベルでも喫煙規制が行われており、例えばピッツバーグ市では、公衆の面前で喫煙するマイナーがいれば留置せよという行政命令が、市長によってだされた。さらにニューヨーク市では、「いかなる形態であれ、タバコを使用する16歳以下の少年を逮捕する権限が警察に与えられており」、実際に身柄を拘束された者も少なくなかった。²⁴ このような措置の法的根拠になったのは、ニューヨーク市のようにマイナーによる人前での喫煙を禁止した条例（1893年）の場合もあったが、それがないところでは、「公序良俗を乱す迷惑行為を取り締まるための条例」であった。

反紙巻きタバコ派が、マイナーによる喫煙の次に問題視したのは女性によるものであった。もともと植民地時代には、女性はパイプ・タバコや嗅ぎタバコを嗜んでおり、当時それは比較的自由に行える行為だった。しかし独立後、特に男女の領域と役割が定まっていった19世紀中頃以降のいわゆる「ヴィクトリア時代」になると、彼女たちには道徳の擁護者たることが求められ、女性のタバコ使用に不寛容な風潮が生じたのである。その結果、タバコ使用は男性にのみ認められた一方で、女性に関しては「道徳的堕落」と見られはじめた。²⁵

1879年に『ニューヨーク・タイムズ』紙は、「女性による紙巻きタバコ喫煙は常に不道徳なものに付随する、もしくはそれへとつながる行為」であるという記事を掲載した。これは当時多くの人たちが、タバコを使用する女性は「受身で快楽を享受するのではなく、自ら積極的に快楽を与える」ために、「性を売り物にする……女優、ダンサー、売春婦に多い」という偏見を信じていたことを反映したものだった。²⁶ ところが、実際世紀転換期に紙巻きタバコを喫煙したのは、必ずしも「性を売り物にする」女性ではなかった。それどころか、例えば「東海岸の大都市に住む洗練された上流階級に属するインテリ女性」や参政権を求める女性など、どちらかと言うと性を売り物にすることには嫌悪感を示すであろう人たちのなかに喫煙者は多かったのである。²⁷ したがって、反紙巻きタバコ派にとって「不道徳なもの」とは、新聞記事が仄めかしている性的な堕落ではなく、男女の間に異なった領域と役割を定めた社会規範を否定する行為であったと考えられる。

世紀転換期、そのほとんどが紙巻きタバコを選択したが、それでも女性の喫煙率は、男性と比較するとかなり低かった。しかしたとえ少数であっても、喫煙はやはり彼女たちに求められた社会規範を破る不道徳な行為であると考える活動家が少なくなかった。そして、このことは男性だけではなく、ホワイトのような女性活動家によっても共有される見解になっていた。

……神は、女性が汚らしく愚かな興奮剤(タバコ)の使用によって、自らを堕落させることをお許しにはならないでしょう。タバコで毒された息を吐く女性の存在を想像することは、何と不愉快なことでありましょう。母親の首に手を巻きつけた幼い子供の新鮮で汚れない唇に、タバコ臭さと不快な唾液によって汚された母親の唇が押しつけられることを考えるだけで身震いしてしまいます。²⁸

しかし、マイナーによるタバコ使用を法律によって規制することにはおおむね肯定的だった世論も、成人女性に関しては少々異なっていた。先述したように、この時代女性の喫煙を社会規範からの逸脱行為として認めない保守的な世論は確かに存在していたが、マイナーに対する販売禁止法と同じものが、女性を対象として立法化されるほど大きくはなかった。したがって、女性への紙巻きタバコ販売を禁止するための立法については、いくつかの州議会において議案提出がなされたものの、それらはほとんど審議されることなく棚上げされる傾向にあった。その一方で、女性による公衆の面前での喫煙が目立ちはじめたニューヨーク市のように、それを禁止する条例を成立させるか否かを議論した自治体もあった。

そもそもニューヨーク市での議論のきっかけは、20世紀初頭にレストランやホテルなど不特定多数の人が集まる場所において女性による喫煙が目立ちはじめたため、それを規制すべきと多くの市民が考えているという新聞記事が、市議会で取り上げられたことであった。その後、サリヴァン(Timothy Sullivan)議員によって提出されたそのような場所での女性による喫煙を違法とする条例案が、1908年1月に賛成多数で可決されたという広報が流された。しかし、これは市議会を通過したものの2週間後にマクレラン(George McClellan)市長が行使した拒否権によって最終的に成立しなかったのであるが、実際にマルケイヘイ(Katie Mulcahey)という29歳の女性が逮捕され、その日のうちに治安判事によって5ドルの罰金刑が言い渡されるという混乱を引き起こしたのである。²⁹

以後ニューヨーク市では、女性による公衆の面前での喫煙を禁止する条例案は繰り返し提出されたが、それらはすべて廃案になっている。それでも身柄を拘束された女性がいたのであるが、その法的根拠は、マイナーの場合と同じように、公序良俗を乱す迷惑行為を禁止した条例だった。しかし、たとえそのような条例によって拘束されても罰則はなく、通常はその日のうちに釈放されるのだが、自らの子供がいる前で行われる常習的な喫煙は、「[子供たちの]道徳性を破壊するもの」と考えられ、ときには厳しく処罰されることもあった。1904年10月18日の『ニューヨーク・タイムズ』紙は、7歳の息子と5歳の娘の前で喫煙を繰り返していた母親(Jennie Lasher)が逮捕され、30日間の禁固刑を受けることになったと報じている。³⁰そもそも、この「事件」は夫の告発に端を発したものだったが、新聞記事になったという意味で希な事例

であったと考えられる。いずれにしても、女性に的を絞った規制法を州レベルではもちろん自治体レベルでも成立させることは、マイナーの場合と異なり容易でなかった。

マイナーと女性について、東および南ヨーロッパから大量に流入してきた移民労働者も、反紙巻きタバコ運動のなかでやはり問題視された。すでに触れたように、彼らの多くが紙巻きタバコを選択したのはこれが安価であること、扱いやすく仕事場の片隅で短時間に使用できたこと、そして彼らが大西洋を渡る前からそれに慣れ親しんでいたことなどが理由としてあった。労働者による紙巻きタバコ喫煙を攻撃した者として、一部には排外主義者もいたが、その多くは生産効率の低下を危惧する企業家であった。20世紀初頭、「喫煙者は有能ではないし信用もできない」と決めつける企業家が少なからずおり、それを反映したと思われる「紙巻きタバコを喫煙する者は仕事にありつけない状況が生じている」という記事が、『ニューヨーク・タイムズ』紙に載せられた。さらに、『アメリカン・ヘリテージ』誌によって取り上げられた研究には、実際に喫煙を理由に「200万人以上の人人が仕事への扉を閉ざされてしまった」という推定値まで示されている。³¹

1902年にデトロイトでキャデラック自動車会社を設立したリーランド(Henry Leland)も、紙巻きタバコ喫煙者を敬遠する経営者の1人だった。彼は、自動車製造に不可欠な技能労働者を養成する機関として、2年制の「キャデラック応用力学学校」(the Cadillac School of Applied Mechanics)を開設したが、この学校へは「道徳的に優れた性格の持ち主で喫煙と飲酒をしない人物のみ」の入学が認められたのである。³² また、同じく自動車会社を設立したフォードも、喫煙が飲酒やギャンブルなどの「道徳的堕落」と結びつきやすい点を忘れてはいなかったが、やはり経営者として、就業中に繰り返される喫煙による経済的損失や、作業場での火災や事故を問題視した。彼は、多くの経営者仲間や教育関係者などから喫煙者を雇用することについて意見を聞き、その結果をまとめた冊子『小さな奴隸所有者への異議申し立て』を発行して広く産業界へ配布したのである。フォードが目的としたのは、「小さな奴隸所有者」と自らが呼ぶ紙巻きタバコに、「隸属」しつづける喫煙者を雇用しないよう呼びかけることであった。³³

キャデラック社やフォード社以外にも、世紀転換期には紙巻きタバコ使用者を敬遠する企業があり、それには鉄工業のカーネギー社やコロラド燃料鉄鋼会社、通信販売のシアーズ・ローバック社やモンゴメリー・ウォード社、小売業のマーシャル・フィールド社やワナメーカー社、鉄道業のシカゴ・バーリントン・クインシー鉄道、ロックアイランド鉄道、ニューヘブン鉄道、アチソン・トピカ・サンタフェ鉄道など枚挙にいとまがないほど多くの会社が含まれた。³⁴ さらに、これらの会社を経営する者、例えばカーネギー(Andrew Carnegie)やシアーズ・ローバック社のローゼンウォルド(Julius Rosenwald)やモンゴメリー・ウォード社のソーン(William Thorne)などは、ACLAをはじめいくつかの組織へ寄付を行ったが、このような経営

者による寄付金が、すでに述べたように反紙巻きタバコの活動を財政的に支えたのである。³⁵

世紀転換期のアメリカには、機械化が進み企業が巨大化するなど大衆消費社会の到来を予感させるものがあった。しかし、コンピュータによる制御が珍しくない現代とは異なり、当時は工場において機械を事故なく操作できる労働者の技能が重要だったが、その多くがヨーロッパの農村地域から流入してきたため、彼らに技能と効率を重視する労働倫理を理解させることは容易でなかった。そこで、移民たちを勤勉で有能な労働者にするため、フォードのような経営者によってとられた方策が、彼らの日常生活を細部にわたって管理することだった。紙巻きタバコの喫煙規制もその一部であり、これは禁酒法の成立を目指した運動のなかで、やはり企業家が提唱した労働者に対する飲酒規制と、同じ文脈で捉えられることは言うまでもない。

しかし、労働者を標的にして紙巻きタバコ販売を規制する法律を成立させることは、成人女性の場合よりもさらに困難だった。確かに、政府が管轄するニューヨーク港のエリス島において、到着したばかりの移民——そのほとんどが不熟練の工場労働者になる人たち——に対してタバコ会社が行っていた紙巻きタバコの無料配布や激安販売は、20世紀初頭には、タバコ会社の関係者をそこから締めだす措置によって事実上禁止されることになった。³⁶ その一方で、法のもとでの平等を基本理念として掲げてきたアメリカにおいて、特定の社会集団だけに的を絞った立法を求めるには限界があったのである。

III：“cigarette prohibition” の成立とその執行状況

前節で述べたように、ほとんどの州ではマイナーに対する紙巻きタバコの販売が、大きな反対もなく法律によって禁止された。ところが、禁止の対象が成人になると、なぜ紙巻きタバコだけなのかを含めてそのような立法を正当化するために、説得力のある理由づけが必要であった。そこで、反紙巻きタバコ派が取り上げたのが「健康」や「麻薬」などの問題で、これに関して組織として最初に動いたのはWCTUだった。³⁷ 第一節で触れたインガルズ反麻薬部会長を中心に、WCTUは紙巻きタバコ販売が、合衆国憲法によって連邦議会の権限とされた州際通商の範疇に入る場合が多々あると考えたため、1892年にその販売や搬送などを禁止する連邦法を求めて首都ワシントンにおいて活動を開始した。

これに対して連邦議会は、その請願内容が住民の健康を憂慮するものになっていたことを理由に、上院の「感染症委員会」で審議する決定をくだした。ところがこの委員会は、もし紙巻きタバコの使用に何らかの規制を設けるのであれば、住民の健康を守るのは州の役割であるとの観点から、それは連邦ではなく州の権限で行うべきと結論づけ、責任を州へ投げたのである。これに対してWCTUは、州による紙巻きタバコの販売規制が、やはり州際通商に関して連邦議会に付与された権限に抵触すると考えたため、州による規制を是認する何らかの法的措

置をあらためて求めたのであるが、連邦議会はそれには応えなかった。³⁸

連邦議会での議論をうけて、規制の問題はいくつかの州の議会において議論されたのであるが、その内容は紙巻きタバコの販売を中心に、ところによっては製造や譲渡や広告なども禁止されるべきか否かというものだった。³⁹ ちなみに、これらの行為を禁止する法律は、同時期に進められていた酒類の製造や販売などを禁止する法律である“prohibition”にちなんで“cigarette prohibition”（以下、CP法）と呼ばれるようになった。⁴⁰ CP法は1890年代から1920年代にかけて14州と1准州において成立と廃止が繰り返されたほか、22の州や准州では成立しなかったものの議会で審議されており、なかにはあと一步で成立するところもあった。本節および次節では、実際にCP法が成立したいくつかの州を取り上げ、その内容や執行状況などを見てみたい。

州CP法が最初に成立したのは1893年のワシントン州で、エヴェレット市において弁護士を本業としながら共和党の州下院議員を務めていたロスコー（C. T. Roscoe）が立法化の中心人物だった。彼はCP法となる「下院法案第236号」を州議会へ提出したが、そのなかで紙巻きタバコが健康と道徳に悪影響をおよぼすことを理由に挙げながら、次のような禁止事項と罰則を提案したのである。それは「いかなる個人や組織が行おうとも、紙巻きタバコもしくは[自ら巻くための]巻紙の販売、譲渡、製造は違法であり、違反者には最高500ドルの罰金刑か最長6ヶ月間の禁固刑、もしくはその両方が科せられる」という厳しいものだった。⁴¹

この法案は、一部の議員が反対したものの州議会を通過し、3月7日にマクグロー（John McGraw）知事による署名で成立してから4ヶ月の周知期間を経て施行されることになった。このワシントン州CP法に関して、『ニューヨーク・タイムズ』紙は「紙巻きタバコの喫煙は愚かな行為であり、ほかの形態のタバコよりも健康にとって有害だ。しかし、それは法律を成立させてまでは正すべきものではない。このような法律が順守されることはなく、それによって法律の権威を失墜させる方がより悪い結果を招くものとなる」という批判的な記事を掲載している。また、地元の『ヤキマ・ヘラルド』紙も、「州内いくつかの地域で違反が公然となされることによって、その正当性を疑う状況が予測されており、[隣接するオレゴン州]ポートランド市のタバコ小売り業者たちは、ワシントン州の消費者に通常価格の紙巻きタバコを前払いの通信販売で提供できると広告している」と、やはり否定的な記事を載せている。⁴²

結局、この州法は施行後まもなく連邦巡回裁判所で違憲判決を受けたのだが、その理由は、州際通商に対する規制権限が合衆国憲法によって連邦議会に与えられていたため、他州で製造されたものを自州へ搬入しようとする業者を犯罪者にする州CP法は、憲法違反であるというものだった。成立当初、逮捕される者もいたが、違憲判決以降この法律は死文化、つまり執行されることがなくなり、免許取得者だけに販売を許可する制度の導入と引き替えに、州CP法

は1895年に廃止されたのである。⁴³

しかし、20世紀に入りワシントン州では再び反紙巻きタバコの活動が活発化し、州CP法の復活が図られた。そして、バイアリ(Oliver Byerly)下院議員によって提出された新たな州CP法案は、審議の結果1907年6月に成立して同年9月1日から施行されることになったのである。この1907年法では、「紙巻きタバコだけではなく、葉タバコを巻く目的で準備されたあらゆる種類の巻紙に関して、それらを製造、売渡、交換、取引、譲渡すること、そして喫煙および販売目的で保有すること」が違法とされたが、1893年法の教訓から、州際取り引きに携わる仲買人が法律の適用から除外された。新しい州CP法で注目すべき点として、「喫煙」は文言上禁止されなかつたが、それを目的としての保有が禁止されたため、実質的には違法行為と見なされたことが挙げられる。ちなみに、罰則に関しては初犯の場合10ドル以上50ドル以下の罰金、再犯の場合は100ドル以上500ドル以下の罰金もしくは6ヶ月以内の郡刑務所での禁固刑が明記されていた。⁴⁴

1907年のワシントン州CP法の執行状況について、地元紙に興味深い記事が散見された。例えば、1908年9月1日の『シアトル・デイリー・タイムズ』紙に、オリンピア市のハッジマイヤー(W. S. Hagemeyer)市長が、自ら経営する葉巻スタンドで紙巻きタバコを販売したために逮捕され、その後裁判にかけられた結果罰金10ドルと裁判費用の支払いを命じられたことが報じられている。また、1909年10月6日の『タコマ・タイムズ』紙には、州西部のコウルファックスの町で牧畜業を引退して悠々自適の生活を送っていたホリングズワース(H. S. Hollingsworth)という人物が、「販売目的で大量の紙巻きタバコを保有していた」という疑惑で逮捕され、やはり裁判の結果10ドルの罰金と裁判費用の支払いを命じられたという記事が載せられている。法の執行があまり熱心に行われることのなかった状況で、10歳から喫煙を始めたホリングズワースが70歳を超えて当時とすれば「高齢者」であったにもかかわらず、以前「馬鹿げた州CP法を成立させるために時間と公金を浪費した州議会議員たち」を手厳しい批判したことがあり、そのことが取り締まりの理由として仄めかされていたのである。⁴⁵

これらの記事は、ワシントン州内の限られた地域で話題になったが、州CP法の執行が全国的に注目を集める出来事もあった。それは、世紀転換期の労働運動において急進的指導者として位置づけられていたヘイウッド(William "Big Bill" Haywood)が、1909年に講演旅行でワシントン州西部の町々を訪れたとき、エレンズバーグのレストランとノース・ヤキマの酒場で、自ら手で巻いた紙巻きタバコを口に咥えていたところを同じ日(6月16日)に2度逮捕されるという事件であった。彼は直ちに罰金をそれぞれ15ドル支払うことで釈放されたのであるが、他州の新聞でも取り上げられたため、この「事件」は全国に知れわたることとなった。⁴⁶

西部一帯の鉱山労働者で組織する組合の指導者だったヘイウッドは、労働条件の改善を求める

て経営者と激しく渡り合うことが多く、ときには連邦軍が出動するほどの激しいストライキを指揮することもあった。1905年の暮れに、長年ヘイウッドと対立してきた職を離れたばかりのアイダホ州知事ステューネンバーグ(Frank Steunenberg)が自宅前で爆殺されるという事件が起こった。ヘイウッドは首謀者の1人として起訴されたが、裁判では証拠不十分で無罪になり、その後に起こった紙巻きタバコにまつわる微罪での逮捕劇であったため注目されたのである。この事件の直後、『シアトル・デイリー・タイムズ』紙は、州CP法が「狂文、物笑い、茶番」の産物であると非難しながらそのを廃止を社説に掲げた。実際、この州法はそれ以降ほとんど執行されないまま1911年に廃止されるのだが、ヘイウッドは自伝のなかで、自らの逮捕が州CP法の「愚かさ」を国中に伝えたため、その廃止を早めたと自慢げに語っている。⁴⁷

次にイリノイ州へ話を移してみたい。そこは、CP法が成立したなかでは例外的に紙巻きタバコの製造が、一定規模で行われていた州だった。これは、ワシントン州を含めてCP法が成立した州で、たとえ「製造」が禁止されたとしても大きな影響はなかったが、イリノイ州においては製造者からの反対が強く、州経済に与える影響も小さくなかったことを意味した。⁴⁸ この州でCP法の成立を目指す活動が始まったのは1890年代の中頃だったが、言うまでもなく、その中心にいたのはシカゴを拠点に活動していたギャストンであった。1895年以降、彼女は請願と意見陳述のためにたびたび州議会へ赴いてCP法の必要性を訴えたが、最初に提出された議案は審議すらなされたのである。

このとき、紙巻きタバコ喫煙のマイナーにおよぼす道徳的悪影響だけが請願理由ではなく、より幅広い支持を得るために、それが使用者全体におよぼしかねない健康被害にも言及された。健康被害をもたらす根拠として、紙巻きタバコには「[製造の] 下準備に葉タバコがニコチンの液に浸されたり、アヘン、シロバナヨウシュチョウセンアサガオ(ナス科の有毒植物)、ペラドンナ(同)、……そのほかの有害で有毒な物質が混ぜられている」と、議案のなかでまことしやかに述べられていた。ここで引き合いにだされているニコチンは、当時は殺虫剤として使用されたことから毒性をもつものと考えられていたため、健康被害を引き起こす物質として疑われたのである。ニコチンが、もともと葉タバコに含まれる依存性を生みだす物質であることは後の研究によって明らかにされるが、19世紀末このように言及された背景として、マイナーだけではなくすべての喫煙者におよぶ健康被害と結びつけることが、州CP法の成立に向けて効果的な理由づけであると考えられたことがあった。⁴⁹

クリスチャン・シティズンシップ・リーグ

1897年、ACLAは「キリスト教市民権連盟」などの協力で請願に必要な数の署名を集めることができ、再度州議会へ働きかけを行った。その結果作成された、100ドルから200ドルの罰金と30日から60日の禁固刑が罰則として明記された紙巻きタバコの製造、販売、譲渡等を禁止する法案が、議会でようやく審議されたのである。⁵⁰ ところがこの法案は、州議会下院で可決さ

れたものの上院では否決されてしまい、以後合計で4回提出された類似の法案も不成立を繰り返した。しかし、20世紀に入り一時的に落ち込んでいた紙巻きタバコの消費量が再び増加しへじめると、ACLAは州議会への働きかけを強めた。そして最初の請願から12年が経過した1907年6月に、1897年に提案されたものとほぼ同じ州CP法がようやく成立するのであるが、罰金の額は100ドル未満そして拘留期間も30日未満へと軽減されていた。⁵¹

このような経過を辿って成立したCP法ではあったが、半年後にイリノイ州最高裁判所は、この法律が州憲法で保障している自由に商取引を行う権利を侵しているという理由で、違憲判決をくだしたのである。その結果、イリノイ州CP法は即座に廃止とはならなかったものの、ワシントン州の1893年法と同様に死文化することになった。これに対してギャストンたちは、裁判官をリコールするために署名活動を行ったが、それも成功しなかった。⁵²

イリノイ州では違憲判決を受けたが、反対に合憲であるという判断がくだされた州もあった。それはテネシー州で、そこでは「いかなる人物、商店、企業であろうとも、紙巻きタバコ、そして巻紙やその代替物の販売、および販売を目的とした州内への搬入、無料配布、譲渡を行えば、それらはすべて犯罪と見なされる。本法のすべての条項に対する違反行為には、50ドルを下回らない罰金が科せられるものとする」という内容のCP法が、1897年5月に成立して直ちに施行されたのである。⁵³ このCP法は、テネシー州最高裁判所と最終的には連邦最高裁判所によって有効性が認められることになるのだが、そもそも始まりは、オースティン(William Austin)というマディソンヴィルに住むタバコ販売業者が被告となった裁判だった。

オースティンは、ノースカロライナ州ダーラムにあったアメリカン・タバコ会社の工場で製造された紙巻きタバコを大量に仕入れ、それをテネシー州内で販売しようとした。州CP法に違反したということで、彼は一審と二審で有罪となり50ドルの罰金刑を言い渡されたが、その後この事件は州最高裁判所で争われることになった。⁵⁴ 一連の裁判を通して、州境を越えて商品が移動する「州際通商」の規制は、州ではなく連邦議会に付与された権限であるという、1893年のワシントン州CP法以降親タバコ派が繰り返し用いてきた議論を援用して、オースティンはテネシー州CP法そのものの違憲性を訴えた。しかし、1898年12月にテネシー州最高裁判所は彼の主張を退けてその合憲性を認め、下級審の罰金刑を支持したのである。その理由として、テネシー州CP法には州民の健康を守るという目的が明記されており、それは州に与えられた「公衆衛生を司る権限」に合致することが挙げられていた。⁵⁵ 以下はその判決文の一部である。

紙巻きタバコは通商上適法な商品なのであろうか？ 効能はいっさいないだけでなく毒性があり、健康に対して明らかに有害であるため、われわれはそのようには考えていない。紙

巻きタバコ使用は常に百害あって一利なく、有害、まさに本質的に有害であるのみで、どこにおいても、効果的であるとか有用であるなどと推奨されたことはない。それどころか、紙巻きタバコは邪悪なものとして広く非難されており、紙巻きタバコは明らかに心身の健全さと活力を奪う方向へ [喫煙者を] 導くものである。⁵⁶

オースティンは州最高裁判所の判決に納得できなかったため、最終的に連邦最高裁判所に判断を求めた。この「ウイリアム・オースティン対テネシー州」事件の判決は1900年11月にくだされ、5対4と裁判官の意見は分かれたものの、テネシー州CP法の合憲性は再度認められることとなった。判決では、連邦議会に与えられた州際通商の規制権限について二次的に触れられたが決定的な争点とはならず、その一方で紙巻きタバコ喫煙には「特に若者の肉体と精神に悪影響をおよぼす側面があること」が強調されるなど、州民の健康を守ることを優先させたテネシー州最高裁判所の判断が支持されたのである。⁵⁷

V：第一次世界大戦後の“cigarette prohibition”

20世紀初頭まで、紙巻きタバコは特定の人たちによって使用される傾向にあったが、第一次世界大戦期に年齢や性別や職業などに関係なく国民の間で広く流行しはじめたため、州CP法を求める運動は停滞を余儀なくされることになった。かつて、この運動に好意的だった赤十字やキリスト教青年会（YMCA）などの組織が、方針を変えてヨーロッパ戦線で戦うアメリカ兵に対してタバコ製品を慰問品として届ける活動をしたことは、明らかに運動を停滞させる一因になった。「常道への復帰」を目指した終戦後には、州CP法運動はいずれ消滅すると考える者も少なくなかった。事実、1919年から21年までに、先ほど触れたテネシーをはじめネブラスカ、アイオワ、アーカンソーの4州でこの州法は廃止されている。また、アイダホ州では1921年に紙巻きタバコの販売を禁止する法律が成立したものの、執行されないまま数週間後に廃止されるという混乱も起こった。⁵⁸ いずれの場合も、帰還兵が州CP法に反対する世論を盛り上げ、廃止へ向けての動きを加速させたことは明白だった。

このような州CP法に否定的な世論は、1921年に全国の新聞記者を対象に大規模に行われた調査の結果にも表れている。この調査を担当したニューヨーク市のプレス・サービス社が対象にした記者は12,518名にもおよび、そのうち63%にあたる7,847名から回答があった。調査で問われた質問は、(1)あなたは成人による紙巻きタバコの使用を規制する立法に賛成ですか？(2)あなたが住む地域社会では、そのような立法に対する人びとの意見は好意的であると考えられますか？(3)あなたにとって、そもそも紙巻きタバコの使用は好ましくないのですか？という三つだった。回答した記者のうち94%にあたる7,393名が、これらの質問に対して否定的、

つまり州CP法に反対する意志を示したのである。⁵⁹

記者の意見分布が世論を正確に反映しているとは限らないが、州CP法を否定的に眺める傾向に世論があったことは容易に想像される。しかし紙巻きタバコの流行は、一方ではこのタバコへの反発を招いたことも事実であった。1919年に合衆国憲法修正第18条が確定したことをうけて、当時強い影響力をもっていた福音派牧師のサンデー (Billy Sunday) も、「禁酒法を勝ちとった。次はタバコの番だ！」と呼び、州CP法運動の復活を促した。⁶⁰ 実際、いくつかの州においてこの運動は再び活発化したのであるが、そのなかで注目されたのはユタ州であった。

政治的そして社会的には保守的なモルモン教徒が多く居住していたユタ州では、長年CP法の成立を目指した運動が行われてきたが、ようやくそれが実現したのは1921年6月のことだった。州上院議員のサウスウイック (Edward Southwick) によって提出され、ACLAやWCTUなどの支援を受て成立した州CP法の要点は、「いかなる人物、企業、法人も、紙巻きタバコやその巻紙の交換と販売、およびそれらを目的とした保有、供給、譲渡、商品の偽装やごまかし、また特定の場所でマイナーに喫煙させること、新聞、雑誌、定期刊行物、看板、プラカード、ビルボードなどを使用した広告、さらには閉ざされた公的空間での喫煙は禁止される」というものであった。ちなみに、この「閉ざされた公的空間」として、「ホテルのレストラン、飲食店、カフェテリア、劇場、エレベーター、路面電車、郊外列車、乗り合いバス、駅の待合室、床屋、州や郡や市町村が所有する建物」などが具体的に言及されていた。⁶¹

またサウスウイックは、紙巻きタバコの喫煙が「女性と子供たちの道徳と健康を危険に曝す」だけではなく、「公の場の空気を汚し非喫煙者の〔タバコ煙からの〕自由を奪う」行為であることを提案理由として挙げた。もちろん、当時は受動喫煙の問題点を医学的に論じたものは皆無であったが、このように迷惑行為としてではあったが、それに言及されたことは注目に値する。⁶² ちなみに、この時期ユタ州のようにマイナーだけではなく、すべての人による公の場における喫煙が、自治体ではなく州レベルで違法とされたケースは多くなかった。

そもそも州CP法が成立しても、それらが積極的に執行されずに事実上死文化する傾向にあったことを、これまでワシントン州やイリノイ州の事例で見てきた。禁酒法と同様に、世論の支持がえられない場合が多々あった州CP法には、紙巻きタバコ使用に反対する人とそうでない人の間に、たとえ法律を成立させたとしてもそれを厳格に執行しないという「暗黙の了解」が、あたかも存在していたかのようであった。⁶³ 当初ユタ州でも、法律は成立したものの違反した成人男性が逮捕されることはほとんどなかったのである。

ところが、そのような状況を不満に思う反タバコ派が少なくなかったことが、この州の特徴でもあった。彼らはモルモン教会大官長グラント (Heber Grant) による指導のもと、1922年11月に行われたソルト・レイク郡の保安官選挙で、厳格な法執行を公約したハリーズ (Benjamin

Harries)を当選させることに成功した。そして、保安官に就任したハリーズは、紙巻きタバコ販売業者つまり密売人だけではなく「閉ざされた公的空間」で喫煙する者を、公約通り逮捕すると宣言したのである。

実際、1923年2月のある火曜日の昼食時にソルト・レイク市中心部にあった「ウイーン・カフェ」というレストランで、食後に喫煙を楽しんでいた「地元の名士」たちが逮捕される「事件」が起こった。逮捕されたのは、キーストン鉱山会社総支配人で、前年11月の選挙で落選したが連邦上院議員の共和党候補者だったバンバーガー(Ernest Bamberger)，ソルト・レイク製氷会社の経営者リンチ(John Lynch)，そして銅の製錬を手がけるアメリカ・スメルティング・アンド・リファイニング社重役のニューハウス(Edgar Newhouse)であった。⁶⁴

マイナーや女性や移民労働者ではない名士3人が、喫煙を理由に留置場へ入れられたため、この出来事は多数の新聞によって全国的に伝えられた。暗黙の了解が破られたことに対し、逮捕された人たちが属す実業界——例えばソルト・レイク・ライオンズ・クラブやユタ州製造業者協会——が中心になり、『ソルト・レイク・トリビューン』や『ソルト・レイク・テレグラム』などの新聞を使って親タバコ派は直ちに反撃を開始した。反紙巻きタバコ運動が始まった世紀転換期、すでに述べたように多くの産業資本家はこの運動を肯定的に捉え、寄付を行ったり喫煙者を雇用しないなど積極的に関与した。しかし、第一次世界大戦を境に立場を変える者が出てはじめるのだが、このことはいくつかの州で起こったCP法の不成立や廃止の原因になったのである。以前、葉巻やパイプ・タバコを喫煙していた彼ら自身も、その扱いやすさやまろやかさなどから徐々に紙巻きタバコを嗜むようになり、逮捕された実業家もそのような人たちであった。

バンバーガーたちの逮捕劇を伝えた他州の新聞——例えば『ワシントン・ポスト』、『ボストン・ranscript』、『シンシナティ・タイムズ・スター』、『オマハ・ワールド・ヘラルド』、『フィラデルフィア・インクワイアラー』など——は、ユタ州CP法に対してより否定的なコメントを載せはじめた。このような、州の内外から示されたCP法への批判を背景に、ユタ州の親タバコ派は、成人への紙巻きタバコ販売や公の場における喫煙を認める修正案を州議会へ提出した。そしてこの法案は大きな反対もなく成立、つまり州CP法の廃止が決まったのであるが、この一連の動きはバンバーガーたちの逮捕から数ヶ月のあいだに起こったのであった。⁶⁵

ユタ州CP法が廃止された1923年の時点で、ノースダコタ州とカンザス州でのみCP法は存在していた。ノースダコタ州CP法は、ワシントン州につづいて1895年に成立した販売を禁止するもので、成人へのそれは見過ごされる傾向にあったが、マイナーに関しては執行されることもあった。しかし、30年近く存続してきたこのCP法も1925年に廃止されている。⁶⁶一方、カン

ザス州CP法は1927年まで存続したため、世紀転換期に行われた反紙巻きタバコ運動の最後まで残った成果として歴史に記されている。

カンザス州CP法は、1909年に紙巻きタバコの販売のみを禁止するものとして成立したが、1917年には広告や所有も禁止条項へ書きくわえられた。この州では、CP法が成立した他州と同じように、もともとCP法への支持は決して大きいものではなかった。しかし、それでも成立した理由として、主に二つのことが考えられた。まず第一に、全国的に見てタバコや酒類の規制に対して肯定的なのが都市部よりも農村部で、また各州の議会における議席配分に関しても、その農村部が過剰になる傾向にあった点が挙げられる。第二点として、喫煙や飲酒などの問題に対して、男性よりも女性の方が規制をより積極的に支持したことが挙げられる。カンザス州では、合衆国憲法修正第19条（女性参政権の付与）が確定する1920年以前に女性へ選挙権が与えられており、州CP法を支持して積極的に活動した女性たちの政治的影響力は決して小さいものではなかった。⁶⁷ ちなみに、CP法を成立させた州は中西部に集中しており、これらの州では基本的に農業地帯で農村部が過剰代表になり、また女性参政権も第19条の成立以前に付与されたところが多かったのである。

他州と同様に、カンザス州でもCP法の合憲性を問う訴訟がタバコ販売業者によって起こされたが、1920年に州最高裁判所はその訴えを退ける判決をくだしている。このような状況下で、ギャストンは合憲性が認められたCP法の厳格な執行を促す目的でこの州へやってきた。カンザスは、禁酒法運動の女性活動家ネイション(Carry Nation)が1900年代に酒場を打ち壊して回ったことで有名になった州で、ギャストンもそのことを意識していた。彼女は郡単位でACLAの支部を立ち上げることに奔走しながら、各地で法の執行を求めて集会を開いた。ギャストンの働きかけがどの程度影響したのかは不明だが、トピーカの町では紙巻きタバコを販売していた店舗に対する取締りが行われた。このような取締りはそれまであまり行われたことがなく、また数日前に当局によって予告されたものであったが、それでも合計で35軒の店舗が捜索を受け、発見された紙巻きタバコはすべて没収され、店主たちも逮捕されたのである。⁶⁸

また、ギャストンは紙巻きタバコを意味する「棺の釘」という小冊子を発行したり、次期大統領に決まったハーディング(Warren Harding)が紙巻きタバコの喫煙者であったため、喫煙をやめるようカンザス州から手紙を送りつけるなど活発に行動した。余談だが、これに関連してアチソン市に住む親タバコ派は、彼女の「無礼な」手紙を詫びる言葉とともに、質の良い紙巻きタバコ1カートン(10箱)をハーディングに贈ったというエピソードがある。⁶⁹ 親タバコ派には、アメリカ在郷軍人会に属す元兵士たちが数多く含まれていた。すでに述べたように、戦場で覚えた紙巻きタバコの味が忘れられなかった彼らは、各地でCP法に反対する立場で活動した。実際カンザス州でも、1920年と1923の2回、成立しなかったが彼らも加わって州CP

法廃止の法案が議会へ提出されている。

このように、1920年代のカンザス州において、反タバコ派はCP法の厳格な執行を求めるよりも、それを存続させることに奔走していた。カンザス州滞在中に、ギャストンは結果として自らが追放されてしまうACLAの内部対立が起こり、活動の拠点をアイオワ州へ移すためにそこを離れることになった。その後カンザス州の反紙巻きタバコ派は、WCTUの活動家を母親にもち、後に州下院議員になるヘインズ(Stella Haines)によって率いられた。1927年、親タバコ派はタバコ販売を免許制にすること、マイナーへの販売は引きつづき禁止にすること、さらには道路整備を目的として紙巻きタバコ1箱につき2セントを課税することと引き替えに、州CP法の廃止を提案した。現行法の廃止だけを提案していたそれまでとは異なり、代替案を提示した戦略はヘインズたちの抵抗はあったものの功を奏し、カンザス州法は1927年に廃止されたため、ここに州CP法運動の成果はすべて消滅したのである。⁷⁰

おわりに

20世紀への転換期、アメリカでは紙巻きタバコを主に標的とした反タバコ運動が行われた。当初はマイナーのみを規制対象にして立法化が試みられたが、すぐにすべての人に対して紙巻きタバコの販売などを禁止する州法を求めた運動が始まった。その結果、14州と1准州においてCP法が成立したのだが、実際にこの法律がほとんど実効をともなわなかったことは、すでに触れた通りである。⁷¹ 事実、『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』紙が伝えた「立法化されるも紙巻きタバコの販売量は増加」という見出しの記事にあるように、州CP法は喫煙量を減らすことにはつながらなかったのである。これをもたらした原因として、記事のなかでは「法律無視」という社会風潮が挙げられているが、この風潮が生じた背景には、これまで考察してきたようにいくつかの理由があった。⁷²

まず第一に、標的にされた紙巻きタバコが、20世紀に入って人気が出はじめていた状況が挙げられる。第一次世界大戦期のアメリカでは、禁制品になった酒類の代わりに、ヨーロッパへ出征した兵士に慰問品としてタバコ、特に戦場で扱いやすい紙巻きタバコを送り届ける活動が、愛国的な雰囲気のなかで多くの一般市民が参加して行われたのである。終戦後、紙巻きタバコの喫煙習慣を身につけて帰還した兵士が、このタバコの消費拡大に貢献する一方で、州CP法を否定的に眺めたのは自然の成り行きであった。

第二の理由として考えられるのは、反紙巻きタバコ運動の目的が生産効率の向上と社会秩序の維持にあったという点である。この運動の指導者たちは、喫煙がマイナーや労働者を飲酒や無気力などと結びつけて経済活動に悪影響をおよぼすとか、子供を立派に育てることを期待された女性による喫煙は、「ヴィクトリア時代の道徳観」を逸脱する行為であるなどと考えたの

である。しかし、このような特定の社会集団を標的にした「差別的な」立法が、20世紀に入り平等化や大衆化へと向かう社会において、支持されなくなることは不可避であった。

いま一つ考えられる理由は、多くの人たちを納得させうる反紙巻きタバコ言説が欠如していた点である。実際に、州CP法の必要性を説くプロパガンダとして頻繁に使われた言説は、本文中で引用したホワイトのように道徳的となる傾向にあった。しかしそのような言説は、一部の人の感情へ情緒的に訴えかけることはできても、多数の国民に対して説得力をもつことは困難であった。そこで反紙巻きタバコ派は、例えばこの形態のタバコに麻薬が含まれているなどというプロパガンダも用いたのである。このような主張がまことしやかに語られたのであるが、これは医学的および科学的に証明された数多くのデータや統計数値を根拠として、喫煙はさまざまな疾病の原因になるという現在の反喫煙運動における主張と比較すると、説得力に欠けるものであった。

以上のような理由で、人びとの州CP法に対する順守の精神が希薄になることは避けられなかつたのである。その結果として、註の63で触れたガスフィールドが指摘するように、法律を成立させることとそれを執行することは別であるという考え方がある、そのまま法律無視という社会風潮として現れたのである。いずれにしても、このような実情は20世紀への転換期に行われた反紙巻きタバコ運動の本質を語るものであり、同時にその限界を示すものでもあった。

註

- 1 Carl A. Werner, *Tobaccoland: A Book about Tobacco; Its History, Legends, Literature, Cultivation, Social and Hygienic Influences, Commercial Development, Industrial Processes and Governmental Regulation* (New York: The Tobacco Leaf Publishing Company, 1922), 43; Jack J. Gottsegen, *Tobacco: A Study of Its Consumption in the United States* (New York: Pitman Publishing Corporation, 1940), 42.
- 2 Masaru Okamoto, "The Maine Law of 1851: How the Prohibitionists Made It" *The American Review* 16 (March, 1982), 199-221.
- 3 反酒場連盟に参加した人々は、自らが目指す社会を実現するために禁酒法という強制的手段による「改革」を追求しようとした。その改革とは、都市の酒場に集まる移民たちを利用して地方政治を支配するシステム——マシーン政治——を解体することと、労働者の飲酒によって生じる生産効率の低下を防ぐことであった。これに関しては、拙著『アメリカ禁酒運動の軌跡－植民地時代から全国禁酒法まで－』(ミネルヴァ書房, 1994), 185-248を参照されたし。
- 4 「マイナー」(minor)とは「年少者」とか「未成年者」などと訳されるが、タバコ使用に関

しての具体的な年齢については、州および時代によって異なった。19世紀末にかけて上限を16歳とする州は多かったが、20世紀初頭には18歳まで引き上げてマイナーと規定する州が増えた。Gottsegen, 155.

- 5 New York Times, October 17, 1882; John C. Burnham, *Bad Habits: Drinking, Smoking, Taking Drugs, Gambling, Sexual Misbehavior, and Swearing in American History* (New York: New York University Press, 1993), 91.
- 6 Ellen G. White, *Temperance: As Set forth in the Writings of Ellen G. White* (Mountain View, Cal.: Pacific Press Publishing Association, 1949), 58.
- 7 「あらゆる改革への参加」については、拙稿「婦人キリスト教禁酒同盟－その多様性と政治運動化について－」『同志社アメリカ研究』22 (1986), 69-77 を参照されたし。
- 8 Margaret W. Lawrence, *The Tobacco Problem* (Boston: Lee and Shepard, Publishers, 1885), 163.
- 9 Woman's Christian Temperance Union, *WCTU Annual Meeting Minutes* (Chicago: 1891), 136; Frances Willard, *Glimpses of Fifty Years: The Autobiography of an American Woman* (Chicago: H. J. Smith & Co., 1889), 642.
- 10 Sinclair Lewis, *Arrowsmith* (New York: Harcourt, Brace & World, Inc., 1925), 258.
- 11 Woman's Christian Temperance Union, *Union Signal* (Chicago), October 29, 1896 & August 3, 1899.
- 12 ただし、第三節以降で考察する立法活動については、このようなACLAからの支援があったものの、それぞれの地域に生まれた組織を中心に行われた。Gerard Petrone, *Tobacco Advertising: The Great Seduction with Values* (Atglen, Penn.: Schiffer Publishing Ltd., 1996), 202; Jacob Sullum, *For Your Own Good: The Anti-Smoking Crusade and the Tyranny of Public Health* (New York: The Free Press, 1998), 30; *New York Times*, July 12, 1901 & June 17, 1910.
- 13 Cassandra Tate, *Cigarette Wars: The Triumph of "The Little White Slaver"* (London: Oxford University Press, 1999), 49-51.
- 14 Lee J. Alston, Ruth Dupre, & Tomas Nonnenmacher, "Social Reformers and Regulation: The Prohibition of Cigarettes in the United States and Canada," *Explorations in Economic History* 39 (2002), 425-45.
- 15 Anti-Cigarette International League, *First Annual Report* (Chicago: 1921), 7.
- 16 Gottsegen, 27 & 42.
- 17 Henry Ford, *The Case against the Little White Slaver* (Detroit: Henry Ford, 1916), 3.

- 18 *New York Times*, January 29, 1884; Richard B. Tennant, *The American Cigarette Industry: A Study in Economic Analysis and Public Policy* (New Haven: Yale University Press, 1950), 133; Jordan Goodman, *Tobacco in History: The Cultures of Dependence* (London: Routledge, 1993), 118; Lina G. Munoz, "Gender, Cigar and Cigarette: Technological Change and National Patterns," Proceeding of XIV International Economic History Congress, August 21 to 25, 2006, Helsinki, Finland, 11.
- 19 Charles Larsen, *The Good Fight: The Life and Times of Ben B. Lindsey* (Chicago: Quadrangle Books, 1972), 97.
- 20 *New York Times*, August 8, 1909; Allan M. Brandt, *The Cigarette Century: The Rise, Fall, and Deadly Persistence of the Product that Defined America* (New York: Basic Books, 2007), 48; Morton Keller, *Regulating a New Society: Public Policy and Social Change in America, 1900-1933* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1994), 115-16.
- 21 Robert L. Rabin & Stephen D. Sugarman, eds., *Smoking Policy: Law, Politics, and Culture* (London: Oxford University Press, 1993), 50.
- 22 Florida, Laws (1907), 229-30; West Virginia, Acts (1913), 123; Kentucky, Statutes I (1915), 732, quated in Tate, 56; Gottsegen, 155; Tennant 134.
- 23 Alston, Dupre, and Nonnenmacher, 431.
- 24 Petrone, 230.
- 25 女性の喫煙とヴィクトリア時代の道徳観に関しては、拙稿「アメリカ合衆国における女性によるタバコ使用とジェンダー領域の関係史」『中・四国アメリカ研究』3 (2007), 95-115 を参照されたし。
- 26 *New York Times*, September 1, 1879; Richard Klein, *Cigarettes Are Sublime* (Durham, N. C.: Duke University Press, 1993), 117.
- 27 女性参政権を求める集会の終了後、会場整備をする職員のなかに吸い殻の後始末が大変であるという不満がしばしば聞かれた。 *Reno Evening Gazette*, January 15, 1908; Robert Sobel, *They Satisfy: The Cigarette in American Life* (New York: Anchor Books, 1978), 13.
- 28 White, 59-60.
- 29 *New York Times*, January 8, 21, & 23, 1908; Kerry Segrave, *Women and Smoking in America, 1880-1950* (Jefferson, N. C.: McFarland & Company, Inc., 2005), 89-91.
- 30 *New York Times*, October 18, 1904.
- 31 *New York Times*, August 8, 1909; Gordon L. Dillow, "Thank You for not Smoking: The Hundred-Year War against the Cigarette," *American Heritage Magazine* 32 (February /

- March 1981), 94ff.
- 32 Raymond R. Fragnoli, *The Transformation of Reform: Progressivism in Detroit – And After, 1912–1933* (New York: Garland Publishing, Inc., 1982), 22.
- 33 Ford, 28ff; Donley T. Studlar, *Tobacco Control: Comparative Politics in the United States and Canada* (Ontario, Canada: Broadview Press, Ltd., 2002), 28.
- 34 Elizabeth M. Whelan, *A Smoking Gun: How the Tobacco Industry Gets away with Murder* (Philadelphia: George F. Stickley Co., 1984), 49; Richard Kluger, *Ashes to Ashes: America's Hundred-Year Cigarette War, the Public Health, and the Unabashed Triumph of Philip Morris* (New York: Vintage Books, 1996), 67.
- 35 Tate, 54.
- 36 Petrone, 199.
- 37 医学的および科学的研究成果によって活発化した20世紀後半の反喫煙運動と異なり、この時期の反紙巻きタバコ運動で取り上げられた健康の問題は、学術的知識や統計資料などの裏づけがない独断的なものが多く、なかには紙巻きタバコの喫煙が弱視やコレラなどを引き起こすといものもあった。Susan Wagner, *Cigarette Country: Tobacco in American History and Politics* (New York: Praeger Publishers, 1971), 42-43.
- 38 Gaines M. Foster, *Moral Reconstruction: Christian Lobbyists and the Federal Legislation of Morality, 1865–1920* (Chapel Hill, N. C.: The University of North Carolina Press, 2002), 149; *Wichita Daily Eagle*, November 2, 1897; *Scranton Tribune*, November 2, 1897.
- 39 反紙巻きタバコ派は「販売」以外にも「譲渡」を禁止する州CP法を求めたが、それは、業者のなかにマッチをタバコと同じ1箱5セント程度で販売しておいて、紙巻きタバコを「おまけ」として「譲渡」する者がいたからであった。このようなやり方は、19世紀末の州禁酒法のもとで、珍しい動物を酒場で見せることで「入場料」を徴収し、その代わりに酒類は「販売」されるのではなく無料で振る舞われるという法律逃れのやり方を参考にしたもので、ちなみにそのような酒場は「盲目の虎」^{ブラインド・タイガー}とか「盲目の豚」^{ブラインド・ピッグ}などと呼ばれた。これに関しては、拙著『禁酒法－「酒のない社会」の実験－』(講談社現代新書, 1996) , 56を参照されたし。
- 40 酒類規制に関して、“prohibition”は通常「禁酒法」と訳されるがこれは誤訳である。その理由は、そもそも“prohibition”とは飲酒を禁止する意味の「禁酒」を強制した法律ではなく、業者を標的にして酒類の製造や販売などを禁止したものだったからだ。したがって“prohibition”は本来ならば「酒類製造・販売等禁止法」と訳されるべきであるが、本稿では慣用的に使用されている「禁酒法」とした。一方、タバコの“prohibition”に関し

ても、「禁酒法」から連想される「禁煙法」と訳されることがある。当時、確かに喫煙が禁止されたところも自治体レベルを中心として一部にはあったが、一般には販売のほか製造や広告や譲渡などが禁止されることが多かったため、「紙巻きタバコ販売等禁止法」がより正確な訳語と思われる。しかし、本稿では訳出せずに「CP法」と略称した。

- 41 Humanities Washington, "Cigarette Prohibition in Washington, 1893-1911" <http://www.historylink.org/index.cfm?DisplayPage=pf_output.cfm&file_id=5339>
- 42 *New York Times*, June 15, 1893; *Yakima Herald*, June 8, 1893.
- 43 *St. Paul Daily Globe*, June 22, 1893; *Yakima Herald*, March 14, 1893.
- 44 *Seattle Daily Times*, September 1, 1909; *Colville Examiner*, October 3, 1908. 本文中でも触れたように、「喫煙」は州CP法の禁止項目に含まれていない場合が多かった。それは、確かに紙巻きタバコを選択したのは全タバコ使用者の1~2%程度(1900年)で、それもマイナーや女性や移民労働者がほとんどであったが、それでもワスプなど社会の主流派に属す成人男性のなかにもこの「女らしいタバコ」を好む者はおり、もし「喫煙」を禁止すれば、彼らを逮捕せざるをえない状況が生じると考えられたためであった。同時代の「州禁酒法」そして1920年発効の合衆国憲法修正第18条のなかでも、酒類の「飲用」はやはり禁止項目にはならなかったが、これも飲酒をつづけるであろう主流派の人たち——紙巻きタバコの場合とは異なり多数——の逮捕を免れさせるためだった。つまり、州CP法も禁酒法も、それぞれの第一目的が喫煙や飲酒を止めさせることではなく、非主流派を管理することだったのである。(註の3と63を参照)
- 45 *Tacoma Times*, October 6, 1909; *Seattle Daily Times*, September 1, 1908.
- 46 *San Francisco Call*, June 17, 1909; *New York Tribune*, June 18, 1909.
- 47 William D. Haywood, *Bill Haywood's Book: The Autobiography of William D. Haywood* (New York, International Publishers, 1929), 228; Douglas O. Linder, "The Trial of William 'Big' Haywood" <http://law2.umkc.edu/faculty/projects/trials/haywood/HAY_ACCT.HTM>; *Seattle Daily Times*, July 25, 1909 and August 21, 1909.
- 48 反紙巻きタバコ派は販売や譲渡以外にも、「製造」を禁止する州CP法を成立させようとしたが、1910年の時点で、全48州のうち紙巻きタバコが一定規模以上で製造されていた州は21州だった。そのなかで、ニューヨーク、ヴァージニア、ノースカロライナ、イリノイなどは紙巻きタバコの製造が特にさかんだったが、そのほかの州では州経済がそれに大きく依存するところは少なかった。したがって、CP法に「製造」の禁止条項があっても実際には製造していない州や極めて小規模な州も多く、この項目の影響は限定的であった。
Alston, Dupre, and Nonnenmacher, 437.

- 49 Illinois, 38th General Assembly (1893), S. B. 310, H. B. 185; 39th General Assembly (1895), S. B. 245, 307. 紙巻きタバコが薬物と結びついているという噂は、紙巻きタバコとライバル関係にあったほかの形態のタバコを製造する業者からしばしば流された。Jerome R. Brooks, *The Mighty Leaf: Tobacco through the Centuries* (Boston: Little, Brown and Company, 1952), 253-54.
- 50 Illinois, 40th General Assembly (1897), S. B. 245 & 134, H. B. 221.
- 51 Wagner, 44.
- 52 Tate, 59; Petrone, 200; Sobel, 61.
- 53 William B. Austin v. State of Tennessee, 179 US 343; 21 S Ct 132; 45L Ed 224 (November 19, 1900) <<http://medicolegal.tripod.com/austinvtenn.htm>>
- 54 David L. Hudson, Jr., *Smoking Ban* (Philadelphia: Chelsea House Publishers, 2004), 12.
- 55 P. D. Jacobson, J. Wasserman, and J. R. Anderson, "Historical Overview of Tobacco Legislation and Regulation" in *Smoking: Who Has the Right?* eds. Jeffrey A. Schaler and Magda E. Schaler (New York: Prometheus Books, 1998), 44; *Holt County Sentinel*, December 16, 1898.
- 56 Tennant, 134.
- 57 William B. Austin v. State of Tennessee, 179 US 343, op. ct.; *Brownsville Daily Herald*, November 23, 1900.
- 58 Tate, 160.
- 59 *Bourbon News*, May 31, 1921; *Oklahoma Miner*, June 9, 1921.
- 60 Joseph C. Robert, *The Story of Tobacco in America* (New York: Alfred A. Knopf, 1952), 247.
- 61 John S. H. Smith, "Cigarette Prohibition in Utah, 1921-23," *Utah Historical Quarterly* 41 (1973), 364n; *American Fork Citizen*, June 11, 1921.
- 62 "Cigarette Measure Is Discussed in Senate," *Deseret News*, February 3, 1921.
- 63 法律を作ったものの積極的に執行しない、もしくはできないという状況は、禁酒法に関してすでに見られていた。禁酒法運動を研究したガスフィールド(Joseph Gusfield)は、社会的地位の異なる集団間に発生した対立にこの運動の起源を求めた。彼は著書『象徴的十字軍』(1963) のなかで、禁酒法運動を「ステータス・ポリティックス」という概念を用いて解釈しようと試みた。ガスフィールドが言う「ステータス」とは、文化、人種・民族、宗教、階層そして道徳的価値観などを共有する一定の集団が占める社会的地位を指し、「ステータス・ポリティックス」とは、そのような人たちに共通する規範や生活習慣など

を異質な別の集団に認めさせることで、自らが支配する統合された社会作りを目的とした政治であった。彼によると、この運動で最も重視されたのは、酒類の製造や販売等を禁止する法律を成立させて自らの存在感を示すことであって、必ずしもそれを厳格に執行することではなかった。したがって、禁酒法は基本的には自らの存在をアピールするためのものであり、その点で実効をともなわない「象徴的」なものであっても構わなかった。州CP法に関しても、意図的か否かについて議論の余地はあるが、結果的にガスフィールドが禁酒法に用いた「ステータス・ポリティックス」という概念が当てはまるケースが少なくなかった。Joseph R. Gusfield, *Symbolic Crusade: Status Politics and the American Temperance Movement* (Chicago: The University of Chicago Press, 1963), 16ff.

- 64 *American Heritage Magazine*, op. ct., 94.
- 65 *Literary Digest*, March 24, 1923, 14-15.
- 66 Robert, 250.
- 67 *Ogden Standard-Examiner*, January 11, 1921; John Dinan & Jac C. Heckelman, "The Anti-Tobacco Movement in the Progressive Era: A Case Study of Direct Democracy in Oregon," *Explorations in Economic History* 42 (2005), 542-43.
- 68 *Hartford Republican*, August 26, 1921.
- 69 Petrone, 204-05; Robert, 249.
- 70 Robert S. Bader, *Prohibition in Kansas: A History* (Lawrence, Kansas: The University Press of Kansas, 1986), 207.
- 71 本文中で取り上げた州以外に、CP法が成立したのは以下の州であった。ノースダコタ州では1895年から1925年まで販売が、アイオワ州では1896年から1921年まで販売と製造が、オクラホマ准州 [1907年に州へ昇格] では1901年から1915年まで販売と譲渡が、インディアナ州では1905年から1909年まで販売、製造、所有が、ウィスコンシン州では1905年から1915年まで販売、製造、譲渡が、アーカンソー州では1907年から1921年まで販売と製造が、ネブラスカ州とサウスダコタ州では1909年から1919年と1917年までとともに販売、製造、譲渡が、そしてミネソタ州では1909年から1913年まで販売と製造などが、それぞれ禁止された。ちなみに、これらの州CP法が廃止されたとき、ノースダコタ州、アイオワ州、カンザス州など多くの場合、マイナーへの販売は引きつづき禁止されたほか、販売業者に対するライセンス制の導入や紙巻きタバコへの課税によって、歳入の増加を目的とした政策への転換が図られた。Ronald J. Troyer and Gerald E. Markle, *Cigarettes: The Battle over Smoking* (New Brunswick, N. J.: Rutgers University Press, 1983), 34; Tate, 150-51.
- 72 *New York Daily Tribune*, February 18, 1907.

Cigarette Prohibition Laws at the Turn of the 20th Century in America: The Background of Its Enactment and Repeal

OKAMOTO Masaru

The fact that in the United States prohibition laws, which banned the manufacture, sale, and transport of alcoholic drinks at both state and federal levels, were enacted at the turn of the 20th century is widely known today by many ordinary Americans as well as historians. Yet the fact that other laws, which banned the sale and sometimes the manufacturing and advertising of cigarettes, were enacted during the same years in 14 states and one territory is almost unknown to people in general. In fact, cigarette control is both an old and new public policy issue in the United States.

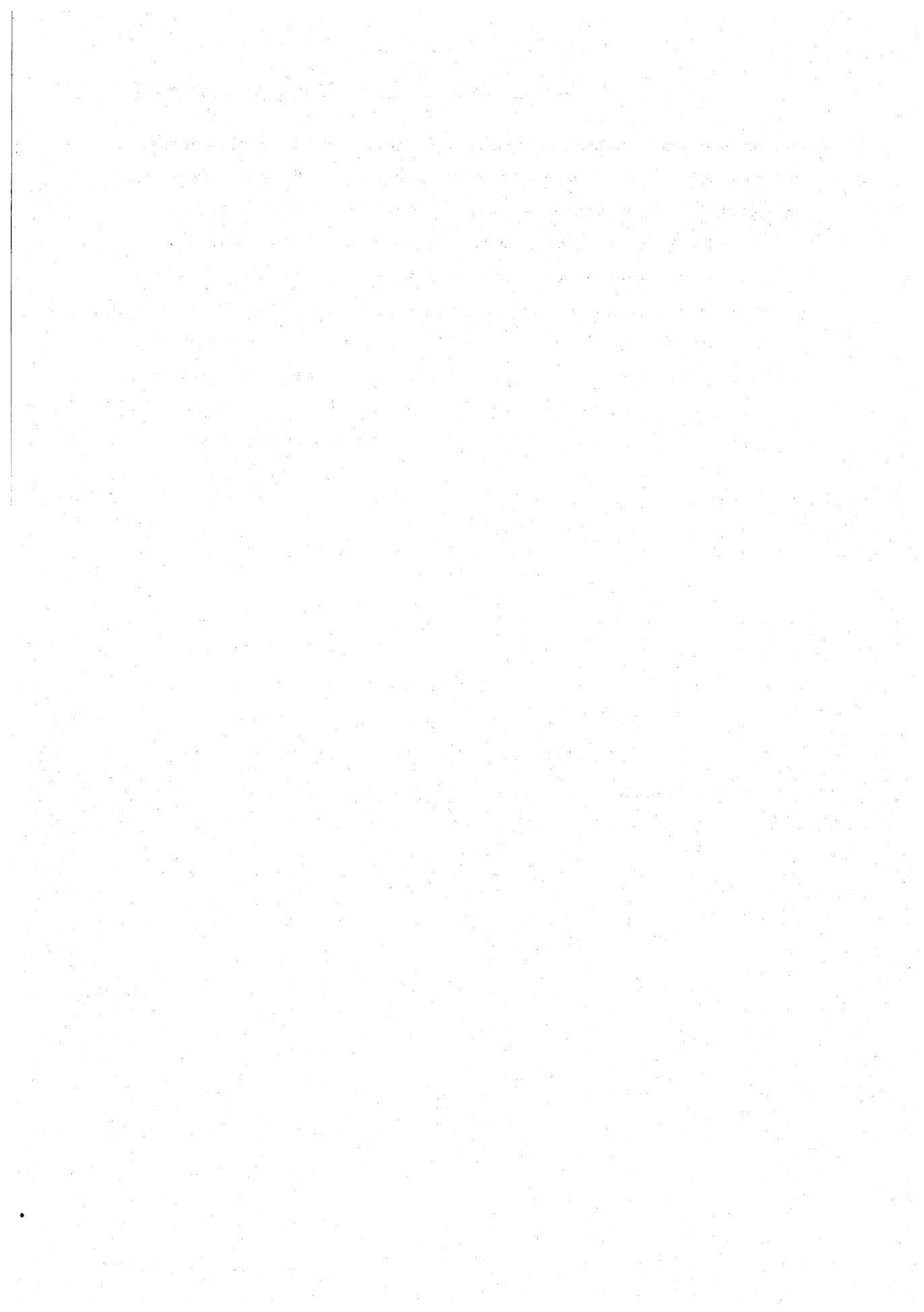
One of the first strong movements seeking the enactment of such "a cigarette prohibition" got up steam late in the 19th century with the Anti-Cigarette League of America as its prime mover. Its leader, Lucy Gaston, whom Sinclair Lewis depicts as "the anti-nicotine lady from Chicago" in his novel, *Arrowsmith*, and her friends put pressure upon local and state politicians. At first they tried successfully to ban the sale of tobacco products to minors. Then, with tremendous support from many anti-liquor activists, they succeeded in enacting cigarette prohibition laws, mostly in the Midwestern states.

The purpose of this paper is to answer the following questions: why did cigarettes become the only target, who were the leaders trying to eliminate cigarettes, and how did they attempt to do so during the time when medical arguments were not as scientific or persuasive as today? In addition, I take up several states such as Washington, Illinois, Tennessee, Utah, and Kansas, where so-called cigarette prohibition laws were enacted even for a short period of time. Generally speaking, these laws, however, were poorly enforced. The reasons for this result are also to be discussed in this paper.

As mentioned, these laws specifically prohibited the sale, and in some states, the manufacture and advertising of cigarettes; but they usually did not refer to other types of tobacco products, such as plug, snuff, pipe tobacco, and cigar. Cigarettes, a relatively new type of smoking in the United States, emerged as a commercial product shortly after the Civil War, and gradually became popular among minors, women, and immigrant workers. Cigarettes were easy to handle and mild in taste compared to other types of tobacco. They were also cheap,

especially after a tax reduction was introduced and a cigarette rolling machine was invented early in the 1880s. On the contrary, most male adults, while traditionally smoking cigars or pipe tobacco, looked down upon cigarettes as "an effeminate tobacco."

According to the anti-cigarette advocates, minors' and women's smoking was not acceptable, because almost all adolescents who committed various crimes smoked cigarettes, and because smoking might undermine female moral virtues as "a Republican mother" to bring up her children properly. Also workers' usage of cigarettes was not permissible because smoking at workplaces might decrease productivity, and usually would induce them to drink much, it was thought. The discourse which the early anti-cigarette movement adopted, therefore, tended to focus on social disorder and moral deterioration caused by such people's smoking.



在米日本人移民社会における高等教育推奨の動き

——南カリフォルニア地域を中心に——

松 盛 美紀子

1. はじめに

1924年に成立した移民法は恒久的に移民の数量を制限し、さらに付帯条項としてつけられた「帰化不能外国人入国禁止事項」によって日本人の移民は全面的廃止に追い込まれた¹。この「排日」移民法の成立は、日米間に深刻な問題を引き起こしただけでなく、在米日本人移民コミュニティにも少なからぬ影響を及ぼした。これを契機として、在米の日本人移民たちは「二世教育」のあり方を見直すことを余儀なくされた。

「二世教育」に関する研究は、日本語教育機関であった日本語学校の役割やそこで使用された教科書（日本語読本）の編纂に関するものが多く見受けられた。そのため多くの研究は、1900年代から1920年代初頭に焦点をあて、一世の視点に立った議論を進めた。そして、一世による二世教育の対応や思想の変化が指摘された²。また近年では、「越境」という視点から、1930年代に盛んであった二世の日本留学や祖国（日本）見学団の実態が明らかにされてきた。30年代の日米関係との関連性から「二世教育」を分析したり、あるいは二世に対する教育活動として日本留学や祖国見学に注目するなど、「越境」という視点から「二世教育」を分析する動きも見られる³。1920年代に入るとアメリカ西海岸各地では、一部の二世が大学へ進学するようになり、さらには医学や法学方面で活躍する二世も出現し始めた。高等教育を受けた二世に関する研究は、第二次世界大戦中の強制収容期に日系二世が東部の諸大学へ転入学したことをテーマに扱った研究がある⁴。これらの研究によると、1940年代初頭には日系二世全体の約5パーセントが大学に在籍し、日系二世全体の約6パーセントが大学進学を控えていたことが明らかにされた。しかしながら、二世の大学進学傾向が強まるプロセスなどについては十分に考察されていない。

本稿では、こうした研究上の不備を補うべく第二次世界大戦以前の二世の大学進学に焦点を当て「二世教育」の変容過程を解明したい。具体的には、当時顕著に見られた在米日本人移民社会による高等教育の奨励がどのような背景で起こり、それが日本人移民のコミュニティにいかなる意味を持ったのかについて検討する。依拠する資料に言及しておくなれば、本論考では二世教育をめぐる一世の動向を知る上で、南カリフォルニア地域に居住する日本人移民の間で最も多く購読されていた日本語新聞『羅府新報』⁵を主に用いる。『羅府新報』は南カリフォル

ニア地域で最古にして最大の日本語新聞で、1925年には7000部、1935年には9000部の発行部数であったことから、当時の南カリフォルニアの日本人移民社会に大きな影響を与えていたと考えてよい。1920年代の『羅府新報』は政治、経済、文化など幅広いジャンルの記事を掲載し、充実した紙面を提供しており、論説記事や寄稿文からは、日本人移民社会における指導者層の思想や動きを読み取ることができる。

2. 在米日本人移民社会の形成

在米日本人移民社会の形成は、出稼ぎ移民労働者の渡米に由来する。1868年に153人の日本人がハワイへ渡って以来、多くの日本人が新たな労働機会や近代的な知性を求めてアメリカへ渡った。こうした移民労働者や私費留学生は、妻子を伴わない一時滞在者だった。その後、次第にアメリカ本土への日本人の移住が進むと、日本政府は1870年にワシントンに初めて公使館を設けた。そして1872年にはニューヨークに、1873年には西海岸のサンフランシスコにも領事館が開設された。1873年のサンフランシスコ領事館開設当時の調査記録によると、カリフォルニア州の日本人居住者は男性68名、女性8名、子供4名であった。初期の在米日本人は、その多くがサンフランシスコに居住し、水夫や亡命者以外は白人家庭での住み込み労働で一ヶ月10ドルの収入を得ながら勉学に励む「出稼ぎ書生」であった⁶。

ロサンゼルスを中心とする南カリフォルニア地域にも、日本人移民の姿は見られたが、その数はサンフランシスコに比べるとわずかなものであった。1900年の国勢調査によると、サンフランシスコ在住の日本人移民は1781人であったのに対して、ロサンゼルス在住の日本人移民は150人であった。ところが、1906年のサンフランシスコ大地震をきっかけに、ロサンゼルスの日本人移民の人口は急激に増加した。震災で打撃を受けたサンフランシスコから新たなビジネスチャンスを求めてロサンゼルスへやってきた移住者が多かったことに加え、独身男性が日本から妻を呼び寄せて家族を形成するようになったことが主な要因であった。とりわけ、日本人移民が家族を形成したことで、彼らのアメリカ定住はさらに促進されたと考えられる⁷。1915年にロサンゼルス日本領事館が開設されると、ロサンゼルスはカリフォルニア州においてサンフランシスコと並ぶ日本人移民の一大集結地となり、南カリフォルニア地域最大の日本人移民社会が形成されることになった⁸。

その後、1924年に成立した移民法によって日本人移民のアメリカへの入国は禁止された。「帰化不能外国人入国禁止条項」が付帯されたことで、すでに1922年の最高裁判決によって市民権の取得資格がない「帰化不能者」として確定していた日本人は、移民としてアメリカへ入国することが不可能になった⁹。この「排日」移民法によって、日本に一時帰国した一世はアメリカへの再入国を許されず、日本とアメリカで一家離散という悲劇が発生することも少なく

なかったという¹⁰。そうした事態を避けるために、日本人移民はアメリカ定住を決意するようになった。彼らの間では、アメリカで生き抜くためにすべきことは何なのか、アメリカ生まれの二世をどのように育てるべきなのか、二世の二重国籍の状態をどのように解決すべきなのか、など早急に答えを出さねばならない難題に直面した。特に二世に関する問題は、在米日本人移民社会の中で「第二世問題」として取り上げられ、一世たちの最大の关心事となり、活発に議論が交わされた¹¹。

3. 「二世教育」の変容

3-1. 帰国準備から定住志向へ

前述したように、初期の日本人移民は出稼ぎ労働者や出稼ぎ書生であったことから、日本人移民社会には第二世問題は存在しなかった¹²。二世の誕生を受けて、一世たちは子供たちの教育機関として日本語学校の設立に着手し始めた。まず、1902年にシアトルに設立され、続いてサンフランシスコ、サクラメントなどで開設された。これら初期の日本語学校は、二世が帰国した際、日本の小学校に編入できることを念頭に置いたものであり、日本での就学に備えた準備教育という性格が強かった¹³。

1908年になると、カリフォルニアの日本人移民の間で、日本語学校での教育に一つの疑念が持たれた。それは、アメリカの公立学校への進学を控えていたり、あるいは現に進学していたりする二世にとって、日本語学校での教育が果たして役に立つか、というものであった。さらに、二世が日本に関して驚くほど無知であることも大きな問題であった。そこで、日本人移民社会の中核をなす政治組織であった在米日本人会は、1908年にサンフランシスコ地域に居住する二世児童の正確な数を把握するために調査を行った。その結果、学齢期に達した児童の数がかなり多いことが判明した。この事態に対処するため、一世指導者たちは、1909年初めに二世の教育問題を検討するための特別機関を設けた。「木曜会」と名付けられたその特別機関は、二世児童の教育問題について議論を重ね、1910年1月に、増加しつつあった二世児童に対する新しい日本語学校の教育計画を草案した。木曜会は、「主として米国の国風に同化せしめざる可からざると共に之に加味するに祖国を忘失せざる程度に於ての思想を注入するにあらざるべき」、という二世の教育方針を示した。この計画により、幼稚園部は二世がアメリカの公立学校に入学するための準備教育として位置づけられ、白人のアメリカ人教師から英語を学べる機会が提供された。小学部は、すでにアメリカの公立学校に通っている学齢期の児童に、修身、日本史、日本地理、国語などを補習科目として教えることにした。こうした木曜会の教育計画に基づいて、1911年サンフランシスコに金門学園が創設され、同年ロサンゼルスにおいても羅府第一学園が創設された¹⁴。その後も次々と開校した日本語学校では、「この地に永住し、将

来この地に活動せんとするものに対してであって、決して日本に帰るものに対してではない」という強い決意の下で二世教育が行われた¹⁵。

3-2. 二世教育の米化：「米主日従」教育へ

1917年にアメリカが第一次世界大戦に参戦して以降、合衆国への揺るぎない愛国心や忠誠心が最も重要とされる「百パーセント・アメリカニズム」をスローガンとするアメリカ化運動が、主として連邦政府や州政府によって展開された¹⁶。さらに外国人土地法（1920年）や外国語学校取締法（1921年）が成立したことで、在米日本人を取り巻く環境は厳しさを増していった。激化する排日運動やアメリカ社会の当時の動向を敏感に感じ取った日本人移民社会では、コミュニティ内の社会統制を図るため、各地の日本人会による日本人移民の監視体制が強化された。また、一世のリーダーたちは日本人移民自らが自分たちの優秀性を強調しながらも主流派への同化を推し進めていく、いわゆる「米化運動」を積極的に展開させた。この米化運動は、日本人移民が集団としてアメリカへの忠誠を証明しようする試みであった¹⁷。

こうした試みは、「二世教育」にも反映された。サンフランシスコを中心に北カリフォルニア地域の日本人移民社会に影響力を持っていた在米日本人会は、1912年4月に各地の日本語学校による情報や意見の交換を目的とする在米日本人教育者大会を開催した¹⁸。同様の動きはロサンゼルスを中心とする南カリフォルニア地域でもみられた。1915年に日本語学校の教育者によって南加日本人教育会¹⁹が創設され、二世教育に関して議論する場が設けられた。さらに、南カリフォルニア地域の日本人会を統括していた南加中央日本人会では、1917年2月の第一回定期理事会で教育部の設置が決議された。そして、同年4月に南カリフォルニア地域の代表が集まって、第一回教育大会が開催された。さらに6月に南加日本人教育会と南加中央日本人会の教育部が合併すると、南カリフォルニア地域の教育審議機関は南加中央日本人会の教育部に一本化され、二世教育についての本格的な議論が開始された²⁰。教育部では、日本語学校の名称を「日本語学園」と改めることを決定したり、あるいは米化運動に鑑みた日本語学園の方針を審議した。1918年6月8日に行われた教育者大会では、①日本語学園が使用する従来の日本語教科書の中に米化主義に反する記述があれば、それを米化主義の範疇で解釈すること、②米化主義に合致する新たな教科書を編纂すること、③米化主義の特別委員を設置すること、などが取り決められた²¹。このように日本語学園は、二世の米化教育を担う教育機関としての役割を期待された。

3-3. 「善良なるアメリカ市民」としての二世教育へ

1920年8月に開催された第四回南加教育会で、「学園の本旨は米国市民養成の精神に基づき単に日本語を教授して親子間の精神的融和に資するに止まらず家庭に代りて公立学校と連絡し教育の普及を図り又た社会教育の中心機関たらしむるにあり」と決議された²²。これは、単に

日本語学園の教育方針や役割について示されただけでなく，在米日本人移民社会における「二世教育」が「善良なるアメリカ市民」を育成することであることが明確化された。

二世を「善良なるアメリカ市民」にするための教育の必要性は、排日運動が激しくなるに従って、しだいに強調されるようになった。排日運動家は、日本人移民とその子弟たちのアメリカ社会への同化が遅いことを激しく攻撃した。そして、彼らは二世教育に対しても疑念を抱き、攻撃の矛先を向けるようになった。一世たちは、自分たちが行っている二世教育、すなわち二世に対する日本語教育や二世を日本に帰国させて純然たる日本教育を行おうとすることそのものに原因があると考えた²³。そこで在米日本人移民社会では、子供たちを日本に帰国させる子弟教育に警鐘を鳴らし始めた。『羅府新報』では、「子供を帰すな膝許^{ママ}で育てよ」(1920年10月7日)、「児童の将来 米国で教育を続けよ」(1921年2月3日)、「児童を帰国せしむるな」(1922年4月22日)という見出しで始まる記事が掲載されるようになった。そこで主張は、二世やその子孫の将来がアメリカにある限り、日本で教育を行う必要性は全くないというものであった。さらに、日本で二世の教育に携わる人々が、移民集団の同化に「焦心苦慮」しているアメリカ社会の動向や在米日本人の置かれている立場を何ら理解していない点を指摘した²⁴。とりわけ排日運動の争点が在米日本人とその子弟の同化や二世の教育であることを考えると、二世が次々と帰国することは憂慮すべき事態であった。そのため一世リーダーたちは、「今市民権を有する者^{ママ}例へ一人たりとも此米国から去らしむるのは同胞の発展を切崩す様なもの」であるとの強い懸念を示したのであった²⁵。

1921年に外国语学校取締法が可決されると、「我が民族の発展」や「我が民族隆衰消長」を念頭に置くならば、二世を善良で優秀な「日系の米国市民」として育成する必要がある、との論調は高まりを見せた²⁶。そして、絶えず二世教育について言及し続けていた羅府新報社が、「社会奉仕」と称してアメリカの歴史、憲法、建国の精神などを記した全6巻の書籍を新聞購読者の子弟に贈呈することを決めるなど、二世の市民教育に日本人移民社会全体で取り組んだ²⁷。こうした試みによって、二世は「我が子にして我子にあらず。北米大陸に於ける我が民族発展の先駆者」²⁸としての役割を次第に与えられていった。

4. 高等教育の推奨

4-1. 「善良なるアメリカ市民」としての高等教育

1920年代の在米日本人移民社会では、米化運動と連動していた「二世教育」、すなわち二世を「善良なるアメリカ市民」にするための教育が新たな展開を見せた。日本人移民自らが、「善良なるアメリカ市民」を育成する要件に、「高等教育」を付加するようになったのである。

南加中央日本人会が日本語学校の教育方針について議論を重ねる中で、定例委員会では「日

本人学生の高等教育奨励の件」という議題が提出され、度々審議されるようになった²⁹。そこでは、もし二世が白人主流派と同等、あるいはそれ以上に高度な教育を身につければ、日本人移民が排斥されることはないのではないか、という立場が示された³⁰。さらに、教育の有無によって人物が評価され、教育によって初めて才能は開花し發揮されるのだから、両親だけでなく在米日本人移民社会も子弟教育に無関心であってはならないとの考えも示されるようになつた³¹。このような論調を受けて、在米日本人知識人の一人であった南カリフォルニア大学教授の乾精末は、高等教育を奨励する演説を行い、両親たちに向かって高等教育と社会上昇の関係性を熱心に語りかけた。演説の中で彼は「新運命」や「開拓」という力強い言葉を使うことで、今こそ一世は二世のために奮起しなくてはならない、と訴えた³²。

1923年に入ると、『羅府新報』では高等教育の必要性に関する論説記事がしばしば掲載されるようになり、その語調は強さを増していった。1923年3月16日の論説「日系学生 高等教育を授けよ」では、公立学校に通学している二世の成績は語学（英語）において若干劣るもの、おしなべて成績が良好である点を称えた。そして、一世たちに向かって、何事を差し置いてでも二世に十分な教育を与え、借金をしてでも二世に高等教育の機会を与えるべきではないか、と訴えかけた。1924年1月1日には、「現代に忍んで次代を待つのみ 次代同胞の教養第一」の見出しで始まる記事において、「在留同胞」の発展は二世の時代が来るまで耐え忍んで待つこととし、来るべき時に備えて、今は二世を立派なアメリカ市民として教育することに奮闘するべきである、との懸賞論文の主張を掲載した。それは、「在留同胞将来の発展策」が次世代の子弟である二世の教育にかかっていると訴えかけるものであった。さらに1924年2月29日の論説「高等教育奨励論」においても、「知識を養ひ、技能を磨き、且つ品性を陶冶し、以て社会有用の在として、民族的生存競争の衝に当たらねばならぬ」と二世の高等教育の必要性を唱えた。そして、「此の白人種最優の觀念を、実力に依て、見事に打破せざる限り、日米間の眞の親善は望まれない」と迫った。

4-2. 奨学金の設立

南加中央日本人会で議論が繰り返され、そして『羅府新報』で度々大きく報道された高等教育推奨の動きは、「市民奨学協会(the Citizen Educational Aid Society)」を創設することで具体化された。

一世の間では、「高等教育を奨励せよ」と演説会で訴えるだけではなく、具体的な行動で奨励を促進することも検討すべきであるとの意見が出されるようになった。そのような中、南加中央日本人会では一世の篤志家から寄付金500ドルの提供を受けたことで、二世の高等教育を奨励するための有効な方法が検討され始めた³³。それにより、1920年8月1日に「在米同胞の将来の栄枯盛衰は懸て現代の同胞の双肩に在りて夫れには次代たる学生をして優秀なる人

に養育するに在り」との目的で、一世リーダーたちによって市民奨学協会が設立された。設立には、当時の在ロサンゼルス日本領事館領事、南加中央日本人会会长、羅府日本人会会长、牧師、開教師、新聞社社長などの有志が発起人となり、先述した篤志家からの寄付金500ドルに加えて、日本人移民社会から広く寄付を募ることで基金の財源を確保しようとした³⁴。基金を創設した当初はコミュニティ内での関心も高く、各方面から寄付金が寄せられて熱気を帯びていた。しかしながら、その後は期待していたほどの寄付金が集まらず活動は下火となっていました。

ところが1924年の移民法成立が目前に迫ると、一世の指導者たちの間では、いよいよ二世の高等教育が必要であるという認識が高まった。停滞していた市民奨学協会の活動は、1924年2月20日の南加中央日本人会連絡幹事会の会議をうけて再始動した。奨学金の制度化が早急に進められて、二種類の奨学金が設けられた。一つは、南加青年同盟³⁵が主催する演説会の懸賞金として大学生および高校生に支給される「直接奨学金」で、もう一つは基金から無利息で貸与される「貸与奨学金」であった。前者には100ドル、後者には250ドルが割り当てられ、後者を「奨学金」あるいは「奨学資金」と呼んだ。この市民奨学協会の基金は、個人的な寄付金を財源としたこれまでの条項に加えて、南加中央日本人会の傘下にある21の日本人会が資金1500ドルを分担することになった³⁶。そして、奨学金の貸与資格や貸与方法などが詳細に規定された。奨学金の貸与資格者は、①南カリフォルニア地域の高校を卒業しているか、あるいはこの地域に2年以上居住していて、大学在学生または大学進学を希望している若者、②成績優秀者、③健康であること、④品行方正であること、の4条件を満たさなければならなかった。奨学金の受給者は、南加中央日本人会連絡幹事会の審議を経て決定し、一人当たり年間250ドルを限度とする奨学金が貸与された。奨学生は大学の成績表を毎学期ごとに連絡幹事会へ提出せねばならず、貸与された奨学金については、大学を退学あるいは卒業後10年以内に無利息で全額返済することが義務付けられた。ただし、奨学生が死亡あるいは返済能力がないと判断された場合に限り返済は免除となった³⁷。

南加中央日本人会では、奨学金貸与の規定を詳細に定めた後、1924年5月に奨学金貸与の希望者を公募した。最終的に7名の申込みがあり、幹事会の審査を経て同年7月18日に大寺千代子、若松兼治、小野譲、岡見茂一の4名を奨学生として決定した³⁸。『羅府新報』では、彼らを「何れも優秀な学生にして前途嘱望」であると称賛した市民奨学協会の選抜委員のコメントが掲載されると共に彼らの略歴も大きく紹介された³⁹。特に、唯一女性で奨学金を貸与された大寺千代子は、「米国で育った娘としては極めて柔軟な性質で、勿論学業も秀で、白百合のような美しい容貌を有し、数ある日系女学生の内にて模範とされゐる」と称賛された⁴⁰。翌年(1925年)には「奨学資金に花が咲く」という見出しで、岡見茂一が学力優秀によりアメリカ

科学界の権威とされるシグマサイ会の会員に推举されたことが大きく報じられた⁴¹。さらに1926年には、南カリフォルニア大学（以下、USCと略記）歯学科を卒業する若松兼治が、成績優秀により大学総長の推薦で3個の金メダルを贈られたとの記事が掲載された⁴²。

4人の若者から始まった市民奨学協会の奨学金制度は、その後も南カリフォルニア地域の指導者たちの財政支援を受けて運営された。ところが、在米日本人移民は市民奨学協会以外の様々な団体から寄付金を求められることが往々にしてあり、さらには経済不況が重なったことで、この協会では寄付が思うように集まらない事態に直面することもあった。そのため、奨学金の貸与を中断せざるを得ない時期があったものの、こうした困難な状況を何とか乗り越えながら、1938年まで奨学金の貸与は続けられた⁴³。

4-3. その他の経済的支援

南カリフォルニア地域では、南加中央日本人会によって創設された市民奨学協会以外に日本人移民子弟を経済的に支援する体制が整えられ始めた。南加広島県人会では、1928年の定期総会で同郷の二世を対象とする奨学金制度の設立に向けて動き始めた⁴⁴。個人レベルでは、南加日本病院長の猪瀬伊之助が川角虎松という青年の学費を支援した⁴⁵。その他に、二世大学生が組織した学生クラブによる奨学金基金も存在した。例えば、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（以下、UCLAと略記）の日系二世の女子学生クラブChi Alpha Deltaでは、チャリティーを目的としたダンスパーティーやティーパーティーを開催し、そこでの収益を奨学金とした。彼女たちはUCLAに通う後輩の二世女子学生に、この奨学金を支給した⁴⁶。

大学からの奨学金に関しては、ロサンゼルス出身で、のちに二世で初めてロサンゼルス市の判事となった相磯ジョンが、大学総長の推薦で奨学金を得ることができた。彼はハリウッド高校で優秀な成績を修めて東部のブラウン大学に進学し、さらに学生寮にも入ることができた⁴⁷。しかしながら筆者が調べた限りにおいて、1920年代と1930年代に南カリフォルニア地域の大学（USCとUCLA）に在籍した二世が大学当局から奨学金を支給されたというケースは確認できていない。したがって、相磯ジョンのような日系学生は非常にまれであったと考えられる。大学へ進学した二世のうち、父親の職業が医師や実業家である以外は、授業料やその他の費用を私費で負担せねばならず、そのためスクールボーイやスクールガールとして白人家庭で家事手伝いをしながら大学へ通うというのが一般的であったようだ⁴⁸。

さらに、地方から都市部の大学へ進学した二世大学生を大いに悩ませたのは住宅であった。彼らにとって、住居費は経済的な負担が大きく、さらにどこに住むかということも切実な問題であった。1920年代から1930年代にかけて大学キャンパス内、あるいはその周辺に学生寮が整備されていくのだが、それは主として白人学生のための学生寮であった。二世は人種的偏見から大学の学生寮を利用することはできなかった。そこで、二世大学生によって組織された学生

クラブは、会員の為の寄宿舎を兼ねた自分たちの会館を設立しようと動き出した。例えばUSCの日本人学生会、UCLAの男子学生クラブ The Japanese Bruin Club、UCLAの女子学生クラブ Chi Alpha Deltaは、『羅府新報』の紙面に会館購入のための資金援助を求める記事を掲載した。さらに、南カリフォルニア各地の日本人会を訪問したり、ダンスパーティーやチャリティーパーティーを開催して、資金援助を呼びかけた。その結果、USCの学生クラブは南加中央日本人会の一世指導者たちから経済的支援を得て、大学キャンパス周辺に会館を設けることができた。さらにUCLAの女子学生クラブChi Alpha Deltaも、一世を招待したパーティーの収益などをもとに、寄宿舎兼会館となる住宅を借り受けることができた。彼女たちの場合は、白人老夫婦から一軒家を借り受け、夫妻が寮夫・寮母となって学生の監督に当たった。そして寄宿生である二世は一ヶ月27ドル50セントから35ドルの家賃を支払うだけでよかった⁴⁹。このように住居を提供する会館や寄宿舎は、決して裕福とは言えない多くの二世大学生にとって、大学、日本人会、県人会、個人からの奨学金と同様に学業を続ける上で重要な経済的支援であった。

4-4. 二世の大学進学

二世教育に対する経済的支援が確立していく中で、二世の大学進学の実態はどうであったのか。UCLAとUSCの事例から検討する。

UCLAの学生新聞*Daily Bruin*によると、キャンパス内に日系アメリカ人の姿が見られるようになったのは1922年頃だという⁵⁰。また、筆者の調査によると1926年のYearbooksにおいて、のちに「招聘研学講師」⁵¹として同志社大学で英語講師を務める後藤順子の名前を見つけることができた。以上のことから、二世のUCLAへの進学は1920年代初頭から始まっていたと考えられる。それ以降については、UCLAの大学統計資料で1930年から1940年までの二世の在籍者数を把握することができる。それによると1930年には56名、1936年には144名の二世がUCLAに在籍していた。そして1940年には248名の二世が在籍しており、太平洋戦争の開戦によって日系人が強制移住させられるまで、その数は毎年増加し続けていた。男女比で見てみると、1930年は男子学生が27名で女子学生が22名在籍していた。この時点では、男子学生数が若干ではあるが女子学生数を上回るもの、UCLAに在籍する日系人学生は男女ともほぼ同数であった。しかしながら1936年になると男子学生は94名、女子学生は42名となり、その差は拡大していった。この2倍近い男女差は1940年まで続いた。このように男女差が生まれる要因として挙げられるのは、在米日本人移民社会では女子教育よりも男子教育が優先されていたことが大きく影響していたと考えられる。しかしながら、毎年数十名の日系女子学生が在籍していた事実は、日本人移民社会において既に女性の高学歴化がはじまっていたことを示唆している。また、二世のUCLA在籍者数は在籍者総数の割合から見ると非常に低いものの、マイノリティ集団全体の中では黒人を抜いて最も多かった⁵²。

次に、USCのYearbooksによると、1900年の歯学部4年生に「高木 (TAKAGI, S. N.と記載)」という人物の名前を確認することができる。それ以降も、法学部や教養学部に数多くの日本人が在籍していた。彼らは、現在の東京大学、京都大学、大阪大学、早稲田大学などを卒業して、USCへ留学するケースがほとんどであった。1922年のYearbooksでは、二世の音楽家として知られる須々木ジュリアが一年生として在籍していた。このことから、UCLAと同様にUSCでも1920年代初頭から二世の進学がはじまったと考えられる。1922年には、日本人留学生ならびに二世が49名いたが、当時は二世よりも日本人留学生のほうが多い傾向にあった。さらにUSCの場合、男女比をみると圧倒的に男子学生が多い。その理由として私立大学であるUSCは州立大学のUCLAとは違って学費が高額であったため、女子学生が、女子教育に消極的な両親の理解を得ることは余程のことではない限り困難であったと考えられる。さらに、当時のUCLAが教育、経済、政治などの学科を充実させる一方で、USCは神学、法律、薬学、歯学、音楽などの専門課程や大学院課程が充実していたことも女子の進学者数が少ない要因として考えられる⁵³。

UCLAにおいても、USCにおいても、キャンパス内で少数派だった二世（および日本人留学生）は、精神的にお互いを支え合い、そして充実した学生生活を送る場として学生クラブを創設した。USCでは、1908年に日本人留学生によって南加大学日本人学生会 (The Japanese Student Club) が創設された。この団体は、その後、主要なメンバーが日本人留学生から次第に二世へと移行したことからThe Japanese Trojan Clubと名称を変更した⁵⁴。UCLAでは、1926年に二世の男子学生クラブ The Japanese Bruin Clubが、そして1928年に二世の女子学生クラブ Chi Alpha Deltaがそれぞれ創設された。これらの学生クラブによる活動は、スポーツ、ダンスパーティー、ピクニックといった娯楽から、日米関係について各クラブが意見をぶつけあうディベート大会まで多岐にわたっていた。こうした活動を通して、二世大学生はクラブ会員同士のコミュニケーションを図るだけでなく、他の二世団体とのネットワークも形成していく。そして、高等教育を受けた二世たちが、政治的にも文化的にも二世の若年層を牽引するようになり、日本人移民社会の中で次第に大きな存在となっていった。

5. まとめ

在米日本人移民社会では1900年代初頭から「二世教育」に関する議論が繰り返し行われてきた。アメリカ社会の動きや在米日本人移民社会を取り巻く環境の変化と共に、二世に対する教育方針も変化を遂げていったわけだが、この変容過程から在米日本人移民の思潮を読み取ることができる。

「出稼ぎ志向」が強かった1900年代初頭の教育方針は、子供たちの「帰国」に備えた準備教育としての側面が強かった。ところが1910年以降になると、日本人移民は次第に「永住志向」

へと傾倒していき、二世に対する教育方針は、将来アメリカに永住して活動できる人物を育成すること、アメリカ社会に適応できる人物を育成することであった。それは、アメリカ国内が移民に対して同化を強く求めたアメリカ化運動と連動したものであり、在米日本人移民社会が二世を「善良なるアメリカ市民」に教育するという方針へと大きく舵を切った瞬間であった。

その後1920年になると、「善良なるアメリカ市民」を育成する教育方針の中に、「高等教育」という項目が付加されるようになった。『羅府新報』では二世の高等教育の必要性を訴える記事が掲載され、一世リーダーは高等教育を奨励する演説会を行った。こうした一連の高等教育推奨の動きは、市民奨学協会の設立（1920年）と奨学金制度の確立（1924年）によって、さらに強化された。また、1924年の移民法成立の前後になると、二世が高等教育を受けることでの「善良なるアメリカ市民」としての要件を満たし、それでこそ「大和民族」が発展するのだという、一種の方程式が一世によって生み出された。そして、この時期から『羅府新報』の論説や南加中央日本人会の議事録には、「日本民族」や「大和民族」という語で二世を表現するようになつた。そこでは、祖国（日本）教育によって二世の「民族的自覚を促し」、「民族的自尊心」や「民族的自負心」を育てる、という一世の考え方方が示された。この時期の在米日本人移民社会では、「二世教育」に振り戻しが起こっていたと考えられる。一世たちは1910年代初頭にアメリカ永住を決意して以来、日本語学校で使用する教科書（日本語読本）に記された「日本的なもの」を「アメリカ的なもの」へと変更し、子供たちを日本に帰国させて日本の教育をしようとする対して厳しく非難した。こうした態度は、在米日本人移民社会が「日本」を強く印象づけるような教育から一定の距離を置くことを表明するものであった。ところが1924年以降、二世教育に対する一世の態度は、「日本人性」を前面に押し出すものへと変化したのであった。これは、「二世教育」を考える上で1924年に成立した移民法が大きな転換点であったことを意味する。

1924年の移民法が成立する20年ほど前から西部では排日運動がくすぶっており、それは日露戦争の勝利で急速に存在感が増した日本への脅威からくるものであった。1906年10月11日のサンフランシスコ学童隔離令の採択、1907年11月から翌年3月にかけての日米紳士協約の合意、1913年の外国人土地法などは、どれも日米関係を揺るがす重大な事案であった⁵⁰。これらの法案は、様々な理由を付与することで移民に何らかの制限を加えるものであり、在米日本人移民やその子弟である二世も例外ではなかった。そして、在米日本人移民社会における「二世教育」の方針にも少なからず影響を与えるものであった。

法案の成立をめぐる議論の中で、新移民のアメリカ社会への同化の遅れが問題になると、日本人移民たちは子供たちの「米化」教育に力を注ぐようになった。それは、移民である自分たちが積極的かつ果敢にアメリカ社会への同化に取り組んでいる姿勢を示すと共に、「同化して

いる」二世の存在を示す必要があったからである。つまり、一世たちは、日本人移民とその子弟が「同化可能な人種」であることを証明しようとした。その後、白人主流派が新移民の劣等性を問題視すると、一世たちは彼らの子供たちが中学校や高校で優秀な成績を修めていることを強調した。そして「優秀学生」「優等生」「名誉」などの言葉で二世を称賛した。これは、現地の公立学校に優秀な二世がいることを示すことで、二世が白人と肩を並べるか、あるいはそれ以上の学力があることを示そうとした。さらにそれは、二世を「善良なるアメリカ市民」にする教育の実践が成功していることを証明するものであった。こうした試みは、在米日本人移民社会の中に留まらず、排日運動家に対しても日本人移民とその子弟の優等性を証明しようとするものであった。このように「二世教育」には、日本人移民の非同化や劣等生を糾弾する排日運動家に対抗するための戦略的な手法としての側面も持ち合っていた。

1924年に移民法が成立するまでに繰り広げられた排日運動家と一世との同化やアメリカ化をめぐる攻防戦は、1920年になって突如として唱えられるようになった二世の高等教育推奨の動きを生み出したと考えられる。確かにこの当時、高校入学や高校卒業を迎える年齢層の二世たちがすぐそこまで控えていたことから、将来の進路選択の一つとして大学を考えるように促す動きが自然に起こったとしても不思議ではない。しかしながら、『羅府新報』や南加中央日本人会の間で起こった二世の高等教育推奨の動きは、1920年から1924年の間に最も盛んに展開されていることから、1924年に成立した移民法の成立に向けた排日運動家による論調と関連づけて捉えるべきである。つまり、一連の高等教育推奨の動きには、在米日本人およびその子弟の人種的優位性を示すため、高等教育を受けた二世の存在を示すことこそが最も効果的であると判断した一世リーダーたちの思惑が見え隠れする。そして1920年に設立された市民奨学協会が、1924年に早急に奨学金制度を確立させた背景には、スクールボーイやスクールガールをしながら苦学している二世大学生を経済的に支援しようとする一世リーダーたちの熱意の表れであった。しかしその一方で、在米日本人移民社会の将来にとって、そして何よりも二世の市民権はく奪の論調を回避するためにも早急に高学歴な二世を輩出して、民族の優位性を証明せねばならない事情もあった。そうしたなかで設立された市民奨学協会の奨学金は、在米日本人のコミュニティ全体で二世の高等教育を支援する姿勢を示し、さらに奨学金を貸与された若者が大学で勉学に励んだ後は「立派な」職業に就くという、ある種の成功物語を提示することを可能とし、二世の若者に大学へ進学することへの希望を与えた。そして、この奨学金制度は、これまで二世の高等教育にさほど関心を示さなかった一世たちの意識を覚醒させ、日本民族の優秀性を象徴する二世大学生を増やす役割も担っていた。これまでの研究では、一世は子弟の教育に熱心であったからこそ、高校や大学へ進学する二世が多かったという見方が一般的であった。しかしながら、一世が奨学金制度を確立してまで二世の高学歴化を促進しようとした背景には、

子弟の教育に熱心であったというだけでなく、その時代性や社会的背景にも目を向けなくてはならない。一連の高等教育推奨の動きは、1924年の移民法成立に向けた排日運動家の活動と、移民法成立後に懸念された二世の市民権はく奪という事柄を見据えた、一世リーダーの巧みな戦略であったと解釈することができる。

その後1930年代に入ると、「二世教育」は再び新たな局面を迎えた。一世たちは二世の日本留学を支援して、「日米親善」や「日米の楔」としての役割を二世に付与した。その一方で、幼少期に日本へ渡って教育を受けた二世に帰国を促す「帰米奨励」の動きも同時に行つた。これは、日本で教育を受けた帰米二世がアメリカの日本民族を発展させる点を強調しながらも、一世の人口減少や高齢化で弱体化する在米日本人移民社会を補強する目的があった⁵⁶。このように、1930年代以降から1942年に日系人が強制移住させられるまでの「二世教育」は日本的なものを肯定的にとらえる色彩を帯び、さらに「二世教育」の議論の中に、アメリカ生まれで日本育ちの帰米二世に関する教育問題が新たに登場することになった。

註

- 1 水谷憲一. 2010. 「日本人移民問題をめぐる米国連邦移民政策と国際関係 1906年～24年」肥後本芳男, 山澄亨, 小野沢透編『アメリカ史のフロンティアⅡ 現代アメリカの政治文化と世界——20世紀初頭から現代まで』昭和堂, p. 29. 飯野正子『もう一つの日米関係史——紛争と協調のなかの日系アメリカ人』有斐閣, p. 57.
- 2 東栄一郎. 2005 a. 「二世の日本留学の光と影——日系アメリカ人の越境教育の理念と矛盾」吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育史』, 日本国書センター, pp. 221-249. イチオカ, ユウジ. 1991. 「『第二世問題』1920年-1941年——二世の将来と教育に関して変換する一世の展望と見解の歴史的考察」同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』, PMC出版, pp. 731-787. イチオカ. 富田虎男・糸井輝子・篠田佐多江訳. 1992. 『一世——黎明期アメリカ移民の物語』, 刀水書房. 賀川真理. 2005. 「日本人と公立学校分離教育」吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育』, 日本国書センター, pp. 61-88. 坂口満宏. 2001b. 『日本人アメリカ移民史』, 不二出版.
- 3 前掲 東2005a. Azuma, Eiichiro. 2005 b. Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese American, New York: Oxford University Press. 前掲 イチオカ2001. イチオカ, ユージ. 1994. 「『見学団』——日系二世による日本研究旅行の起源」上山和雄, 阪田安雄編著『対立と妥協——1930年代の日米通商関係』, 第一法規出版, pp. 281-308. 吉田亮編著. 2005. 『アメリカ日本人移民の越境教育史』, 日本国書出版. 吉田亮. 2008. 「ハワイと同志社——キリスト教越境ネットワークの形成と展開」『同志社・ハワ

- イ・日本——知られざる日米交流』, 同志社大学国際センター, pp. 55-80. 吉田亮編著.
- 2012.『アメリカ日系二世と越境教育』不二出版. マイグレーション研究会編. 2012.『来日留学生の体験』不二出版.
- 4 Okihiro, Gary. 1999. *Storied lives: Japanese American students and World War II*. Seattle : University of Washington Press. Austin, Allan W. *From concentration camp to campus: Japanese American students and World War II*. Urbana : University of Illinois Press. 島田法子. 2005.「第二次世界大戦下の二世教育」吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育史』, 日本国書センター, pp. 277-302.
- 5 『羅府新報』は1903年4月に南カリフォルニア大学(USC)の学生であった山口正治, 渋谷清次郎, 飯島榮太郎による共同発行でスタートした。田中紀雄によると, 創刊時は250部, 翌年には400部, 1925年には7000部, 1935年には9000部と発行部数を確実に増やしていった。伝統的に商業新聞を目指しており, 編集権の独立が保たれた紙面であった(田中紀雄『アメリカの日本語新聞』, pp. 160-161, 197.)。
- 6 南加日系人商業会議所『南加州日本人七十年史』, pp. 4-5.
- 7 1900年の日本人移民社会の既婚女性はわずか410名であったが, 日本人の写真結婚などを受けて, 1910年にその数は5581名となり, 1920年までには22,193名にのぼった(イチオカ『一世』p. 182)。
- 8 米国国勢調査によるロサンゼルスの日本人移民の人口は, 1900年は150人, 1910年は4238人, 1920年は11619人, 1930年は21081人とある(南加日系人商業会議所『南加州日本人七十年史』, p. 19)。
- 9 水谷憲一. 2010.「日本人移民問題をめぐる米国連邦移民政策と国際関係 1906年~24年」肥後本芳男, 山澄亨, 小野沢透編『アメリカ史のフロンティアⅡ 現代アメリカの政治文化と世界——20世紀初頭から現代まで』昭和堂, pp. 45-48. 飯野正子『もう一つの日米関係史——紛争と協調のなかの日系アメリカ人』有斐閣, pp. 57-69.
- 10 森本豊富. 2005.「エスニックコミュニティ母語学校としての日本語学校——カンプトン両学園を例に」吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育史』日本図書, pp. 97-98.
- 11 Yoo 2000, 16, pp. 28-32.
- 12 イチオカ1991, p. 733.
- 13 イチオカ1991, pp. 732-733.
- 14 イチオカ1991, pp. 734-736. 賀川真理. 2005.「日本人と公立学校分離教育」吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育史』日本図書センター, pp. 78-82. 南加日系人商業会議所『南加州日本人七十年史』, pp. 279-281. なお, 日本人移民社会に二世に日本語を教える

機関が設立されたのは、1902年創立の桑港日本語学園と1903年創立のサクラメント桜学園が最古のものであった。南カリフォルニア地域では、1905年4月に羅府仏教会がその付属事業として日本語小学校を設けて授業を始め、1906年9月に羅府日本人ベツレヘム教会に日本語小学校が設けられて開校した。このように宗教組織付属の日本語学園が初期の機関であった。1911年12月2日開校の羅府第一学園は、羅府日本人会によって創設された（南加日系人商業会議所『南加州日本人会七十年史』p.279）。

- 15 イチオカ1991, p. 744. 南加日系人商業会議所編p. 286. 森本豊富は1900年から1940年にかけてカリフォルニア州における日本語学校数の推移を示した。1910年から1914年に24校、1915年から1919年に25校、1920年から1924年に23校、1925年から1929年に98校の日本語学校がカリフォルニア州に存在した（森本 2005, p. 98）。
- 16 フォーナー, エリック, 横山良他訳. 2008.『アメリカ自由の物語——植民地時代から現代まで』, 岩波書店, pp. 38-39.
- 17 廣部泉. 2003.「アメリカニゼーションと『米化運動』——1910年代後半カリフォルニアにおける日本人移民の矯風運動」油井大三郎, 遠藤泰生編著『浸透するアメリカ, 拒まれるアメリカ:世界の中のアメリカニゼーション』, 東京大学出版, p 73. 松本悠子. 2007.『創られるアメリカ国民と「他者」——「アメリカ化」時代のシティズンシップ』, 東京大学出版会, pp. 228-229.
- 18 森本, p. 92.
- 19 1912年にサンフランシスコに在米日本人教育会が創立され、南カリフォルニア地域からも代表者が参加していた。1915年に分離独立して南加日本人教育会が発足した（南加日系人商業会議所『南加州日本人七十年史』p. 286）。
- 20 教育部委員として、遠山則之, 橋井榮太郎, 金子眞成, 島野好平, 田中重平, 田中義一, 寺田菊次郎の7名が推薦された（『米国中央日本人会史』, p. 45）。
- 21 イチオカ, p. 745.『米国中央日本人会史』, pp. 57-60.
- 22 『羅府新報』1920年8月14日.
- 23 『羅府新報』1921年2月26日, 1922年4月22日, 1921年6月2日.
- 24 『羅府新報』1920年10月7日.
- 25 『羅府新報』1921年4月22日.
- 26 『羅府新報』1921年4月23日, 1921年5月22日.
- 27 『羅府新報』1921年8月27日, 8月31日.
- 28 『羅府新報』1921年5月22日.
- 29 南加州日本人商業会議所編, p. 73.

- 30 『羅府新報』1920年2月18日.
- 31 『羅府新報』1920年2月21日.
- 32 『羅府新報』1920年7月11日.
- 33 『羅府新報』1920年2月18日, 2月21日.
- 34 『羅府新報』1920年8月2日, 8月13日, 8月15日, 8月17日. なお, 500ドルを寄付した篤志家の名前は明らかとなっていない。その後, 高橋昇之助から200ドル, 乾精末から100ドル, さらにビジネスでロサンゼルスに来ていた日本の実業家神谷忠雄から200ドルの寄付があった (『羅府新報』1920年8月26日, 9月5日)。また, カレキシコ新谷楠太郎から1000ドル, 平井由太郎から200ドル, 齊藤徳三郎から100ドル, 土屋林平と笠森順造から各50ドル, 山内恵国から20ドルの寄付があった (『羅府新報』1920年9月18日)。
- 35 日本人移民社会では, 各地日本人会に所属する青年会が発足した。1922年1月に, 南カリフォルニア各地の日本人会, 基督教会, 仏教会に所属する青年会の中核組織として, 「南加日本人青年会同盟」が創設された (松盛美紀子. 2012. 「日系アメリカ人組織の変遷と「相互扶助」の意味を問う——1885年~1942年を中心に」マイグレーション研究会編『エスニシティを問い合わせる——理論と変容』関西学院大学, pp. 180-181)。
- 36 ロサンゼルス日本人会は500ドルの分担金で最も高い。続いて, サンペドロ日本人会は170ドル, モネタ日本人会は100ドルの分担金となっている。その他の地域では, 日本人会の規模によって15ドルから65ドルの分担金となっている (Japanese American Research Project collection: 南加中央日本人会, box 229, Department of Special Collections: Young Research Library, UCLA)。
- 37 『羅府新報』1924年6月27日, 7月10日, 9月14日.
- 38 『羅府新報』1924年5月9日, 6月11日, 7月10日, 7月20日, 7月22日, 8月31日, 9月14日.
- 39 『羅府新報』1924年7月22日.
- 40 『羅府新報』1924年10月11日. 大寺千代子は, アメリカ生まれの20歳でロサンゼルス在住で, ロサンゼルス高校と加州商業専門学校を卒業した。そして, 獎学金受給が決まった1924年秋より南カリフォルニア大学に進学し家政学を専攻した (『羅府新報』1924年7月20日)。
- 41 『羅府新報』1925年4月21日.
- 42 『羅府新報』1926年6月8日.
- 43 『羅府新報』1925年8月27日, 1938年5月13日. 『米国中央日本人会史』, p. 250, p. 270.
- 44 『在米広島県人史』1929年; 1994年, p. 95.
- 45 『羅府新報』1930年6月8日.

- 46 1941年1月10日付のChi Alpha Deltaの議事録によると、20ドルが支給された。
- 47 『羅府新報』1926年6月6日、1926年6月26日、1930年2月4日、1930年7月7日。相磯ジョンがロサンゼルス市の判事に任命されたのは1953年である。1957年9月には、ロサンゼルス郡上級裁判所判事に任命された（南加日系人商業会議所編。1960.『南加州日本人七十年史』, p. 621.）。
- 48 UCLAの場合、市民権を持つカリフォルニア州居住者の学費は無料で、それ以外の学生は学費が75ドルだった（Dorothy Swaine Thomas, Charles Kikuchi, and James Sakoda. 1952. *The Salvage: Japanese American Evacuation and Resettlement*, CA: University of California Press, pp. 458-459）。一方USCの場合、居住地域に拘らず学費は120ドルだった。両大学とも、学費以外に設備費等の諸経費も必要だった（USC Yearbook. 1925, pp. 26-29.）。
- 49 『羅府新報』1930年9月3日。
- 50 1929年にUCLAの二世女子学生によって創設された学生クラブChi Alpha Deltaの歴史を紹介する記事の中で言及された（*Daily Bruin*, May 21, 2001）。
- 51 アメリカの大学を卒業した二世を祖国日本に長期間滞在させて、日本の大学講師として招くと共に、日本の学校で勉学させる制度（『羅府新報』1927年1月28日）。
- 52 UCLA日系人学生数（1930年～1940年）

	1930年	1931年	1932年	1933年	1934年	1935年	1936年	1937年	1938年	1939年	1940年
男性	27	39	39	58	55	—	94	107	106	131	164
女性	22	25	28	28	28	—	42	51	53	62	76
性別不明	7	5	3	5	5	—	8	5	8	11	8
計	56	69	70	91	88	—	144	163	167	204	248

UCLA Statistics, Oct. 1930-Aug. 1940のデータをもとに筆者が作成（松盛美紀子. 2011.「戦前日系アメリカ人の大学進学とエスニック学生組織の成立——UCLAのソロリティーChi Alpha Deltaを中心に」『移民研究年報』第17号, p. 87より）。

UCLAエスニック・グループ別学生数（1930年～1940年）

	1930年	1931年	1932年	1933年	1934年	1935年	1936年	1937年	1938年	1939年	1940年
学生総数	6391	6814	7168	6765	6863	7214	7807	8087	8963	—	—
日系人	56	69	70	91	88	—	144	163	167	204	248
中国系	7	4	5	6	4	—	7	9	13	8	5
韓国・朝鮮系	2	3	0	1	1	—	4	2	2	0	2
フィリピン系	15	14	1	8	0	—	2	1	2	4	4
ハワイ先住民	0	0	0	0	0	—	0	0	1	2	2
先住民	0	0	2	0	0	—	0	2	1	0	0
メキシコ系	10	9	7	—	7	—	11	4	8	5	8

*UCLA Statistics, Oct. 1930-Aug. 1940*のデータをもとに筆者が作成。なお、日系、中国系、韓国・朝鮮系、フィリピン系、ハワイ先住民、先住民に関しては、「オリエンタル」あるいは「黒人以外」と表題のついた学籍簿を参照した。メキシコ系に関しては、外国人学籍簿を参照した（松盛美紀子. 2011. 「戦前日系アメリカ人の大学進学とエスニック学生組織の成立——UCLAのソロリティーChi Alpha Deltaを中心に」『移民研究年報』第17号, p. 87より）。

- 53 *University of Southern California Yearbooks, 1880-1942.* (University of Southern California, Special Collection Library所蔵)。
- 54 *University of Southern California Yearbooks, 1880-1942.* (University of Southern California, Special Collection Library所蔵)。在米日本人基督教学生会 (The Japanese Students' Christian Association of North America) の南カリフォルニア支部所属の二世大学生によって発行されたNadeshikoによると、USCの学生が中心となった学生クラブは、南加日本人学生俱乐部以外に羅府学生会（1898年設立）があった。羅府学生会は男子学生のみに限定されており、日本人留学生と二世によって会員が構成されていた。(Nadeshiko, pp. 50-51)
- 55 水谷, pp. 29-39.
- 56 『羅府新報』1930年3月28日, 1938年8月28日.

参考文献

- Austin, Allan W. *From concentration camp to campus: Japanese American students and World War II.* Urbana : University of Illinois Press.
- 東栄一郎. 2005 a. 「二世の日本留学の光と影——日系アメリカ人の越境教育の理念と矛盾」吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育史』, 日本図書センター, pp. 221-249.
- Azuma, Eiichiro. 2005 b. *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese American,* New York: Oxford University Press.

- *Chi Alpha Delta Almunae Administrative Files*, Department of Special Collections-University Archives, Charles E. Young Research Library, UCLA.
- *Chi Alpha Delta Oral Histories and Chi Alpha Delta Research Files*, Department of Special Collections-University Archives, Charles E. Young Research Library, UCLA.
- *Daily Bruin*, May 21, 2001.
- Dorothy Swaine Thomas, Charles Kikuchi, and James Sakoda. 1952. *The Salvage: Japanese American Evacuation and Resettlement*, CA: University of California Press.
- フォーナー, エリック, 横山良他訳. 2008.『アメリカ自由の物語——植民地時代から現代まで』, 岩波書店.
- 廣部泉. 2003. 「アメリカニゼーションと『米化運動』——1910年代後半カリフォルニアにおける日本人移民の矯風運動」油井大三郎, 遠藤泰生編著『浸透するアメリカ, 拒まれるアメリカ:世界の中のアメリカニゼーション』, 東京大学出版, pp. 72-89.
- 飯野正子『もう一つの日米関係史——紛争と協調のなかの日系アメリカ人』有斐閣.
- イチオカ, ユウジ. 1991. 「『第二世問題』1920年-1941年——二世の将来と教育に関して変換する一世の展望と見解の歴史的考察」同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』, PMC出版, pp. 731-787.
- _____. 富田虎男・糸井輝子・篠田佐多江訳. 1992.『一世——黎明期アメリカ移民の物語』, 刀水書房.
- _____. 1994. 「『見学団』——日系二世による日本研究旅行の起源」上山和雄, 阪田安雄編著『対立と妥協: 1930年代の日米通商関係』, 第一法規出版, pp. 281-308.
- 賀川真理. 2005. 「日本人と公立学校分離教育」吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育』, 日本国書センター, pp. 61-88.
- マイグレーション研究会編. 2012.『来日留学生の体験』, 不二出版.
- 松盛美紀子. 2011. 「戦前日系アメリカ人の大学進学とエスニック学生組織の成立——UCLAのソロリティーChi Alpha Deltaを中心に」『移民研究年報』第17号, pp. 83-95.
- _____. 2012. 「日系アメリカ人組織の変遷と「相互扶助」の意味を問う——1885年~1942年を中心に」マイグレーション研究会編『エスニシティを問い合わせなおす——理論と変容』関西学院大学, pp. 165-194.
- 松本悠子. 2007.『創られるアメリカ国民と「他者」——「アメリカ化」時代のシティズンシップ』, 東京大学出版会.
- Matsumoto, Valerie J.. 1999. "Japanese American Women and the Creation of Urban Nisei Culture in the 1930s". In *Over the Edge: Remapping the American West*, edited by Valerie J.

- Matsumoto and Blake Allmendinger. Berkeley: University of California Press, pp. 291-306.
- . 2003. "Japanese American Girls' Clubs in Los Angeles during the 1920s and 1930s". In *Asian / Pacific Islander American Women: A Historical Anthology*, edited by Shirley Hune and Gail M. Nomura. New York: New York University Press, pp. 172-187.
- ・水谷憲一. 2010. 「日本人移民問題をめぐる米国連邦移民政策と国際関係 1906年～24年」肥後本芳男, 山澄亨, 小野沢透編『アメリカ史のフロンティアⅡ 現代アメリカの政治文化と世界——20世紀初頭から現代まで』昭和堂, p. 29-56.
- ・南加中央日本人会編. 1940. 『米国中央日本人会史』.
- ・南加福岡県人会編. 1937. 『在米福岡県人ト事業』
- ・南加熊本県人会編. 1932. 『在米の肥後人』
- ・南加広島県人会編. 1929. 『在米広島県人史』
- ・南加日本人学生会編. 1912. 『南加学窓』第一卷.
- ・—. 1913. 『南加学窓』第二卷.
- ・—. 1919. 『南加学窓』第七卷.
- ・南加日系人商業会議所. 1956. 『南加州日本人史』前編・後編, 南加日系人商業会議所.
- ・—. 1960. 『南加州日本人七十年史』, 南加日系人商業会議所.
- ・『羅府新報』, 1919-1941.
- ・Okihiro, Gary. 1999. *Storied lives: Japanese American students and World War II*. Seattle : University of Washington Press.
- ・坂口満宏. 2001a. 「日本人会ネットワーク——北米日本人会の組織と活動を中心に」, 『史窓』58: 83-95.
- ・—. 2001b. 『日本人アメリカ移民史』, 不二出版.
- ・—. 2003. 「アメリカに渡った日本人移民に関する歴史研究の現在——『日本人アメリカ移民史』補論」, 『史窓』60: 43-62.
- ・島田法子. 2005. 「第二次世界大戦下の二世教育」吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育史』, 日本国書センター, pp.277-302.
- ・Solomon, Barbara Miller. 1985. *In the Company of Educated Women: A History of Women and Higher Education in America*. New Haven: Yale University Press.
- ・Spickard, Paul R. 1996. *Japanese Americans: the Formation of an Ethnic Group*. New York: Twayne Publishers.
- ・The Southern California Japanese College Students. 1929. *Nadeshiko* 1(1).
- ・UCLA Yearbooks, 1926-1943.

- ・ University of California Los Angeles, *Statistics*, Oct. 1930-Aug. 1940.
- ・ University of Southern California *Yearbooks*, 1880-1942.
- ・ Yoo, David K.. 2000. *Growing Up Nisei: Race, Generation, and Culture among Japanese Americans of California, 1924-49*. Urbana: University of Illinois Press.
- ・ 吉田亮編著. 2005. 『アメリカ日本人移民の越境教育史』, 日本図書出版.
- ・ _____. 2008. 「ハワイと同志社——キリスト教越境ネットワークの形成と展開」『同志社・ハワイ・日本——知られざる日米交流』, 同志社大学国際センター, pp. 55-80.
- ・ _____. 2012. 『アメリカ日系二世と越境教育』, 不二出版.

An Encouragement of Higher Education in Southern Californian Japanese American Communities before World War II

MATSUMORI Mikiko

This article focuses on the educational history of the second-generation Japanese Americans (Nisei) from the 1900s to the 1930s. My goal is to investigate the change of the first-generation Japanese American's (Issei) opinions about educating their children and the process of obtaining higher education for Nisei before WWII. Before World War II, Nisei were educated in public schools with their white peers, and some Nisei had the opportunity to get a higher education at universities and colleges. According to *Rafu Shimpō*, an ethnic newspaper, Issei had always felt that a good education was valuable for Nisei. However, their opinion about the emphasis of their children's education has shifted with the times. In the 1900s, it was most important for Nisei to learn Japanese language and Japanese culture in preparation for their returning to Japan. In the 1910s, the U. S. government began the "100 percent" Americanization Movement. This campaign was organized by a federal bureau between 1910 and 1930. It was a movement to try to promote a national policy to integrate immigrants into American society. Therefore, Issei worked together to make changes in curriculums at Japanese language schools to try to give their children a more "Americanized" education. In the 1920s, Issei began to stress the need for their children to receive a higher education. They believed that this would be a passport for them to be acknowledged as Americans. In the 1930s, Issei developed a preference for educating their children in Japan, and it became very popular for

Nisei to study abroad. This was a change in attitude, as Issei had criticized people who tried to educate their children in Japan in the 1910s. Nisei then had two paths to lead them to higher education: either going to college in the United States or studying in Japan. While Issei leaders discussed how to raise their children as American citizens and how to increase the number of higher educated children, they set up their own scholarship fund in Southern California. This scholarship played a significant role in supporting college-bound Nisei mentally and economically. In addition, by organizing the scholarship fund, Issei shared with each other their urgent need to raise their children as American citizens.

奔放な女を家庭的なフラッパーに ——映画『プラスティック・エイジ』における性表象——

大野瀬津子

序論

パーシー・マークス(Percy Marks)の『プラスティック・エイジ』(The Plastic Age, 1924)は、主人公の男子大学生ヒュー(Hugh)が、フラタニティの仲間関係や男同士の友情を通じて経験する心の葛藤を扱った小説である。たとえばグウェンダ・ヤング(Gwenda Young)はヒューが集団主義的考え方から個人主義的考え方へ移行していく過程を、諏訪部浩一はヒューが女性の危険さを学ぶ過程を、本作品に読み取っている(147; 158)。タイトルの「可塑的な」(plastic)という単語にも象徴されるように、この作品はヒューの心の移ろいやすさを劇化した心理小説だった。

『プラスティック・エイジ』は出版当初、学生たちの人気を集め、年間ベストセラーの二位に躍り出たが、親たちには不評であり、教育機関の怒りを買った。¹ 「卑猥な単語」(dirty words)を含む「卑猥な本」(dirty book)だったからであり(Maas 45-46)，ボストンでは発禁の対象にさえなった。²

ところが、この禁書騒動を引き起こした「卑猥な」小説を原作とする映画版『プラスティック・エイジ』は大ヒットとなる(Basinger 434; Desjardins 130)。もっとも、一部には、映画に登場する若い男女の奔放さに不快感を示す向きもあった(Schlater 118)。だが、公開直後の1925年および1926年に刊行された新聞記事では、単なる「ジャズ風のセックス映画」ではない、巷に溢れるフラッパー映画のなかでも「希有な」作品、この年の「本当に重要な映画」の一つ、などと概ね好意的に評価されている。³ この映画を試写会で観たあるコメントーターが、「あらゆる客層」から熱狂的に迎え入れられた、と1925年の新聞記事で報告する通り、映画版『プラスティック・エイジ』は幅広い支持層を獲得したのである(Lipke 17)。

禁書扱いにまでなった作品が、映画版では広く受け入れられたのはなぜか。手掛かりは、この映画を製作したプリファード・ピクチャーズ(Preferred Pictures)のプロデューサー、B. P. シュルバーグ(B. P. Schulberg)の発言にある。『アメリカン・マーキュリー』(American Mercury)誌1925年12月号の記事に引用されたシュルバーグの言葉によると、製作者サイドは、この映画が大学生活の精神活動の物語となるよう、物語を「変性させ」、観客を不快にさせうるいかなる要素や展開も「除去した」という(Mencken 433)。小説版が猥本の誇りを受けてい

たこと、さらに当時「淫らもしくは有害な」事柄を含む本の映画化がウィル・ヘイズ(Will Hays)率いる検閲団体MPPDA(Motion Picture Producers and Distributors of America)に規制されていた事情も考慮すると、シュルバーグのいう不快な要素や展開とは、性的なものを指すことはまず間違いない(Maltby 104)⁴。1925年のある新聞記事は、この映画にヘイズ氏を怒らせる要素はほとんどない、と述べ(Williams 16)、また別の新聞記事も、映画には誰の怒りも招く要素がないと賞賛している(Lipke 17)ように、映画に施された卑猥で淫らな要素の削除こそが、映画成功の鍵となった。

これまで『プラスティック・エイジ』の小説版と映画版は別々の文脈で論じられることが多く、相互に関連付けられることが少なかった。例外的にヤングは、小説と映画のテーマや内容の相違を指摘しているが、両者の受容のされ方の違いについては触れていない(147-51)。本稿は、原作中の淫らな要素を除去された映画版における性の表象のあり方を掘り下げるアダプテーション論の試みである。その際、最大の争点となるのは、卑猥な要素の正体である。小説『プラスティック・エイジ』についての各記事は、この小説が猥本の扱いを受けた事実は明らかにするものの、具体的にどの箇所が問題だったのかは全く語らない。本稿では、1920年代当時のアメリカ社会における性の規制のあり方に照らし、小説『プラスティック・エイジ』における「卑猥」さを推理する。次に、「卑猥」な要素を除去してあらゆる観客を満足させようとする映画の戦略について考察する。これらの手続きを通じ、当時のアメリカ社会と映画『プラスティック・エイジ』とが性規制の戦略を共有していたことを炙り出したい。

I. 性イメージの拡散とその規制

アメリカのヴィクトリア期(1840s-1890s)を席巻していたのは、純潔の理想だった(White 7)。フレデリック・ルイス・アレン(Frederick Lewis Allen)が出版した1920年代文化の総括、『オンリー・イエスタディ——1920年代・アメリカ』(Only Yesterday: An Informal History of the 1920's, 1931)によると、ヴィクトリア期のモラル・コードとは以下のようなものであった。すなわち、良家の子女は結婚相手が現れるまで、キスすら許してはならない。男性の場合、結婚前でも買春は仕方ないが、同じ階級に属する交際相手とは清い関係を維持しなければならない(51)。

さらに、男女交際は、男性が気になる女性の家の使用人にカードを渡して交際を依頼した上で、女性の実家で家族ぐるみで時間を過ごす「訪問」(call)の慣習に従って行われるのが一般的であった。恋人たちが外出する場合には「付き添い人」(Chaperone)がついた(White 6; Zeitz 32)。これら「訪問」や「付き添い人」の慣習によって、社会は男女交際を監視し、婚前交渉を未然に防ごうとしていた。⁵ 裏返せば、ヴィクトリア期のモラル・コードは、セックス

を夫婦間に限定された生殖行為として、家庭制度の内部に囲い込んでいたといえる。

しかし、1920年代に起こった性革命を女性の変化に注目して論じたジョシュア・ザイツ (Joshua Zeitz)によれば、アメリカが「セックス時間」(Sex o'clock)を迎えたと宣言される1913年頃以降、性は家庭の外部に溢れ出し始める(23)。自動車は若者たちが恋人と二人きりで出掛けることを可能にし(34)、町には、ダンス・ホール、映画館など、「デート」に絶好の娯楽施設が建ち並び始めていた。⁶ 重要なのは、そうした場所が男女の性的接触の温床になった点である。たとえばダンス・ホールや遊園地では、カップルたちがハグやキスに勤しんでいた(32)。また男性にとって自動車は、単なる移動手段であるにとどまらず、女性と手を握ったり、ネッキングやペッティングをする隠れ家だった(35)。これらの現象は、異性間の性的接触が単に家庭の外部に出ただけでなく、夫婦という家族の枠組みを越えて、未婚のカップルにも広がったことを物語っている。⁷ 1920年代、異性間の性的接触は、夫婦が寝室で行なう生殖行為という家族制度の枠組みを越えて、未婚のカップルが公共の場でも営む行為へと拡散したのである。

しかしヴィクトリア期に青春時代を過ごした大人たちは、若者文化を受け入れられず、それを法とモラルによって規制しようと試みた。たとえば、路上駐車の車内で行われるペッティング・パーティーが警察の指令で禁止された("Bans Petting Parties," 10)。ダンス・ホールでの踊りの作法も、市町村の法令で事細かに規制された(Zeitz 23)。自動車を「悪魔のワゴン」(Zeitz 23)、ダンスを「地獄への最も安い第一歩」(Giordano xii)などと呼び、それらに不道徳のレッテルを貼る大人たちは、社会に遍在する未婚の男女間の性的接触を抑止しようとしたのである。

一見過剰とも思われる規制の背景には、大人たちの不安があった。1920年代のアメリカでは、ペッティングが「痛切な憂慮」の的となっていたという(White 158)。たしかに、ロイ・E・ディッカーソン(Roy E. Dickerson)が1930年に発表した若者向けのセックス・マニュアル本にも、「ペッティング」の章が立てられている。その章でディッカーソンは、「問題は、健全な交際と不健全な親密さを区別する境界線をどこで引くべきかである」と問題提起し、自ら答えを出そうと試みる(118)。彼は、ヘヴィー・ペッティングが性交への一歩であり、それを「一線を越える」("goes the limit")寸前でやめるのは難しいだろう、との見解を述べる(120)。ペッティングから性交に至る一連の過程のどこまでが「健全な交際」でどこからが「不健全な親密さ」なのか。彼の逡巡を敷衍するなら、ペッティングに対する大人たちの「痛切な憂慮」の内実とは、道徳的行為と非道徳的行為との間に境界線を引けないことへの不安であったといえる。

社会の至るところで異性と戯れる若者たちの道徳意識は、セックスを夫婦間に限定するヴィ

クトリア期のモラル・コードを攪乱する方向性をもっていた。ここで、1920年代の性をめぐる若者と大人の対立を具体的に検証すべく、当時コロラド州デンヴァーの少年家庭裁判所の判事を務めていたベン・E・リンジーによる『最近の若者の反抗』(The Revolt of Modern Youth, 1925)を紐解いてみたい。リンジーが面談した若者たちと大人たち双方の主張を紹介するこの報告書は、若者文化に起った性革命と大人による規制を考察する上で、極めて示唆に富む。同書によると、ある女子高校生は、リンジーに対し、愛し合う未婚の男女が同棲することよりも、愛し合わない夫婦と一緒に生活することの方がより「ふしだら」(immoral)ではないかと疑問を呈したという(26)。彼女の疑問は、夫婦間のセックスを道徳的、未婚の男女間のセックスを不道徳的としてきたヴィクトリア期以来の線引きの仕方に異議を突きつけるものであった。また、ある男性と結婚せず気が変わるまで同棲する「お試し婚」(Trial Marriage)を実行中の19歳の女性は、結婚を前提とせず愛し合う男女は、「社会的に不道徳」だとしても、「生物学的・心理学的に道徳的」である、と主張した(175, 178)。ここには、夫婦間のセックスを道徳的、婚前交渉を不道徳的として区別する旧来の線引きに抗おうとする若者たちの肉声がある。

リンジーの考えでは、道徳基準の攪乱は、結婚制度そのものの揺らぎを意味していた。彼は、一人の男性と性的関係を結び同棲する22歳の女性メアリー(Mary)を例に挙げる(137)。多くの結婚生活が破綻する現実を見てきたメアリーには結婚願望がない。⁸ メアリーは、リンジーから見れば、結婚制度の「変更」を試みているように映る(136)。しかも、未婚の男女による同棲やお試し婚は、例外的な現象ではなく、社会の水面下で広く実践されていた(170)。リンジーは、若者文化全体に、既存の結婚制度からの「旅立ち」(departures)の兆しを読み取るのである(143)。

他方大人たちは、従来の結婚制度の維持に向かう。リンジーは、前述のメアリーが恋人と深い仲になったことを知った親族の反応を書き留めている。それによると、親族は、何かが起きたとしても相手の男はメアリーと結婚しないだろう、と心配する(123)。つまり、親族にとって本当に最悪なのは、セックスそのものではなく、結果として子どもができた場合に二人が結婚しない、という事態だ。現に当時の大人たちは、婚前交渉しても、同じ相手と結婚すれば何とか体面が保たれる、と考えていた(185)。若者たちの婚前交渉に対するこうした大人たちの反応は、当然ながら、セックスや生殖を結婚制度のなかに収めようとする防衛機制に他ならない。

ここまで見てくれれば、大人たちにとって道徳的行為と非道徳的行為を分かつ分水嶺は、婚姻であったことは明らかだ。若者たちが、セックスを夫婦間に限定するヴィクトリア期の道徳基準を踏み越えたこの時代、道徳の揺らぎに不安を覚えていた大人たちは、結婚を最後の砦とし、生殖による社会の再生産の基盤を維持しようとしていた。この規制は、セックスにも結婚にも

直接には関わらない行動にも及ぶ。たとえばリンジーは、男子高校生と二人でドライブしようとした先述の女子高校生を、ドライブ中はとりわけ飲酒した場合、「性的行為」に及ぶ場合がある、とたしなめたという(24)。このエピソードに、自動車が未婚の男女の性行為の場になりうる、というリンジー自身の懸念を読み取るのは容易い。大人たちが若者の行為に「不道徳」のレッテルを貼っていた背景には、道徳／非道徳の境界線が引けないという大人たち自身の不安、そして伝統的な結婚制度の危機が横たわっていたのである。

II. 小説に対する性イメージの規制

1920年代の大人たちは、現実のみならず、フィクションである小説さえも規制の対象とした。当時、書物の検閲をめぐる裁判が立て続けに開かれ、多くの本が発売禁止の憂き目に遭った(Boyer 1)。発禁まで至らずとも、卑猥であると社会的非難を浴びた小説は枚挙に暇がない。

当時卑猥であると問題視された小説には、婚姻関係にない男女間の、あらゆる場所での性的接触が描き込まれている。たとえば、「不健全」との誇りを受け、発禁を求められたりもした『市民と大学』(*Town and Gown*, 1923)では、大学生の男女によるドライブ・デート中のキスや、墓場でのペッティング・パーティーやセックスが描かれる(Montross 102, 158)⁹。社会にセンセーションを巻き起こし、ボストンでは「モラルの純度」(Miller 37)に疑いのある小説として販売書店が検挙されかけた『燃ゆる若者』(*Flaming Youth*, 1923)では、クラブ・ハウスにおけるダンス中の男女の固い抱擁、スポーツ・クラブのプールに裸で飛び込む男女混合グループの馬鹿騒ぎなど、様々な場所での未婚の男女の性的接触に加え、未婚女性と既婚男性という不倫関係の二人に生じるキスやペッティング、結婚を前提としないセックス、さらには別の男女によるお試し婚の挑戦まで描かれる。¹⁰ また、F. スコット・フィッツジエラルド(F. Scott Fitzgerald)の『楽園のこちら側』(*This Side of Paradise*, 1920)は、都市部におけるペッティング・パーティーの流行、相手を次々に変える恋愛ゲームとしてのキス、結婚に発展しない男女の性的関係などを含んでいる。¹¹ 大人たちからふしだらだとみなされたこれらの小説には、共通して、婚姻関係にない男女間の性的行為が盛り込まれているのである。

小説を検閲し、それらを禁書にしたり非難したりした大人たちの心性の淵源は、現実とフィクションの混同にある。前掲書『オンリー・イエスタディ』によれば、アメリカの親たちは、『楽園のこちら側』を読んで初めて、子どもたちに何がどれほど前から起こっているかを「完全に認識した」のだという(52)。大人たちが実社会に対する小説の影響を危惧していたのは当然だろう。

1920年代に猥本のレッテルを貼られた『プラスティック・エイジ』の受容もまた、実社会の取り締まりを小説にも敷衍する時代思潮の影響下にあった。事実、1924年2月3日付けの『ニ

『ニューヨーク・タイムズ・ブック・レビュー』(New York Times Book Review)の記事は、この小説が当世の大学生活を描写する際の「写実性」、あるいは「本物ぶり」を賞賛している("The Plastic Age," 9)。また、作者マーカスによれば、出版当初、この小説は現実の大学生活の醜聞を暴くマックレイキングものとして捉えられたという(Marks, Which Way 10)。当時の読者は、他の小説同様、『プラスティック・エイジ』にも現実の若者文化の反映を見ていたのである。

先述したように、小説『プラスティック・エイジ』は、主人公の男子大学生ヒュー(Hugh)の心の移ろいやすさを劇化した心理小説であって、決して男女関係を主題とした恋愛小説ではない。しかし、現実と同様、フィクション内の男女関係にも目を光らせていた当時の大人たちの観点に立てば、この小説はふしだらな若者文化の鏡像に他ならない。「雑談会」で話題に上る、性行為を経験済みの男子学生の割合の高さ(105)、ヒューの友人カール(Carl)が告白する、森の中での女性との初体験(102)、カールの郊外での買春(119)、ダンス会場を抜けたカップルたちによる、ダイニング・ルームや個室でのペッティング(140, 141)、これらは全て、未婚の男女間のあらゆる場所での性的行為を仄めかす記述であり、当時の大人たちの道徳規準に照らせば、「卑猥」とみなされる要素である。しかし、主人公ヒューが直接関与していないという点では、これらはヒューの内面ドラマを盛り上げる舞台装置に過ぎず、物語の背景に留まっているといえる。

ヒュー本人が関与する性的行為という点では、プロムの夜に恋人シンシア(Cynthia)と性交寸前までいく場面が最もセンセーショナルだったろう。泥酔したヒューは、シンシアに誘われるまま寮に戻り、部屋に入るや否や、彼女の体に腕を回し抱き寄せる(165)。もっともその瞬間、部屋にいた友人に見つかるので、二人がそれ以上事を進めるわけではない。しかし、主人公による婚前交渉の可能性を漂わせるこの場面は、当時の道徳基準に照らせば、「卑猥な」要素に他ならない。

それでも作者マーカスがヒューとシンシアを結婚させていれば、小説『プラスティック・エイジ』が発禁になるほどの非難を浴びることはなかったかもしれない。マーカスが二人の恋愛関係に用意した結末は、結婚ではなく別れであった。プロムの一件以降、距離を置いていた二人は、ヒューの卒業前日に町で再会する。その場でヒューはシンシアに結婚を申し込む(203)。たとえ婚前交渉に淫しても結婚さえすれば許されると考えていた大人たちの最低限のモラルに照らせば、ヒューの振る舞いはかろうじて道徳的である。加えてシンシアとの冷却期間中、一切別の女性と関わらず、禁欲的な生活を通してきた点も考え方わせると、ヒューは、大人たちのモラルの体現者とすらいえよう。ヒューの内面ドラマは、結婚でもって幕を引くかに見える。

しかしシンシアは、ヒューからのプロポーズを断る(204)。彼女は、ふしだらな自分では、

彼を「地獄」にしか連れて行けない、と認識している(204)。シンシアによる求婚の拒絶は、当時の大人たちから見れば、大変な脅威だったに相違ない。なぜならそれは、結婚を基準とする大人のモラルがシンシアには通用しないことを意味するからだ。いわば、大人のモラルの敗北である。さらに特筆すべきは、シンシアの役回りである。彼女は、浜辺での初対面のときから、うぶなヒューに積極的に話しかける(146)。彼と大学で再会した折には自らヒューの腕のなかに飛び込んで顔を上げ、キスを誘う(159, 160)。プロムの夜には、酔っ払いながら、彼に挑発的に迫る(165)。シンシアは、ヒューを誘惑して「卑猥な」行為を引き起こす張本人であり、ヒューは彼女の前で受身に回る。あらゆる異性間接触を結婚制度の中に収めようとする当時の大人たちの道徳基準に照らせば、このように男に従属せず、求婚さえ拒む奔放なシンシアは、性的に卑猥であるばかりか、伝統的な結婚制度そのものを揺るがせかねない危険な存在となる。

翻って、シンシアを馴致できないヒューの無力さも際立つ。世紀転換期以降のアメリカでは、男性はスポーツを通じて一人前になる、という言説が流布していた(Kimmel 137)。ヒューは陸上に打ち込むが、大会で他校のライバルに敗れてしまう(177-78)。ヒューが己の限界に挑んだ姿勢は、教授からは評価される(179)。しかし当時の社会通念を斟酌すれば、スポーツで肉体的強さを証明できなかったヒューは、まだ半人前ということになろう。せっかくモラルを遵守していても、肉体的力強さが伴わなければ、奔放なシンシアを馴致して妻とするには至らない。かくしてヒューの申し出を断ったシンシアは、危険分子のまま社会へと巣立つのである。

もちろん『プラスティック・エイジ』は主人公ヒューの心の揺れを主題とした心理小説であり、シンシアといえどヒューの内面ドラマを演出する一つの要素に過ぎない点は重ねて銘記しておかなければならない。しかし当時の大人たちは、フィクションを現実と混同し、小説で描かれた異性間の性的接触にも現実と同じ道徳基準を適用していた。青年の内面ドラマでは後景化されても、男を翻弄し結婚制度に最後まで収まらないシンシアこそが、最も「卑猥な」要素として、当時の大人たちの目を釘付けにしたのではないだろうか。

III. 矯正のアダプテーション

映画版『プラスティック・エイジ』には、原作からの変更点が主として三つある。第一に挙げられるのは、言葉の削除および改変である。本作はサイレント映画なので、視聴者に提示される科白やト書きは、主として場面と場面の間に挟まれるインターナイトルに記される。映画では、小説で多用されていた性を明示する言葉——kiss, petting, sex——等がどれ一つとして用いられていない。性を含意する場合でも、表現は婉曲的なものに変更されている。たとえば入学前夜にヒューが父親から性教育を受ける場面では、小説の“sex”に代わり、映画では

「彼が知るべきこと」(the things he should know)という表現が採用されている(3:59)。¹² 小説に顕著だった言語面での性的率直さが、映画では婉曲語法によって希釈されているのである。

第二の変更点は、「卑猥な」諸要素がカメラのフレームの外に置かれていることである。ダンス会場を抜けたカップルたちのペッティング・シーンについていえば、小説では、ダイニング・ルームの椅子の上で「固い抱擁」を交わす6組ほどのカップル、個室の「ベッドに横たわる」カップルの姿が、ヒューの目を通して、直接的に描写される(140, 141)。対照的に映画では、並んで座っている男女の足元を横のアングルからクロース・アップする。二人の上半身はカメラの枠外にあるが、組まれた女性の足とせわしなく前後する男性の足の動きは、愛の行為を想像させずにおかない(30:17-30:22)。他方ヒューとシンシアが接触する場面では、暗転の手法が用いられる。夜のキャンパスを散歩中、二人はファースト・キスを交わすが、直後に逃げ出したシンシアをヒューが追いかけ、二人でじゃれている最中に場面が暗転する(27:00-27:37)。アンジェラ・シュラター(Angela Schlater)は、この場面に「さらなる性の試み」の暗示を見て取る(119)。たしかにじゃれあっている最中の暗転は、この後二人の接触がエスカレートする可能性に想像の余地を残す(119)。いずれの場面でも、フレーム内のものしか映らないという映画の特性を生かし、卑猥に映りかねない部分を視野の外に置くという点で共通している。¹³

以上確認してきた映画版『プラスティック・エイジ』の二つの変更点は、原作の性的言語を希釈し、性的接触をフレームの外に置くことで、「卑猥な」諸要素を後景化しているといえる。

しかし、第三点にして最大の変更点は、シンシアの前景化である。原作を一読したプリファード・ピクチャーズのシュルバーグが「クララ・ボウ(Clara Bow)の当たり役だ」といつて即座に映画化を決めたエピソードが物語るように、これはボウ扮するシンシアありきの映画だった(Maas 47)。実際、「映画界で一番イケてるジャズ・ベイビー」と宣伝されたボウの演技は一世を風靡し、彼女の名を一躍世に知らしめる契機となった(Stenn 55)。当時の『ニューヨーク・タイムズ』(New York Times)の記事は、彼女が全身を効果的に使い「小妖精のような肉感性」を放っている、と述べたという(Stenn 55)。たしかに画面の中のボウは、まん丸な目を見開いたり、小さく肩をすくめたり、両手を頭の上にあてて指をヒラヒラさせてみたり、小走りでヒューに駆け寄っていったりと、まるで子どものように天真爛漫である。¹⁴ かと思えば、悩まし気に体を揺らせて踊ったり、ヒューの体に手を這わせたりして、ヒューに迫る。¹⁵ まさにボウの演技は「全身を使った身体性」(full-body physicality)(Desjardins 130)により、可愛らしくも妖しいシンシアの存在感、そして彼女のつかみどころのない奔放さを生んでいるのである。

しかし前二点の変更と異なり、小説で脇役の一人に過ぎなかったシンシアの前景化は、原作

の性的要素をいや増すことになりはしないだろうか。プロット上も、ボウ演じるシンシアは、ヒューに迫る「性の侵略者」(sexual aggressor)として描かれる(Schlater 119; Basinger 434)。たとえばヒューがルーム・メイトのカールから見せられた写真の中で、シンシアは上半身に衣服を纏わず、横向きにではあるがその肉体を晒している(9:12-9:21)。彼女はまた、初対面のヒューとダンスをする際に軽快なステップでヒューをリードし、彼と再会した折は自ら夜の散歩に誘うなど、積極的にアプローチする(15:49-15:59, 24:53)。ダンス・パーティーでは、シンシアはヒューの相手としてダンスに来たにもかかわらず、途中で会場を抜け、カールと二人きりで車にこもる(34:29-34:48)。しかもカールといふところをヒューに見つかった彼女は、「誰であれ、私が行きたい人と行くわ」といってカールの手を振りほどき、ヒューの手を引っ張ってダンス会場へと戻るのだ(34:58-35:43)。加えて、ロードハウスでヒューとカールが喧嘩した後は、二人を車に乗せ、シンシア自らハンドルを握って運転する(47:51-48:07)。当時自動車が若い男女の関係を深めうる場であった事情に鑑みると、運転するシンシアは、ヒューやカールとの関係でも主導権を握っていたことが窺える。一連の言動に象徴されるように、シンシアは性的魅力で男を惑わすだけでなく、自分で男性を選びイニシアチブを取る主体的な女性として描かれるのである。

性的言語や性的接触が原作と比べ大幅に無害化されているこの映画において、男たちを翻弄し主導権を握る奔放なシンシアの存在は、例外的である。アメリカ社会での受容を優先するなら、原作ではヒューの内面ドラマを盛り上げるプロンプターの一つに過ぎなかったシンシアの性的魅力をわざわざ前景化するのは、蹉跎にしかならないように映る。危険なシンシアをあえて前景化することのメリットを考える必要があるだろう。

移り気な女に留まる原作と異なり、映画版のシンシアは変貌する。彼女は、自分がヒューの勉強とスポーツの邪魔をし、彼とカールの仲まで裂いてしまったことに心を痛め、ヒューから身を引く(48:11-51:04)。彼女はヒューが会いたいと電話してきても、自分の気持ちを押し殺し、誘いを断る(51:30-53:05)。さらに、ヒューの大学時代最後のアメフトの試合を観に来たシンシアは、つば広の帽子にコートと手袋で肌を覆い隠すなど、上品な格好をしている(56:21, Young 149)。注目すべきは、そうした彼女のファッショング、同じく観客席で応援するヒューの母親のそれと似通っている点である。ファッショングだけではない。シンシアとヒューの母親の姿を交互に映し出すカメラが捉えるのは、ヒューを見守る母親とシンシアの一挙一動が酷似している様子である(56:05-63:29)。ここに、シンシアがヒューの母親のような慎ましさを身につけたことの暗示を読み取ることが可能だろう。はたして彼女は、最後にタッチダウンを決めてヒーローになったヒューに駆け寄っていくこともせず、無人の観客席に一人座り、涙をためて遠くから彼を見守る(67:24-67:42)¹⁶ 極めつけは卒業式直後の貞淑さだろう。シンシアは

言い寄ってくる他の男には目もくれず、カールの前でもヒューへの思いを露わにするが、自らヒューに会いに行こうともしない。¹⁷ ただヒューが来てくれるのをじっと待つ彼女の姿に、もはや、二人の男の心を弄んだ奔放さも、自ら自動車のハンドルを握ったりヒューの手を引っ張った主体性も見当たらない。「彼女は随分変わったよ——落ち着いた——別人だ」とカールがヒューにいうように、シンシアは、愛する一人の男に主導権を預ける、貞淑な受身の女へと変貌を遂げたのである(71:09)。

物語は、ヒューがシンシアに駆け寄り、抱きしめ合ったその勢いでベンチが倒れるも、起き上がった二人が何度もキスする、というコミカルな場面で幕を下ろす(73:14-73:41)。批評家たちは、このエンディング・シーンに、ヒューとシンシアの結婚という幸せな未来さえ読み解く(Schlater 120; Young 151)。シンシアが、アグレッシヴな誘惑者からヒューの母親のように家庭的で貞淑な受身の女性へと変身するという映画版の結末は、結婚制度の持続さえ約束するようだ。シンシアの変貌ぶりを確認した今なら、映画版におけるシンシアの前景化は、原作の様々な制御不能な要素を彼女の身体へ収斂させ、一挙に飼い慣らす措置だったといえるだろう。ただし、シンシアが家庭的な女になる転機やプロセスは、映画で全く触れられない。この物語展開としては不自然な点にこそ、アダプテーションの力学が働いている。すなわちフラッパー映画のフォーミュラである。

フラッパーとは、1920年代に出現した現実の若い女性たちの代表であるとともに、メディアを通じ社会に氾濫した「キャラクターの類型」でもある(Zeitz 8)。当時ハリウッドでは、この類型をモチーフに、「フラッパー映画」というジャンルを開拓していた。映画に登場するフラッパーたちは、ダンスなどの娯楽、短い髪や動きやすい服装などの両性具有性、ペッティングなどの性的自由の試みを通じ、伝統からの解放を表現しているように描かれたという(Desjardins 121)。ボブ・カットに膝下丈のスカートという出で立ちでダンス・ホールに入り出し、ヒューを積極的に誘うシンシアは、まさしくフラッパーのイメージに合致する。実際、1920年代当時から、ボウはフラッパーの典型として、『プラスティック・エイジ』はフラッパーのための映画として、受け取られていた(Higashi 125-26; Basinger 434)。

重要なのは、新しい女性たちを大人に許容可能なものにすべく映画界が打ち立てた、フラッパー映画のフォーミュラである。この公式では、フラッパーは奔放な生活を送った後、行動を改め結婚する。¹⁸ つまりポイントは、フラッパーの矯正と結婚にある。たとえば『屠殺者』(Manslaughter, 1922)では、パーティーに明け暮れる女性が殺人を犯し入った刑務所の中で「愛と奉仕」に目覚め、出所後は慈善活動に精を出す(77:50, 81:54-82:30)。そして自分を愛する男と再会し、その男がアルコール中毒を克服した後、彼と結婚する(99:22-99:35)。『船出の朝』(The Single Standard, 1929)では、自分を一途に愛する真面目な男性と結婚した女性が、

元恋人と再会し、いったんは家庭を捨てようとするが、結局、元恋人への思慕よりも息子への愛が勝ち、家庭に戻る。これらの映画では、奔放な女性が心を入れ替える転機は、入獄であつたり我が子への愛の勝利であつたりと異なる。しかし彼女たちには共通点がある。夫となるに相応しい大人の男性と共に家庭に収まる点である。

映画『プラスティック・エイジ』で家庭性を獲得するシンシアは、フラッパー映画の公式に準じていたことが分かる。ヒューもまた、夫となるに相応しい男性へと成長する。原作では、スポーツで肉体的強さを獲得できなかった半人前のヒューは、求婚を断っていた。これに対し映画では、アメフトのトレーニングに励んできたヒューが、試合でチームを勝利に導く活躍をする(37:03-37:25)。ヒューは今やスポーツの花形アメフトのヒーローへと成長したのであり、プロポーズを断られないだけの根拠を得たことになるだろう。フラッパー映画で重要なのは、理由は何にせよ、奔放な女が家庭的な女になり、一人前の男性と結婚するという筋書きであった。この筋書きにのっとる以上、シンシアがどのような経緯で家庭的になったかは問題ではない。裏を返せば、この映画のエンディングに批評家たちが結婚の予兆を読み取れるのは、プロセスはどうであれ、当事者の男女がそれぞれ家庭を持つに足る逞しさと包容力を持っているという成熟が描かれているからだろう。この意味で二人の結婚を描くことさえ蛇足なのかもしれない。なぜなら、二人は結婚制度を担うに相応しい次世代の成熟した男女として映画の掉尾を飾るからだ。

フラッパー映画を名乗る『プラスティック・エイジ』は、シンシア更生のプロセスを不問に付す。シンシアの奔放さはフラッパー映画のフォーミュラを前提している限りにおいて、あらかじめ無毒化されている。フォーミュラこそが、矯正具でありモラルである。よって、シンシアを家庭的女性へと矯正したのは、まさしく映画のアダプテーションの力であったといえる。

結論

小説『プラスティック・エイジ』最大の卑猥さは、プロポーズを拒絶するシンシアの奔放さに集約される。アダプテーションはそのシンシアを、フラッパー映画という檻の中に入れ、家庭的な女性へと飼い慣らし、当時の大人たちの批判をかわすことに成功した。大衆の同意をとりつけなければならない映画媒体としては、実に巧妙なアダプテーションであったと結論できるだろう。しかしある程度それは、映画が原作を飼い慣らした、ということではない。映画版は結婚制度の維持を目論む1920年代の大人社会に迎合した、という見方も成り立つからである。他方、シンシアを奔放なまま社会へと送り出す小説『プラスティック・エイジ』は、依然として結婚制度そのものを世に問う可能性を秘めた作品のまま、野に放たれているのだから。

註

- 1 Hackett 137; "Brown University's Reward for Marks," C5; Lipke 17を参照。
- 2 1926年暮れ、ボストンの一角で、二人のドラッグストアの店員が小説『プラスティック・エイジ』を販売した廉で逮捕される(Miller 100)。1927年3月12日付けの新聞記事によれば、当時この小説は、「卑猥で淫らで不潔な言葉を含むか、明らかに若者のモラルを低下させる傾向がある」とされ、ボストンで発禁の対象となっていたという("Gantry May Be Barred," 1)。
- 3 Williams 16; Lipke 17; "Plastic Age Leads Majestic Program" C4; "Plastic Age at Boston Theatre" 8 を参照。
- 4 各スタジオには、映画化する前に原作を提出しMPPDAの判断を仰ぐことも求められていた(Black 33)。小説『プラスティック・エイジ』は、MPPDAによる映画化禁止の対象だった(Williams 16)。
- 5 実際、当時の大半の女性が性体験をせぬまま結婚生活に入ったとされる(White 7)。
- 6 デートの習慣は、1920年代に定着したという。White 14; Zeitz 30-36を参照。
- 7 Zeitz 118; White 148, 149を参照。
- 8 Lindsey 136, 137, 139を参照。
- 9 ある大学の学長は、男女が結婚する気もなく関係をもったことに気分を害し、この小説の発禁処分を望んだという。Treichler 47-48を参照。
- 10 『燃ゆる若者』の受容については、Treichler 47-48; Kennedy 132; Miller 37; "Flaming Youth" 24を参照。また小説中の性的場面についてはFabian 94, 179, 181, 108, 335を参照。
- 11 Allen 52; Fitzgerald 43, 49, 51, 129, 137, 143-44を参照。
- 12 以後、ビデオからの引用は、およその通し時間(分:秒)で示す。
- 13 唯一の例外は、ヒューと恋人のシンシアがキャンパスを散歩しているとき、あちこちでカップルたちが、靴を落としても気付かぬほどの熱中ぶりで抱擁し合っている場面である(25:34-26:47)。当時の評論家のなかには、この場面に体現されるような男女の性道徳の乱れに不快感を示す者もいた(Schlater 118)。
- 14 (11:05), (11:27), (16:55-16:58), (24:09-24:12)を参照。
- 15 (15:23-15:27), (24:27-24:35)を参照。
- 16 ヒューを見守るだけのシンシアのいじらしさに、当時の観客は涙した(Williams 16)。
- 17 (68:51-69:15), (72:20-72:54), (69:58-70:49)を参照。

18 Ross 75; Young 151; Higashi 114を参照。

参考文献

【一次資料】

- Allen, Frederick Lewis. *Only Yesterday: An Informal History of the 1920's.* 1931. Los Angeles: Indo-European, 2011.
- “Bans Petting Parties.” *Los Angeles Times.* 8 Sept. 1925: 10. Los Angeles Times Archives. 26 Sept. 2012 <<http://pqasb.pqarchiver.com/latimes/advancedsearch.html>>.
- “Brown University’s Reward for Marks.” *Hartford Courant* 29 June 1924: C5. Hartford Courant Archives. 2 Aug. 2012 <<http://pqasb.pqarchiver.com/courant/advancedsearch.html>>.
- Dickerson, Roy E. *So Youth May Know: New Viewpoints on Sex and Love.* New York: Association, 1930.
- Fabian, Warner. *Flaming Youth.* New York: Macaulay, 1923.
- Fitzgerald, F. Scott. *This Side of Paradise.* 1920. New York: Dover, 1996.
- “Flaming Youth.” *New York Times Book Review* 28 Jan. 1923. 24.
- “‘Gantry’ May Be Barred By Boston Police.” *Hartford Courant.* 12 Mar. 1927: 1. Hartford Courant Archives. 2 Aug. 2012 <<http://pqasb.pqarchiver.com/courant/advancedsearch.html>>.
- Lindsey, Ben B., and Wainwright Evans. *The Revolt of Modern Youth.* New York: Boni & Liveright, 1925.
- Lipke, Katherine. “*The Plastic Age Breaks Record.*” *Los Angeles Times.* 6 Sept. 1925: 17. Los Angeles Times Archives. 1 Aug. 2012 <<http://pqasb.pqarchiver.com/latimes/advancedsearch.html>>.
- Manslaughter.* Dir. Cecil B. DeMille. Paramount Picture, 1922. Videocassette. Kino on Video, 2002.
- Marks, Percy. *The Plastic Age.* 1924. Charleston: Bibliobazaar, 2007.
- , *Which Way Parnassus?* New York: Harcourt, Brace, 1926.
- Mencken, H. L. *American Mercury Magazine: September to December 1925.* N.p.: Kessinger, 1989.
- Montross, Lynn, and Lois Seyster Montross. *Town and Gown.* New York: George H. Doran, 1923.

大野瀬津子

- The Plastic Age.* Dir. Wesley Ruggles. Prod. B. P. Schulberg. Preferred Pictures, 1925. Videocassette. Kino on Video, 1999.
- “*The Plastic Age.*” *New York Times Book Review* 3 Feb. 1924. 9.
- “‘Plastic Age’ at Boston Theatre.” *Boston Daily Globe*. 12 Jan. 1926: 8. Boston Globe Archive. 2 Aug. 2012 <http://pqasb.pqarchiver.com/boston/advancedsearch.html?camp=cse_static>.
- “‘Plastic Age’ Leads Majestic Program.” *Hartford Courant*. 9 May. 1926: 1. Hartford Courant Archives. 2 Aug. 2012 <<http://pqasb.pqarchiver.com/courant/advancedsearch.html>>.
- The Single Standard.* Dir. John S. Robertson. Metro-Goldwyn-Mayer Distributing Corporation, 1929. Videocassette. MGM Home Video, 1991.
- Williams, Whitney. “‘Classified’ New Medium for Corinne Griffith’s Versatility.” *Los Angeles Times*. 27 Sept. 1925: 16. *Los Angeles Times* Archives. 1 Aug. 2012 <<http://pqasb.pqarchiver.com/latimes/advancedsearch.html>>.

【二次資料】

- Basinger, Jeanine. *Silent Stars*. New York: Knopf, 1999.
- Black, Gregory D. *Hollywood Censored: Morality Codes, Catholics, and the Movies*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- Boyer, Paul S. *Purity in Print: Book Censorship in America from the Gilded Age to the Computer Age*. 2nd ed. Madison: U of Wisconsin P, 2002.
- Desjardins, Mary. “An Appetite for Living: Gloria Swanson, Colleen Moore, and Clara Bow.” *Idols of Modernity: Movie Stars of the 1920s*. Ed. Patrice Petro. New Brunswick: Rutgers UP, 2010. 108-36.
- Fischer, Lucy, ed. *American Cinema of the 1920s: Themes and Variations*. New Brunswick: Rutgers UP, 2009.
- Giordano, Ralph G. *Satan in the Dance Hall: Rev. John Roach Stratton, Social Dancing, and Morality in 1920s New York City*. Lanham: Scarecrow, 2008.
- Hacket, Alice Payne. *Sixty Years of Best Sellers: 1895-1955*. New York: R.R. Bowker, 1956.
- Higashi, Sumiko. *Virgins, Vamps, and Flappers: The American Silent Movie Heroine*. Montreal: Eden Press Women’s Publications, 1978.
- Kennedy III, Samuel V. *Samuel Hopkins Adams and the Business of Writing*. N.p.: Syracuse UP, 1999.

- Kimmel, Michael. *Manhood in America: A Cultural History*. New York: Free Press, 1996.
- Maas, Frederica Sagor. *The Shocking Miss Pilgrim: A Writer in Early Hollywood*. Kentucky: UP of Kentucky, 1999.
- Maltby, Richard. "To Prevent the Prevalent Type of Book: Censorship and Adaptation in Hollywood, 1924-1934." *Movie Censorship and American Culture*. Ed. Francis G. Couvare. Washington: Smithsonian Institution, 1996. 97-128.
- Miller, Neil. *Banned in Boston: The Watch and Ward Society's Crusade against Books, Burlesque, and the Social Evil*. Boston: Beacon P, 2010.
- Ross, Sara. "1922: Movies and the Perilous Future." Fischer 70-94.
- Schlater, Angela. *Flaming Youth: Gender in 1920s Hollywood*. Diss. Loyola U, 2008. Ann Arbor: UMI, 2009.
- Stenn, David. *Clara Bow: Running Wild*. New York: Doubleday, 1988.
- Treichler, Paula A. "Isabel Bevier and Home Economics." *No Boundaries: University of Vignettes*. Ed. Lillian Hoddeson. Urbana: U of Illinois P, 2004.
- White, Kevin. *The First Sexual Revolutions: The Emergence of Male Heterosexuality in Modern America*. New York: New York UP, 1993.
- Young, Gwenda. "1925: Movie and a Year of Change." Fischer 43-64.
- Zeitz, Joshua. *Flapper: A Madcap Story of Sex, Style, Celebrity, and the Women Who Made America Modern*. New York: Three Rivers, 2006.
- 諏訪部浩一. 「『新しい女』という他者 ——『プラスティック・エイジ』と『種』をめぐって」. 『多言語・多文化社会へのまなざし——新しい共生への視点と教育』. 赤司英一郎, 萩野文隆, 松岡榮志編. 白帝社, 2009.

Making a Wild Woman into a Domesticated Flapper: The Representation of Gender / Sexuality in the Movie of *The Plastic Age*

OHNO Setsuko

When published in 1924, Percy Mark's *The Plastic Age* (1924) was condemned as a "dirty" book by adults. The film adaptation that was released the following year, however, became a huge hit and was praised by a general public and reviewers because the film removed

provocative elements from the original work. In this paper, I examine the strategy in adapting the film of *The Plastic Age*, particularly in regard to sexual aspects found in the book.

In the latter half of the nineteenth century, Victorian morality restricted sexual behavior to the bedroom of married couples. In the 1920s, however, the young violated the code by petting in public, having premarital sexual intercourse and so forth. Adults feared that they could not discern what was immoral. The criterion they used to judge the morality of youth was marriage. By labeling any possible sexual behavior without the legitimacy of marriage as immoral, adults not only tried to ease their anxiety but also wished to maintain their own monogamous relationships, which functioned as the sanctuary of sex and reproduction.

Adults in the 1920s often confused fiction with reality, and therefore, judged the morality in this novel by the same criterion as they did in real life: marriage. The novel *The Plastic Age* seems to include many scenes where unmarried couples have sexual relations. As for the protagonist Hugh, he nearly gets involved in a premarital love making with his girlfriend Cynthia. She tempts him into the sexual affair, and what is worse, refuses a marriage proposal he made. Given that adults wished to maintain monogamous relationships, Cynthia can be viewed as the most provocative element in the novel.

There are three main alterations in the movie adaptation. First, the director omitted explicit sexual terms and employed euphemisms. Second, allusions to sexual intimacy, instead of explicit scenes, are used. The third, but the most important change in adaptation, is the foregrounding of Cynthia casted by Clara Bow. In the plot, Cynthia is described as a "sexual aggressor" who takes initiative in her relationships with men. According to the development of the story, the character of Cynthia, however, is molded into a modest and passive woman just like Hugh's mother. The ending scene implies that Cynthia and Hugh, having grown to be a tough man, may get married. It seems strange that the film does not describe the reason for and the process of Cynthia's reform. Yet the formula of flapper films at this time tries to show that an immoral girl reforms herself and becomes domesticated enough to bring up a family. In this way, the adaptation domesticated a wild Cynthia, and by so doing, won fame and, in return, prevented criticism and reproach.

『青い眼がほしい』におけるクローディアの二重意識

渡 部 知 美

はじめに

トニ・モリスン (Toni Morrison) の処女作『青い眼がほしい』 (*The Bluest Eye*, 1970) は、それまでほとんど扱われることのなかった黒人少女に焦点を当てている。青い眼を欲しがる黒人少女の物語として、最初は短篇小説だったものに、同じ年頃の姉妹二人を導入し、一人を語り手でもある「わたし」にし、長篇化されたのである。この物語の冒頭には、1950年代、60年代のアメリカの小学校用の国語の教科書からの一節が置かれ、更にそれを二つのスタイルに崩したもののが置かれている。これは何を意味しているのか。

さて、本作品の内的分裂を抱えた黒人に関して、ウィリアム・エドワード・バーガート・デュボイス (William Edward Burghardt Du Bois) が『黒人のたましい』 (*The Souls of Black Folk*, 1903) において述べているアメリカ黒人の二重意識がしばしば指摘されている。¹ デュボイスは次のように述べている。

アメリカの世界 — それは、黒人にすこしも眞の自我意識をあたえてはくれず、自己をもう一つの世界の事物を通してのみ見ることを許してくれる世界である。この二重に屈折した意識、このたえず自己を他者の目によってみるという感覚、軽蔑と憐びんをたのしみながら眺めているもう一つの世界の巻き尺で自己の魂をはかっている感覚、このような感覚は、じつに異様なものである。かれはいつでも自己の二重性を感じている — アメリカ人であることと黒人であること。(デュボイス 16)

ここで「もう一つの世界」とは白人の世界を意味している。本論においては、青い眼を欲しがるピコーラ・ブリードラヴ (Pecola Breedlove) と読者との「橋渡し役」 ("bridge") (Ruas 97) というモリスンによって与えられたクローディア・マックティア (Claudia MacTeer) の役割に注意を払いながら、クローディアの二重意識を中心に考察する。

1. クローディアのアメリカ白人の美の価値基準への導入

子供のクローディア、大人のクローディア、全知の語り手による語り、そしてピコーラの母ポーリーン (Pauline) による独白、神への手紙を通して響くソープヘッド・チャーチ (Soaphead Church) の声が、ピコーラの悲劇の物語を織り上げている。いくつかの断片が寄り集まって一つの物語を構成しているのである。

アメリカ社会において、黒人少女は、階級、人種、ジェンダー、年齢²において四重の差別を受ける存在である。

ピコーラも、フリーダ(Frieda)とクローディア姉妹も、オハイオ州ロレイン(Lorain)に住む貧しい労働者階級の家の娘である。ただ、ロレインにゲットーではなく、異なる人種の人々が隣り合って暮らしている。マックティア家は古いながらも浴室もある二階建ての家を所有している。一方、ブリードラヴ家は、住民の入れ替わりの激しい地区に住み、灰色のペンキのはげつたる箱のような家、合板で仕切られた居間と寝室しかなく、台所は裏口に、便器は排便の音が聞こえる所にあるという惨めな貸家住まいである。しかし、両家とも製鉄所の火で空が鈍いオレンジ色をしている工場地帯に住んでいる。

他方、エリー湖に向かって歩いて行くと、丈夫で、ペンキも新しく、ポーチの柱がまっすぐに立っている、奥行きのある庭付きの家並になる。更に進むと、通りからひっこんだ所に煉瓦建ての家々のある地区になる。湖に面した家々は、テーブルや椅子があり、坂道を下ると「青いエリー湖」(105)へ、そして、かつて黒人奴隸が憧れたカナダへとつながっている。「この空はいつも青かった」(105)とクローディアは語っているが、彼女もまた、自分の家のことは蔑ろにしても湖沿いの「大きな白い家」(105)に住み込みで働いていたいと思うポーリーンも、その家に汚れた洗濯物を取りに行くピコーラも、家並や空の色の変化に階級的差異を読み取っていると考えられる。黒人が入れない湖岸公園には、芝生や噴水、ピクニック用テーブルがあり、バラが植えられ、「公園は清潔でお行儀のよい白人の子供たちや両親をやさしく待ち受けている。彼らは夏になると、その湖を見下ろす公園で遊び、やがて、喜んで迎えてくれる湖水まで、小走りに、半分よろめくように斜面をくだっていくのだった」(105)とクローディアは語っている。従って、子供のクローディア、フリーダ、ピコーラにとって、澄んだ青さ、明るい白は、物質的豊かさ、幸福を意味するものとして心に刻みつけられていると捉えられる。それは白人の専有物であり、自分達には手の届かないものであることを承知しながらも、憧憬を抱いているのである。また、白さが清潔、行儀の良さと結びつけられ、そういう価値観が彼女達の中に刷り込まれていることも分かる。

種々の人種のいる空間で、肌の黒さはひときわ目立つ。ピコーラに自身の身体を白人の価値基準で見るよう強いたのは、客として入ってきた彼女に向けられた生鮮食料品店の主人ヤコボウスキー(Yacobowski)の視線である。彼の目は彼女を見ようとせず、「眼はたじろぎ、ためらい、宙をさまよう」(48)のであり、そのことにピコーラは気づく。そして、「本来なら好奇心が宿るところに、空白しかないのを見る。それから、それ以上のものを。つまり人間を認めようとしない意識の完全な欠如("The total absence of human recognition")—ガラスをはめこんだように隔絶した感じ」(48)を敏感に感じ取っている。フランス領マルチニック島に生まれた

黒人精神科医フランツ・ファノン(Frantz Fanon)も同様の経験をし、『黒い皮膚・白い仮面』(Peau Noire, Masques Blanc, 1952)においてその意味を鋭く分析している。「自分の身体の上に客観的なまなざしを注」ぎ(ファノン 132), 自分を人間として認めようとしない意識の完全な欠如の原因は、自身の黒い容貌であることをファノンもピコーラも痛いほど感じ取っている。「白人の眼のなかに嫌悪でふちどられた空白を創りだしたもの、その原因となるものは、彼女が黒人だという事実だった」(49)という彼女の思いがそれをうらづけている。彼女が「外側の黒い肌は、不動で、恐ろしいものだった」(49)と思う時、彼女は自ら自己を「黒い皮膚の中に閉じ込め」(ファノン 16), 消えてしまいたい、見えない存在になりたいと願望していると思われる。代金を差し出した自分の手に触るのを白人が躊躇し、触れたがっていないのを察知して、黒さは罪なのかと問わざるを得ないような気持ちなのではないだろうか。他者からの疎外がピコーラの中に自己疎外を生むのだと考えられる。

一方、クローディアに、初めて自己を客観化して眺める視線を持たせるのは、「肌の色が薄い、夢のようにすてきな黒人の女の子」(62)と彼女が語る混血児モーリーン・ピール(Maureen Peal)である。転校生モーリーンは、春の待ち遠しい冬に、まるで春が来たかのよう現れる。裕福さを思わせる服装、春の気配を感じられる眼、耳に心地よい「鈴を振るような彼女の笑い声」(70)が白人の少女達だけでなく、子供達にとって権威ある存在である先生達をも魅了してしまう。子供にとっての時間の流れが自然界の季節の流れとともににあるとしたら、彼女はまさに「季節の破壊者」(62)である。しかし、モーリーンは、家の狭さ、貧しさ、父親のだらしなさを嘲るかのようにピコーラに、あんたはお父さんの裸をみたことがあるわと言う。それはクローディアやフリーダにも思い当たることであり、侮辱されたという思いをピコーラと共有していると捉えられる。クローディアの「今まで恥ずかしいと思っていなかったことを恥ずかしいことだと感じる」("feel the shame brought on by the absence of shame") (71)という言葉は、彼女が初めて自分と自分の家族を客体化して見る目を持ったことを暗示している。モーリーンの「わたしはかわいいわ！ だけど、あんたたちは醜いのよ！ 黒くて醜い黒んぼやーいだ。わたしはかわいいわ！」(73)という言葉は、その重みに三人とも呆然自失となるくらい心に突き刺さっている。我を取り戻したクローディアの思いは彼女達の苦悩を伝える。

わたしたちは、モーリーンが言った最後の言葉にひそむ知恵、正確さ、正当さに圧倒されて、意気沮喪しかけていた。もし彼女がかわいいとすれば一信ずるに足ることがあるとすれば、たしかに彼女はかわいらしい一わたしたちは、かわいくないのだった。それにはどんな意味があったのだろう？ わたしたちは劣っている、ということだ。わたしたちのほうが善良で、頭もよかつたけれど、それでも劣っているのだった。(74)

この時初めてクローディアは「羨望」(74)を、即ち、別人に、モーリーンのようになりたいと

いう感情を抱いたのである。彼女の「恐れなければならないのは、わたしたちではなくて彼女を美しくしているものだった」("The Thing to fear was the Thing that made her beautiful, and not us") (74) という思いは、彼女が世間の美の価値基準を思い知らされていることを明かしている。クローディアは人間としての自分の価値を認める一方で、もう一つの価値基準で自分を評価する目を、この時抱えてしまったのだと考えられる。

2. 「ファンク」になれるクローディア

モリソンは本作品について、「人々に碎けた鏡の視覚的なイメージ、あるいは青い眼に表わされている割れた鏡の回廊が、『青い眼がほしい』の内容であり、形式である」("The visual image of a splintered mirror, or the corridor of split mirrors in blue eyes, is the form as well as the content of *The Bluest Eye*") (Morrison, *Thought* 388) と語っている。ピコーラはヤコボウスキーの視線に傷つき、「説明しがたい恥ずかしさ」(50)を感じる以前は、人との関係が希薄でも、きれいだと思えるタンポポや、位置も形もよく知っている割れ目のある歩道を見ることで、世界との繋がり、所属感を抱くことができた。「こうしたものを所有していれば、彼女は世界の一部になり、世界は彼女の一員になった」(48)という表現がそのことを物語っている。ここに髪でもなく肌でもなく、ピコーラにとって眼の重要性がある。³ しかし、今は、青い眼に映った自身のゆがんだ像が次々に現れ、まるで割れた鏡が両側に連なる廊下の狭い空間に彼女は閉じ込められているかのようである。その鏡が映し出す歪な像が自分だと信じ、自身の本当の姿は見ようとしないのである。白人の美的価値観で判断する他者の視線に傷つくたびに、萎縮し内的世界へ引き籠もってしまうのである。彼女自身も白人の美的価値基準を内面化してしまっているのである。トゥルーディア・ハリス (Trudier Harris) は、「青い眼を持っているということはすべてを、愛、他者による受容、友達、家族を持っているということ、即ち社会において本当にうらやましい境遇にあるということである」(Harris 43)と指摘している。

ポーリーンは赤ん坊のピコーラを醜いと判断するという母親としての過ちを冒してしまった。映画を見ながらポーリーンは、女性の美貌や魅力を白人男性と同じように判断する目、感じ方を持ってしまったのである。南部からロレインへ移住して来た頃、ハイヒールも化粧も似合はず、黒人女性達に仲間にしてもらえなかった。彼女自身、視線による侮蔑に傷ついた経験があるのである。そして、鋸びた釘が突き通って土踏まずのない足となった片足に幼い頃から負い目を感じてきた。だが、それがチョリー (Cholly) にとっては魅力となり彼と結ばれたのであり、その足を「貴重なもの」(116)と感謝したのではないか。傷ついたピコーラの乙女心を一番理解し彼女を精神的に支えられるのは、同じ女として、母としてのポーリーンであるべき筈である。しかし、彼女は、自分をブリードラヴ夫人 (Mrs. Breedlove) と呼ばせ、夫や息子の

サミー (Sammy), ピコーラとの間に冷たく距離を置くだけでなく, 世間から好意的視線を自分に向けてもらうための手段として, 家族を利用さえしているのである。

チョリーは最初の性体験の時, 白人に懷中電灯と銃を向けられて性行為を強要された。白人男性の好奇の眼差しの中で, 自分が動物のレベルまで落ちたような気持ちを抱かざるを得なかつたと思われる。相手の少女ダーリーン (Darlene) をかばえず, 彼等にはむかうこともできず, 男としての屈辱感の経験であった。黒人男性は少年の頃から, 白人男性から比喩的意味で去勢されるような思いを味あわされていると考えられる。チョリーが白人男性に向けるべき憎しみを, 自身の屈辱的場面を目撃したダーリーンに向けたように, 黒人男性の鬱屈した気持ちの刃は, 黒人女性に向けられる。また, ポーリーンがピコーラを自身の評判を高めるための道具としたように, あるいは, 黒人の男の子達がピコーラを取り囲んでいじめたように, 社会的に一番弱い立場にある黒人少女が, 怒りや憎しみという感情の直接的な対象の代用物にされてしまうのである。母親の精神的支えもなく, 負の感情の連鎖がスパイクルとなって, ピコーラを不可視の世界へ押し込んでいく。

一方, 子供のクローディアは自己認識の別の方法を抱え込んでも, 自己肯定をしている。

その頃, わたしたちは虚栄心もなく, 率直に, まだ自分自身を愛していた。自分の皮膚に包まれているのが快く, 感覚が放出してくれる知らせを楽しみ, 自分達の垢を崇拝し, 傷痕を丹精して作り上げていたので, このように値打ちがないということが理解できなかつた。(74)

クローディアは自分の肌の色, そして, 視覚も含めて自分の感覚が伝えるものを肯定し, 自分に道徳的価値を見い出している。体の垢や傷さえ愛おしく思っている。命の火を燃やし続けておくために, 駅の近くで寒い中石炭拾いをする。その際体にこびり付いた垢やできた傷を, 彼女は労働の証として誇りに思っているのである。彼女が入浴を嫌う理由は, 誇りに思っているものが洗い流されてなくなってしまうからである。「あの恐ろしく, 屈辱的な思い。想像を楽しむ余裕もない, あのいらいらする清潔さ」(22)と語る彼女にとって, 清潔であるということは誇りの消失を意味しているのである。

台所から漂ってくる母親の心の籠もった料理の匂いと彼女がよく口にするブルースに包まれて, フリーダ, クローディア姉妹は育ったのである。マックティア夫人は, 心が晴れるまでブルースを歌うことで, 怒りや悲しみに満ちた辛い生を耐え易いものにしていたのだと考えられる。フォーク演奏家ジョージアナ・コルマーの「私は自分がしあわせになるまで, いつも嘆きを歌います」(オスター 184)という言葉は, マックティア夫人にとってのブルースの意義を言い当てる。ハリー・オスター (Harry Oster) は, ブルースの機能は「情緒のカタルシスにある」(オスター 185)と指摘している。マックティア家には, 自身の中にアフリカ人の血

が流れていることを感じさせる環境があったのである。

マックティア夫妻は、父親として、母親としての義務感を持ち厳しいしつけを行いながらも、愛情を持って二人の娘を育てている。マックティア氏は、チョリーとは対照的に、冬にはストーブの熱が部屋に行き渡るように細かく家族に指示をする。その時の父親の恐い位の形相が、寒さから家族を守ろうとする父親の必死さを物語っていたことを、クローディアは成長する過程で理解するに至るのだと考えられる。風邪をひいて熱を出すと、「頭に何かかぶれって、いったい何度言わなくちゃいけないの？ おまえは、この町でいちばんの阿呆よ」(10)と母の言葉の鞭が飛ぶ。そして、軟膏をクローディアが痛みで気が遠くなり金切り声を上げそうになるまでこすりつけマッサージをする。医者に診せる経済的余裕の無さ故の母なりの処置、予防のため油断しないようにさせるための言葉の厳しさである。母の厳しさに「罪悪感と自己憐憫」(10)を感じたこと、胸をこすられた時の痛みと母の手の「大きくて荒れて」(11)いたという感触を大人になってもクローディアは体で覚えているが故に、母の厳しさは自分への「シロップのように濃く黒い愛情」(12)だったと悟っているのである。悪い事をすれば、木の枝、革紐、ヘアブラシ等四季折々の道具で打たれた。しかし、フリーダもクローディアもキャンディーを食べている時の喜びを表現するために、ハミング、タップダンス、スキップ、舌鼓を組み合わせた「キャンディー・ダンス」("Candy Dance") (76)にうち興じるように、伸び伸びとしている。ピコーラの初潮の血を洗い流しながら笑っている母の声に、クローディアは音楽のような音を聞き取っているが、母子ともに生の喜びを心から表現できるのである。

従って、両親の愛情、家庭でのしつけ、広義の意味での「ファンク」(funk)⁴まで含めてアフリカの血の肯定が、クローディアを精神的に安定した、自己肯定できる少女にまで成長させたのだと捉えられる。

3. クローディアのジレンマの持つ意味

自分は醜いと確信し、自分の醜さの秘密を知ろうとして鏡を見るピコーラ。一方、クローディアは、貧しい黒人少女としての自分を受け入れ、ありのままの自分に誇りを抱いている。そして、女の子なら、女性ならほとんどみんなが大好きな「大きな青い眼をしたベビードール」(20)の愛らしさ、美しさの秘密を見つけ出そうとして、人形をバラバラに分解する。その人形について、彼女自身は、「わたしは、あの丸い愚鈍な眼や、パンケーキのような顔、オレンジ色のらせんのような髪に肉体的に反発し、人知れずおびえてもいた」(20)と語っている。彼女の「ただの丸い形をした金属」(21)という表現は、単なる物質的なもの、金属にすぎないという秘密を握った者の安堵感を伝える。しかし、それは、逆に言えば、一時とはいえ、アフリカ系アメリカ人としての彼女の意識に揺さぶりがかけられていたことを暗示している。ま

た、思春期の入り口にあるフリーダとピコーラは、金髪の巻き毛がかわいい映画の子役スターのシャーリー・テンプル(Shirley Temple)を崇拜しているが、クローディアは大嫌いだと語っている。新聞や雑誌、店の看板、映画といったメディアによる広告、宣伝の影響は、黒人少女にまで及んでいるのに。9才だった当時の自分を振り返って、大人のクローディアは次のように語っている。

フリーダとピコーラのどちらよりも年下だったわたしは、当時はまだ、シャーリー・テンプルを好きになれるほど心理的に成長していなかった。そのとき感じていたのは、汚れたところのない憎しみだった。(19)

そして、更に、「わたしはずっとあとになって、ちょうど清潔さを喜ぶことを学んだように、彼女を崇拜することを学んだ。そして、それを学んだときですら、変化とは向上を伴わない順応("adjustment without improvement")だということを知った」(23)と語っている。クローディアが、かつて自分が金髪で青い眼の白人の女の子に抱いていた憎しみは純粋なものであったと思っていること、今は白人の美的価値観を受け入れているが、そういう自分の変化を決して改善だとして満足してはいないことが分る。入浴の習慣が身についた生活をし、階級上昇を果たしただろうことが推察される。⁵ 暮らしは豊かになったとしても、精神的には妥協をして子供の頃の純粋さを失った自分を決していいとは思っていないのである。

ピコーラの青い眼にして下さいという願いを自分が日頃嫌っている老いぼれ犬を毒殺する手段として利用し、彼女に青い眼になったと信じ込ませたソープヘッドは、結局ピコーラをだましたのである。彼はイギリス貴族と黒人の血を引く混血であるが、彼の潔癖さはピコーラに「この性悪のチビの黒い売女め」(92)という言葉を浴びせかけたジェラルディン(Geraldine)以上で、「体が起こすすべての自然な排泄作用や保護作用は彼を不安にする」("all the natural excretions and protections the body was capable of — disquieted him") (166)。ジェラルディンは黒人の血を暗示する自身の中のもう一人の自分を一生懸命抑圧しているが、彼はむしろ、肉と肉とが触れ合うこと、体臭、息の匂い等、ファンクなものを生理的に嫌悪し耐えられないものである。何が彼をこういうふうにしたのか。一つには、「厳密な公正さと暴力による管理」(169)で知られた校長である彼の父がその教育方針を家庭にも持ち込んだことが影響していると考えられる。父親の管理された暴力に「厳格な習慣と柔軟な想像力」(169)を育むことで応えたのである。また、父親の教育への理解と経済的な豊かさが、彼に、聖職、精神医学、社会学、物理療法と次々と種々の学問を学ぶことを可能にしてくれた。しかし、それは彼を、「学究的な陰湿さ」(170)にふけったり、憂うつ症に苦しむと同時にそれを楽しむ人間にしたのである。人との接触を生々しく感じる人間嫌いにしたのである。ポーリーンはチョリーとの性交によるオルガスムスの中で紫や黄、緑といった種々の色彩に色どられた世界を見たが、ソープ

ヘッドは、そういう性的陶酔から自己疎外していくのである。

彼がピコーラをだました自己の行為を弁明し、かつ自己正当化を行っている神への手紙の中で述べていることと、大人のクローディアがピコーラを悲劇に、狂気の世界にまで追い込んだことに対する黒人共同体の責任を悟って語っていることは、ガーリーン・グルーウル(Gurleen Grewal)が指摘するように、妙に「類似している」(Grewal 25)。ソープヘッドは次のように述べている。

その結果、わたしたちは王者らしくなるかわりに俗物的になり、貴族的になるかわりに階級意識の強い人間になりました。わたしたちは、権威とは目下の者にたいして残酷になることで、教育とは学校に行くことだと信じていました。また、あらあらしさを情熱だと思いこみ、怠惰を安逸とまちがえ、向こう見ずを自由だと考えていました。(177)
一方、クローディアは次のように語っている。

それはたしかに幻想だった。わたしたちは強くはなく、攻撃的なだけだったから。自由ではなく、鑑札を受けているだけだった。また、憐れみ深くはなく、礼儀正しいだけだった。善良ではなく、お行儀がよいだけだった。わたしたちは自分たちを勇敢だと言いたいために、死に求愛し、盗人のように生から身を隠した。立派な文法を知性の代用にし、成熟の見せかけを作るために習慣を変え、うその形を変えてそれを真実だと言い、旧い概念の新しいパターンのなかに、神の言葉と啓示を見た。(205-6)

ソープヘッドもクローディアも、自分達の自己欺瞞を悟っている。その自己欺瞞を彼等の中に育んだものこそ、学校内での偏った教育,⁶ そして、教育があるのだという優越感、おごりの感情だと考えられる。フィリップ・ページ(Philip Page)がクローディアについて、「彼女はピコーラに起こった悲劇で自分が果たしてしまった役割の責任を受け入れている、しかし彼女は「土壤を、土地を、国全体」を非難している」("She accepts responsibility for her role in Pecola's tragedy, but she blames 'the earth, the land... the entire country'"') (Page 57) と指摘するように、また、結局ソープヘッドが神を非難して自己正当化に陥るように、二人とも自己の虚偽性を見抜きながらも自分の無力さに身を任せているのである。しかしながら、そういう自分をクローディアは決していいと思ってはいない。「二重意識を抱えて生きていく」(Page 59) のだと考えられる。アフリカ系アメリカ人でありながらも、自分達の文化をアメリカの白人文化より劣っていると見なし、自身を後者をより享受している者として捉えているのだと考えられる。世間の価値基準で自己をながめる目は、学校での社会生活を通して大きくなつていったと考えられる。

おわりに

都市郊外の一軒家での物質的豊かさに囲まれた理想的な家族像の原型は、アメリカが「ファシズムとコミュニズムの勃興に対抗するために1930年代につくられた」のである（三浦 873-875）。従って、政治的イデオロギー性を帯びた小学生用教科書を、二つのスタイルに解体することで、モリスンはアメリカの理想的家族像を脱構築し、内実が伴わなければ、理想像、模範になり得ないことを暴露したのである。ステファニー・クーンツ（Stephanie Coontz）が『家族という神話』（*The Way We Never Were: American Families and the Nostalgia Trap*, 1992）において報告した、ミス・アメリカになった女性が、郊外の閉鎖的空间の中で「5才の時から…社会的地位の高い父親による性的虐待を受け続けた」（クーンツ 61）という事実によって、現実にそれは神話と化すのみである。

同情してくれたのに、内的分裂を抱えながらも社会の中で生きていける大人へと成長していく友達クローディアの心も次第に離れ、こわれたピコーラの人生。ポーランドではユダヤ人虐殺、中国では南京大虐殺が起り、民族強姦の行われた時代であったことも否定できない。粉碎されたピコーラの生を理解するには彼女の生の断片、断片を知っている人々の語りをつなぎあわせていくしか理解できないと考えられる。クローディアは自身のありようにジレンマを抱えながらも、白人の価値基準への妥協に屈し、アフリカ系アメリカ人というよりアメリカ人としての意識が強いと考えられる。これは、白人の消費文化に取り囲まれ、心を絡め取られた彼女のモラル・スタミナの弱体化を示すものである。しかしながら、内的分裂を抱え込むことを強いられたクローディアは、確かに、自己非難の気持ちも持っているのである。しかし、それが、生きていく上で大切なことは何かも分からぬが故に悲劇を招き寄せたピコーラへの共感、理解を読者の側にもたらしていると考えられる。

付記 本稿は、2011年10月の日本英文学会中国四国支部第64回大会での発表原稿を加筆・修正したものである。

註

- 1 本作品における分裂のイメージを、共同体、家族、個人のメタファーと捉えるフィリップ・ページは、「『青い眼がほしい』はカラーラインに沿ったアメリカ文化における裂け目を捉えている」（“*The Bluest Eye captures the fundamental rift in American culture along racial lines.*”）（Page 51）と述べ、アフリカ起源の文化的伝統を受け継いだアフリカ系アメ

リカ人でありながらも、アメリカという国のために働いているアメリカの一市民であるという二重意識の葛藤をアフリカ系アメリカ人が抱えていることを指摘している。少女、女性の場合、アメリカの白人文化、女性美の基準、物質的豊かさの指標でもある消費文化は、自分達の文化とは異質なものに思えながらも、誘惑的魅力を持っていたと思われる。他に、ハインゼ・デニース (Heinze Denise), マイケル・オークワード (Michael Awkward), ガーリーン・グルーワル等が、本作品におけるアフリカ系アメリカ人特有の二重意識を指摘している。なお、本作品からの引用頁数は原著からであり、日本語訳については大社淑子氏による邦訳を利用させていただいた。

- 2 ルース・ローゼンバーグ (Ruth Rosenberg) は、マックティア家の親子関係を例にとって、「クローディアは自分が経験したことを姉に解釈してもらわなくてはならない。子供達は情報を得るのに互いに頼らざるをえない、というのも子供達は大人には聞きにくいから・・・会話は大人から子供へという一方通行の階層構造をなしている」 (Rosenberg 437) と述べている。初潮の知識のないクローディアはまず姉に尋ねざるを得なかったのである。
- 3 眼の重要性については、藤平育子『カーニヴァル色のパッチワークキルト』(學藝書林, 1996) 所収「沈黙と狂気への罠 —『青い眼がほしい』」に詳しい。
- 4 阿部暁帆氏によると、アーノルド・ショー (Arnold Shaw) は「ファンク」 (funk) の元来の意味を、「それは口にすることのできない野卑な光景、音、臭いを指している、しかし特に性的興奮時や性交時に生み出される体臭を指している」 ("It referred to unmentionable, earthy sights, sounds, and smells, but especially to a body odor produced during sexual excitement or intercourse") (*Black Popular Music in America* [New York: Macmillan, 1986]) と定義している。阿部氏は広義の意味での「ファンク」を、「西洋的な価値観を超えた要素を含むもの」、「人生のすべてを肯定的に捉え、ありのままの感情を表現すること」と定義している。(阿部 6-11)
- 5 グルーワルは、大人になったクローディアについて、「彼女は、中流階級であるというアイデンティティは、労働者階級との相違とその階級への無関心とによって成し遂げられた（上昇）移動の産物であることを漏らしている」 (Grewal 41) と述べている。
- 6 ソープヘッド、本名エリヒュー・マイカ・ウイットカム (Elihue Micah Whitcomb) 一族は代々、英國びいき、英國崇拝を受け継ぎ、学校での成績も良く、「すべての文明は白色人種に由来するもので、白人の援助がなければどんな種族も生存することはできず、社会は、それを創造した高貴なグループの血を保存しているかぎりにおいてのみ、偉大で輝かしい」というド・ゴビノーの仮説」 (168) に影響されている。また、ソープヘッド自身の勉学の

仕方については、「彼は貪欲に本を読んだが、好みのところしか理解しなかった。つまり、他人の考えの切れ端や断片を適当に選んで理解したのだが、それはその瞬間に自分が抱いている偏見を支持するものに限られていた」(169)と語られている。また、ジェラルディンが自身の中の黒人性と捉えている面を懸命に抑圧する点にも、白人男性の身の回りの世話を上品にする方法を身につけるよう教えた連邦政府の援助を受けた大学の家政学部での教育が影響していると考えられる。

Works Cited and Consulted

- Awkward, Michael. ““The Evil of Fulfillment”: Scapegoating and Narration in *The Bluest Eye*.” *Toni Morrison: Critical Perspectives Past and Present*. Ed. Henry Louis Gates, Jr. and K.A. Appiah. New York: Amistad, 1993. 175-209.
- Badode, R. M. “American Society as Reflected in Toni Morrison’s *The Bluest Eye*.” *Indian Views on American Literature*. Ed. Mutualik-Desai, A. A. New Delhi, India: Prestige, 1998. 84-94.
- Bouson, J. Brooks. ““Speaking the Unspeakable”: Shame, Trauma, and Morrison’s Fiction.” *Toni Morrison*. Ed. Harold Bloom. Philadelphia: Chelsea House Publishers, 2005. 121-148.
- Grewal, Gurleen. “The Decolozing Vision: *The Bluest Eye*.” *Cicles of Sorrow, Lines of Struggle*. Baton Rouge : Louisiana State UP, 1998. 20-41.
- Guerrero, Ed. “Tracking ‘The Look’ in the Novels of Toni Morrison.” *Toni Morrison’s Fiction*. Ed. David L. Middleton. New York and London: Garland Publishing Inc., 1977. 27-41.
- Harris, Trudier. “*The Bluest Eye*.” *Fiction and Folklore: The Novels of Toni Morrison*. Knoxville: U of Tennessee P, 1991. 15-51.
- Heinze, Denise. “Beauty and Love: The Morrison Aesthetic.” *The Dilemma of “Double-Consciousness”*. Athens and London: the U of Georgia P, 1993. 14-54.
- Malcolm, Cheryl Alexander. “Family Values? Father/Daughter Seduction in Toni Morrison’s *The Bluest Eye* and Milcha Sanchez-Scott’s *Roosters*.” *Reflections on Ethical Values in Post Modern American Literature*. Ed. Teresa, Pyzik. Katowice, Poland: Wydawnictwo Uniwersytetu Slaskiego, 2000. 115-124.
- Miner, Madonne M. “Lady No Longer Sings the Blues: Rape, Madness, and Silence in *The Bluest Eye*.” *Toni Morrison*. Ed. Harold Bloom. Philadelphia: Chelsea House Publishers, 2005. 7-22.

- Morrison, Toni. "Memory, Creation, and Writing." *Thought*. Vol. 59. No. 235 (December 1984) : 385-390.
- _____. *The Bluest Eye*. New York: Alfred A. Knopf. 1970. (『青い眼がほしい』大社淑子訳 東京:早川書房, 1994年)
- Otten, Terry. "The Bluest Eye." *The Crime of Innocence in the Fiction of Toni Morrison*. Columbia and London: U of Missouri P, 1989. 8-25.
- Page, Philip. "The Break Was a Bad One: The Split World of *The Bluest Eye*." *Dangerous Freedom*. Jackson: UP of Mississippi, 1995. 37-59.
- Rosenberg, Ruth. "Seeds in Hard Ground: Black Girlhood in *The Bluest Eye*." *Black American Literature Forum*. Vol. 21. No 4 (Winter 1987) : Indiana State U. 435-445.
- Ruas, Charles. "Toni Morrison." Ed. Danille Taylor-Guthrie. *Conversations with Toni Morrison*. Jackson: UP of Mississippi, 1994. 93-118.
- Tirrell, Lynne. "Storytelling and Moral Agency." *Toni Morrison's Fiction*. Ed. David L. Middleton. New York and London: Garland Publishing, Inc., 1997. 3-25.
- 阿部暁帆「『美』、ファンキネスと双極性」『成蹊人文研究』第15号 東京, 2007年。1-16頁。
- オスター, ハリー 「ブルースの背景」『ブラック・アメリカ』ジョン・F・スエッド編 猿谷要監訳 東京:研究社, 1973年。171-187頁。
- 木内徹・森あおい編・著『トニ・モリソン』東京:彩流社, 2000年。
- クーンツ, ステファニー 『家族という神話——アメリカン・ファミリーの夢と現実』岡村ひとみ訳 東京:筑摩書房, 1998年。(Coontz, Stephanie. "Leave It to Beaver" and 'Ozzie and Harriet': American Families in the 1950s" *The Way We Never Were: American Families and the Nostalgia Trap*, 1992, 23-41.)
- デュボイス, W・E・B (ウイリアム・エドワード・バーガート) 『黒人のたましい』木島始・鯫島重俊・黄寅秀訳 東京:未来社, 1965年。(Du Bois, William Edward Burghardt. "Of Our Spiritual Strivings" *The Souls of Black Folk*, 1903, 7-15.)
- ファン, フランツ 『黒い皮膚・白い仮面』海老坂武・加藤晴久訳 東京:みすず書房, 1998年。(Fanon, Franz. *Peau Noire, Masques Blanc*, 1952)
- 藤平育子「沈黙と狂気への罠 — 『青い眼がほしい』』『カーニヴァル色のパッチワークキルト』東京:學藝書林, 1996年。21-56頁。
- 三浦展「アメリカン・ファミリー」『事典 現代のアメリカ』松尾式之・吉見俊哉・巽孝之・能登路雅子・小田隆裕・柏木博編 東京:大修館書店, 2004年。873-881頁。

Claudia's Double Consciousness in Toni Morrison's *The Bluest Eye* (1970)

WATANABE Tomomi

It is pointed out that African-Americans have a consciousness that they are descendants of Africans and Americans at the same time. The historical background of the tragic story of Pecola Breedlove, a poor African-American girl, is about 1941. However, in the beginning of this work there are three different styles of sentences from the English reader which was used at elementary school in the 1950s and the 1960s. What does this mean? In this essay, I consider the double consciousness of Claudia, paying attention to her role in this work, a 'bridge' between Pecola and the readers.

Claudia MacTeer, one of the main characters of Pecola's story and one of the narrators of the story, is similar to Pecola: both of them are little black girls of poor family living under the orange sky in an industrial district of Lorain, Ohio. However, Pecola, internalizes the standard of female beauty of white Americans and even denies herself. The colors, white and clear blue, mean material richness and happiness to the black girls. Pecola, wishing the bluest eyes, is easily swept off her feet. She does not know what is really important in her life. The brief but contemptuous glance of whites seems to her to insult even her human dignity. Pecola wants to erase her as an African-American.

On the other hand, Claudia is a self-encouraging child. Her breaking up of a white Baby Doll and trying to know the secret of its dearness suggests that her ethnic consciousness has been shaken. However, comparing her family environment with Pecola's, her parents are strict in bringing up their children but really love them. Growing up, Claudia understands their love for her. Moreover, African-American cuisine smells good in the kitchen and her mother Mrs. MacTeer sings blues to her heart's content when she feels sad or depressed. This lets Claudia respect African tradition. She is even proud of dirtiness that is evidence of her hard work to her. Even if she is a poor black girl, she believes that she is fine from a moral point of view. The insulting words of Maureen Peal, a child of mixed blood, white and black, makes Claudia have consciousness for the first time that she is not only an African-American but also an American. She wishes to be a 'beautiful girl' like Maureen, realizing that the standard of beauty and ugliness is that of white Americans. However, the double consciousness of her identity conflicts within her.

Grown-up Claudia thinks that she was pure as a child, but realizes that for Pecola's miserable life she is partly responsible, though she is now used to the American middle-class life. She is never satisfied with what she is. Therefore, Claudia with the double consciousness lets the readers have sympathy with and understand Pecola who was raped by her own father, deceived by Soaphead, a white supremacist, into believing that she has gotten the bluest eyes, and driven into madness. Thus Claudia functions a spiritual 'bridge' between Pecola and the readers. Morrison suggests that even if we live in a clean white house in the suburbs with parents and pets and seem to be happy, which is a dream realized by middle-class white Americans in the 1950s, we cannot be necessarily happy. She thinks that we have to consider what is important and valuable to us in our own life.

『中・四国アメリカ研究』第7号
投稿規定

- 1 資格：中・四国アメリカ学会会員に限る。ただし、編集委員会が執筆を依頼する場合はこの限りではない。投稿できる論文は一人1編とする。
- 2 内容：アメリカ研究に関する未発表論文。すでに口頭で発表したものはその旨を明らかにすること。
- 3 言語：日本語または英語。日本語の場合は英文の要旨を付けること。
- 4 用紙：A4判の用紙を使用し、横書きとする。必ずワープロ原稿であること。
- 5 長さ：日本語原稿の場合は、1頁につき1行42字×32行、15頁以内（400字詰原稿用紙に換算して約50枚。注、文献リスト、英文要旨を含む）。英語原稿については、1頁につき1行80～90文字×32行、15頁以内とする。英語原稿はネイティブ・チェックを受けたものであること。
執筆分担金の割増し負担を条件として、規定の頁数を超えることができる。
- 6 体裁：注は後注とし、本文の終わりにまとめる。注のあとに引用・参考文献リストを付ける。注及び引用・参考文献の表記の仕方は各研究分野の論文執筆の慣行によるものとする。
- 7 提出：原稿は3部提出すること（コピー可）。匿名審査を行うので3部のうち2部は著者氏名、所属、口頭発表への言及、謝辞など、著者の身元を明らかにする事項を削除したものであること。
- 8 締切り：2014年10月31日必着（厳守のこと）
(なお、投稿希望者は2014年3月末までに、学会事務局宛に、ハガキ又はメールで申し込むこと)
- 9 その他：
 - 1) 論文の採否の決定は、編集委員会が選定する査読者の審査を経た後、編集委員会が行う。採否の結果は2014年12月末までに本人に通知する。
 - 2) 採用決定後に、電子媒体の提出を求める。
 - 3) 執筆者による校正は再校までとする。
 - 4) 執筆者は一律20,000円の執筆分担金を負担し、抜刷り20部を受取る。
規定の頁数を超える論文の執筆者には、更に割増し負担金を求める。
 - 5) 発行年月は2015年3月の予定。

編集後記

- ◇『中・四国アメリカ研究』(第6号)をお届けします。
- ◇2012年秋の段階では13名の執筆希望者がありましたが、論文提出期限までに受理した論文は結局8編でした。これら8編の論文は、編集委員会が選定した査読者による厳正な審査を受け、掲載されることになりました。
- ◇本号の掲載論文の執筆者の所属等は次の通りです。

山本 貴裕 (広島経済大学)
中野 博文 (北九州大学)
栗原 武士 (広島経済大学)
佐野 恒子 (アジア太平洋交流センター研究フェロー)
岡本 勝 (広島大学)
松盛美紀子 (同志社大学大学院)
大野瀬津子 (九州工業大学)
渡部 知美 (島根大学)

- ◇『中・四国アメリカ研究』は隔年で刊行されます。次号については、2014年3月末日が執筆申込みの締切り、同年10月末日が論文提出期限、2015年3月に刊行予定となっています。ふるってご投稿ください。

- ◇お忙しい中を査読の労に当たっていただいた皆さまには心からお礼を申し上げます。

- ◇編集委員は次の通りです。

委員長 肥後本芳男 (同志社大学)
委員 藤江 啓子 (愛媛大学)
委員 小平 直行 (県立広島大学)
委員 横山 良 (甲南大学)

(肥後本芳男記)

The Chu-Shikoku American Studies

Vol. 6

2013

CONTENTS

Special Features: The Foundation of American Values: Democracy, Progressivism and Cultural Conflict over Americanism

- A Conflict between the Visible Church and an Invisible Church in the Kingdom of Hawai'i:
Two Kinds of Ecclesiology and their Cultural Implications ... YAMAMOTO Takahiro (1)
- Dissolving the Traditional American Self: The Education of Henry Adams's
Nieces and their Challenge to European Imperialism NAKANO Hirofumi (23)
- Overcoming Whiteness and the American Dream: The Positive Deviation
from the Social Norms in Russell Banks' *Continental Drift* ... KURIHARA Takeshi (43)

Articles

- Seeking the Origin of the Publication of the First Hawaiian Newspaper by
Native Hawaiians SANO Tsuneko (59)
- Cigarette Prohibition Laws at the Turn of the 20th Century in America:
The Background of Its Enactment and Repeal OKAMOTO Masaru (75)
- An Encouragement of Higher Education in Southern Californian Japanese
American Communities before World War II MATSUMORI Mikiko (105)
- Making a Wild Woman into a Domesticated Flapper: The Representation of
Gender / Sexuality in the Movie of *The Plastic Age* OHNO Setsuko (127)
- Claudia's Double Consciousness in Toni Morrison's *The Bluest Eye* (1970)
..... WATANABE Tomomi (143)
- Notes for Contributors (157)
- Editors' Remark (158)
-

The Chu-Shikoku American Studies Society